

秋田県文化財調査報告書第83集

杉 沢 台 遺 跡
竹 生 遺 跡

発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

昭和56年3月

秋田県教育委員会



杉沢台遺跡(航空写真)

序

昭和55年度の国営能代開拓建設事業は、北能代工区が対象でした。対象地内には、3カ所の遺跡が存在します。文化財保護の立場から、工法の変更等で遺跡保存をはかることを目標としてきましたが、杉沢台遺跡と竹生遺跡の一部分は、諸般の事情から保存不可能になったため、記録保存を目的に発掘調査することになったものです。

本報告書は、杉沢台遺跡のほか、用排水路建設に係る竹生遺跡の発掘調査の結果を集録したものです。この報告書の刊行が、地方史研究や文化財愛護に寄与することができれば幸いです。

発掘調査から本報告書刊行に至るまで、東北農政局能代開拓建設事業所・秋田県能代地区土地改良区・小土部落会ならびに能代市教育委員会には、何かと便宜を計っていただきました。心から感謝の意を表するしだいです。

昭和56年3月31日

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

例 言

1. 本報告書は、国営能代開拓建設に伴う杉沢台・竹生遺跡の発掘調査報告書である。
2. 杉沢台・竹生遺跡に関する諸発表・報告と本報告の記述に相違ある場合は、本報告の記述を正確なものとする。
3. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)
坪井清足(奈良国立文化財研究所), 村越潔(弘前大学), 阿部義平(文化庁), 小林達夫(国学院大学), 林謙作(北海道大学), 安孫子昭二(東京都文化課), 瀬川司男・四井謙吉・高橋文夫・佐藤勝・工藤利幸(岩手県埋蔵文化財センター), 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正(岩手県立博物館), 工藤泰博・北林八洲晴(青森県埋蔵文化財調査センター), 市川金丸・鈴木克彦(青森県立郷土館), 小松正夫(秋田城跡調査事務所)
熊谷忠好(野鍛冶職), 小松幸一郎(陶芸家), 上野輝弥(東京国立科学博物館), 辻誠一郎(大阪市立大学), 松谷暁子(神奈川大学)
4. 石質鑑定は渡部晟(秋田県立博物館)氏によるものである。
5. 貝の同定は小池裕子(東京大学総合研究資料館)・渡部晟の両氏によるものである。
6. 報告書の執筆は、永瀬福男・熊谷太郎・大高博康・佐々木金正がそれぞれ分担し実施した。文末に執筆者名を記した。
なお、II-3は工藤英美(秋田県教育センター)氏に、IV-4-⑤は武田孝義(武田事務所)氏に執筆いただいた。
7. 石器実測・トレースは諸澤早苗・丑沢美記子, 土器実測・トレースは石木田京子・納谷鈴子・渡辺章子, 石製品・土製品の実測・トレースは鈴木仁美・京久美子, 拓本は鈴木光子・大谷祐子, 遺構のトレースは宮腰智子・渡辺香代子・大高博康・佐々木金正, 土器復元は米川一郎・米森伴宗・鈴木正一が主に担当した。
8. 土色の記載については、「標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
9. C-14年代測定結果は、日本アイソトープ協会によるものである。
10. 杉沢台遺跡の挿図は、遺構を約1/80に、遺物を約1/3に縮尺している。

目 次

口 絵
序
例 言

杉 沢 台 遺 跡

I はじめに

1. 発掘調査に至るまで…………… 1
2. 調査の組織と構成…………… 1

II 遺跡の立地と環境

1. 立地と環境…………… 2
2. 歴史的環境…………… 3
3. 竹生一杉沢台付近の地形・地質…………… 4
 - ① 調査にあたって…………… 4
 - ② 地形概要…………… 4
 - ③ 段丘群と地質概要…………… 4
 - ④ 米代川第4段丘…………… 5
 - ⑤ フラスコ状ピット底の礫…………… 7

III 発掘調査の概要

1. 遺跡の概観…………… 10
2. 調査の方法…………… 12
3. 調査の経過…………… 15

IV 調査の記録

1. 縄文時代前期…………… 16
 - ① 竪穴住居跡…………… 16
 - ② フラスコ状ピット…………… 53
 - ③ 土 壙…………… 79
2. 縄文時代後期…………… 80
3. 縄文時代晩期…………… 81
 - ① 遺構…………… 81

② 遺物	81
③ その他	88
④ 土製品	91
4 平安時代	91
① 竪穴住居跡	91
② 竪穴状遺構	95
③ 土壌	95
④ 溝状遺構	99
⑤ 遺構外の遺物	100

V まとめ

1 縄文時代前期	100
① 竪穴住居跡	100
② フラスコ状ピット	102
③ 土 壌	103
④ 土器	103
⑤ 石器	108
⑥ 前期集落	109
⑦ C ¹⁴ 測定結果	111
2 縄文時代後期	111
3 縄文時代晩期	111
4 平安時代	112
① 竪穴住居跡	112
② 竪穴状遺構	112
③ 土壌	112
④ 溝状遺構	112

VI おわりに

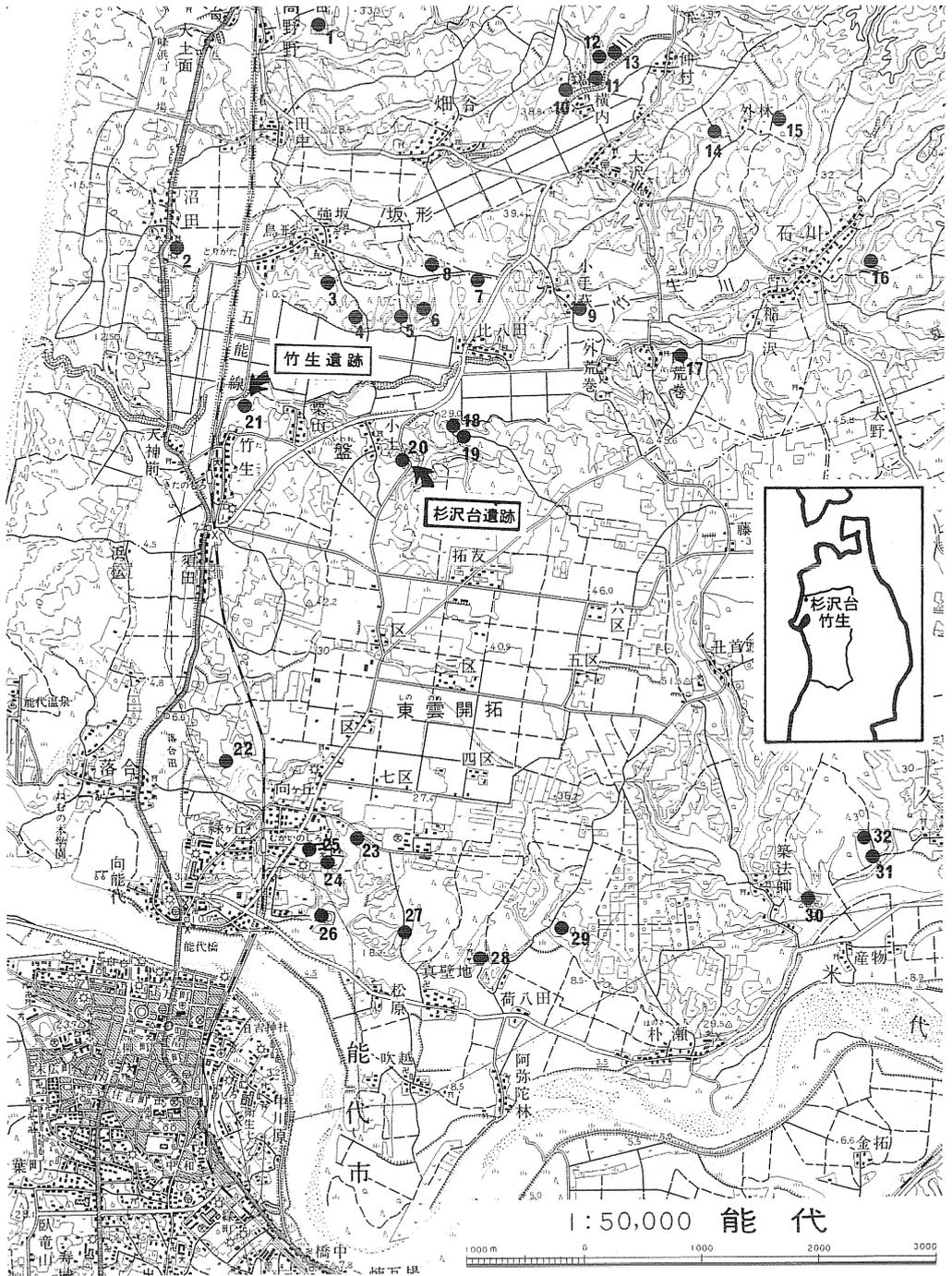
引用及び参考文献

附 編

図 版

竹 生 遺 跡

I	はじめに	
	1 発掘調査に至るまで	1
	2 調査の組織と構成	1
II	遺跡の立地と環境	
III	発掘調査の概要	
	1 遺跡の概観	1
	2 調査の方法	1
	3 調査の経過	2
IV	調査の記録	
	1 遺構と遺物	2
	① 竪穴住居跡	2
	② 竪穴状遺構	2
	③ 溝状遺構	7
	④ 土壌	8
	⑤ カマド状遺構	14
	⑥ おとし穴状遺構	17
	2 遺構外出土遺物	17
V	まとめ	
	1 遺構について	18
	① 竪穴状遺構（製鉄関連遺構）	18
	② 土壌	18
	③ カマド状遺構	19
	2 遺物について	19
	3 むすび	20
	引用及び参考文献	20



第1図 杉沢台・竹生遺跡周辺地形図および遺跡分布図

杉 沢 台 遺 跡

I はじめに

1 発掘調査に至るまで

杉沢台遺跡は、「秋田県遺跡地図」に「杉沢野遺跡」として記載され、従来このように呼称されてきた。しかし、昨年の範囲確認調査で遺跡の広さが判明し、遺跡の所在する小字名を再吟味した結果、遺跡の大部分は杉沢台に所在することが確認された。そのため、今後は「杉沢台遺跡」と呼称していくことになったものである。

さて、昭和51年より東北農政局は米代川の右岸と左岸を対象とする国営総合農地開発事業を実施している。対象地域は、能代市・峰浜村・山本町・八竜町の4市町村におよび、その面積は3,671haである。この地域には周知の遺跡が73カ所存在する。昭和55年度の工事対象地区は北能代工区であり、この工区には、杉沢台・竹生・街道上の3遺跡が存在する。

杉沢台遺跡は、昨年の範囲確認調査で遺跡の広さが35,000㎡程であることが確認された。このうち、当工事で4,400㎡程遺跡が破壊される（工法で対応できない）ため、この部分の記録保存をはかることを目的に、発掘調査されることになった。（永瀬）

2 調査の組織と構成

遺跡名

杉沢台遺跡

遺跡所在地

秋田県能代市磐字杉沢台

調査期間

昭和55年4月14日～同年10月3日

調査対称面積

4,400㎡

調査面積

4,672㎡

調査主体者

秋田県教育委員会

調査担当者

永瀬福男 秋田県教育庁文化課 社会教育主事

熊谷太郎 “ 文化財主事

補佐員 大高博康

補助員 佐々木金正

調査作業員 鈴木三郎 佐々木菊太郎 佐藤礼司郎 佐藤清八郎 工藤兵八郎 工藤義一
工藤孝記 佐藤敬作 成田芳道 佐藤長一郎 工藤竜市 工藤甚七 鈴木正一
米森伴宗 米川一郎 木村喜久三 佐藤清吉 渡辺恒一 朝香利彦 安岡明
工藤力 長谷川徹 石井康宏 住吉和人 工藤清一 桐越貴司 桧森好広 佐
々木勝子 佐々木キヨ 大谷れい子 大谷好子 工藤イワ子 工藤栄子 工藤
俊 工藤テル 佐藤ミエ 工藤ツルエ 大高栄子 工藤ミヨ 大高幸子 工藤
チセ 工藤ハナ 木村ヨシミ 船木ヨシエ 木村ヒデ 船木フデ 船木節子
木村由利子 木村和子 木村五代子 船木幸子 船木あさみ 木村和子 木村
トミノ 木村涼子 木村トメ 工藤琴子 住吉優子 工藤はるみ 木村ミチル
小沢るり子 村木夕紀子 佐藤チセ

調査参加者 高橋利夫 佐々木士郎 堀内智子 大友牧子 秋山由美子 熊谷栄利子 三浦
綾子 富樫和枝 渡会美奈子 布施まき 多田真由美 大友照子 大井裕子
早川一美 野呂繁子 佐々木美由紀 堀真奈美 沢田好子 村井明美 高橋真
由美 茜尾江利子 鈴木加代子 斉藤博子 本間宏 鈴木雅則

整理作業員 鈴木光子 渡辺章子 京久美子 石木田京子 諸澤早苗 宮腰智子 丑沢美記
子 納谷鈴子 鈴木仁美 大谷祐子 高橋洋子 渡部香代子 鈴木正一 米森
伴宗 米川一郎

調査協力機関 東北農政局能代開拓建設事業所
能代市教育委員会
秋田県能代土地改良区
小土部落会

(永瀬)

II 遺跡の立地と環境

1 立地と環境

杉沢台遺跡は、東経 $140^{\circ}15'$ - $140^{\circ}04'$ ・北緯 $40^{\circ}15'$ - $40^{\circ}16'$ に位置する。

遺跡の北を遠望すると、青森県との県境をなす白神山地が東西に横走する。西方の日本海までの路離は、約 3.3km である。南方の米代川までの距離は約 6 km である。

米代川の北には、約 3000ha の広大な東雲台地が広がる。この台地は段丘群によって構成され

ている。遺跡は東雲台地の北縁に位置し、標高約35mを測る。沖積地との比高は約25mである。遺跡の北側の沖積地には竹生川が流れ、日本海に注ぐ。

竹生遺跡は、杉沢台遺跡の位置する台地縁を西方に約1,400m行ったところに所在する。

(永瀬)

2 歴史的環境

米代川の北に広がる東雲台地上には、20余カ所の遺跡が確認されている(秋田県教育委員会1976)。これらの遺跡は、東雲台地の縁に分布し、中央部にはいまのところ確認されていない。遺跡の時期は、原始古代～歴史時代にわたる。台地周辺の米代川、日本海、竹生川が、この台地を生活基盤とした人々の生活を規制していたものと考えられる。

この台地に人々が登場するのは、後期旧石器時代からのものである。能代市久喜沢字館下に所在する館下I遺跡では、杉久保型ナイフ形石器に類似する石器が2点出土している。東雲台地の北縁に位する杉沢台遺跡周辺でも旧石器人が活動していたことが想像される。

縄文時代になると遺跡の数も増加する。

前期には根洗場(3)、杉沢台(20)、落合(22)、外林(14)、大内坂I(32)遺跡が属する。落合遺跡ではヤマトシジミを主体とする貝塚が形成された。

中期になると館下I遺跡Aグループがあり、昭和53年の調査で、中期前葉(円筒土器上層式C・D期)の集落跡が確認され、竪穴住居跡20棟、フラスコ状ピット12基検出されている(秋田県教育委員会、1979)。

中期後葉～後期初葉(大木10式・大曲I式期)の遺跡としては、館下I遺跡Bグループがあり、竪穴住居跡14棟、フラスコ状ピット3基検出された(秋田県教育委員会1979)。

晩期の遺跡としては、杉沢台(20)、大野遺跡(29)があり、多数の土製品、石製品が検出されている。

弥生時代の遺跡は未発見であったが、昭和55年に秋田県教育庁文化課が実施した範囲確認調査で、真壁地トドメキ遺跡(23)、真壁地遺跡(27)で弥生式土器が検出された。

歴史時代になると、「日本書記」・「続日本紀」・「三代実録」などの文献に、米代川河口付近と考えられる地名が登場する。「日本書記」(658年)の淳代郡、「続日本紀」(771年)の野代奏、「三代実録」(878年)の野代河北・野代宮が、それである。これらの地名が具体的にどこなのかは、今後の研究をまたねばならないが、米代川の河口付近であろうと推察される。

古墳・奈良時代に相当すると考えられる遺跡は未発見であるが、平安時代に属すると考えられる遺跡は多数存在する。高野野(1)、トドメキ(23～25)、ガニガ台(4)、重兵衛台I(6)、重兵衛台II(5)遺跡などがある。

古代末～中世に属すると考えられる館跡は、平泉チャシ（18）、作館（17）、荻の城（12）古館（16）、大館（13）、金山チャシ（26）、サトチャシ（28）遺跡である。中田面遺跡（8）は13世紀中葉と考えられる集落であり、昭和54年の調査では、掘立柱建物跡25棟、井戸10基検出されている。掘立柱建物跡には、四面庇建物が8棟もあり注目された。

東雲台地周辺に現存する集落の大部分は、中世末期の文書である「出羽国秋田郡知行目録」（天正19年）、「秋田実季分限帳」（文禄元年）・「秋田実季侍分限帳」（慶長6年）に登場する。したがって、東雲台地周辺の開発はだいぶ進んでいたと考えられる。中世に当地域を支配した松山安東氏の居城である霧山城は、遺跡の南方約12kmのところの所に所在する。（永瀬）

3 竹生一杉沢台付近の地形・地質

① 調査にあたって

杉沢台遺跡と竹生遺跡がある当地域は、第四紀地質学上興味を持たれていたところで、早くから付近の調査（白井1961、内藤1966、秋田第四紀研究グループ1977）がおこなわれている。これまでの調査においては、潟西層との対比において多く議論されてきた。特に礫層の性格については意見の交換が多かった。そこで、杉沢台遺跡にみられるフラスコ状ピットの底部にある礫について精査した。

② 地形概要

すでに報告されている館下遺跡（1979）や中田面等遺跡（1980）、それに当遺跡は能代を中心に広く分布する一連の段丘群の段丘面上に存在する。これら段丘群は、北は白神山地、東は出羽山地で区切られ、南は八郎潟湖岸へと続く。当地域の南側には米代川がほぼ東西方向に流れており、北側には下流で東西方向、上流にいくにつれて北東～南西方向に湾曲している竹生川がある。さらに北側には、中田面等遺跡を持つ舌状の段丘が竹生川と塙川に規制された形で存在する。

沖積面を被って、沿岸砂丘が南北方向に帯状に分布する。砂丘は2層の腐植土層が認められ、今調査で土器片を発見した。

③ 段丘群と地質概要

付近一帯の段丘群は次の4地域ごとにまとめられ、5～9段丘に区分されている。中心とする地域は、八森および北能代、米代川下流域、八郎潟湖東地域である。

当地域は、北能代地域と米代川地域の境界付近にあたり、ここでは便宜上米代川地域の段丘区分に従った。

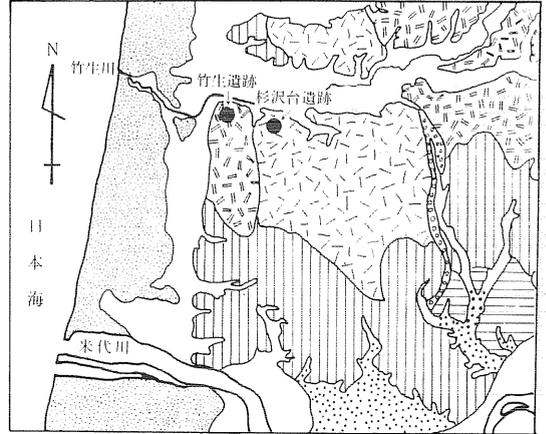
米代川流域では米代川第一段丘から第9段丘まで9つに区分（白石ら1977）されていて、各段丘の主な特徴は次の通りである。

米代川第1段丘 最高位段丘で、段丘面の高度は150 m前後で、下位の段丘群とは明瞭な高度差を持つ。新第三系泥岩の上に不整合に十数mの段丘礫層をのせる。

米代川第3段丘 高位段丘を形成する段丘で当地域ではほとんど分布していない。但し、丑首頭付近に帯状の高まりが南北方向に延びていて、これが当該する段丘ではないかという見解もあるが、疑問が残されている。

米代川第4、第5段丘 両者とも中位段丘にあたり、段丘高度は40~50mで高位面との間には明瞭な高度差が認められる。新第三系および層位不詳含円礫砂層に不整合に重なる。花崗岩質礫を多量に含む礫層を伴う。

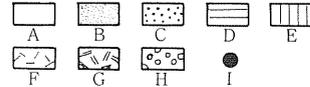
米代川第6、第7、第8段丘 いずれも低位段丘にあたり、高位ならびに中位段丘との高度差は明瞭であるが、それぞれの面間の比高は小さい。第6、第7段丘にはそれぞれ多量の花崗岩質礫を含む10数m~20mの厚い段丘礫層を伴っている。



(白石ら 1977 一部加筆)

0 1 2 3 Km

凡例



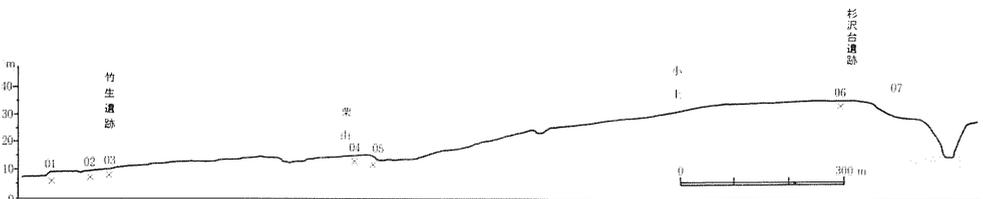
A 沖積平野 D 米代川第7段丘 G 米代川第4段丘
 B 砂丘 E 米代川第6段丘 H 米代川第3段丘
 C 米代川第9段丘 F 米代川第5段丘 I 遺跡

第2図 杉沢台、竹生遺跡付近の段丘分布図

④ 米代川第4段丘

杉沢台遺跡および竹生遺跡はいずれも米代川第4段丘の面上にある。そこで、この段丘の特色をさらにくわしく述べてみることにする。

この段丘は、米代川第5段丘の西側（海岸寄り）に南北方向の高まりを形成している（図3）。すなわち杉沢台遺跡付近を頂点に西方にゆっくりと高度を減じ竹生遺跡に至る。この二地点間においては段丘崖は認められないので、これは、ひと続きの段丘面であろうと考えられている。



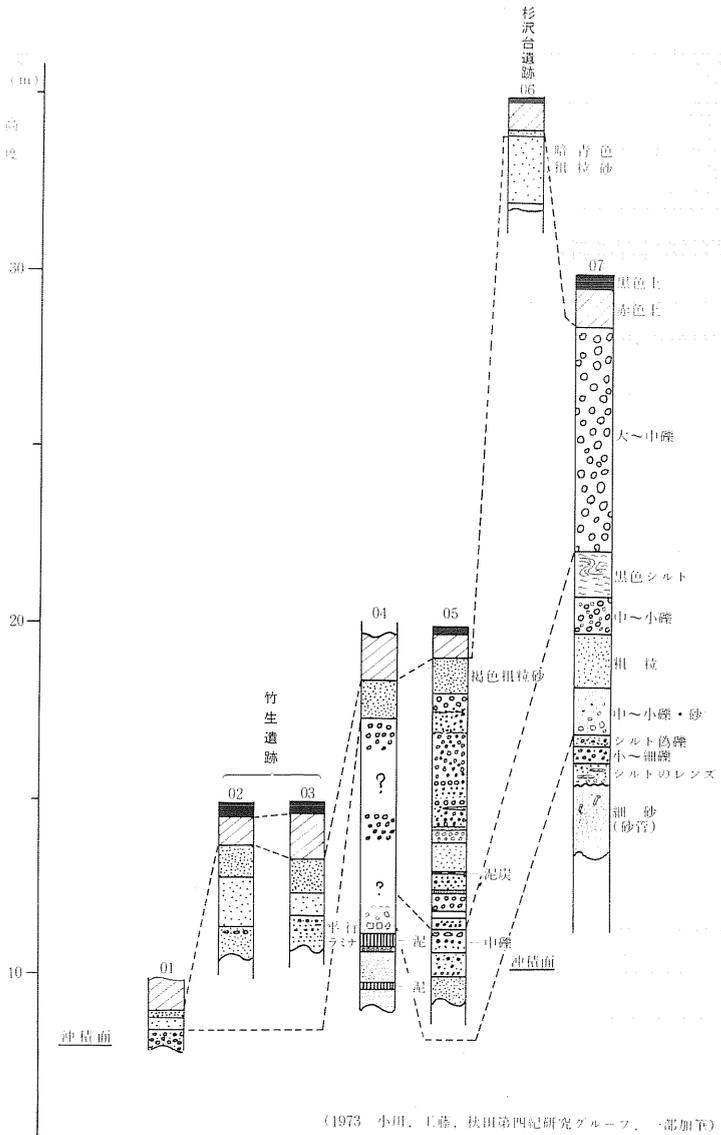
第3図 米代川第四段丘の地形変化

次に、段丘は丘陵に近いほど古い段丘が形成されていることが普通であるが、ここでは、第5段丘の新しい段丘の西側に古い第4段丘が形成されていることになる。秋田第4紀研究グループではこの事からについて次のような見解をとっている。すなわち、第4段丘面が陸上に姿を現わした後にその平野を旧米代川が北々西方向に流れ、平野を浸蝕した。やがて、その谷を埋めるように、現在みられる第5段丘構成層である砂礫層（柱状図07大一中礫層）が堆積した、というものである。しかし、この考えには異論もあり、今後の研究に待たねばならない。

地質については、地形断面図に現わした各地点での地質柱状図を図4にまとめてみた。この図からわかる通り、各柱状図

の上部にみられる砂層は、現地地形面に沿って、広く分布していることが予想され、前述の「この地形面はひと続きの段丘面である」ということと矛盾しない。

各地層の主な特徴をみると、まず、表層には10～50cmの厚さで黒色土があり、下位には褐色の粘土層（赤色土）が70～150cmの厚さで続く。さらに下位には橙色(7.5YR^{6/8})の砂まじりの



第4図 各地点の柱状図

粘土層が20～100 cmほど形成されている。これは下位に続く砂層の風化帯とも考えられるが、明らかではない

その下位には粗粒の暗青灰色の砂層が続き、50～200 cmと厚い。この砂層は広い分布をしめし、潟西地域の本内砂層に対比（白石ら1977）されている。なお、柱状図04、05では、この層は欠如する。

さらにその下位には最大層厚が7 mにおよぶ砂礫層があり、この下部には、泥炭層（10cm）をはさんだり、シルト岩の偽礫が含まれたりしているが、全容はまだ明らかでない。しかし、この砂礫層の一部は、潟西地域の松木沢砂礫層に対比されるものと思われる。なお、柱状図07の上部にみられる大～中礫層（層厚7 m）は、米代川第5段丘を構成するものである。この地層にも多数の花崗岩質礫が認められる。

最下位には砂管を含む細砂岩層が堆積しているが、層位関係はまだ明らかではない。

⑤ フラスコ状ピット底の礫

杉沢台遺跡に多数発掘されたフラスコ状ピットの底部にみられる礫についていくつか観察してみると、SKF28に小規模ながら覆瓦状構造らしきものを発見した。また、礫層とその直上の砂層との境は明瞭であったので、この礫層の表面は、かつての水底面であろうと予想した。それで、この表面の礫

（直径4 mm以上）150 個を任意に選定し、礫の長径方向および最大傾斜方向、最大傾斜角を測定した。測定し終った礫はすべて採取し、礫種・重量・長径中径・短径を室内でおこなった。但し、礫1個については取り出す時、こわしてしまったので、採取した礫は149 個である。

大きさ 礫の大きさは、長径の値を用いて表1の分類法にしたがって分類した。

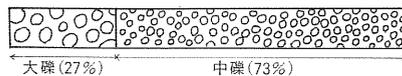
この図からもわかる通り3/4が中礫である。大礫についても最大のもので130 mmであるので、全体からうける感じは中礫層というところである。

円磨度 各礫を円磨度モデル図(Krumbein 1941)に

巨礫	256 mm以上
大礫	256 mm～64 mm
中礫	64 mm～4 mm
細礫	4 mm～2 mm

(水野 1969)

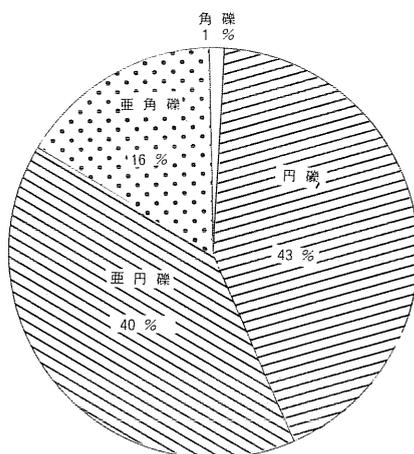
第1表 礫の分類



第5図 礫の大きさによる分類

区分名称	円磨度
角礫	0.2 ～ 0.3
亜角礫	0.4 ～ 0.5
亜円礫	0.6 ～ 0.7
円礫	0.8 ～ 0.9

第2表 礫の円磨度



第6図 円磨度による頻度(%)

照合して、それぞれの礫の円磨度を求め、表2の分類に従って頻度を求めた。

その結果、円礫・垂円礫で80%をこえていて、全体的に磨滅がすすんでいることがわかる。このことは、現地点が礫の供給源から遠いことを示唆しているものと思われる。

また、円磨度の小さいものの中には、写真1にみられる通り、円礫が割れているものがあり、その数も28個（19%）と混入していることは興味深い。

球形度 礫のまるみを表わすもので、算出方法は次のようにしておこなった。礫の中径÷長径の値と短径÷中径の値を求め、この二つ値から、球形度を求める図表(Krumbein 1941)を用いて出した。

その結果、ほとんどの礫は0.6～0.8までに含まれており、形の変化は少ない。これは礫の運搬距離が長いことを物語っている。

扁平度 礫のひらべったさを表わしたもので、算出方法は礫の長径と短径の値を用いて、「礫の大きさ分布の集計用紙による扁平度の求め方」（菅野三郎他1979）から算出した。扁平度の数値が大きいほど平べったい。写真2には、2および3の礫の例をのせたので参照されたい。

この結果からみると、36%が写真でみるような平べったさを持っていることになる。

礫種 礫の分類にあたっては、まず礫を岩石用カッターで二分し、断面を出し、それをルーペを使って観察した。但し、深成岩類については岩石薄片に検鏡を加えた。この方法でできるかぎり礫種を細分して、それらを次の9つにまとめて表にした。不明とあるのは、

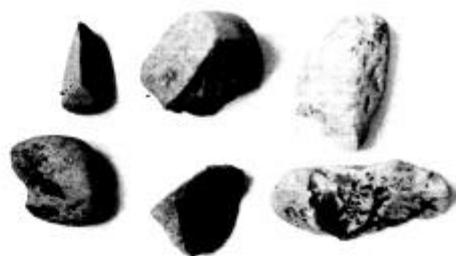
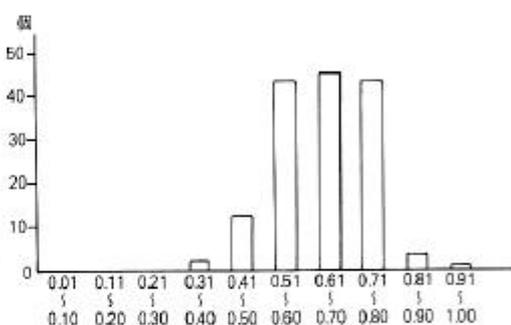


写真1 礫層中の新しい割れ口を持つ礫の例
(1目盛1cm)



第7図 球形度によるヒストグラム

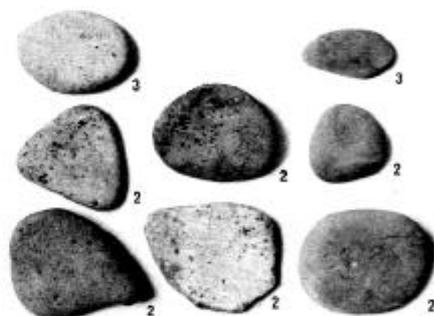


写真2 扁平度2と3の例 (1目盛1cm)



第8図 扁平度による礫の割合

判定の困難なものである。

◦安山岩類：灰～黒色でち密なもの、および素波里安山岩類

◦変質安山岩：淡紫色をしたもの、および淡褐色をした安山岩類

◦流紋岩類：流紋岩と石英安山岩

◦玄武岩類

◦花崗岩類：文象斑岩、花こう閃緑岩（大部分）閃緑岩

◦硬質泥岩類：硬質黒色泥岩・珪質泥岩・泥岩

◦凝灰岩類：角礫凝灰岩、角閃石石英安山岩質凝灰岩、白色の凝灰岩。（後者2種類は非常にもろい）

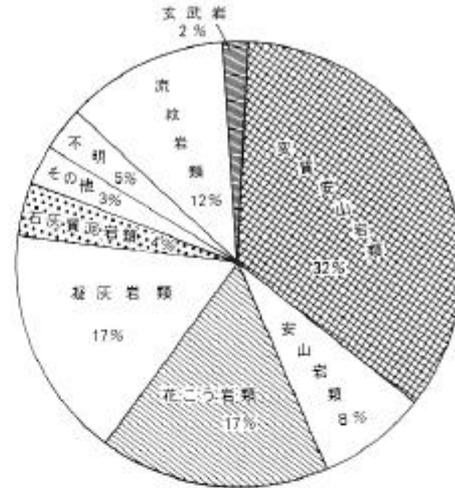
◦その他の岩石：集塊岩、石英脈、礫岩

礫種は以上のように20種以上にもおよび、付近の小河川の礫よりは、はるかに多彩である。また花こう岩類の岩体はこの地域には分布していないので、太平山もしくは竜が森の岩体から運ばれてきたものであろう。花崗岩類の礫中、ほとんどは花崗閃緑岩で、花崗岩がほとんど見つからないのは、この花崗閃緑岩は石英でち密に構成されているからと考えられる。なお、長石類はほとんどすべて絹雲母化されているし、また有色鉱物は緑泥石、緑簾石に変質している。

礫種について更に興味あることは、非常にもろい白色の凝灰岩礫が2個含まれていたことである。（重量29g 長径60mm、中径43mm 短径15mm 円磨度5、と 26g、50mm、22mm

20mm、6の二つ）これから考えられることは、ゆるやかな流れが想定される。

定向配列 流水によって礫が運搬されて、ある位置に止まる時、全体として礫は水流の方向に対して軸の向きが直角になるように並ぶ傾向がある。150個のうち長軸を持つもの134個について、その長軸方向をダイアグラムに表わしてみた。



第9図 礫種による分類

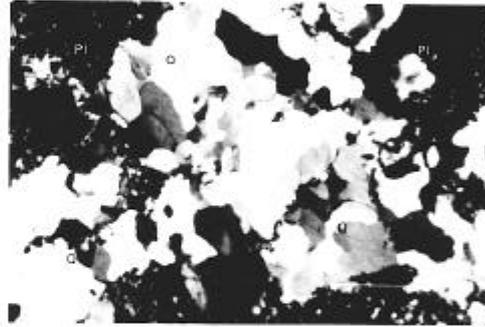
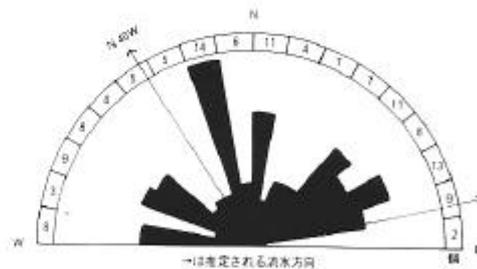


写真3 Q:石英
Pl:斜長石一面に絹雲母化している 1mm



第10図 定向配列ダイアグラム (134個)
→は推定される流水方向

この結果からは、強い、一定方向の流れは想定しにくく、むしろゆるやかな流れで、水流方向が定まりにくい環境が想定される。

覆瓦状構造 方位測定に際し、2つの小規模な覆瓦状構造が見つかり、それから予想される水流方向はN72°WとN65°Eで、定向配列からわずかながらに予想される。N40°WとN70°Eを合せてみるとやや似た傾向をしめす。

以上のような特色から、この礫層の形成された当時の環境を推定してみると、まず、円磨度が高いこと、球形度にばらつきがないこと、太平山もしくは竜が森にみられる岩体の礫があることなどから、この礫層は大きな河川によって運ばれてきたものであろう。現地点では米代川以外には考えられない。

次に、定向配列が安定していないことや礫の中に非常にもろい岩石が残っていることから、流水のおだやかな環境で堆積したものと思われる。(工藤)

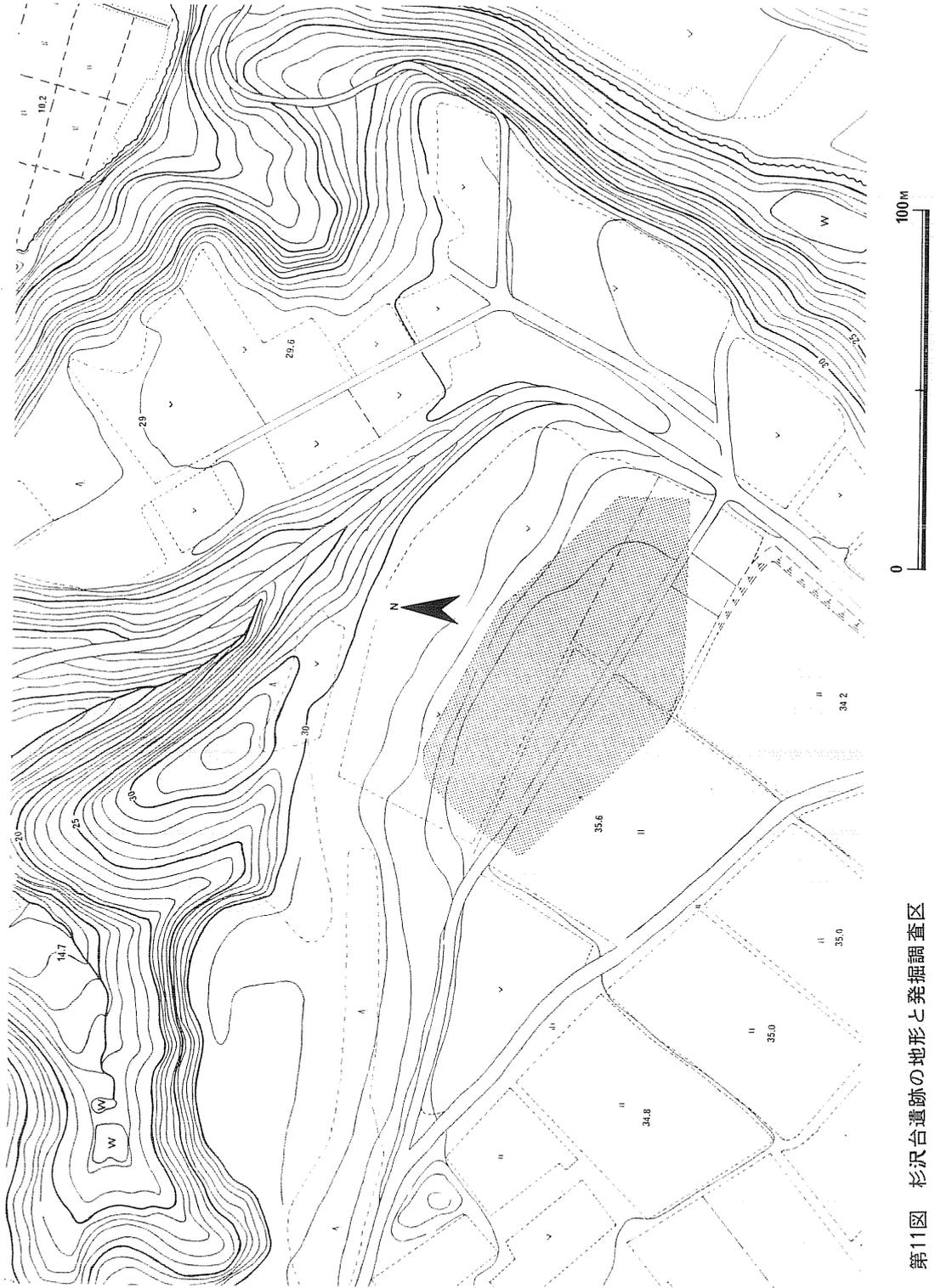
参考文献

- 白石建雄, 工藤英美, 秋田第四紀研究グループ (1977), 秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群, 秋田大学教育学部研究紀要 (自然科学) 第27集
- 秋田第四紀研究グループ米代班 (1977) 秋田県能代平野から藤里地域にかけての段丘群について, 秋田地学No.27
- 内藤博夫 (1977) 秋田県能代平野の段丘地形, 第四紀研究 第16巻, 第2号
- 秋田県教育委員会 (1979), 秋田県文化財調査報告書第62集, 「館下 I 遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会
- 秋田県教育委員会 (1980) 秋田県文化財調査報告書第74集「中田面遺跡, 重丘衛台 I 遺跡, 重丘衛台 II 遺跡, 根洗場遺跡, 発掘調査報告書」, 秋田県教育委員会
- 日本自然保護協会 (1980), 八森岩館自然公園学術調査報告, 財団法人, 日本自然保護協会
- 舟橋三男, 他 (1977), 新地学教育講座 4 「岩石」, 地学団体研究会編
- 菅野三郎, 他 (1979), 地学のガイドシリーズ①「地学の調べ方」コロナ社

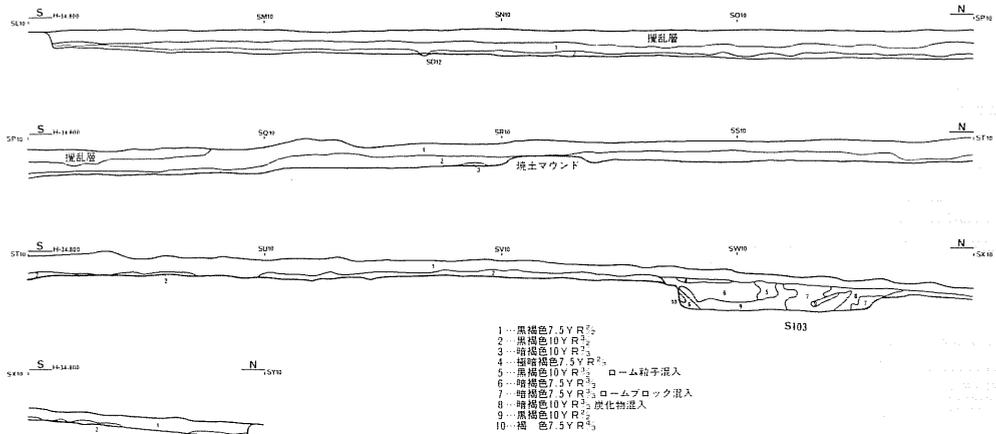
Ⅲ 発掘調査の概要

1 遺跡の概観

昭和54年10月22日～11月1日の範囲確認調査(秋田県教育庁文化課実施)で、遺跡の範囲は



第11図 杉沢台遺跡の地形と発掘調査区



第12図 杉沢台遺跡の地層

約 35,000 m^2 であることが確認されている。

この遺跡は、東雲台地の北縁に位置する。東雲台地は段丘群（白石，工藤他，1977）によって構成され、当遺跡は中位段丘に位置する。また、この中位段丘は、遺跡と周辺では2段になっている。上位は標高35m，下位は約32mである。発掘調査区域は、標高約35mの上位の段丘面と下位の段丘面に移行する斜面である。

標高約35mの段丘面は、南方約6kmにある米代川まで続き、広々としている。標高約32mの段丘面は狭く、北に約20mで急斜面になり、沖積地に至る。沖積地の標高は約11mである。

遺跡の東側には小谷が入り込む。この小谷には、現在でも、良質で水量の豊富な湧泉がある。遺跡下の沖積地には竹生川が流れ、日本海に注ぐ。

遺跡の現況は、畑地と水田である。水田部分は遺跡の南側の平坦地であるが、水田造成のさい、地山の上部を削っているため、遺構の一部の壁が破壊されていた。

当遺跡の地層は、I層が黒褐色土層（20～30cm），II層が暗褐色土層（10～20cm），III層がローム層（1～12m）であり、この下はローム層＋砂層，砂層，礫層へと続く。（永瀬）

2 調査の方法

発掘調査は、グリッド方式を採用した。グリッドの規模は4m×4m。グリッドの南北方向は磁北方向に一致する。グリッドの名称は、南北にアルファベット，東西に算用数字を用い、これらの組合せで表現した。

遺構の実測は、遣り方測量で実施した。遺構の記号は下記のとおりである。

SI…竪穴住居跡，SKI…竪穴状遺構，SK…土壌，SKF…フラスコ状ピット，SD…溝
そして、発見順にSK01，SK02…のように通し番号を付した。その他の略記号は



第13図 杉沢台遺跡遺構分布図

3 調査の経過

調査期間は昭和55年4月14日～同年10月3日である。

4月14日の午前中は、小土公民館において、作業員との打合せ会。調査の目的、発掘の仕方（スライド使用）、勤務時間、賃金の支払い、諸注意を話合う。15日、表土除去作業を開始、西側から東側に調査を進める。西側には水田が1部あったが、転作作物が植えられていたため7月以際に調査することにした。アゼを残しながら、第I層を除去すると歴史時代の土壌、溝、竪穴住居跡を確認。23日、縄文時代前期、晩期の土器、石器も検出されるようになる。25日、歴史時代の住居跡・溝・土壌の精査をはじめ。全体の表土除去作業を終了させ、遺構の重複関係を把握してから精査にとりかかれればよいのであるが、遺構確認面を長期間放置しておく乾燥による地割れ、埋土層の堅固化が進むため精査を開始。

5月1日、SI01の精査でカマド付近に多量の土師器杯が検出。7日、長軸が15m以上もある遺構（SI06）らしきもの確認。地面が凹んだ自然地形なのか、それとも遺構なのか判断にまよいながら、8日に精査。中軸線上で地床炉確認。大型住居跡であることが判明。5月中旬になると縄文時代前期の小型・中型住居跡も数棟精査終了。調査は標高35mラインに沿って東方に進行し、調査予定区域のほぼ中央部で、楕円形に近い環状溝が確認、精査開始。西半分の精査はほぼ終了。しかし、SI06大型住居跡の北側は、東西約30m、南北約9mにわたって地山が出現しない。もしかしたら、30mを越す超大型住居跡ではないかという期待が持たれはじめる。そして、歴史時代の溝であるSD11・14・16の精査過程で、住居跡の床面・壁の1部を確認したため、30mを越える大型住居跡である確信を持った。21日、SI07として精査を開始。5月末になると、発掘区の西側の北斜面にフラスコ状ピットが群集することが判明した。そして、このフラスコ状ピット群は、標高30mラインの北側斜面に広く分布することが予想されたため、斜面の表土除去作業を開始。30日、SKF08の精査、埋土層中から土器とともに、貝層（ヤマトシジミ中心）検出される。

6月3日、竹生小学校児童来跡。5日、SKF18の精査で縄文時代後期の深鉢型土器（完形品）が床面に倒立した状態で検出。今後、後期の遺構も検出されることが予想される。6月末まで、北側斜面と東側の表土除去作業を継続。

7月中旬までに、竪穴住居跡33棟、フラスコ状ピット70基確認し、精査を継続。10日、遺構の平面実測のための遣り方測定の杭打ちを開始。また、水田部分の転作作物の検査が終了したため、南側の表土除去作業も開始。21日、高校生、大学生が調査に参加。遺構の実測を担当してもらった。23日、竹生遺跡の調査開始。30日、大潟村公民館一行来跡。

8月4日、能代市中央公民館チビツ子教室一行来跡。由利高校生21名、6日までの予定で調査に参加。調査区南東隅に分布する縄文時代晩期の遺物包含層の精査開始。5日、能代市東部公民館チビツ子教室一行来跡。8日、秋田県立博物館教室一行来跡。8月末までに竪穴住居跡40棟、フラスコ状ピット84基、土壌15基、溝13条、竪穴状遺構2棟検出。東雲中学校生徒来跡

9月2日、向能代小学校4年生来跡。6日、遺跡の保存問題について小土部落会、農政局、文化課の話し合いを現場事務所で行う。12日、保存についての再度の話し合いを持ち、農政局、地権者、文化課参加。保存は困難であるという意見が多し。9月中旬までに、北側斜面のフラスコ状ピットは100基近くになる。SKF98、99からも貝層が検出され、貝層出土のフラスコ状ピットは全部で6基となる。埴川小学校児童来跡。24日、古池祐子（東大総合資料研究所）氏貝のサンプリングのため来跡。26日までに遺構の精査をほぼ終了。27日、午後1時から発掘調査を一般公開。10月3日まで遺構の実測と写真撮影のほか、発掘用具の撤去作業。（永瀬）

IV 調査の記録

1 縄文時代前期

① 竪穴住居跡

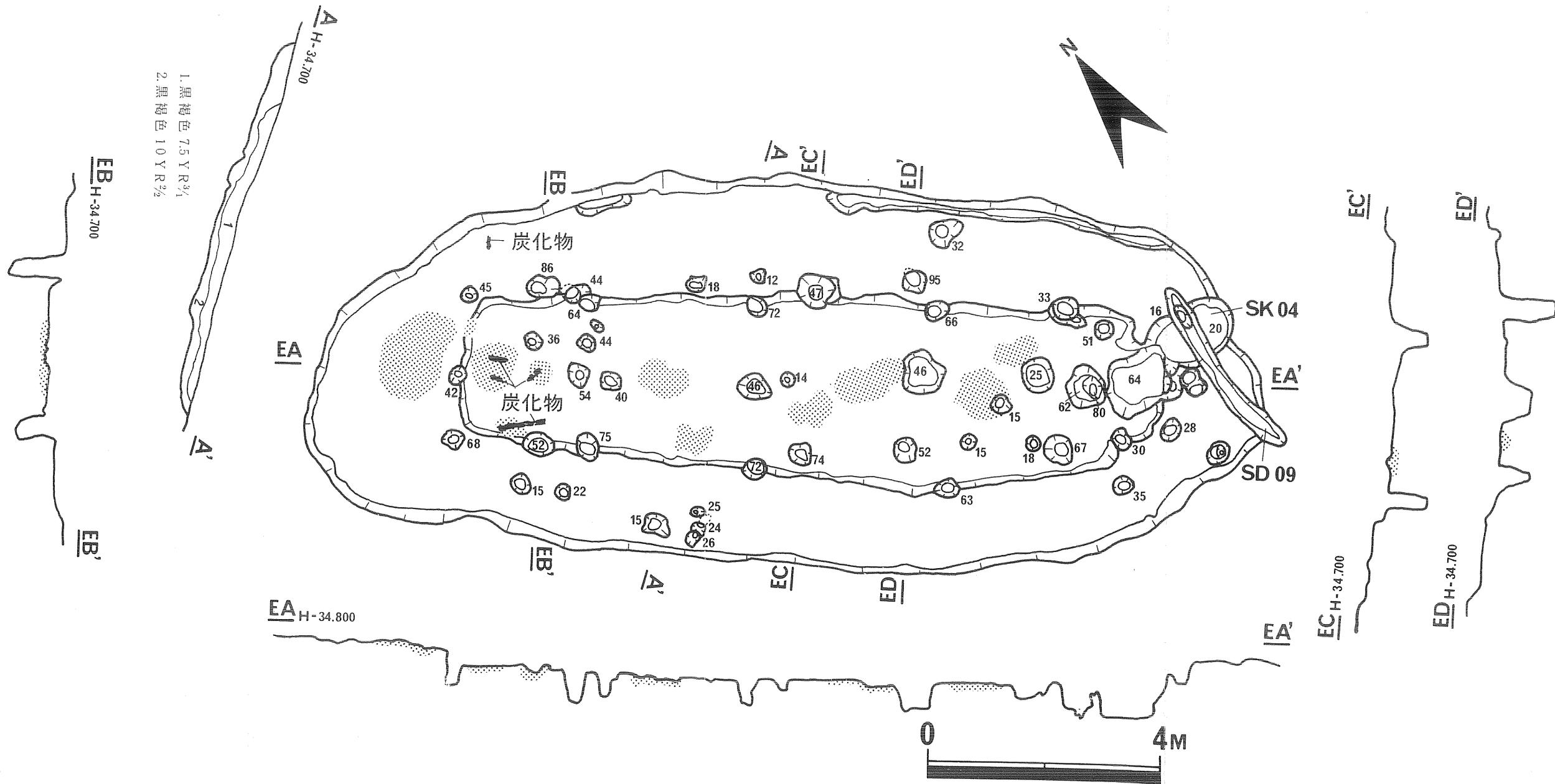
竪穴住居跡はすべて地山ローム上面で検出された。

SI06竪穴住居跡 調査区のほぼ中央で検出。もっとも標高の高い場所に位置する。

SK04・SD05・09・SI31と重複するが、新旧関係はSI31→SI06→SK04・SD05・09である。平面形は小判形であり、長軸方向は略東一西を示す。外プランの規模は長軸約16m・短軸約6.6m。面積約81㎡。

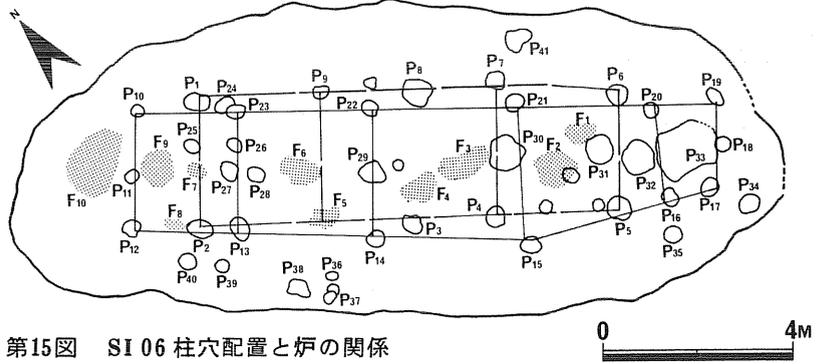
床面は2段構造を呈し、巾約1.5mのベンチ状床面が全周。この床面は内部に向かっていくぶん傾斜し、段を形成しながら土間状床面（もっとも低位の床面をいう）に移行する。段の高さは約20cm。土間状床面は、略長方形を呈し、平坦で堅くしまる。この床面の規模は長軸約12m、短軸約3m。

柱穴はベンチ状床面と土間状床面の段境に、長軸線に相対して配置される。柱穴配置・柱穴規模から2時期に分けられそうである。I期の主柱穴はP₁～P₉であり、柱穴規模がII期のそれより大きく、中央部の柱間が狭くなる特徴を持つ。II期の主柱穴は、段境に沿って配置されているP₁₀～P₂₀が考えられる。I期より柱穴規模は小さくなるが、東西に拡張され、東西両端の柱間が狭くなる。また、両端の中央部にも柱穴（P₁₁・P₁₈）が配置される。柱痕跡を確認できる柱



第14図 SI 06 実測図

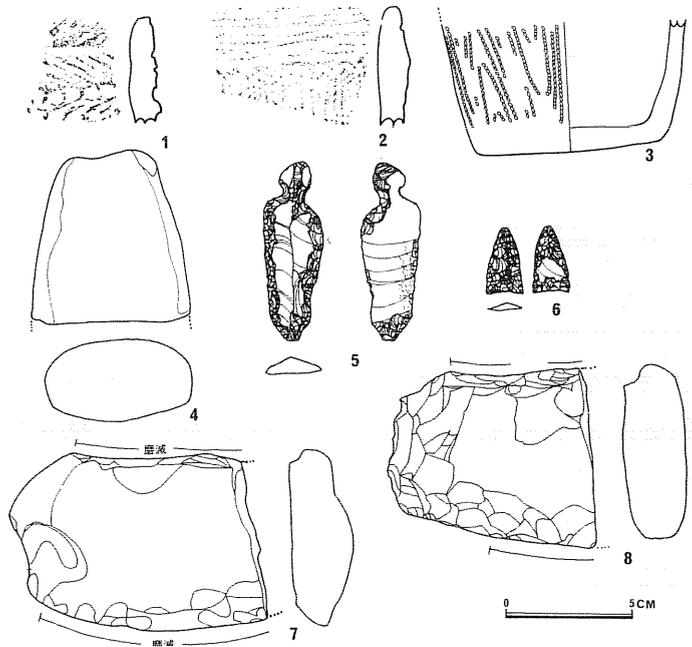
穴は認められなかったが、柱穴底部に柱アタリと考えられる凹みを有するものもあり、太さは約20cmと推定される。なお、長軸線上にも柱穴（P₇～P₂₂）が認められる。



第15図 SI 06 柱穴配置と炉の関係
および柱穴組合せ予想図

炉はこの長軸線上の柱穴と柱穴の間に位置し、いずれも地床(F₁～F₁₀)。F₁・F₄・F₅・F₈は長軸線からはずれる。長軸線上に位置する炉は、熱作用による赤色変化が激しい。F₁₀は熱土が凸状を呈し、ベッド状床面に位置する。北壁の1部に沿って、周溝が認められる。

土間状床面の東端部に特殊ピットP₃₃が存在する。平面形は不整長方形を呈し、長軸約1m・短軸約0.9m・深さ0.64m。用途不明。



第16図 SI06 出土遺物

出土遺物は少ない。土器片と石鏃1点、石匙1点、扁平打製石器2点、石斧1点出土。3と7は床面から、8は柱穴出土。他は埋土出土である。1と2は口頸部の狭い文様帯を持ち、撚糸の側面圧痕と刺突文が施文される。3は木目状撚糸文が施文される。7・8の扁平打製石器は、両側辺とも磨滅している。

SI 07 竪穴住居跡 調査区のほぼ中央、SI06の北1.5mで検出。SI 06と同様、遺構分布地域のなかでもっとも標高の高い場所に位置。本遺構の北はすぐ斜面になり、台地のまさに縁に構築さ

れている。杉沢台遺跡検出の竪穴住居跡のなかでは最大規模である。SD03・05・11・14・16・SKF03・15・16, SI08・11・21・31・47・49, と重複するが、新旧関係はSKF15・16, SI08・11・21・31・47・49→SI07→SKF03, SD03・05・11・14・16となる。

平面形は小判形であり、長軸方向は略東一西を示す。外プランの規模は、東端がSD14・16によって破壊されているが、長軸推定約31m（30mまでは確認できる）・短軸約8.8m。

床面は基本的には2段構造を呈し、巾約2mのベンチ状床面が全周する。なお、西端のベンチ状床面は広く約7mもあるが、西端の壁のくびれからこの部分は拡張されたものと推察される。ベンチ状床面は明瞭に段を形成し、ゆるく傾斜しながら土間状床面に移行する。南側のベンチ状床面にはもう一段認められるが、埋土層の観察から、本住居跡の初期のベンチ状床面と土間状床面の段境と考えられる。従って、土間状床面は、最終的には当初より狭く、深く掘り下げられたものと考えられる。ベンチ状床面と土間状床面の比高は、20~30cm。

土間状床面は略長方形を呈し、長軸約22.6m, 短軸は中央部で約4m, 東西両端部で約3m。床面はほぼ平坦であり、やや堅い。

全体の面積は222㎡であり、ベンチ状床面が145㎡, 土間状床面が77㎡である。

柱穴はベンチ状床面から下の土間状床面に移行する段境に集中する。そして、長軸線を中心に対称的に配置されている。柱穴配置・柱穴の規模・柱穴の重複・埋土の観察などから4期の組合せが考えられる。I期の主柱穴は、初期のものと考えられる段境とわずかに外側に配置されたP₁~P₄が考えられる。中央と両端の柱間が狭くなる。II期のそれは、初期のものと考えられる段境にあるP₅~P₇が考えられる。中央と両端の柱間が狭い。III期のそれは、最終の段界のわずかに内側のP₈~P₉と考えられる。この時期の柱穴はやや規模を小さくするが、西側で延びている。両端の柱間が狭い。IV期のそれは、最終のものと考えられる段境にあるP₁₀~P₁₃と考えられる。この時期の柱穴規模がもっとも大きく、東西両端に拡張されている。中央の柱間が狭い。

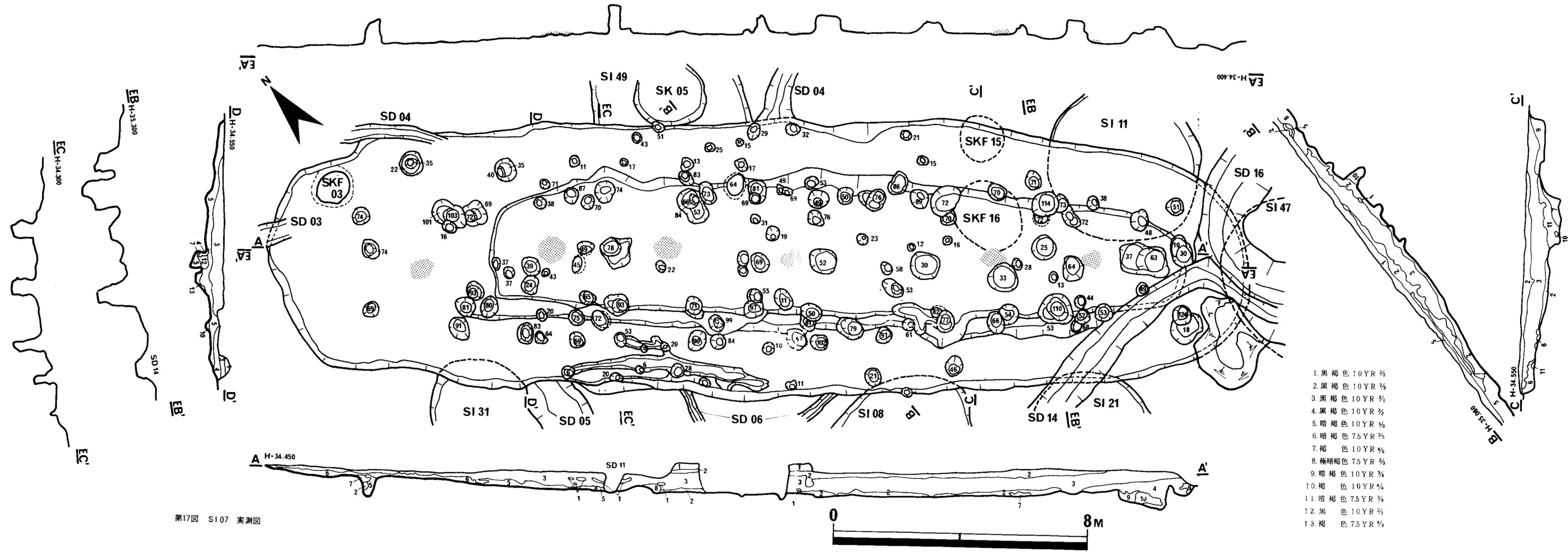
以上の柱穴のほか、長軸線上にも柱穴と考えられるP₉・P₁₀・P₁₁・P₁₃・P₁₅が土間状床面に存在する。

炉は、すべて地床炉であり、長軸線上に存在する柱穴と柱穴の間に位置する。F₁~F₆がそれであり、焼土は赤色変化が激しく、使用度が高かったものと考えられる。F₁~F₅はわずかに凹むが、F₆は凸状を呈する。

壁は1部古代の溝によって破壊されているが明瞭に判別できる。

周溝は認められない。出入口も不明である。

土間状床面の東半分には、柱穴と様相を異にする特殊ピット（P₁₀₇・P₁₁₁・P₁₁₂・P₁₁₄・P₁₁₆）がある。いずれも長軸線上で、炉の近くに位置する。P₁₀₇・P₁₁₁・P₁₁₂・P₁₁₄は円形を呈し、直径約80cm, 深さは25~52cmである。P₁₁₆は略長方形を呈し、長軸約140cm, 短軸約80cm, 深さ63cmである。用途



第17图 S107 实测图

不明。

出土遺物は、土器片と石匙3点・石鏃1点
石斧1点・不定形石器2点・石錘7点・扁平
打製石器1点。床面出土は3・4・11・14。

1は羽状縄文と刺突文が、2と4には縄の側
面圧痕が、9には木目状撚糸文が施文。他の
土器は口頸部文様帯が1.5~1.8cmと狭く、側面
圧痕文が施文。3は口頸部が「く」の字に外
反する。

14の石斧は片刃である。15の扁平打製石器
は、1側辺が磨滅している。

SI08竪穴住居跡 SI07に北東壁が破壊され
ているが、平面形は円形を呈するものと考え
られる。径約4.6m。床面は平坦で堅くしまる。

柱穴はP₁~P₄。P₆は炉と考えられるが、焼
土が判然としない。P₅は径30cm、深さ34cmの
特殊ピット。Bに接して台石があり、上面が
磨滅している。

出土遺物は、口頸部に刺突文の施文される
土器片と石錘3個。いずれも埋土出土。

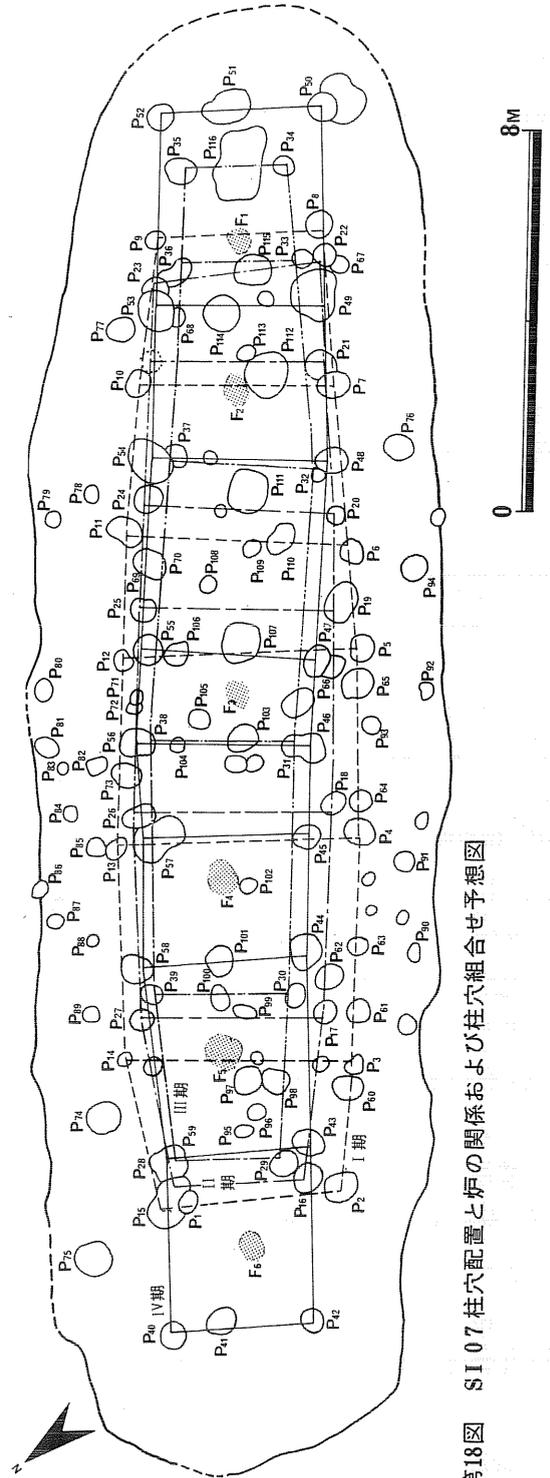
SI09竪穴住居跡 調査区の西側に位置し、
SI02と重複。

平面は楕円形を呈し、長軸約8m・短軸約
6m。面積約34㎡。

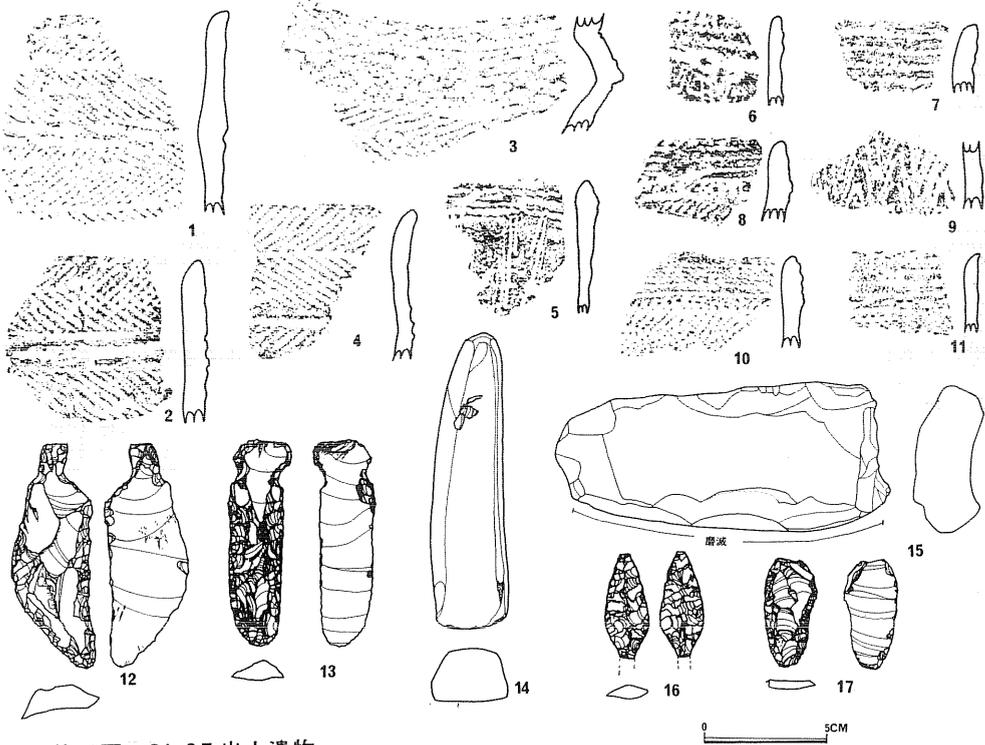
床面は2段構造を呈し、巾20~50cmの狭い
ベンチ状床面が全周する。ベンチ状床面と土
間状床面との比高は約8cm。ベンチ状床面か
ら遺構確認面までの高さは約30cm。

土間状床面は、やや凹凸を呈するが堅くし
まる。

炉は土器埋設炉であり、本遺構の中央に2
カ所存在する。



第18図 SI07柱穴配置と炉の関係および柱穴組合せ予想図



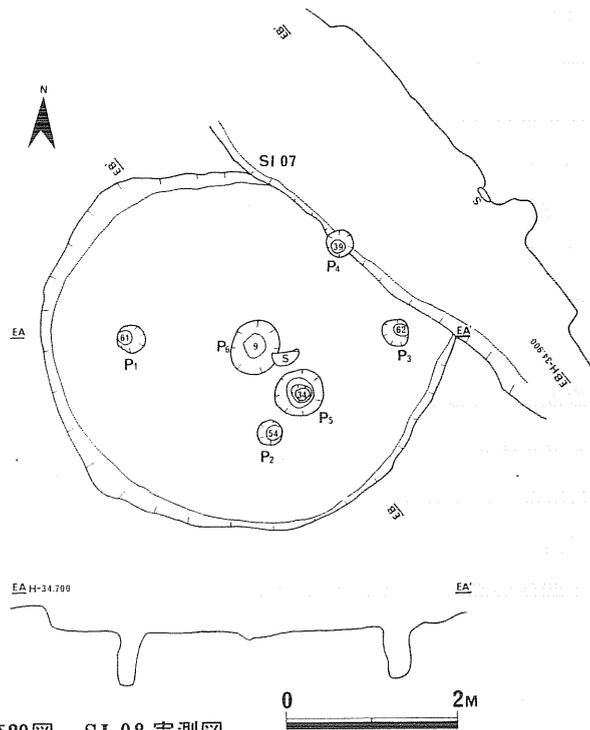
第19図 SI 07 出土遺物

柱穴は、 $P_1 \cdot P_4 \cdot P_7 \cdot P_{23} \cdot P_{12} \cdot P_{14}$ と炉の周辺の $P_{10} \cdot P_{11} \cdot P_{13} \cdot P_{18}$ が、主柱穴と考えられる。壁に沿って、 $P_{25} \sim P_{35}$ も本遺構に伴うものと考えられるが浅い。

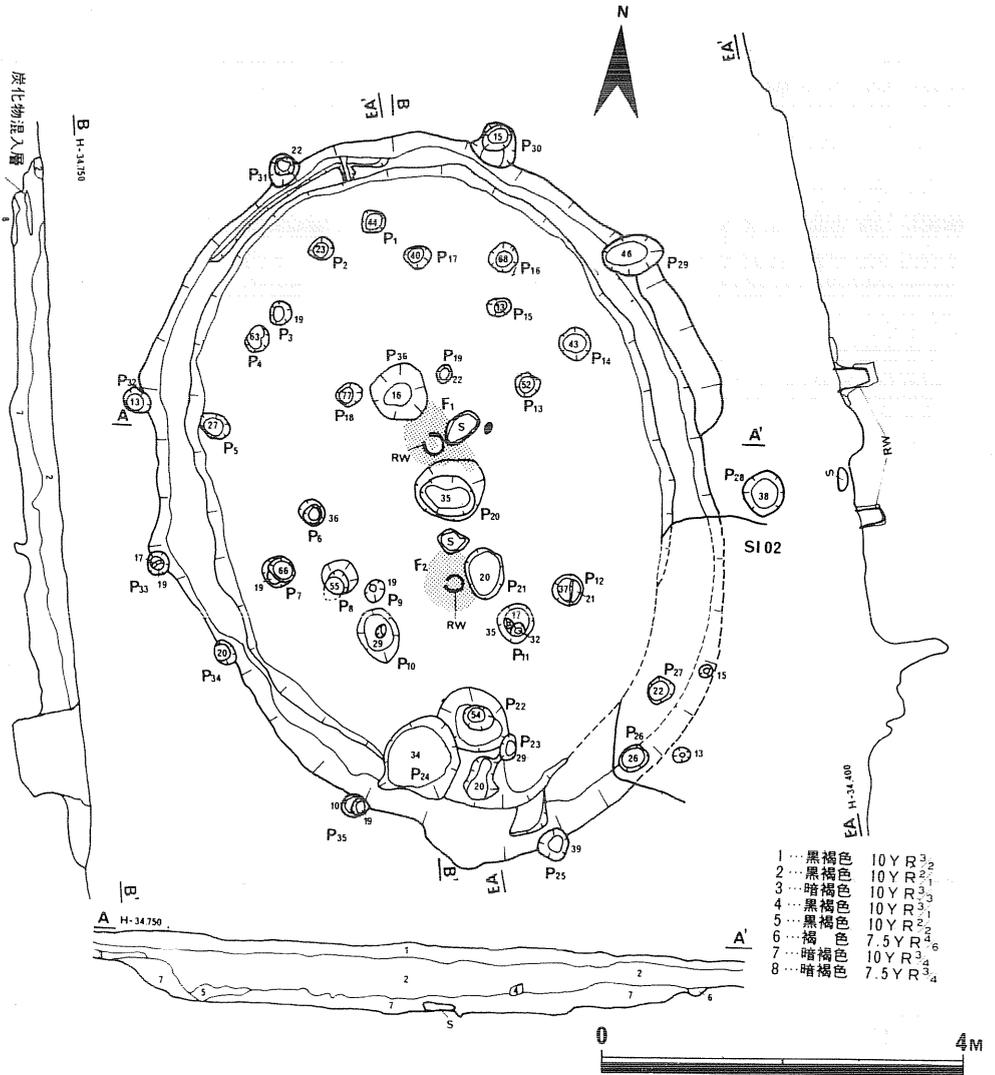
長軸線上には $P_{22} \cdot P_{20} \cdot P_{36}$ の特殊ピットが認められる。 P_{24} は後世のものである。

炉に接して2個の台石があり、いずれも上面は磨滅している。

出土遺物は、1が炉 (F_1) の埋設土器で、ほぼ完形。口径22.5cm・底径14cm・高さ34.8cm。狭い口頸部文様帯には、側面圧痕文が、胴部には木目状撚糸文が施文される。口頸部



第20図 SI 08 実測図



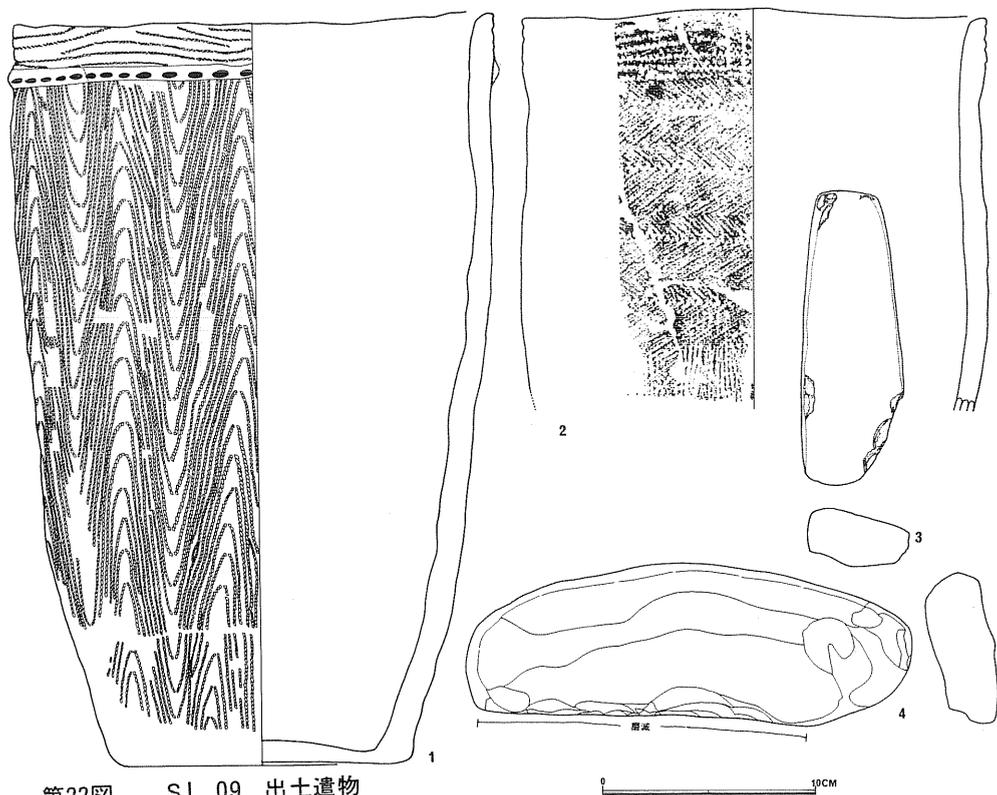
第21図 SI 09実測図

には低い隆帯が貼付され、刺突文が施文される。内面はミガキが顕著。F₂の埋設土器は器面全体に羽状縄文が施文されている。2は波状口縁を呈し、側面圧痕文・異条羽状縄文・単軸絡条体が施文される。石器は石斧1点、扁平打製石器1点、不定形石器1点、石錘1点出土。

SI10竪穴住居跡 調査地区の西側の台地縁に位置する。

SI03と重複し、壁の一部が破壊されているが、円形に近い楕円形を呈する。長軸約5 m・短軸約4.2 m。面積約17 m²。

壁は垂直に近く掘られ、台地側（南）が高く、斜面側が低い。



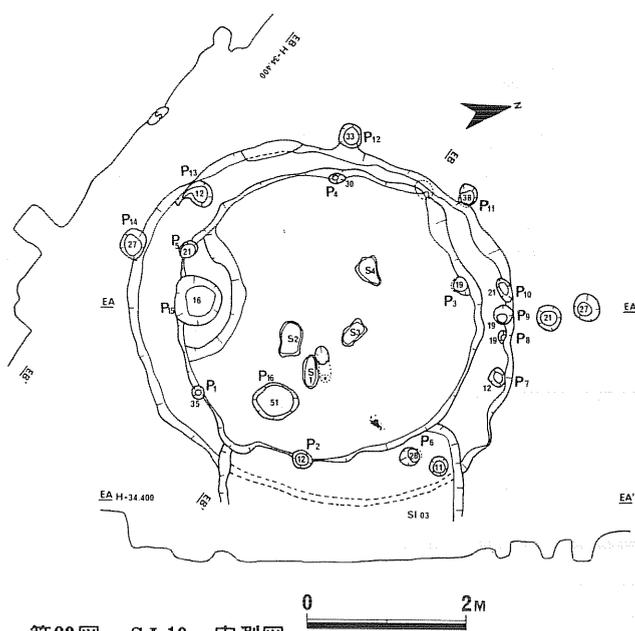
第22図 SI 09 出土遺物

床面は2段構造を呈し、巾20~50cmの狭いベンチ状床面が全周する。ベンチ状床面は平坦で明瞭な段を形成しながら、土間状床面に移行する。段の高さは約15cm。

土間状床面は平坦である。

柱穴は段境のP₁~P₆が主柱と考えられる。周壁にもP₇~P₁₄が認められる。

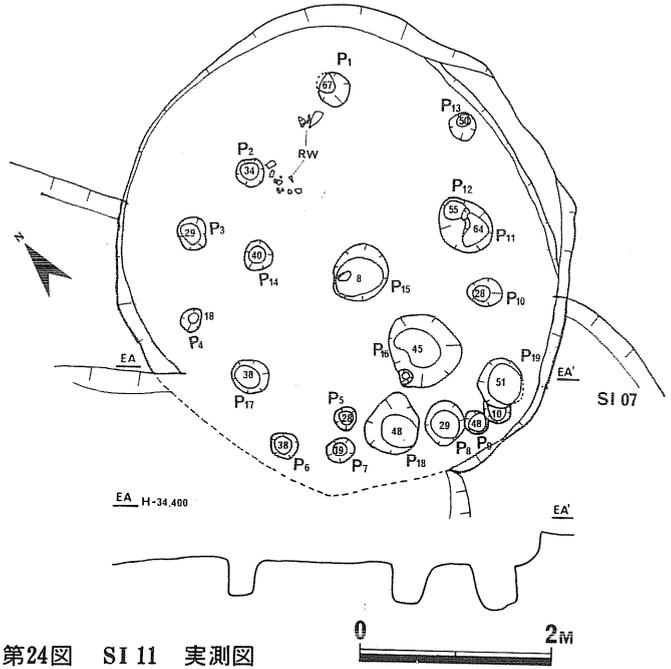
土間状床面にはP₁₅・P₁₆の特殊ピットがあり、とくにP₁₅は床面に高さ約16cmの粘土を手状に張付けて作ったものである。台石が4個あり、S₂・S₄の上面は磨滅している。



第23図 SI 10 実測図

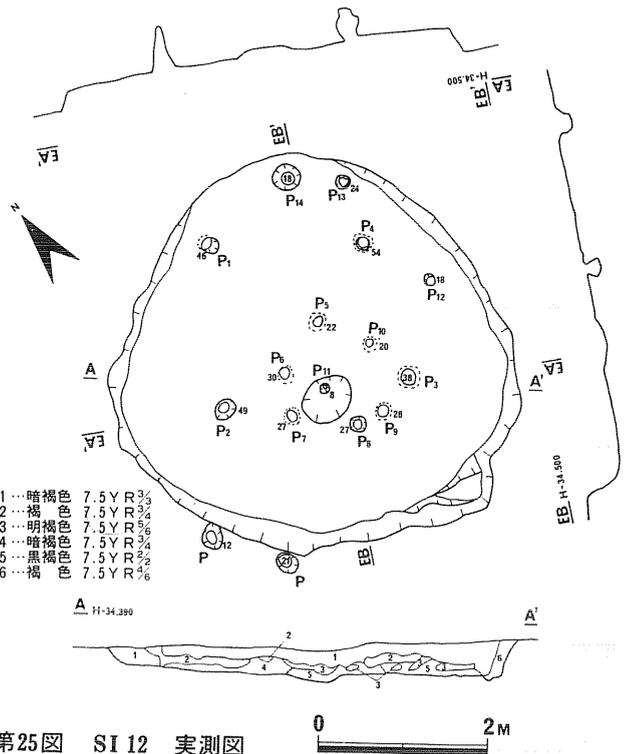
SI11 竪穴住居跡 SI07と重複し、南側の壁は破壊されているが、平面形は円形を呈するものと考えられる。径約5m。壁高は約30cmで、ほぼ垂直に掘られる。支柱穴はP1～P4・P6・P8・P10～P13と考えられる。床面は平坦で堅くしまる。床面のほぼ中央にあるP15は、炉と考えられるが、焼土は判然としない。炉の近くに特殊ピットP16がある。

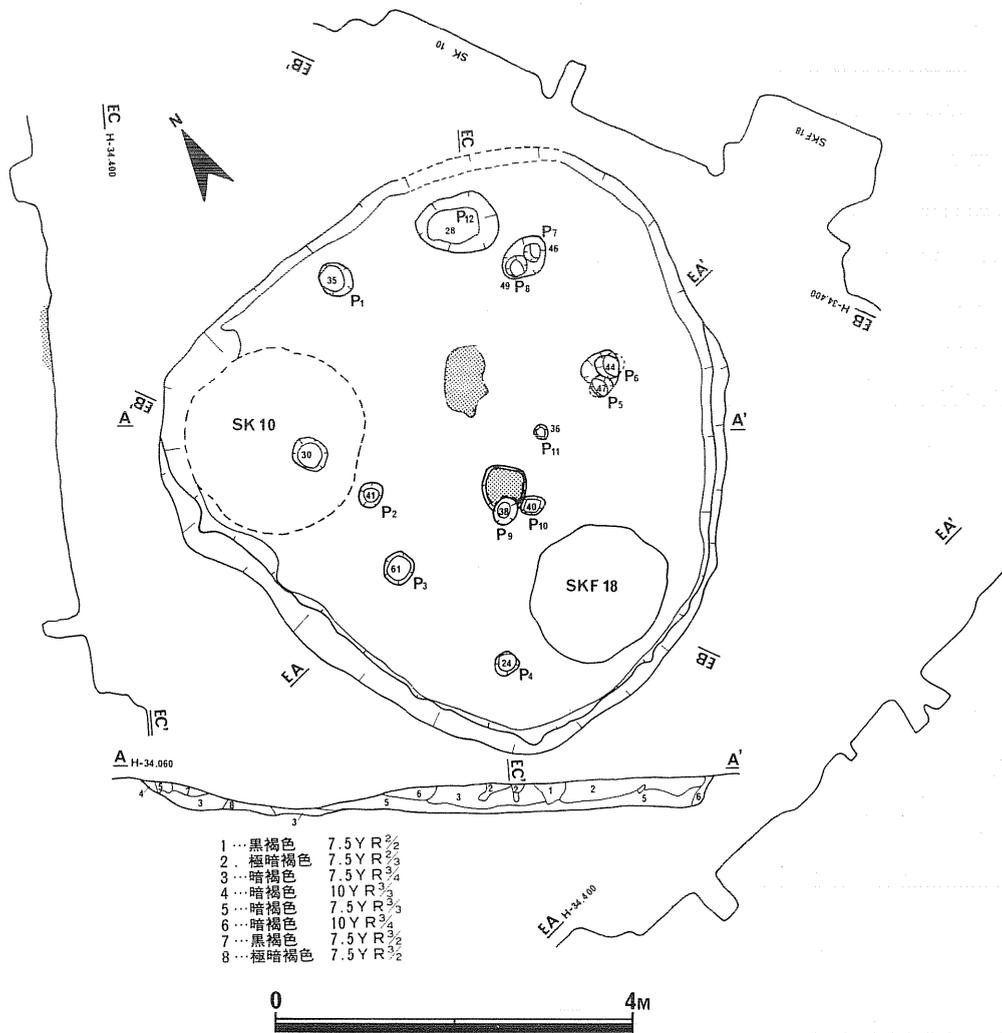
出土遺物は、羽状縄文と単軸絡条体の施文される土器片が埋土から出土。



SI12 竪穴住居跡 SI07の西側近くで検出。平面形は不整円形を呈し、径約4.6m。面積約14.3㎡。南壁は約40cmの高さであるが、傾斜地の北側は不明。床面は平坦で堅くしまる。支柱穴はP1・P2・P4・P8・P2と考えられる。Rは炉と考えられるが、焼土は判然としない。このP11の周囲には、P7・P20・P22・P28・P30の小柱穴がめぐる。

SI13 竪穴住居跡 SI07の北で検出。SKF18・SK10と重複し、新旧関係はSK10→SI13→SKF18である。平面は不整円形で南北6.3m。面積は約26㎡。壁高は西側で65cm、北の斜面側は10cm。床面は平坦で堅くしまる。炉は地床炉で中央に2カ所あり、熱作用による赤色化が





第26図 SI 13 実測図

激しい。主柱穴はP₁～P₃・P₅・P₈と考えられる。

出土遺物は、埋土から側面圧痕文が施文される土器と木目状撚糸文の施文される土器片。石器は石錐1点・石錘4点。

SI 14 堅穴住居跡 調査区の西側で検出。平面形は円形で、径約4m。面積は約10m²。壁高約40cm。床面は堅くしまる。中央部に炉と考えられるP₇があるが、焼土は判然としない。柱穴はP₁～P₄。特殊ピットP₆が南壁近くにある。台石が床面から1cmほど浮いて出土したが、上面は磨滅していない。

出土遺物は、埋土から石鎌2点・石匙1点・扁平打製石器1点。

SI 15 堅穴住居跡 SI 07の北斜面で検出。6基のフラスコ状ピットと重複し、壁は南側斜面上

方しかわからない。壁高約65cm。床面は平坦。柱穴はP₁のみである。

出土遺物は、羽状縄文の施文される土器片と石匙2点・石錘1点が埋土から出土。

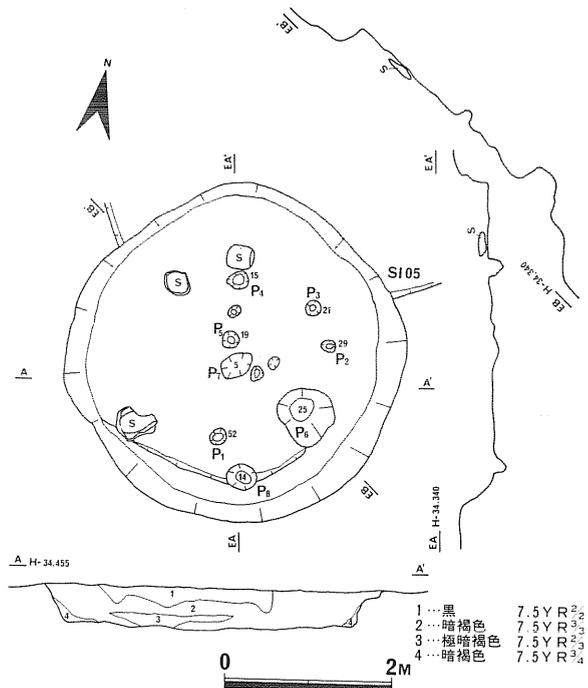
SI16竪穴住居跡 西側斜面で検出。SKF43と重複しているが、本遺構が新しい。平面形は円形で、径約3.7m。面積は約6㎡。壁高は南側で約50cm北側で約23cm。床面は平坦であり、壁に沿って溝がめぐる。柱穴は床面のP₆のほか、壁に沿ってP₁~P₅・P₇がある。

出土遺物は、狭い口頸部文様帯に側面圧痕文の施文される土器片と石匙1点と石錘1点が埋土で検出。

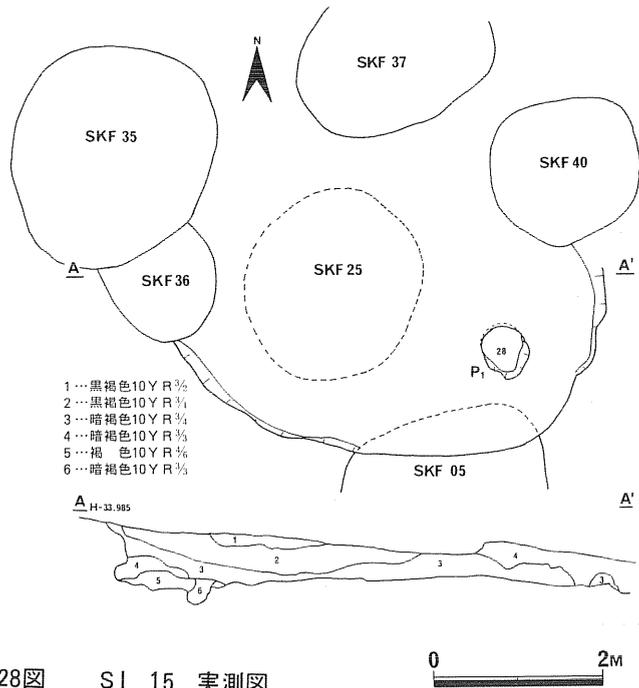
SI17竪穴住居跡 SI18と重複し、東壁が破壊されているが、平面形は径約3.4mの円形を呈するものと考えられる。壁高約20cm。床面は平坦。柱穴状ピットP₁~P₆が認められるが浅い。床面中央に炉かと考えられるP₇があるが、焼土は判然としない。

出土遺物は、埋土から石鏃2点・石匙1点。

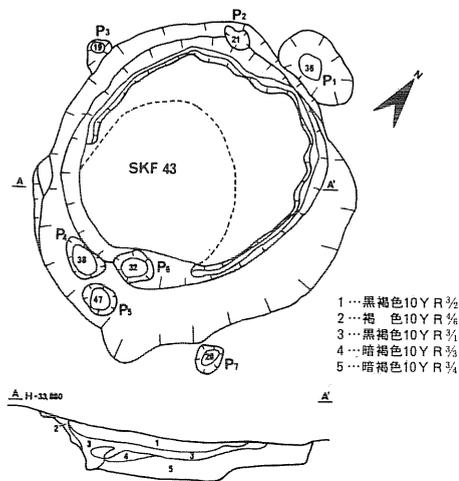
SI18竪穴住居跡 調査地域の中央からやや東の台地の縁で検出。大型住居跡SI07のすぐ東に位置する。多



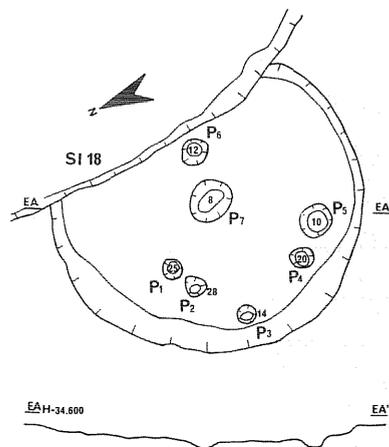
第27図 SI 01 実測図



第28図 SI 15 実測図



第29図 SI16 実測図



第30図 SI17 実測図

くの遺構と重複するが、新旧関係は、SI17・47、SKF90・91・92・103→SI18→SDI2・13・16となり、SI30・SKF70との関係は不明である。

平面形は、確認できる壁・柱穴配置・炉の位置などから楕円形ないしは小判形を呈するものと考えられる。長軸推定約15m・短軸推定7m。長軸方向は南一北である。

床面は2段構造を示すらしく、中央部に段が認められる。段の高さは約10cm。ベンチ状床面の中は約2m。ベンチ状床面も土間状床面も平坦で堅くしまる。

柱穴はベンチ状床面と土間状床面の段境に集中し、柱穴配置・柱穴の重複から考えて2時期の組合せが考えられる。I期はP₁～P₆の組合せが予想される。I期の柱穴位置は南北両端の柱間距離は短くなる。II期はP₉～P₁₆の組合せが予想される。

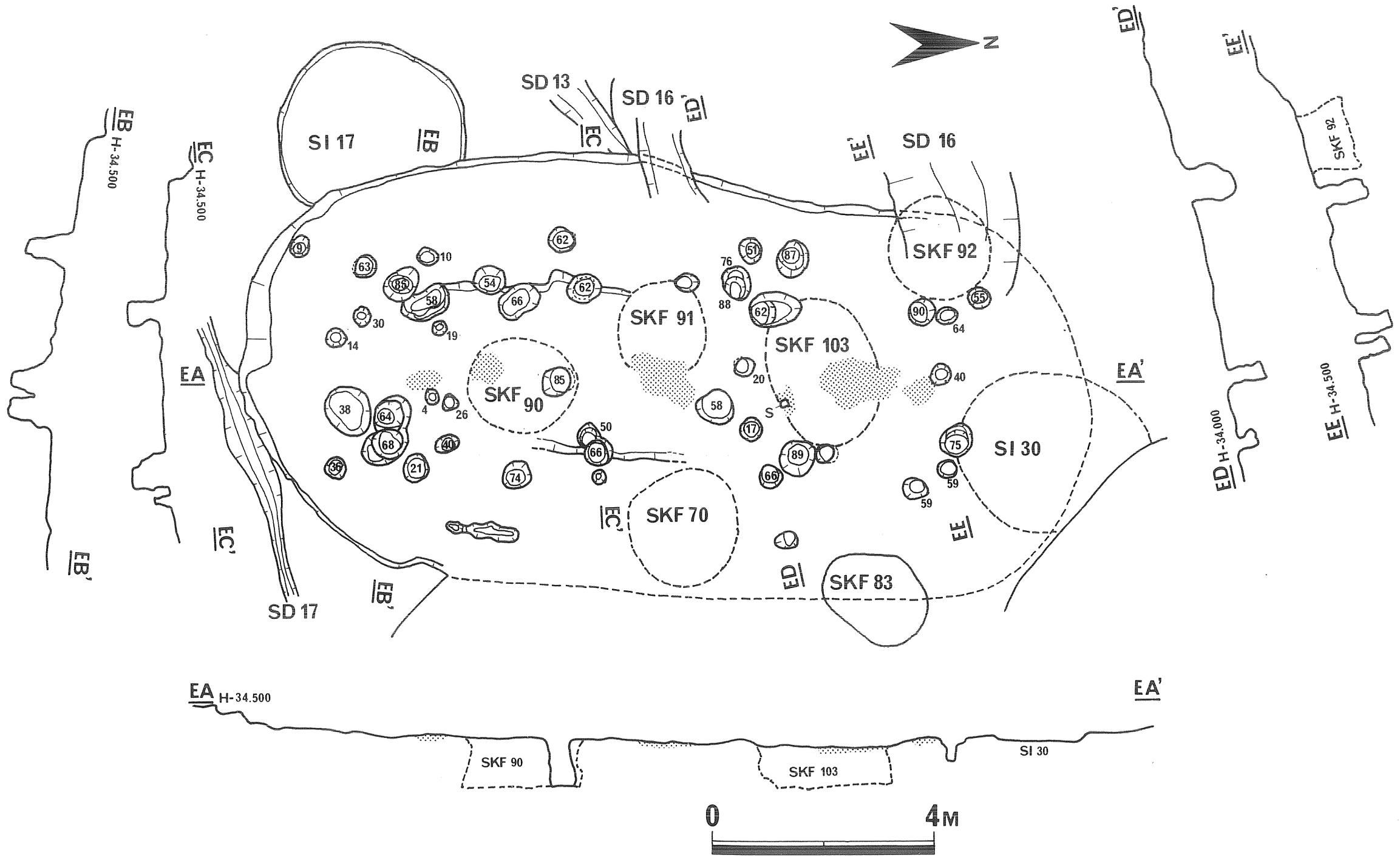
以上の柱穴のほか、長軸線上にもP₁₈～P₂₀の柱穴が認められる。

炉は、この長軸線上の柱穴と柱穴の間に位置する。いずれも地床炉（F₁～F₅）であり、熱作用で赤色変化している。

壁は西側と東側が明瞭であるが、傾斜地の北側と東側は不明である。壁は垂直に近く掘られ壁高は約40cmである。

P₂₀は、柱穴とは様相を異にする特殊ピットで、口径約1m・深さ38cm。用途不明。

出土遺物は、2がP₇の出土であり、他は埋土からの出土。比較的多量の土器が埋土から出土。1と2には羽状縄文と側面圧痕文が施文され、2の胴下半部には多軸絡条体が施文される。3～6には、口頸部に側面圧痕文が横位・縦位・斜位に施文。7には刺突文が施文。8は波状沈線文と刺突文が口頸部に施文される。石器は石槍1、石匙5点、石錘1点、扁平打製石器3点、石錘5点。



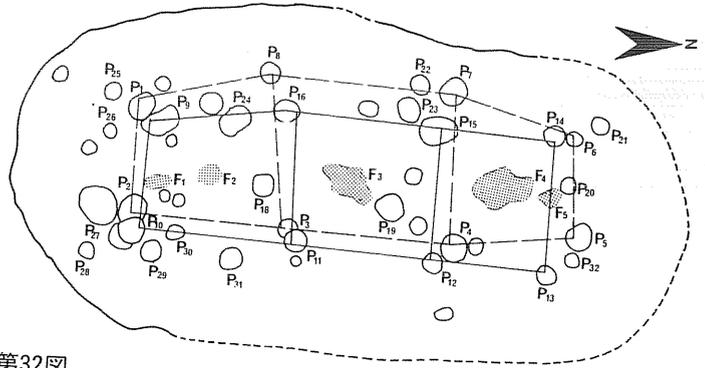
第31图 SI 18 实测图

SI19竪穴住居跡 SI07の北で検出。SKF47・81と重複し、本遺構が古い。平面形は不整楕円形で長軸約3m。面積約6㎡。壁高約20cm。床面は平坦。柱穴は不明。

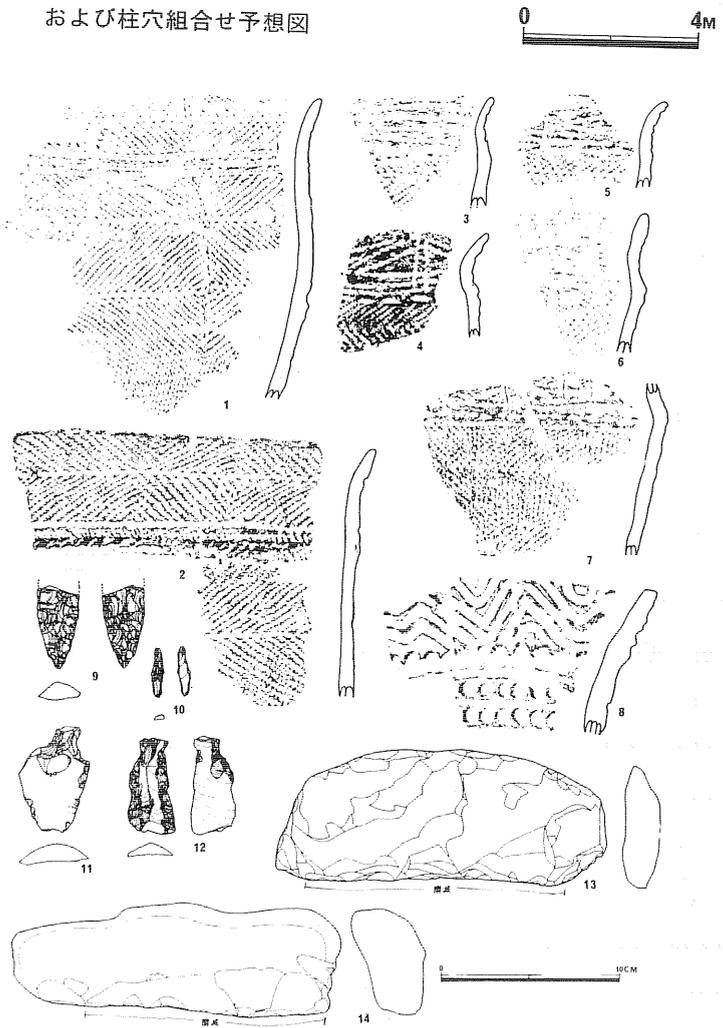
SI20竪穴住居跡 西側斜面で検出。SKF13・82と重複するが、本遺構が古い。平面形は円形を呈し、径約3mと小さい。住居跡の掘り方も浅く、壁高約10cm。床面は堅くじまる。

SI21竪穴住居跡 SD14が西壁を破壊。平面形は円形と考えられる。床面は平坦。炉と考えられるピットが中央にある。

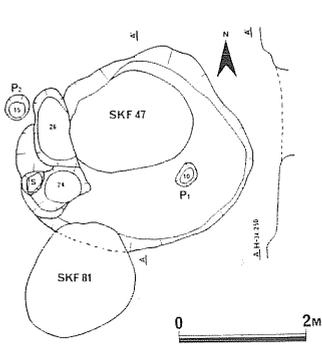
SI22竪穴住居跡 北斜面で検出。SI23・SKF45と重複。新旧関係はSI23→SI22→SKF45。平面形は楕円形を



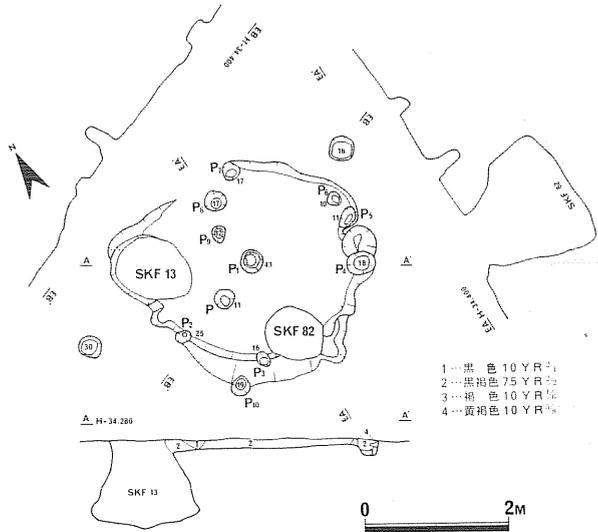
第32図
SI 18 柱穴配置と炉の関係
および柱穴組合せ予想図



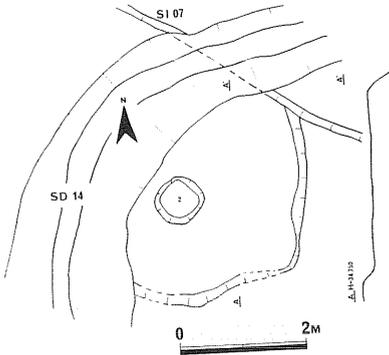
第33図 SI 18 出土遺物



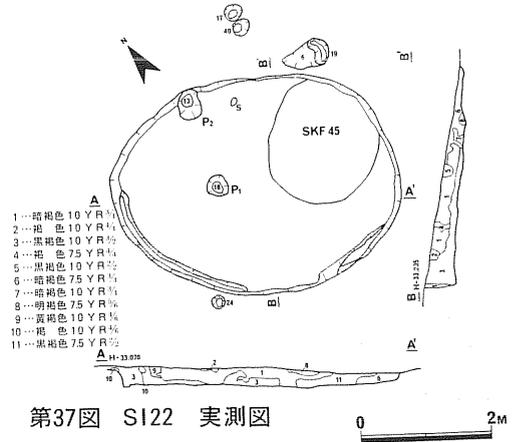
第34図 SI 19 実測図



第35図 SI 20 実測図



第36図 SI 21 実測図



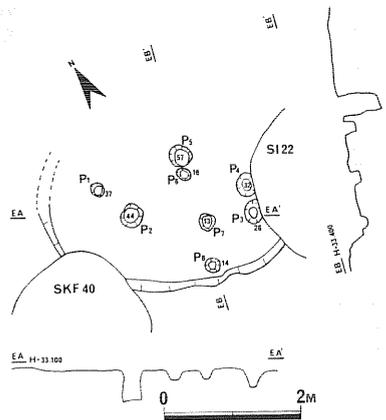
第37図 SI 22 実測図

呈し、長軸約4.8m・短軸約3.4m。面積約11㎡。

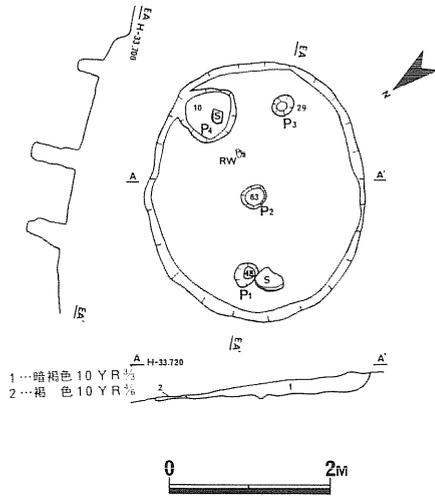
中央に浅い凹みP₁がある。床面は凹凸をなす。

SI23竪穴住居跡 SI22が東壁を破壊。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。南の壁の高さ約20cm。床面は凹凸をなす。P₁～P₆の柱穴が認められる。

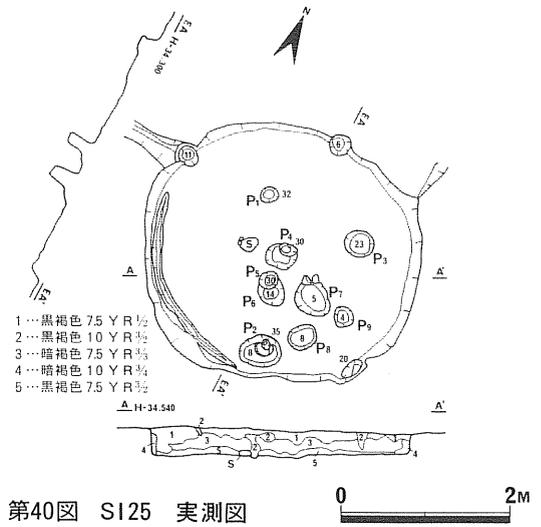
SI24竪穴住居跡 北斜面に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸約3.3m・短軸約2.7m。面積約9㎡。壁高は南壁約20cm・北壁約5cm。床面は堅くしまる。柱穴はP₁～P₃と考えられる。P₄は特殊ピット。台石1個あり焼けている。



出土遺物は、口頸部に綾絡文の施文される土器片出土。 第38図 SI 23 実測図



第39図 SI24 実測図



第40図 SI25 実測図

SI25竪穴住居跡 調査区の西側で検出。平面形は円形を呈し、径約3.3m。面積は7.2㎡。壁約33cm。床面は平坦で堅くしまり、1部に溝が認められる。P₁～P₃が柱穴と考えられる。台石1個があり、上面は磨滅する。

出土遺物は、埋土から石錘1点、凹石1点。

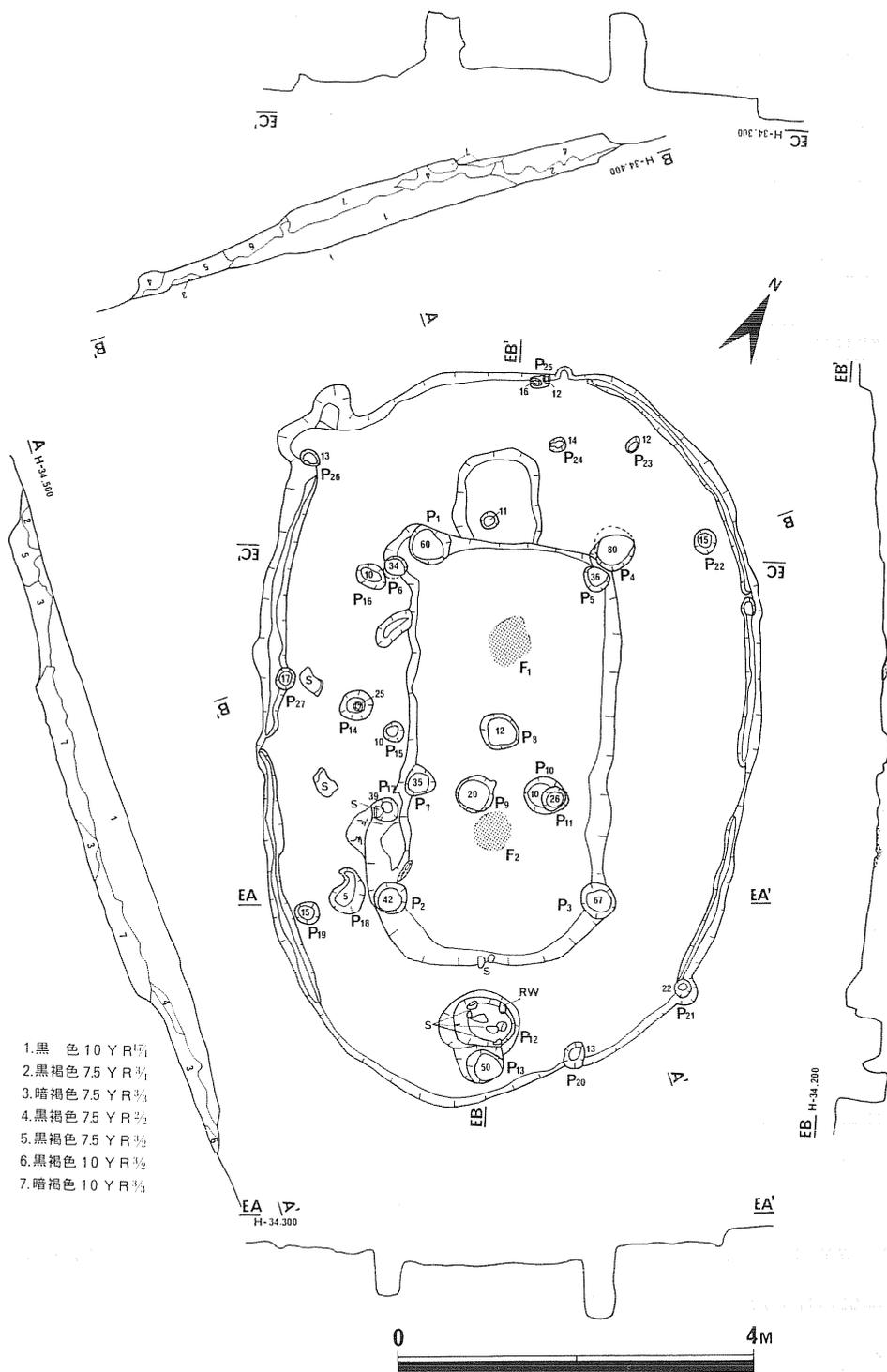
SI26竪穴住居跡 調査区の西側で検出。平面形は楕円形を呈し、長軸約8.3m・短軸約5.5m。面積約36㎡。床面は2段構造を呈し、巾約1.8～1.5mのベンチ状床面がめぐる。ベンチ状床面は平坦で、ゆるく傾斜しながら土間状床面に移行する。段は明瞭で、高さ約12cm。支柱穴はP₁～P₄と考えられる。そのほか、P₅・P₆・P₁₁・P₁₇も柱穴であろう。土間状床面は長方形を呈し、堅くしまる。長軸線上の2カ所に地床炉があり、熱作用による赤色変化が激しい。ベンチ状床面の東側と西側に溝が認められる。特殊ピットP₁₂が南端に存在する。台石が2個あり、磨滅している。

出土遺物は、羽状縄文と単軸絡条体の施文された土器片と石筥1点・不定石器1点・扁平打製石器1点が埋土から検出。

SI27竪穴住居跡 SI26に隣接する。平面形は楕円形で、長軸約4.8m・短軸約4.3m。面積約10.3㎡。壁高約30cm。床面は堅くしまる。柱穴は、P₁～P₅・P₇・P₈と考えられる。床面の南側に段が認められる。

出土遺物は、羽状縄文と多軸絡条体の施文された土器片と扁平打製石器1点が埋土で検出。

SI28竪穴住居跡 西側斜面で検出。北側壁は不明であるが、円形を呈すると考えられる。南壁の高さ約20cm。SKF27と重複し、本遺構が古い。



第41图 SI26 实测图

SI29竪穴住居跡 北斜面で検出。平面形は円形を呈するものと考えられる。SKF48・50と重複し、本遺構が古い。壁高約13cmで、北側は不明。床面は凹凸をなす。P₁～P₃が柱穴と考えられる。

出土遺物は、埋土から石匙1・石錘1点・扁平打製石器1点。

SI30竪穴住居跡 SI32によって北壁が破壊。平面形は円形を呈するものと考えられる。壁高約14cm。柱穴はP₁・P₃・P₅・P₆と考えられる。床面は凹凸をなす。P₂は特殊ピット。

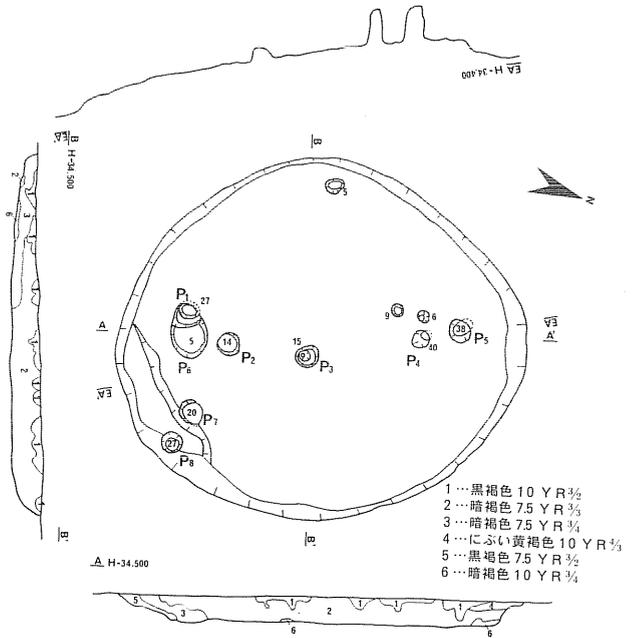
出土遺物は、埋土から不定形石器1点。

SI31竪穴住居跡 SI06と07に南壁と北壁が破壊。平面形は円形を呈するものと考えられる。柱穴らしいP₁・P₂が認められる。床面はわずかに凹凸をなす。炉は不明。床面中央で台石2個検出され、上面は磨滅している。

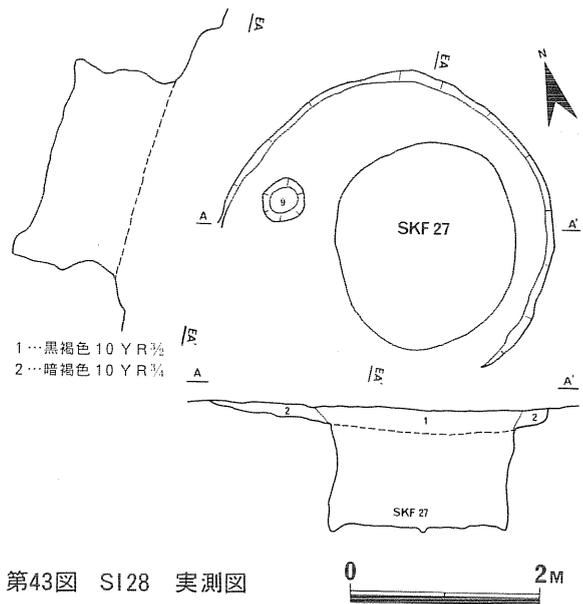
SI32竪穴住居跡 北斜面で検出。住居跡1棟・フラスコ状ピット8基と重複する。新旧関係はSI30・SKF53・57→SI32→SKF57・58・59・78・79・80と考えられる。平面形は楕円形を呈すると考えられ

るが、北壁は不明。南壁の高さ約78cm。床面は2段構造をなすと考えられるが、北側は不明。P₁～P₄・P₇・P₉が支柱穴であろう。地床炉が3カ所認められる。

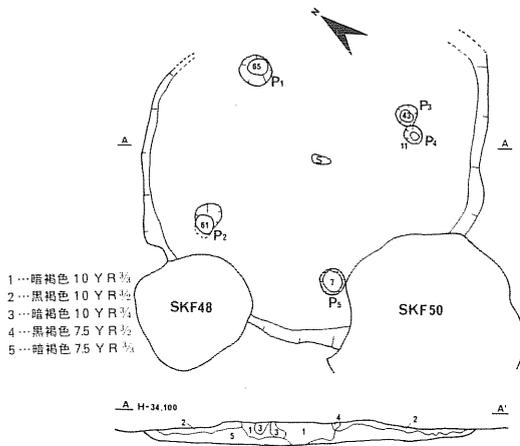
出土遺物は、すべて埋土で検出。1と2は口頸部に綾絡文。3は隆帯を貼付し、その上に指



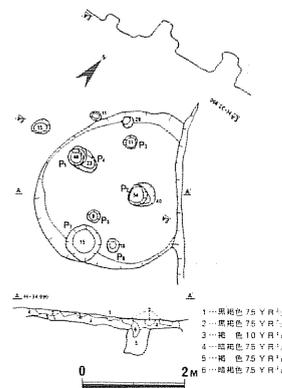
第42図 SI27 実測図



第43図 SI28 実測図



第44図 SI 29 実測図



第45図 SI 30 実測図

頭圧痕文を施文。4は側面圧痕文を施文。5は刺突文と側面圧痕文を施文。石器は石斧1点・扁平打製石器1点・石錘9点・石匙2点。

SI33竪穴住居跡 北斜面で検出。SKF 17・23・39と重複し、新旧関係はSKF23→SI33→SKF17・39となるものと考えられる。平面形は円形を呈するものと考えられる。南壁の高さは約15cm。床面は平坦。

出土遺物は、埋土から検出され、羽状縄文十側面圧痕文の土器片と狭い口頸部文様帯に側面圧痕文の施文された土器がある。

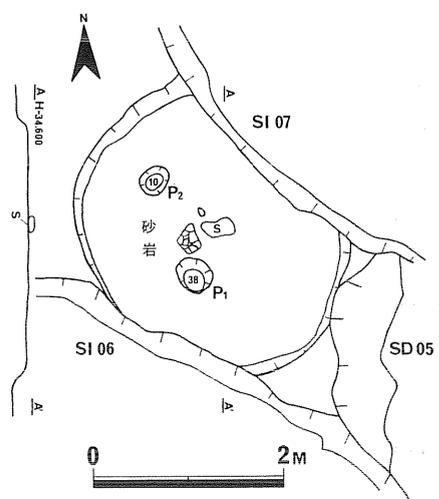
SI34竪穴住居跡 SI18の近くで検出。SKF 51・69と重複。平面形は円形を呈するものと考えられ、径約2.8cm。柱穴はP1。床面は平坦。壁高約13cm。

出土遺物は、埋土から石錘1点、石匙1点。

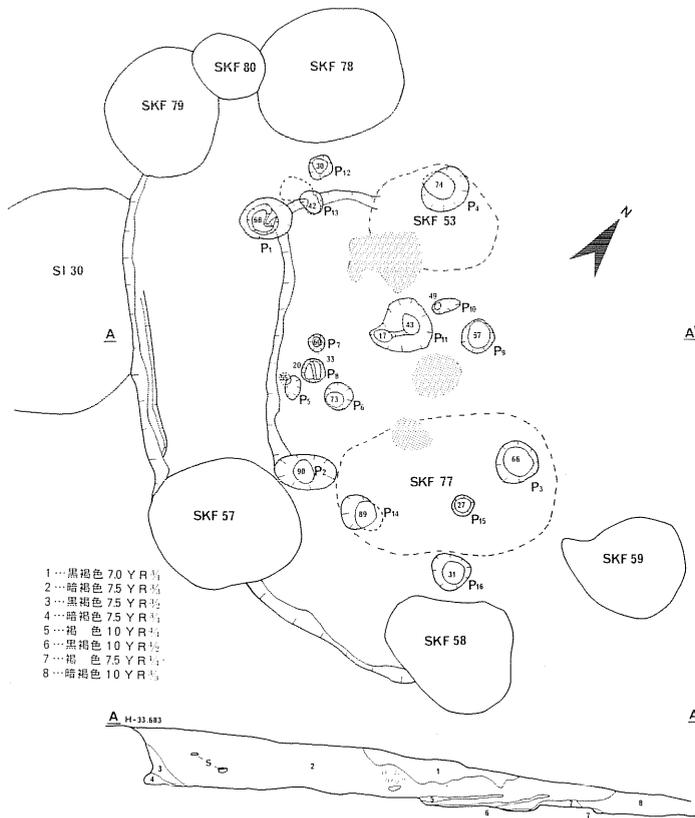
SI35竪穴住居跡 台地の平坦部で検出。平面形は円形を呈し、径約3m。面積は約8.2㎡。壁高約20cm。床面は平坦。柱穴はP2。P3は炉かと考えられるが焼土は判然としない。P1は特殊ピット。

SI36竪穴住居跡 西側の平坦部で検出。平面形は円形。径約2.7m。面積約5㎡。壁高約10cm。床面は平坦。床面中央に浅い凹みP2がある。

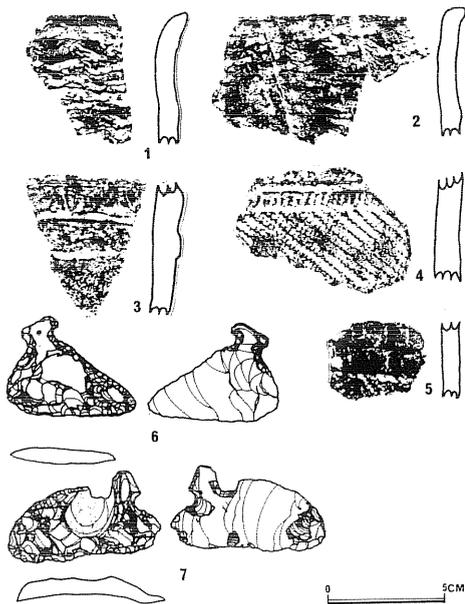
出土遺物は、埋土から石匙1点、石鏃1点、石錘1点。



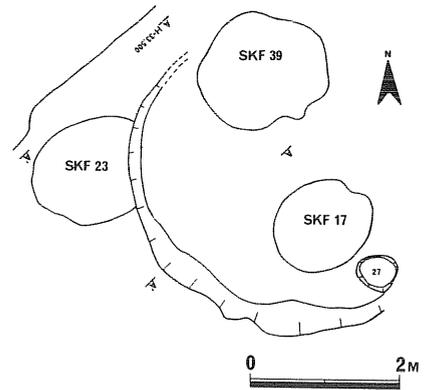
第46図 SI 31 実測図



第47図 SI 32 実測図



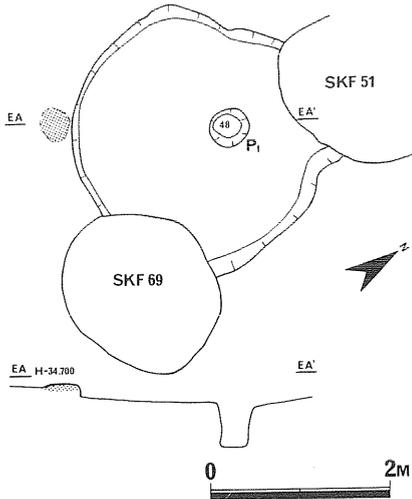
第48図 SI 32出土遺物



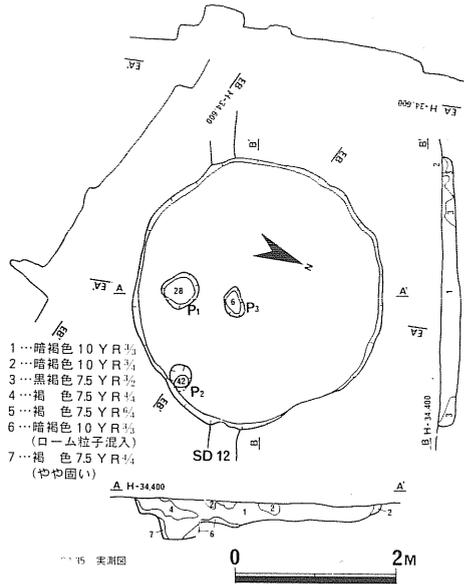
第49図 SI 33 実測図

S137竪穴住居跡 調査区の西端で検出。完掘していないが、平面形は円形を呈すると考えられる。壁はブルドーザーによって削平。床面は凹凸をなす。P₁~P₅・P₇・P₈が柱穴。P₉は炉と考えられるが焼土は判然としない。P₁₀は特殊ビット。

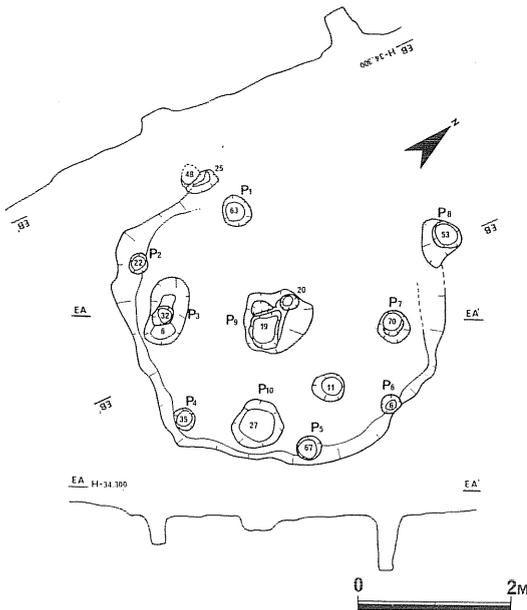
出土遺物は、埋土から狭い口頭部文様帯に側面圧痕文+刺突文の施文された土器が検出。



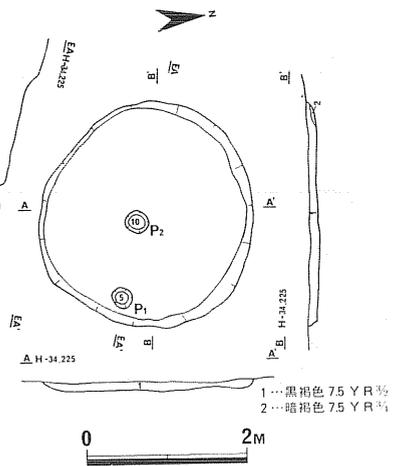
第50図 S134 実測図



第51図 S135 実測図

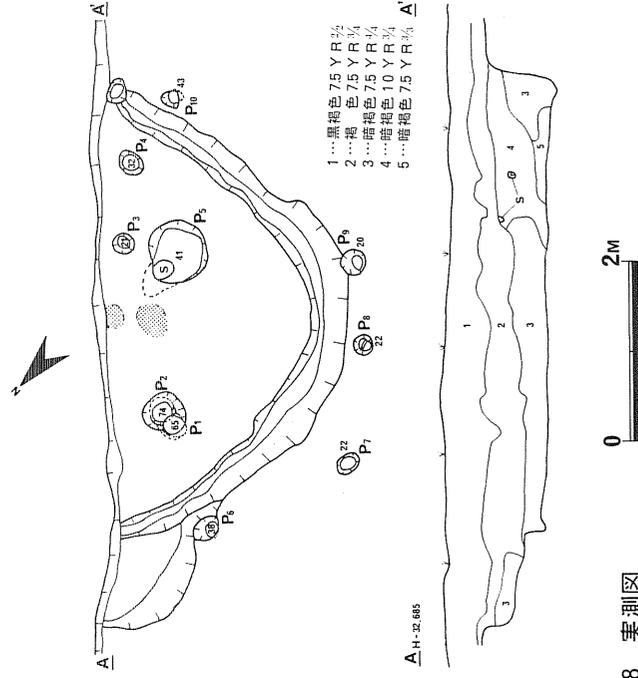


第53図 S137 実測図

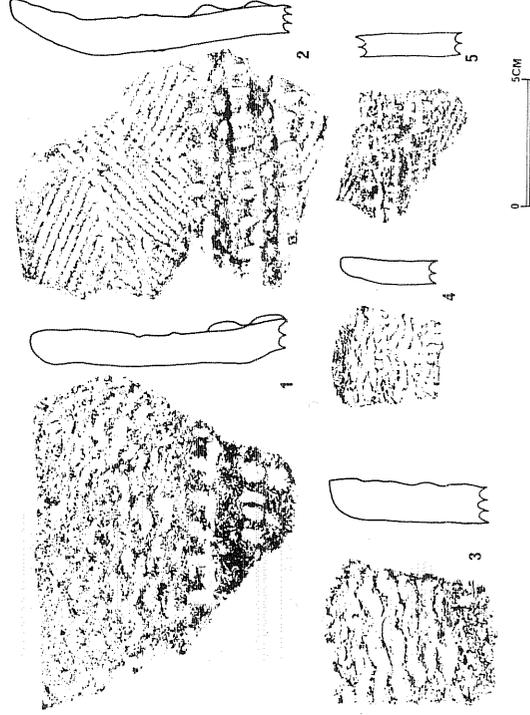


第52図 S136 実測図

S138竪穴住居跡 北斜面で検出。完掘していないので平面形は不明。壁高約70cmと深い。床面は平坦で、周囲に溝が認められる。炉は地床地で2カ所。P₁~P₄が柱穴。P₃は特殊ピット。出土遺物は、埋土からで1は口頸部に緩絡文が施文され、その下に隆帯+刺突文が施文。2は口頸部に羽状縄文が施文され、その下に隆帯+刺突文が施文。5は刺突文が施文。石器は石匙1点・石錘4点。

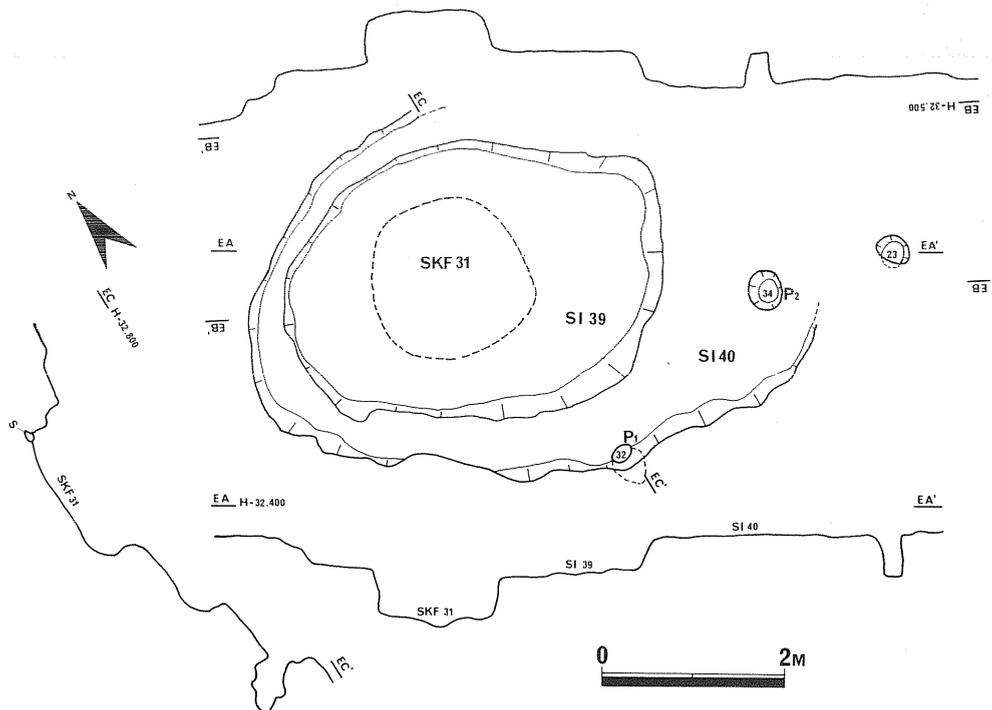


第54図 S138 実測図



第55図 S138出土遺物

SI39・40竪穴住居跡 北斜面で検出。SI40からSI39に縮小されたものと考えられる。平面形は、いずれも楕円形を呈する。長軸は、SI40が約6.2m・SI39は約4.1m。



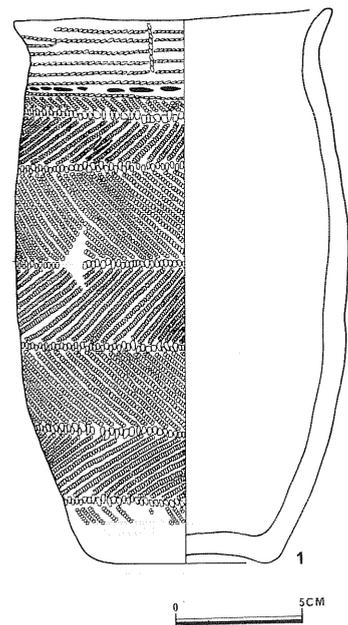
第56図 SI 39.40 実測図

SI41竪穴住居跡 北斜面で検出。15基のフラスコ状ピットと重複し、原形は判然としないが、楕円形を呈するものと考えられる。南壁は約60cmで、北壁は不明。床面は凹凸をなし、2段構造を呈するものと考えられる。柱穴はP₁~P₆が主柱穴。長軸線上に5カ所の地床炉が認められる。

出土遺物は、床面からの土器で口径12.7cm、底径7.5cm、高さ21.5cm。狭い口頸部文様帯に側面圧痕文+刺突文、胴下半分部に羽状縄文が施文される。

SI42・43竪穴住居跡 調査区の西側で検出。いずれも壁の1部が検出されたのみで、平面形は不明。P₁~P₄まで認められるが、どの住居跡に伴うものか不明である。床面は平坦。

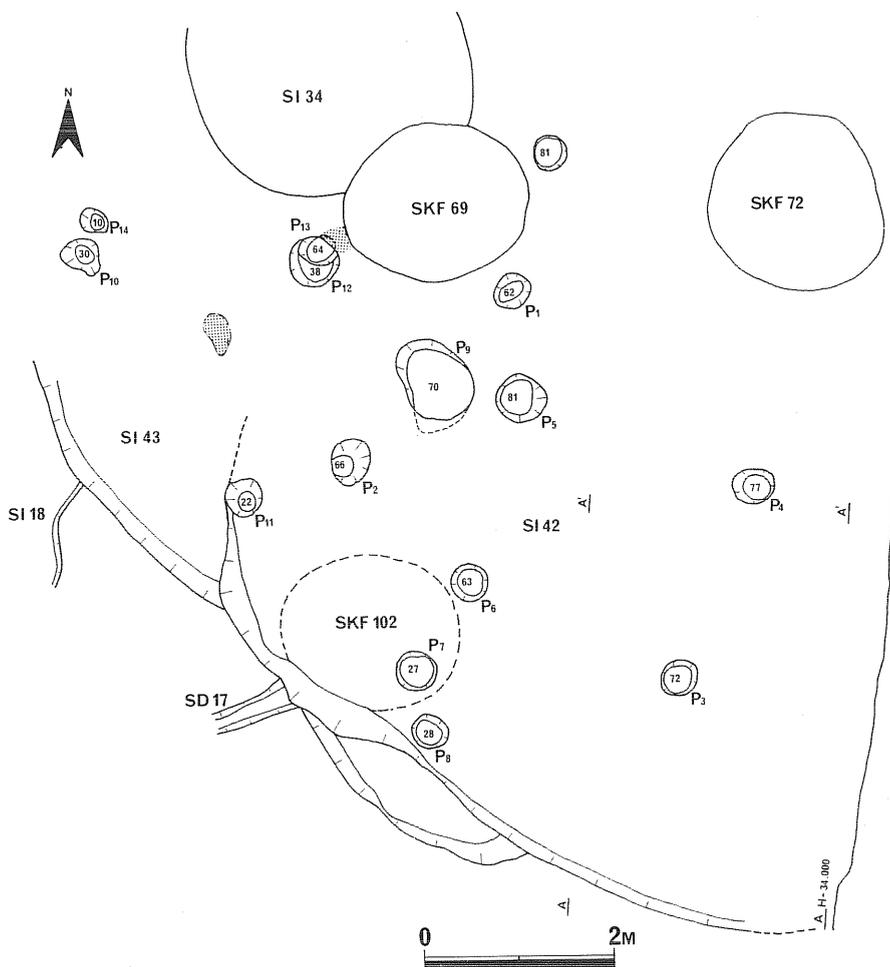
出土遺物は、埋土から刺突文が施文される土器片と、側面圧痕文の施文される土器片出土。石器は石錘5点。



第58図 SI 41出土遺物



第57図 S141 実測図



第59図 S I 42, 43実測図

SI44竪穴住居跡 遺構分布地城のなかで、もっとも標高の高い場所に位置し、SI06・07・18などの大型住居跡の立地条件と同様である。

平面プランは小判形であり、長軸方向は略東—西である。本遺構の西側は、水田造成のさいブルドーザーによって削平され、壁が破壊されている。また、西側はいくぶん低くなるためか、壁は不明である。規模は、長軸推定28m、短軸推定約9mである。

床面は2段構造を呈し、巾約2mのベンチ状床面が全周するものと考えられる。ベンチ状床面は、ほぼ平坦で内部に向かって傾斜しながら土間状床面に移行する。ベンチ状床面と土間状床面の比高は20~30cmである。土間状床面は略長方形を呈するが、西部の北側が広がる。この土間状床面の規模は、長軸約23m、短軸は東西の両端がやや狭く約3m、中央部で約4mである。土間状床面はほぼ平坦であるが、堅くない。

柱穴は、ベンチ状床面と土間状床面との段境に、長軸線に対して対称的に配置されている。

部分的に柱穴が重複するが、建替えはないものと考えられる。P₁～P₁₆が支柱穴と考えられる。柱間をみると、両端と中央部が狭くなる。

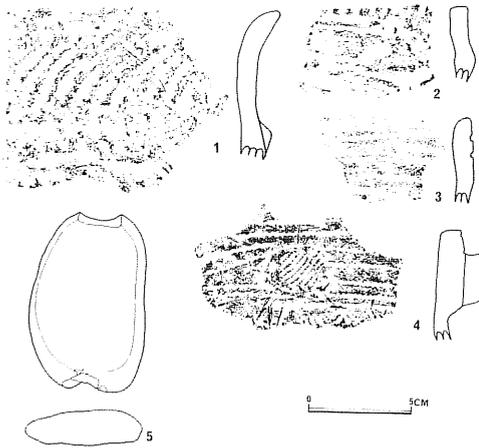
柱穴は長軸線上にも認められる。P₂・P₃₀・P₃₆・P₄₁がそれである。

炉は、わずかに凹む地床炉であり、長軸線上の柱穴と柱穴の間に存在する。F₉以外は長軸線上に存在するが、F₉は長軸線から南にずれる。炉は、熱作用で赤色に変化している。

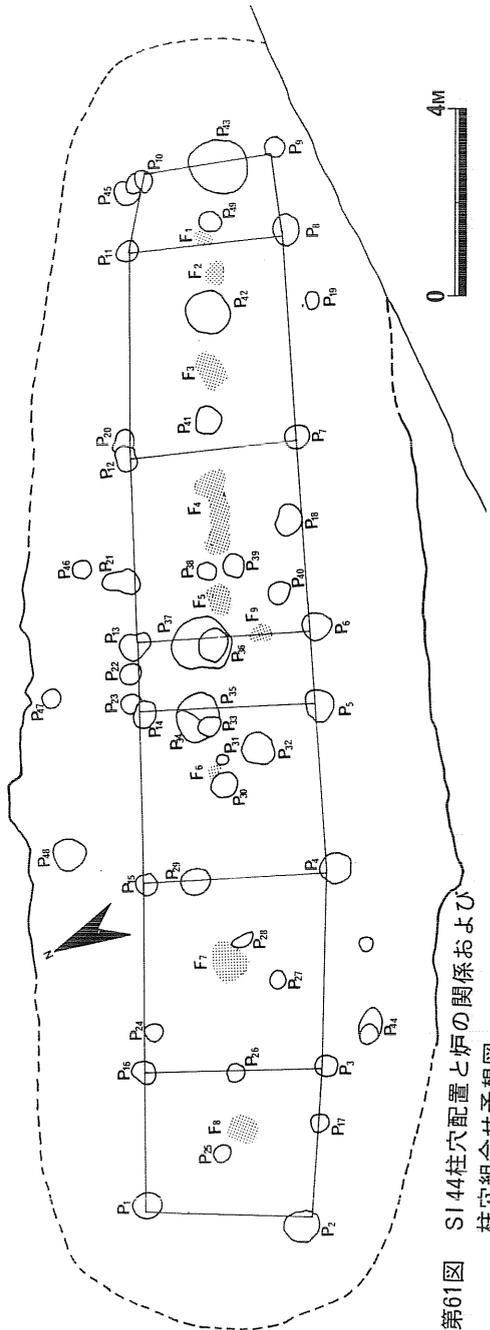
周壁は中央部にしか認められないが、高さはベンチ状床面より約15cmである。

土間状床面の東端部のP₄₂・P₄₃は、柱穴とは様相を異にし、口径1～1.2mの円形を呈する特殊ピットである。出土遺物もなく、用途不明。

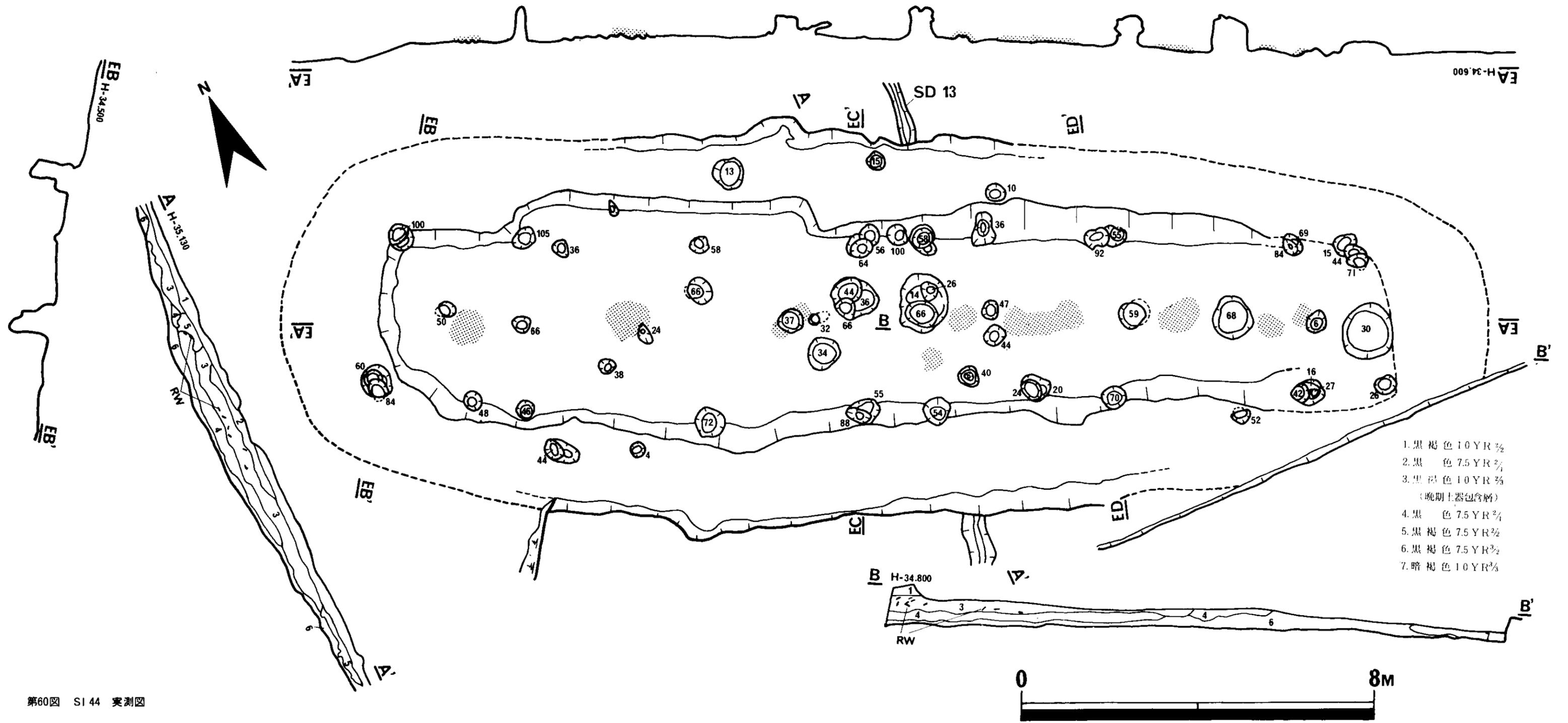
出土遺物は、1が床面、2と5が柱穴で検出。1は口頸部に複節斜縄文が施文され、その下に隆帯+刺突文を施文。3は側面圧痕文を施文。2と4は、刺突文を側面圧痕文風に施文し、ボタン状の粘土塊を貼付。頂部の凹む小突起を有する。石器は石錘6点。



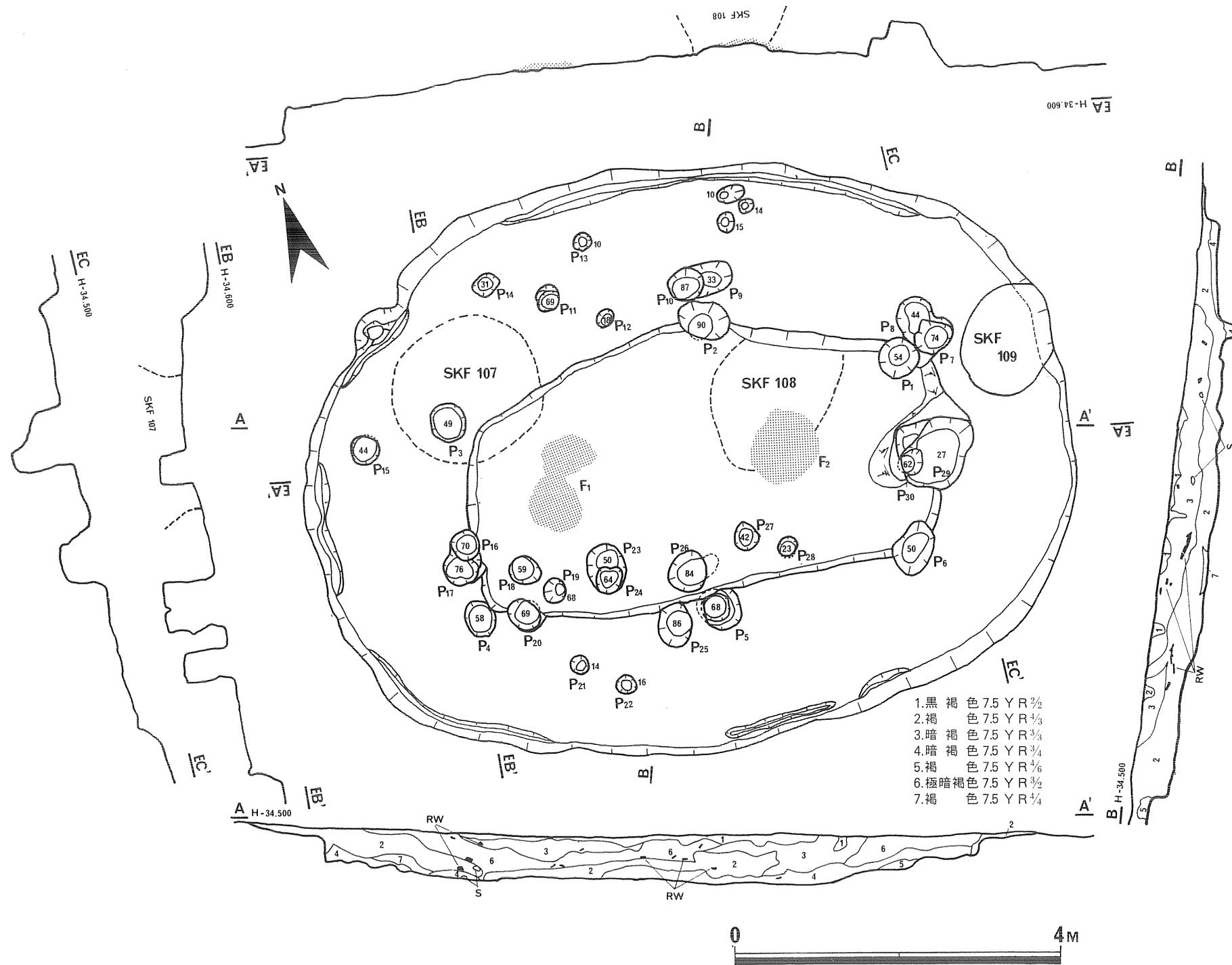
第62図 S144出土遺物



第61図 SI 44柱穴配置と炉の関係および柱穴組合せ予想図



第60图 SI 44 实测图



第63图 S145 实测图

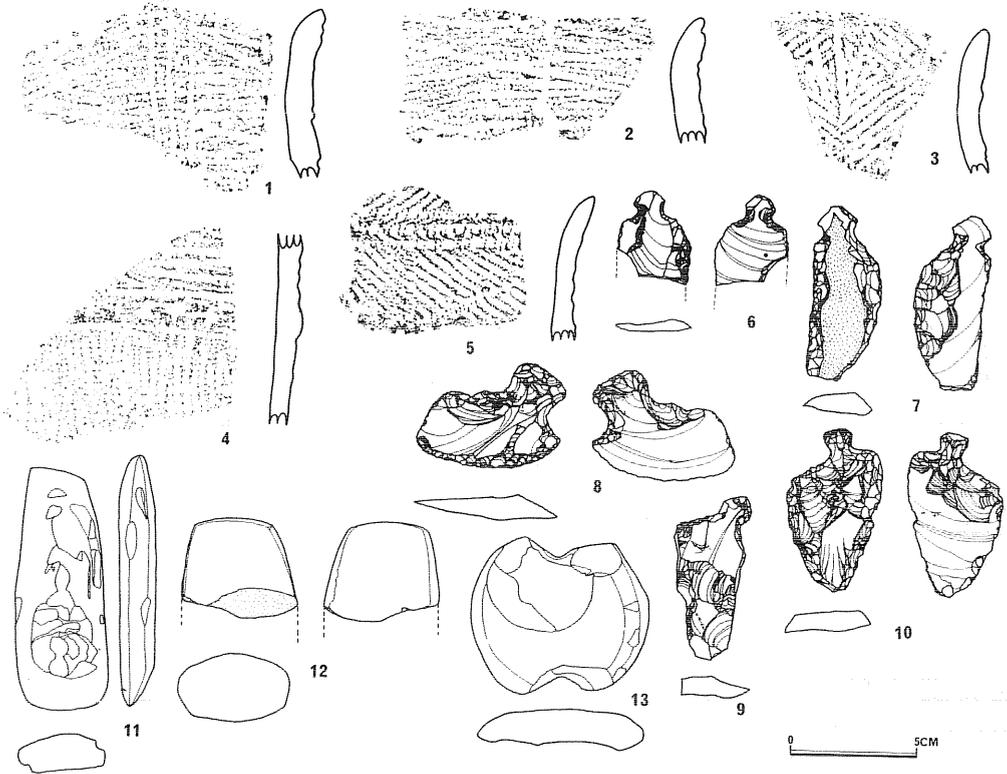
SI45竪穴住居跡 SI44と重複。平面形は楕円形を呈し、長軸約9.5m・短軸7.3m。面積52㎡。床面は2段構造を呈し、巾約1.8mのベンチ状床面が全周し、溝が認められる。ベンチ状床面は平坦で、約10cmの段を形成し、土間状床面に移行する。土間状床面の平面形は、略長方形を呈する。床面は堅くしまる。

柱穴は、P₁～P₆が支柱穴で、他の柱穴から建替えもあったものと考えられる。

長軸線上に2カ所の地床炉が認められる。使用度が高かったとみえて、焼土は赤色変化が顕著である。

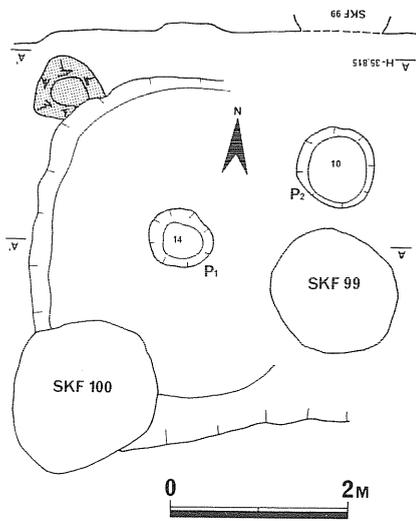
特殊ピットP₂₉が、東端近くに認められる。

出土遺物は、埋土から口頸部に側面圧痕文の施文される土器片と側面圧痕+刺突文の施文される土器が検出。石器は石匙7点・石斧4点・扁平打製石器2点・石錘20点。

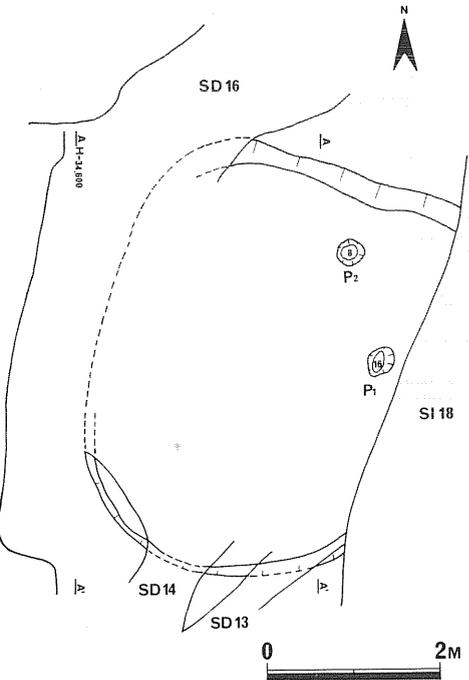


第64図 SI45出土遺物

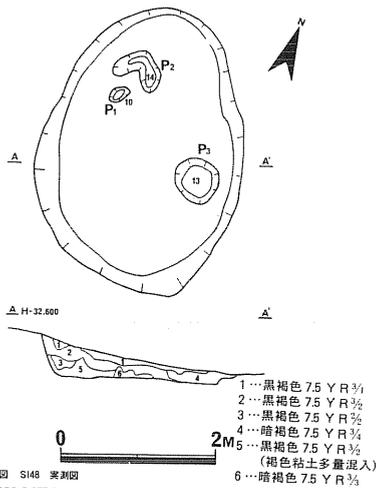
SI46竪穴住居跡 東斜面で検出。SKF99・100と重複し、ほぼ円形を呈するものと考えられる。床面は平坦で、中央に炉と考えられるP₁があるが、焼土は判然としない。



第65図 SI 146 実測図

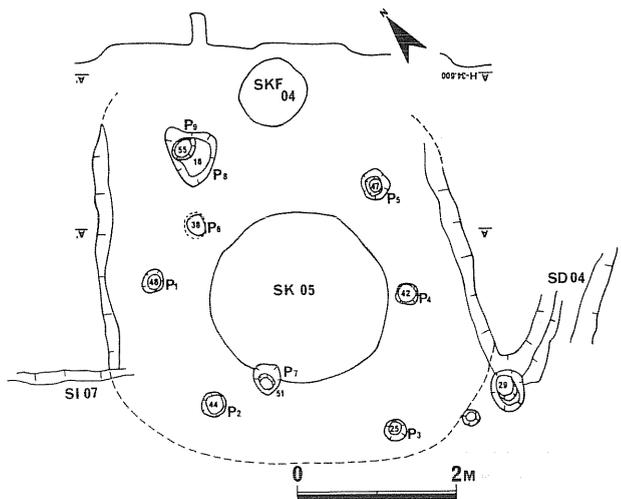


第66図 SI 147 実測図



第67図 SI 148 実測図

第67図 SI 148 実測図



第68図 SI 149 実測図

SI147 竪穴住居跡 SD14・16・SI18に壁が破壊されるが、円形を呈するものと考えられる。柱穴はP₁・P₂と考えられるが浅い。床面は平坦。

SI148竪穴住居跡 東斜面で検出。平面形は楕円形を呈する。長軸約3.6m・短軸約2.7m。面積約5.7㎡。床面は平坦であり、柱穴・炉は不明。壁高は、南側で約50cm・北側で約18cm。

出土遺物は埋土から石槍1点出土。

SI 49 竪穴住居跡 SI07・SKF04・05と重複し、新旧関係はSI49→SI07→SK05であり、SKF04との関係は不明。床面は平坦で、柱穴はP₁～P₆と考えられる。(永瀬・佐々木)

② フラスコ状ピット

大部分は地山上面で確認されたものであるが、竪穴住居跡精査のさい、埋土や床面で検出されたものも少なくない。また、実測記録前に崩壊したため原形を留めないものもある。なお、記述の順序は、(1)開口部の平面形、(2)底部平面形、(3)断面形、(4)口径・底径・深さ、(5)底面の状況、(6)その他特記事項・出土遺物(遺物はすべて埋土から検出された)。

SKF 01 フラスコ状ピット (1)円形、(2)円形、(3)フラスコ状、(4)2 m・2.2 m・1.6 m、(5)壁ぎわにピットあり。

SKF 02 フラスコ状ピット (1)円形、(2)円形、(3)フラスコ状、(4)1.4 m・1.6 m・1.0 m

SKF 03 フラスコ状ピット (1)円形、(2)円形、(3)フラスコ状、(4)1.1 m・1.5 m・1.04 m

SKF 04 フラスコ状ピット (1)円形、(2)円形、(3)フラスコ状、(4)8.2 m・1.6 m・0.94 m

SKF 05 フラスコ状ピット (1)楕円形、(2)楕円形、(3)ビーカー状に近い、(4)2.7×2.2 m・3.0×2.3 m・0.9 m、(5)壁沿いに溝とピットあり、(6)礫のつまっているピットあり。

SKF 06 フラスコ状ピット (1)楕円形、(2)楕円形、(3)ビーカー状に近い、(4)2.9×2.5 m・2.8×2.3 m・1.5 m、(5)壁沿いに溝とピット、(6)側面圧痕文の施文された土器片と石錘2点。

SKF 07 フラスコ状ピット (1)楕円形、(2)楕円形、(3)フラスコ状、(4)1.5×1.1 m・1.6×1.3 m・0.9 m、(5)中央にピット。

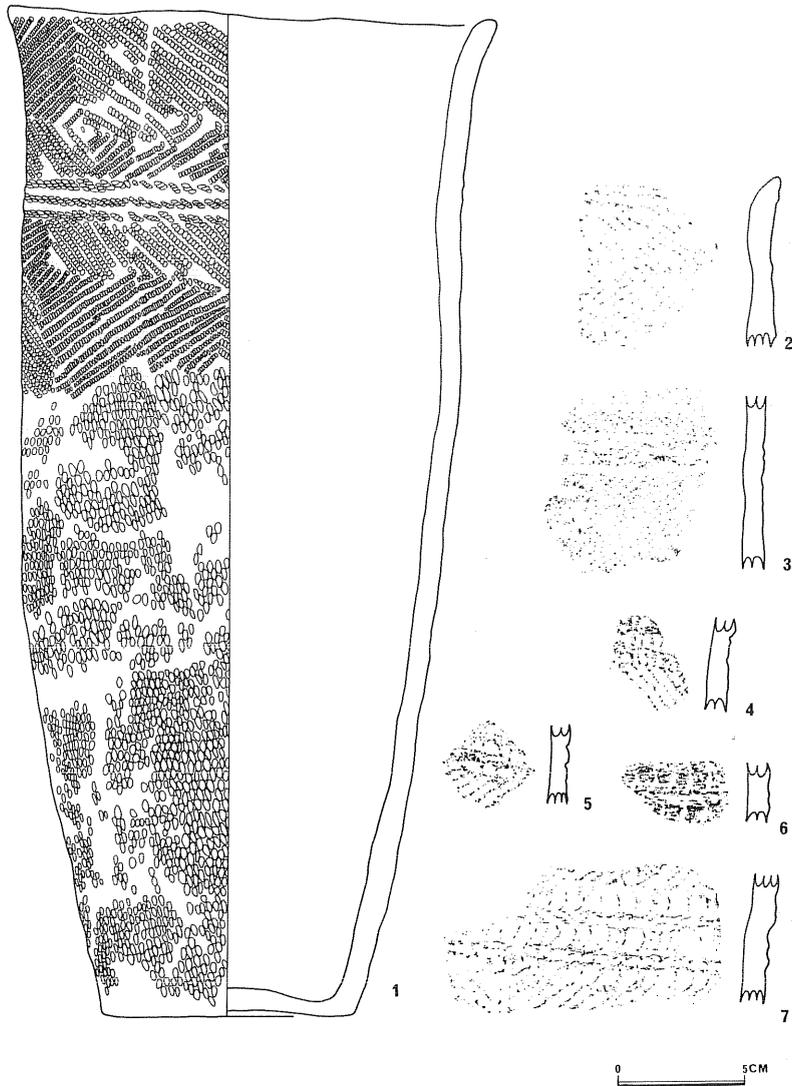
SKF 08 フラスコ状ピット (1)楕円形、(2)楕円形、(3)ビーカー状に近い、(4)2.8×2.0 m・2.3×1.9 m・1.3 m、(5)周囲に溝あり、(6)底面から約10～40 cmの埋土層で土器片と貝層検出。1は、口径19.3 cm・底径10 cm・器高39.9 cm。口頸部は、わずかに外反。胴部上半と口頸部に羽状縄文。この下に多軸絡条体を施文。口頸部に横位の側面圧痕文3条を施文。内面のミガキ顕著。3～7は羽状縄文+刺突文が施文。貝類はヤマトシジミ約9,600個体・カワシンジュガイ約1,150個体・オオタニシ約50個体・カワナ11個体・ヒメギセル9個体・ムツヒダリマキマイマイ1個体・サザエのふた1個・サルボウ1個体。貝層中には多数の魚骨が含まれている。

SKF 09 フラスコ状ピット (1)円形、(2)円形、(3)ビーカー状に近い、(4)1.4 m・1.5 m・1.0 m、(5)壁に沿って溝。

SKF 10 フラスコ状ピット (1)楕円形、(2)楕円形、(3)ビーカー状に近い、(4)2.2×1.9 m・2.0×1.6 m・1.2 m、(5)壁ぎわにピット。

SKF 11 フラスコ状ピット (1)楕円形、(2)円形、(3)フラスコ状、(4)2.2×1.6 m・1.6 m・1.6 m。

SKF 12 フラスコ状ピット (1)円形、(2)円形、(3)フラスコ状、(4)1.0 m・1.6 m・1.5 m。



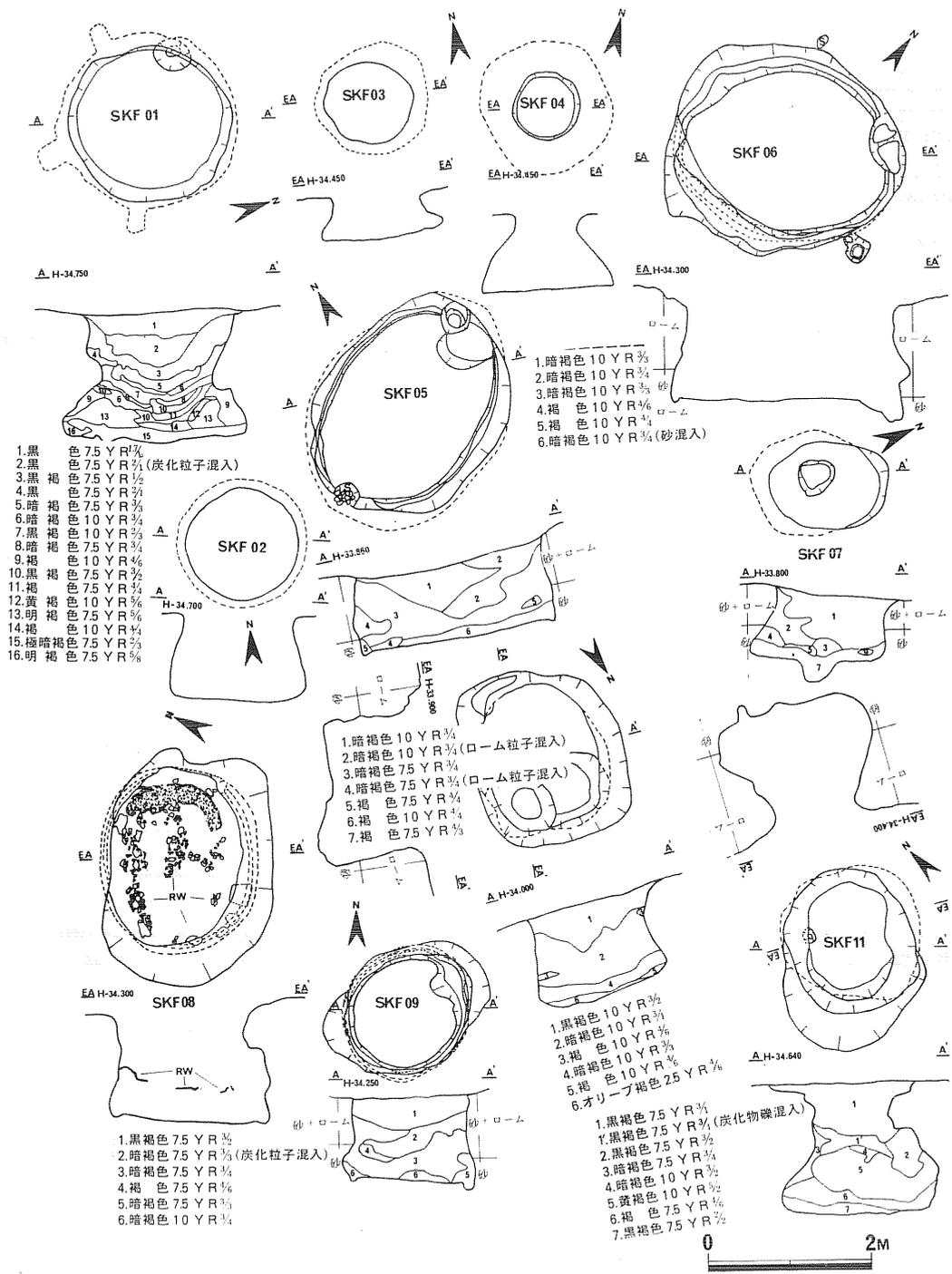
第69図 SKF 08 出土遺物

SKF13フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.1×0.9m・1.5×1.3m・1.1m。

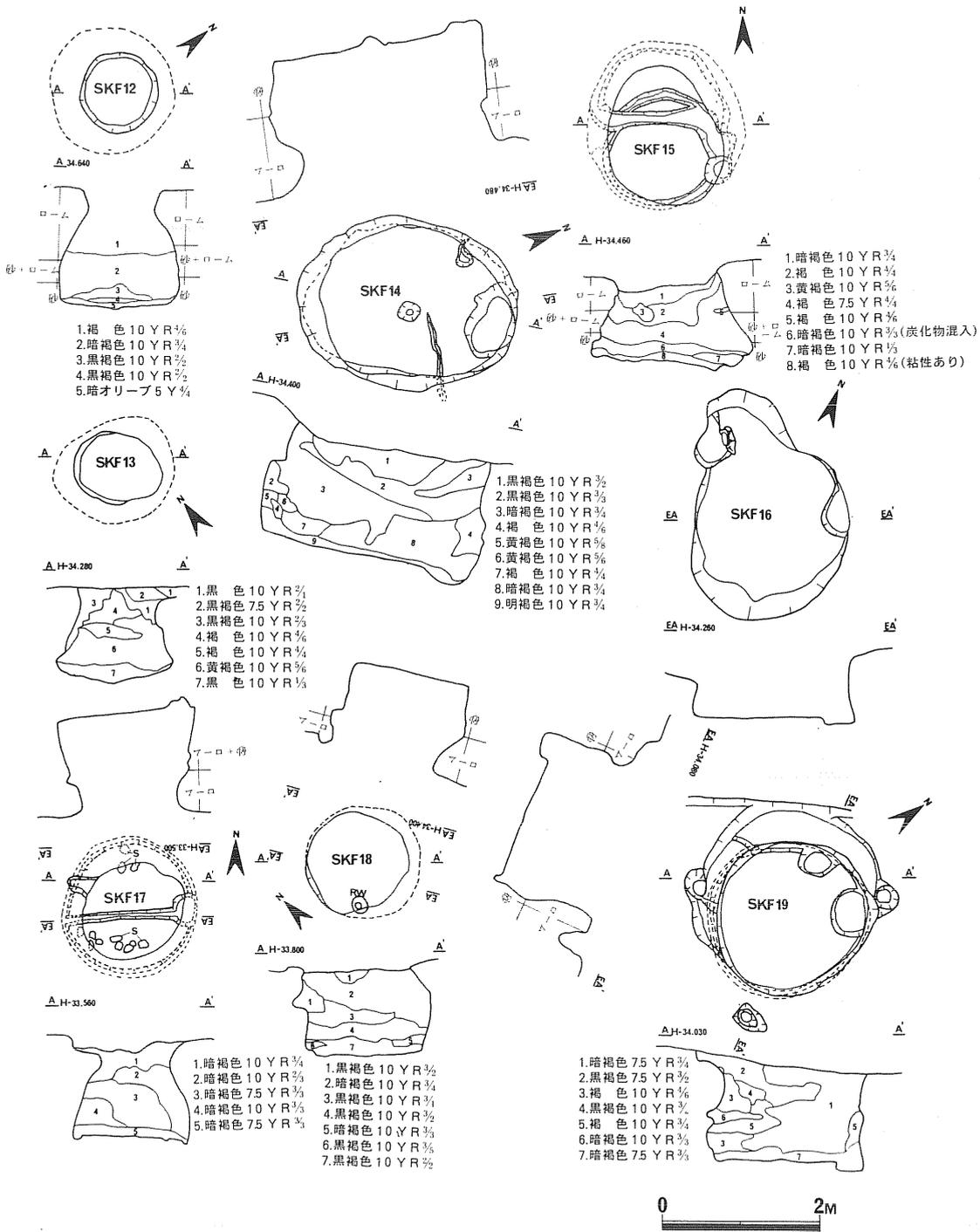
SKF14フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.8×2.1m・2.6×1.9m・1.6m, (5)壁ぎわと中央に溝とピット, (6)口頸部に単節の斜縄文を施文する土器片。

SKF15フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.9×1.4m・2.1×2.0m・1.4m, (5)壁ぎわに溝・ピット・中央近くにも溝, (6)羽状縄文+側面圧痕文施文の土器片と刺突文施文の土器片。

SKF16フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)3.0×1.9m・2.4×1.8m・0.9m (5)壁ぎわにピット。



第70图 SKF01・03~11 实测图



第71図 SKF12~19 実測図

SKF 17 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)1.2m・1.7m・1.3m, (5)壁沿いと中央に溝・壁ぎわにピット, (6)口縁部に段あり。

SKF 19 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.3m・2.1m・1.4m, (5)壁に沿って溝とピット, (6)口縁部に段。

SKF 20 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.7×2.1m・2.1×1.8m・1.6m, (5)壁に沿って溝, (6)羽状縄文+側面圧痕文の施文された土器片と隆帯+刺突文の施文される土器。石匙1点。貝層は底面から0.6~1mの埋土層から検出。貝はヤマトシジミ約58,760個体・カワシンジュガイ320個体・カワニナ約200個体・サルボウ6個体・サザエのふた2個・コタマガイ1個体・ハマグリ1個体・ムツヒダリマキマイマイ1個体であり, 貝層中に多数の魚骨を含む。

SKF 21 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)3.5×3.1m・2.4×2.1m・1.4m, (5)壁に沿って溝とピット・中央に溝。

SKF 22 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)1.2×0.9m・1.2m・1.1m。

SKF 23 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.2×1.8m・1.9×1.5m・1.5m, (5)壁に沿って溝とピット・中央にも溝。

SKF 24 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.5m・2.0m・1.4m, (5)壁ぎわと中央に溝, (6)周囲に柱穴状ピットあり。

SKF 25 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)2.2×2.1m・2.0×1.6m・0.9m, (5)壁に沿って溝とピット, (6)石匙1点。

SKF 26 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.5×2.3m・2.2×2.0m・1.3m, (5)壁沿いと中央に溝・壁ぎわにピット, (6)口縁部に段あり。

SKF 27 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.5×2.0m・2.2×1.7m・1.3m, (5)壁沿いと中央に溝・壁ぎわにピット, (6)口縁部に段あり。

SKF 28 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)3.0×2.7m・1.9×1.7m・1.5m, (5)南壁沿いに溝, (6)石錘1点。

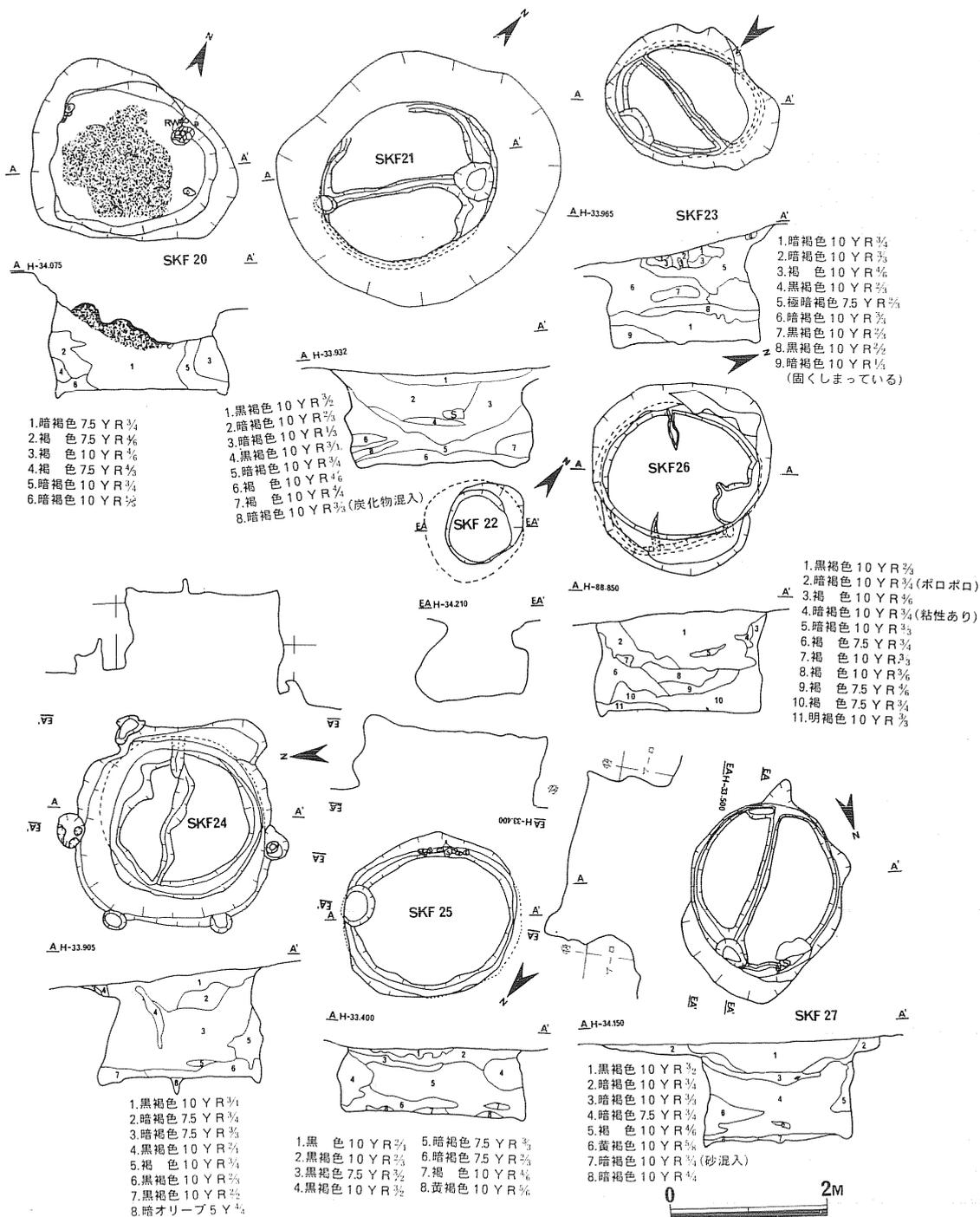
SKF 29 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.9×2.3m・1.7m・1.8m, (6)側面圧痕文の施文される土器片。

SKF 30 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)3.3×2.7m・2.0m・1.5m, (5)壁ぎわに溝, (6)口縁部に段あり。石錘2個。

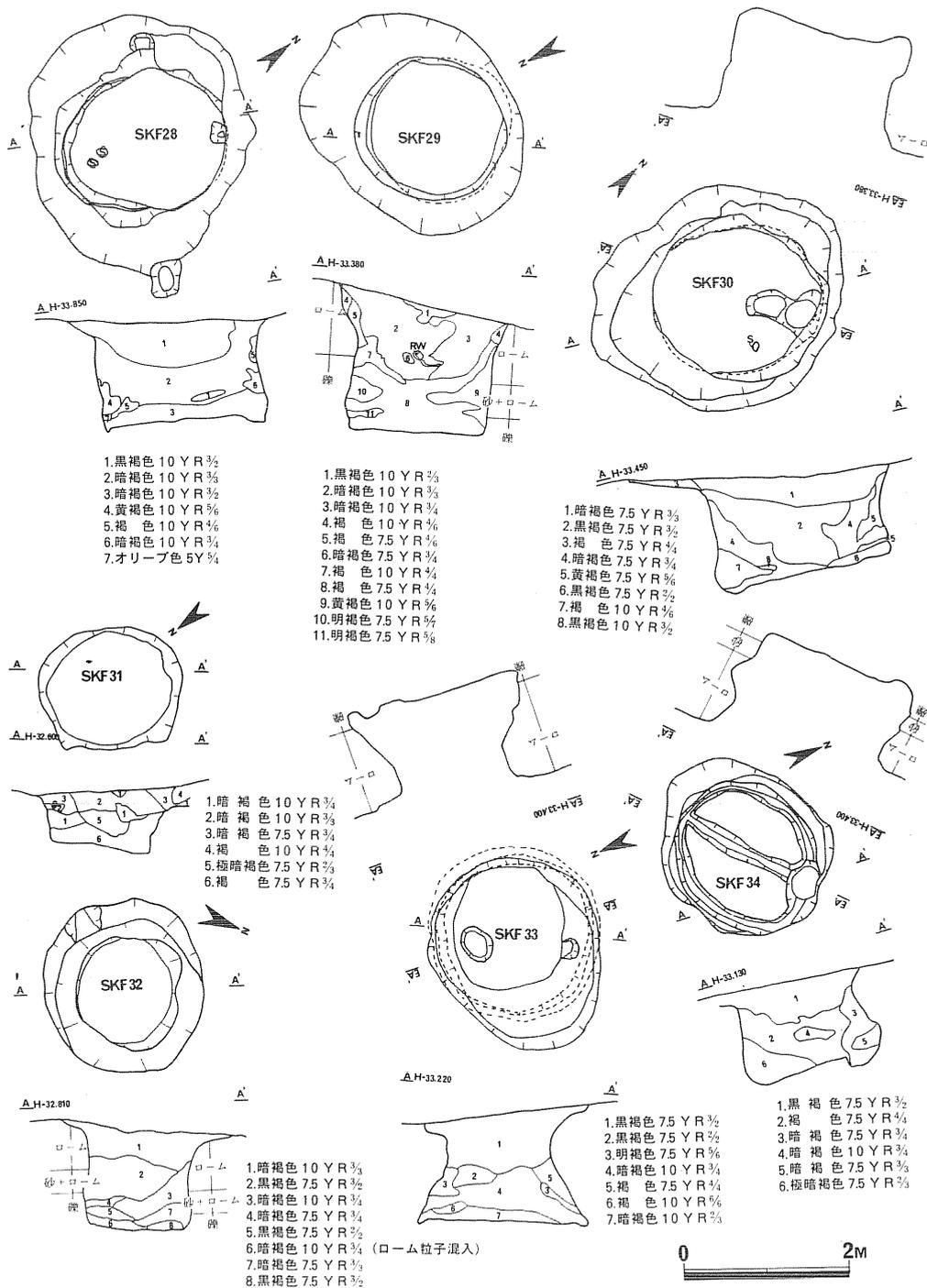
SKF 31 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.8m・1.3m・0.6m。

SKF 32 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.1m・1.1m・1.3m。

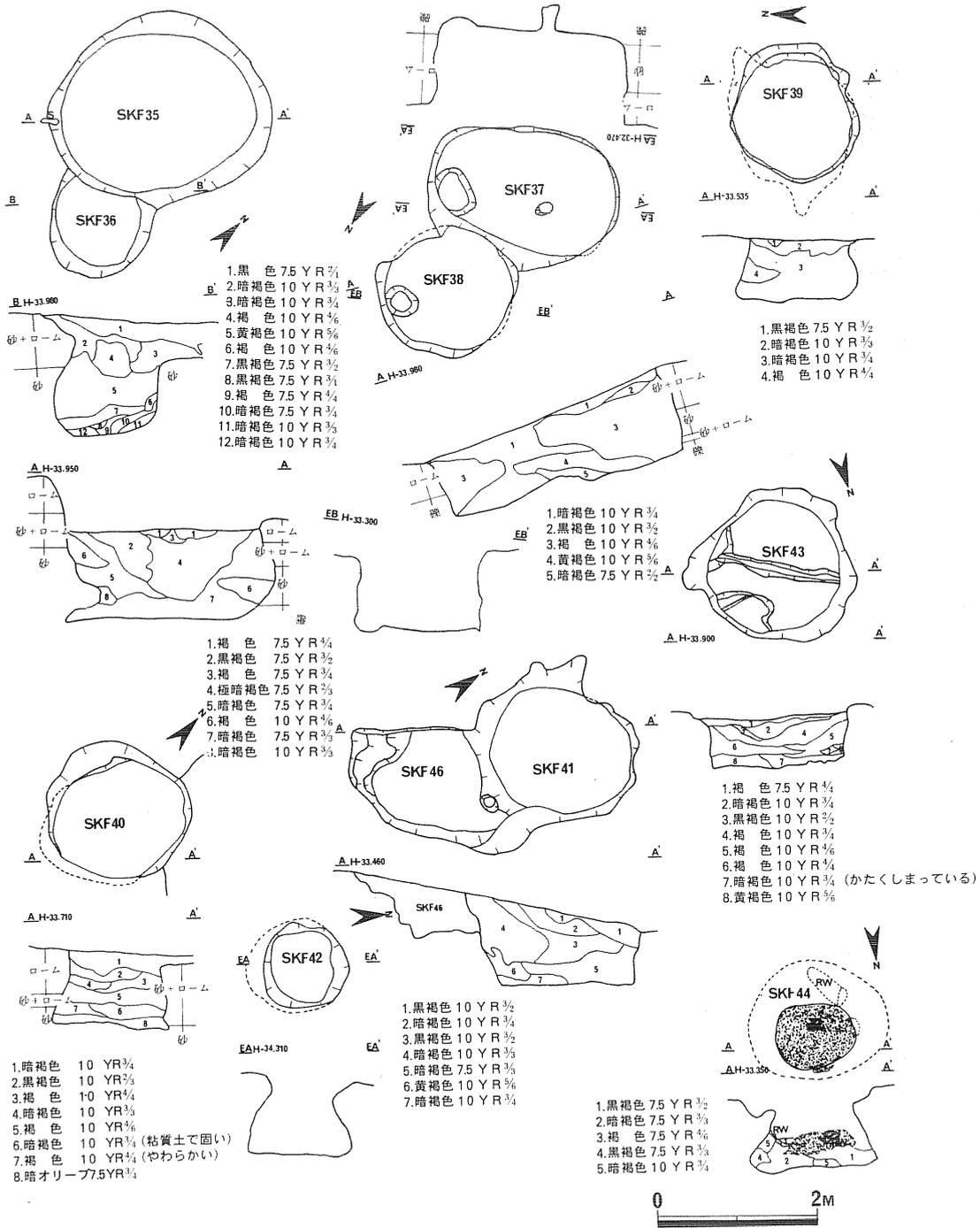
SKF 33 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)2.4×2.0m・2.0m・1.5m,



第72図 SKF 20~27 実測図



第73図 SKF 28~34 実測図



第74図 SKF 35~44・46 実測図

(5)壁沿いに溝，中央付近にピット，(6)扁平打製石器1点。

SKF34フラスコ状ピット (1)楕円形，(2)楕円形，(3)ビーカー状に近い，(4)2.2×1.9m・1.8×1.6m・1.2m，(5)壁沿いに溝とピット・中央にも溝，(6)羽状縄文+側面圧痕文の施文された土器片。不定形石器2点，石錘2点。

SKF35フラスコ状ピット (1)楕円形，(2)楕円形，(3)ビーカー状に近い，(4)2.8×2.5m・2.4×2.0m・1.9m，(6)羽状縄文+側面圧痕文の施文された土器片。

SKF36フラスコ状ピット (1)円形，(2)円形，(3)フラスコ状，(4)1.3m・1.0m・1.6m。

SKF37フラスコ状ピット (1)楕円形，(2)楕円形，(3)ビーカー状に近い，(4)2.4×1.9m・2.3×1.3m・1.0m，(5)中央と壁ぎわにピット。

SKF38フラスコ状ピット (1)円形，(2)円形，(3)ビーカー状に近い，(4)1.8m・1.6m・1.0m，(5)壁ぎわにピット，(6)石錘1点。

SKF39フラスコ状ピット (1)楕円形，(2)不整楕円形，(3)フラスコ状，(4)1.7×1.6m・1.8×1.5m・0.9m。

SKF40フラスコ状ピット (1)円形，(2)楕円形，(3)フラスコ状，(4)1.9m・1.9×1.3m・1.0m，(6)石筥1点。

SKF41フラスコ状ピット (1)不整楕円形，(2)楕円形，(3)ビーカー状に近い，(4)2.1×2.0m・1.8×1.5m・1.0m。

SKF42フラスコ状ピット (1)円形，(2)円形，(3)フラスコ状，(4)1.0m・1.3m・1.0m。

SKF43フラスコ状ピット (1)不整楕円形，(2)円形，(3)ビーカー状に近い，(4)2.1×1.9m・1.6m・0.6m，(5)中央に溝・壁ぎわにピット。

SKF44フラスコ状ピット (1)円形，(2)楕円形，(3)フラスコ状，(4)1.0m・1.8×1.5m・1.0m，(6)床面の $20\sim 25\text{cm}$ の埋土で貝層と土器を検出。1は，貝層の上の壁ぎわで横位の状態で検出。口径 20.2cm ・底径 10.6cm ・器高 42.7cm 。口頸部がわずかに外反。口頸と胴部上半に羽状縄文，胴下半に単軸絡条体，口頸部に3条の側面圧痕文が施文される。内面はミガキが施される。2は，外面全体に巾約 10cm のクシ状工具による条痕文が施文される。石匙1点。石錘1点。貝はヤマトシジミ約21,960個体・カワシンジュガイ約1,400個体・カワニナ約90個体で，この貝層中には多数の魚骨が検出された。

SKF45フラスコ状ピット (1)円形，(2)円形，(3)ビーカー状，(4)1.6m・1.6m・0.7m，(5)壁ぎわにピット。

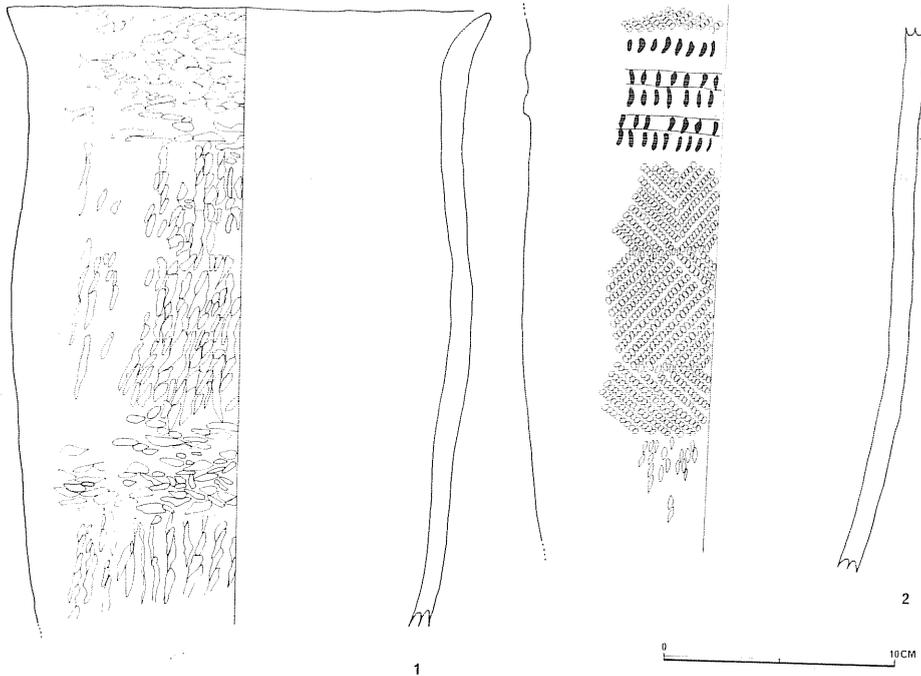
SKF46フラスコ状ピット (1)不整楕円形，(2)不整楕円形，(3)ビーカー状，(4)2.1×1.4m・1.7×1.2m・0.7m。

SKF47フラスコ状ピット (1)楕円形，(2)楕円形，(3)フラスコ状，(4)2.3×1.9m・1.6×1.5m・1.1



第75図 SKF 44出土遺物

m, (5)壁ぎわにビット, (6)1は床面から30cm, 2は87cmの埋土で検出される。1は口径21cmで、口頸部がわずかに外反する。口頸部と胴部に綾絡文帯が2段施文される。胴部には撚戻しと考えられる回転文が施文される。2は胴部下半まで羽状縄文, 底部に撚戻しが施文される。頸部には2条の隆帯+刺突文が施文される。



第76図 SKF 47出土遺物

SKF 48 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)不整円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.0×2.1 m・1.7×1.5 m・1.5 m, (5)中央に溝・壁ぎわにピット, (6)口縁部に段あり, (7)口頸部に羽状縄文, この下に単軸絡条体を施文し,口頸部に側面圧痕文を2条施文した土器片。石匙1点・石錘3点。

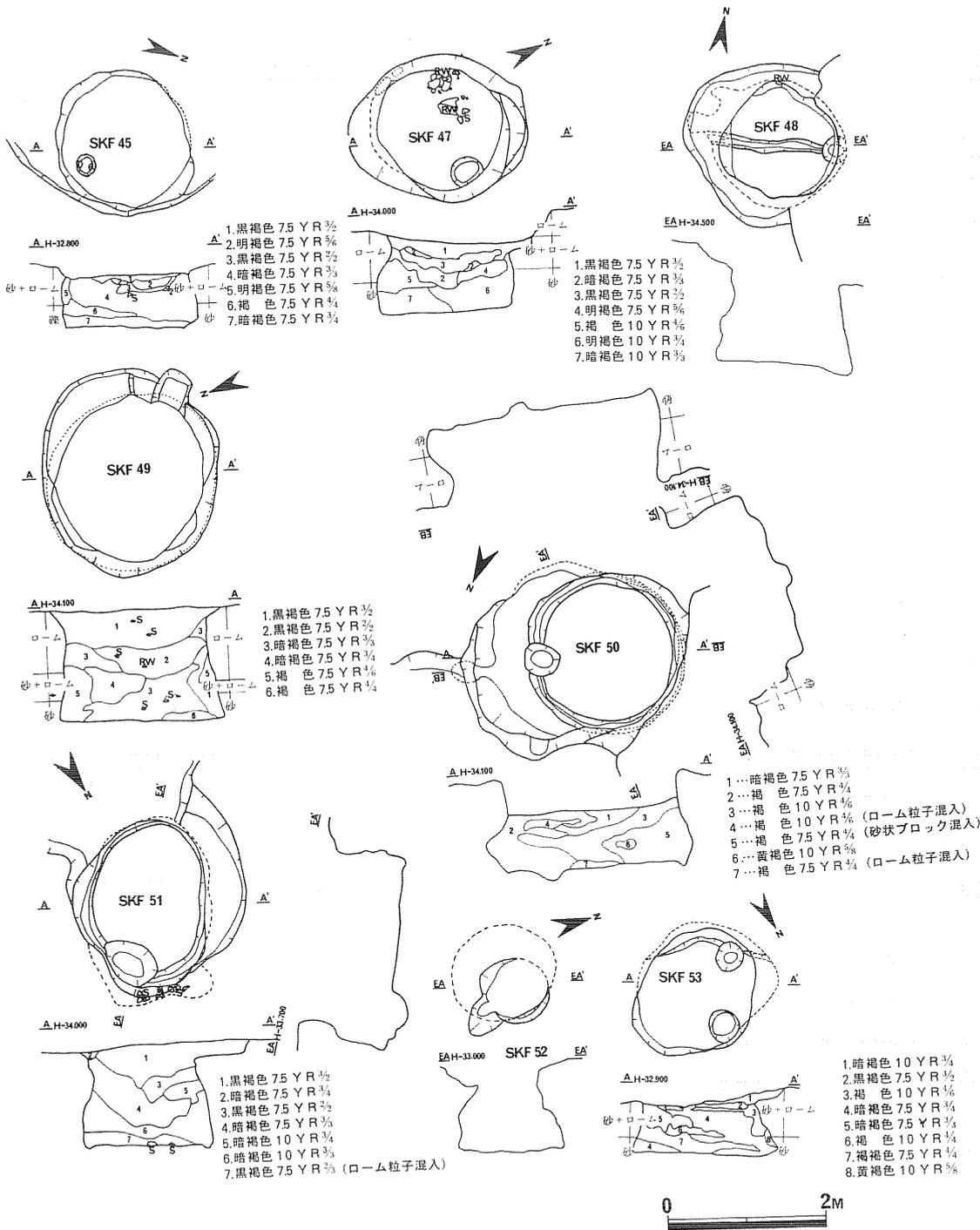
SKF 49 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.6×2.4 m・2.3×2.1 m・1.4 m, (6)口頸部に側面圧痕文の施文された土器片。不定形石器1点。石錘10点。扁平打製石器1点。

SKF 50 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)2.2 m・2.0 m・1.2 m, (5)壁沿いに溝とピット, (6)口頸部に側面圧痕文と, 側面圧痕文+刺突文の施文された土器片。石錘1点。不定形石器3点。石錘2点。扁平打製石器1点。

SKF 51 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.2×2.1 m・2.1×1.6 m・1.3 m, (5)壁沿いに溝とピット, (6)口縁部に段あり。刺突文の施文される土器片。石錘1点。

SKF 52 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.2×0.9 m・1.3×1.2 m・1.1 m, (6)石匙6点・石錘4点・石斧1点。

SKF 53 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)不整楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.6×1.4 m・1.7×1.5 m・0.8 m, (5)壁ぎわにピット。



第77図 SKF 45・47～53 実測図

SKF 54 フラスコ状ピット (1)円形, (2)不整円形, (3)フラスコ状, (4)2.1 m・2.6 m・1.6 m, (5)壁ぎわにピット, (6)刺突文の施文された土器片。石鍾 3 点。

SKF 55 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)不整楕円形, (3)フラスコ状, (4)2.1×2.0 m・2.3×2.1 m・1.1 m, (5)壁ぎわにピット, (6)隆帯+指頭状押圧文と刺突文の施文された土器片。

SKF 56 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)フラスコ状。

SKF 57 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.9×1.8 m・1.7×1.6 m・0.5 m, (5)壁ぎわにピット・中央に溝, (6)石鍾 1 点。

SKF 58 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.0×1.9 m・1.8×1.7 m・1.2 m, (5)壁沿いに溝とピット, (6)石鍾 1 点。

SKF 59 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.9×1.3 m・1.8 m・1.3 m, (5)壁ぎわにピット, (6)口頸部に綾絡文の施文された土器片。石鍾 19 点。

SKF 60 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.7 m・1.6 m・0.9 m, (5)壁ぎわにピット, (6)綾絡文の施文された土器片と隆帯+刺突文の施文された土器片。

SKF 61 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.9×1.7 m・2.0×1.9 m・1.0 m, (5)壁ぎわにピット, (6)口頸部に網目状撚糸文が施文され, さらに隆帯+刺突文の施文される土器片。石鍾 1 点。

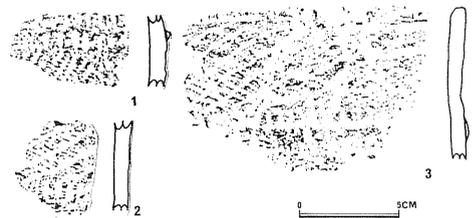
SKF 62 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)不整円形, (3)フラスコ状, (4)1.4 m・1.6 m・1.1 m, (5)壁ぎわにピット。

SKF 63 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.2×1.9 m・2.0×1.8 m・1.1 m (5)壁沿いに溝, (6)隆帯+刺突文の施文される土器片。

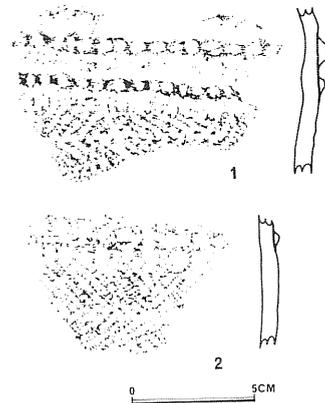
SKF 64 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.7×1.5 m・1.6×1.5 m・1.2 m, (5)壁沿いに溝, (6)隆帯+刺突文の施文される土器片。石鍾 1 点。

SKF 65 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)0.9 m・0.8 m・0.9 m, (6)刺突文の施文される土器。

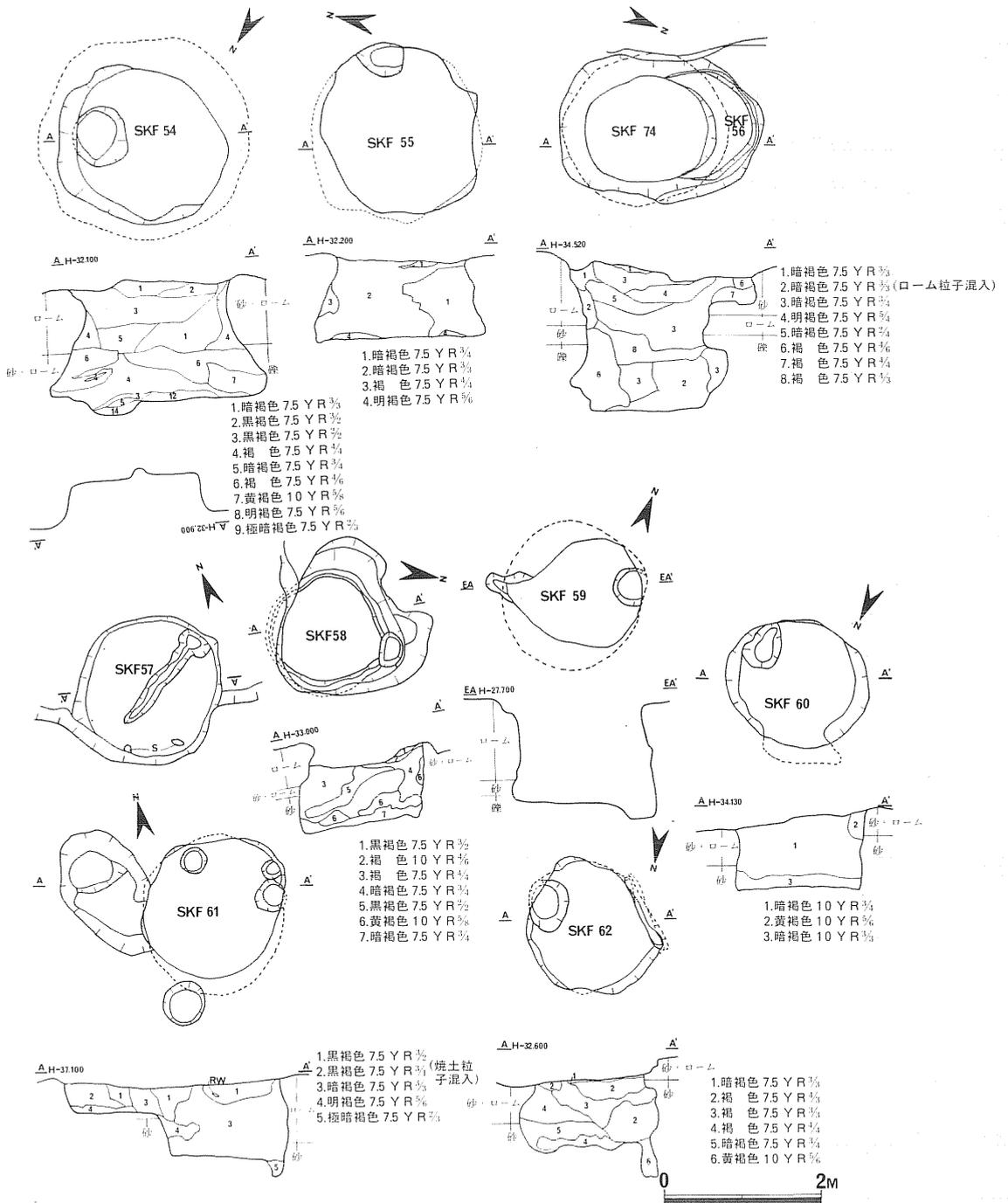
SKF 66 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.1×1.6 m・1.9×1.4



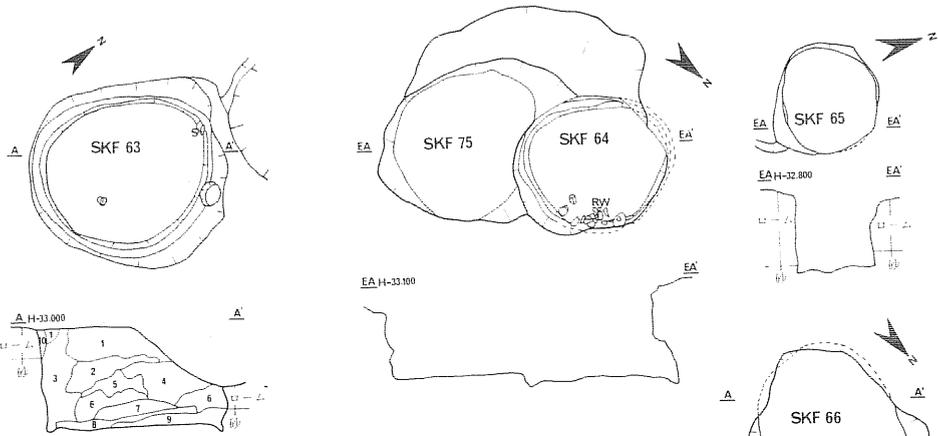
第78図 SKF 61出土遺物



第79図 SKF 64出土遺物

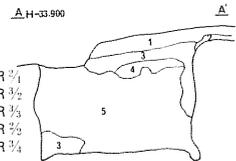
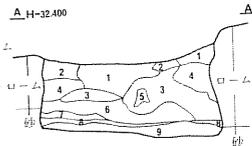
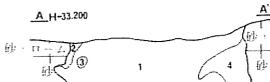
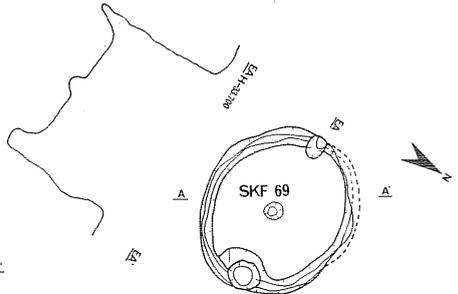
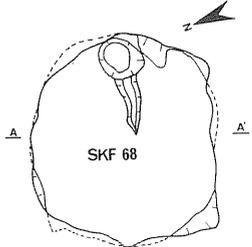
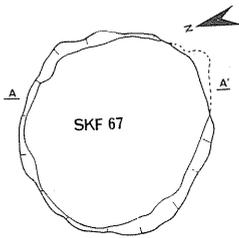


第80图 SKF 54~62·74 实测图



1. 黒褐色 7.5 YR 5/6
2. 暗褐色 7.5 YR 4/6
3. 暗褐色 7.5 YR 5/6 (口一ム粒子混入)
4. 暗褐色 7.5 YR 5/6
5. 褐色 7.5 YR 5/6
6. 褐色 7.5 YR 5/6
7. 暗褐色 7.5 YR 5/6 (炭化物混入)
8. 極褐色 7.5 YR 5/6
9. 黒褐色 7.5 YR 5/6 (焼土粒子混入)
10. 褐色 7.5 YR 5/6

1. 黒褐色 7.5 YR 5/6
2. 暗褐色 7.5 YR 5/6
3. 暗褐色 10 YR 5/6
4. 暗褐色 7.5 YR 5/6
5. 暗褐色 7.5 YR 5/6 (固くしまっている)



1. 暗褐色 7.5 YR 5/6
2. 明褐色 7.5 YR 5/6
3. 暗褐色 7.5 YR 5/6
4. 暗褐色 10 YR 5/6

1. 暗褐色 7.5 YR 5/6
2. 暗褐色 10 YR 5/6
3. 褐色 7.5 YR 5/6
4. 明褐色 7.5 YR 5/6
5. 暗褐色 7.5 YR 5/6
6. 褐色 7.5 YR 5/6
7. 褐色 7.5 YR 5/6 (焼土混入)
8. 黄褐色 7.5 YR 5/6
9. にぶい黄色 2.5 YR 5/6

1. 黒色 7.5 YR 5/1
2. 黒褐色 7.5 YR 5/2
3. 暗褐色 10 YR 5/3
4. 黒褐色 7.5 YR 5/4
5. 暗褐色 7.5 YR 5/4

第81図 SKF 63~69・75 実測図



m・0.9m, (5)壁ぎわにピット。

SKF 67 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.3×2.1m・2.2×1.9m・0.8m。

SKF 68 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.3×2.0m・2.4×2.0m・1.3m, (5)中央に溝・壁ぎわにピット。

SKF 69 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.9×1.7m・1.8×1.7m・1.1m, (5)壁沿いに溝とピット・中央にもピット, (6)口頸部に綾絡文の施文される土器と隆帯+刺突文の施文される土器片。

SKF 70 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)1.7m・2.1m・0.9m, (5)壁沿いに溝とピット。

SKF 71 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.3m・1.8×1.5m・1.3m, (5)中央に溝とピット。

SKF 72 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)不整楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.9×1.8m・1.9×1.8m・1.1m, (5)中央に溝・壁ぎわにピット, (6)刺突文の施文される土器片。石錘1点。

SKF 73 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)2.4×2.0m・2.0×1.9m・1.4m, (5)壁沿いに溝とピット。

SKF 74 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.2×1.9m・2.1×1.9m・2.1m, (6)口縁部に段。石錘1点。

SKF 75 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.0×1.9m・1.8×1.4m・0.8m。

SKF 76 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.5×1.3m・1.5×1.2m・1.2m, (5)壁沿いに溝。

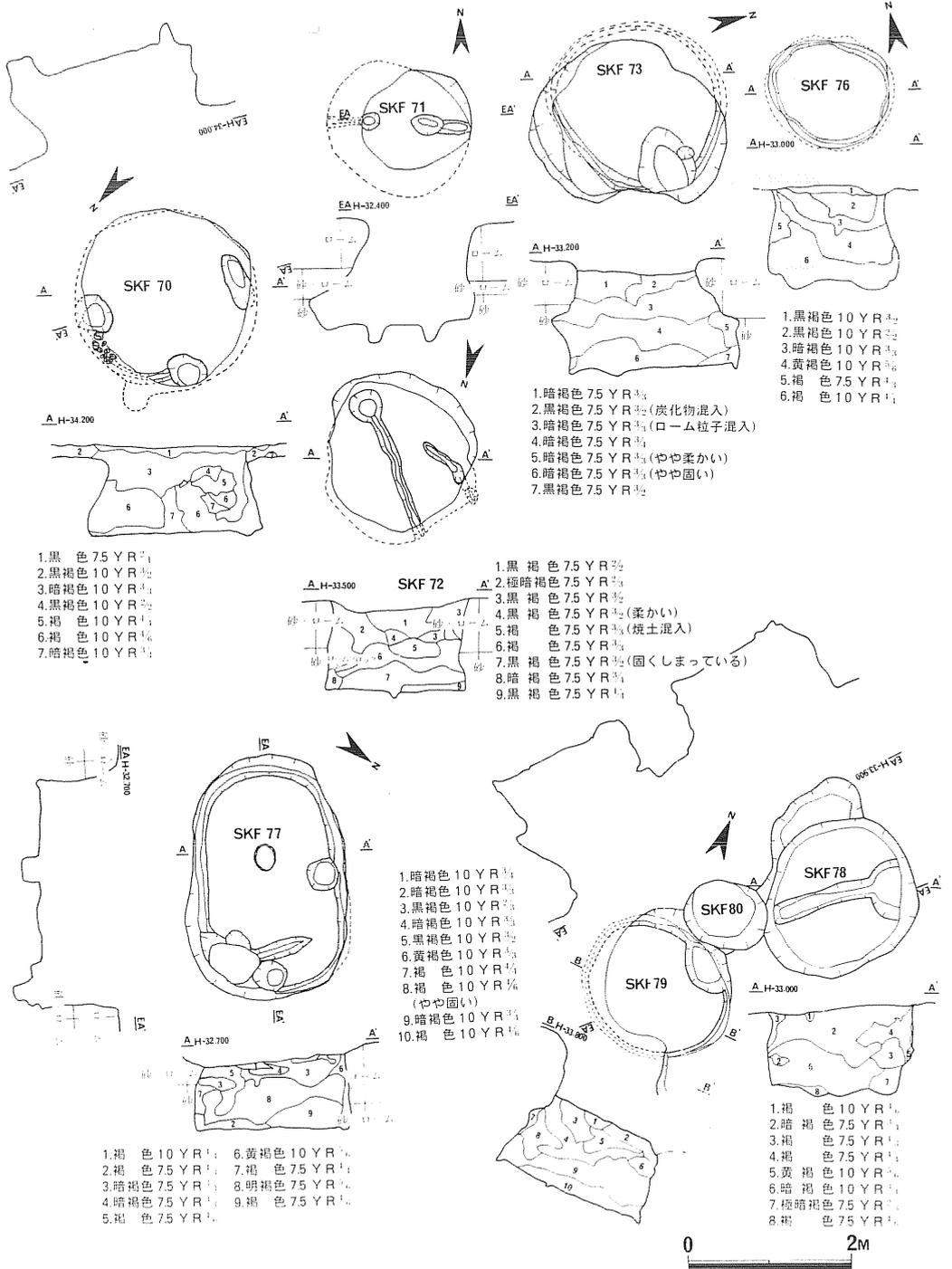
SKF 77 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)3.0×1.9m・2.7×1.8m・0.9m, (5)壁沿いに溝とピット・中央にもピット。

SKF 78 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.1×1.8m・1.8×1.5m・1.1m, (5)中央に溝・壁ぎわにピット。

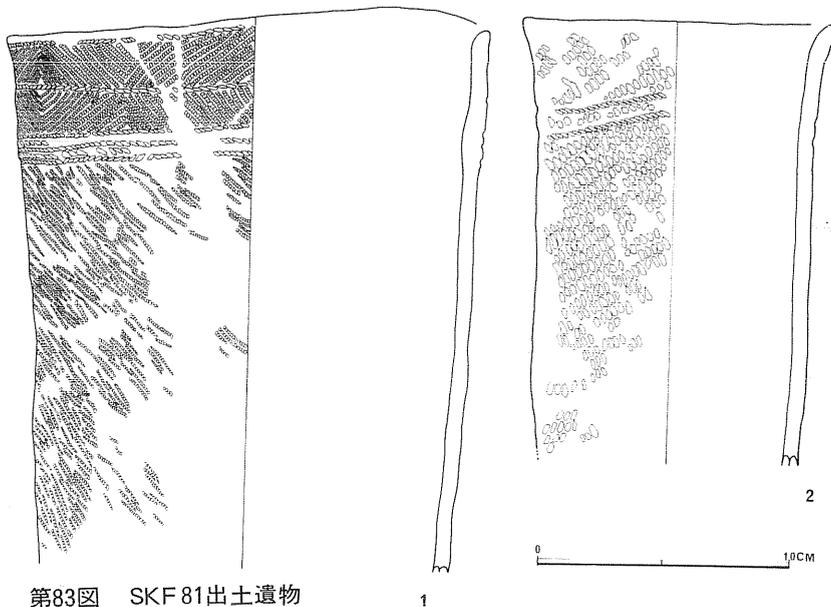
SKF 79 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.8×1.6m・1.9×1.7m・1.8m, (5)壁沿いに溝とピット。

SKF 80 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.0×0.9m・0.8m・1.0m。

SKF 81 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)2.3×2.0m・2.4×1.9m・2.0m, (5)壁沿いに溝・中央にピット, (6)1は口頸部に羽状縄文と4条の側面圧痕文を, 口頸部か



第82図 SKF 70~73・76~80 実測図



第83図 SKF 81出土遺物

1

2

0 1.0CM

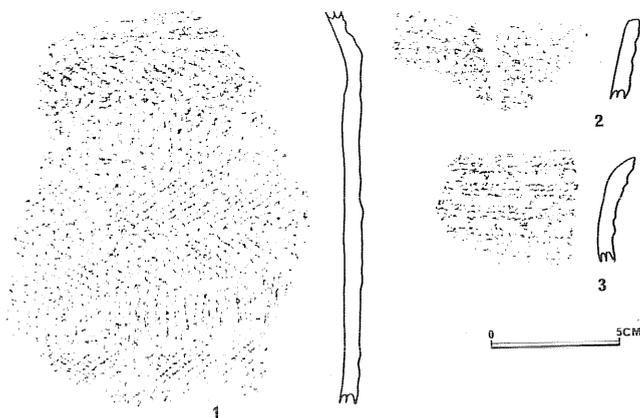
ら下には撚戻しを施文。2は口頸部から胴部下半には単節斜縄文と2条の側面圧痕文、胴下半には多軸絡条体を施文。

SKF 82フラスコ状ピット (1)不整形円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)0.8×0.7m・1.8m・1.6m。

SKF 83フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.9×1.5m・1.9×1.8m・1.3m, (5)壁沿いに溝とピット, (6)貝層が, 底面より0.8~1mの埋土で検出(口縁部に近い)。貝はヤマトシジミ約28,700個体・カワシンジュガイ128個体・カワニナ30個体・サルボウ5個体・ハマグリ1個体, 貝層から多数の魚骨が検出される。土器は多軸絡条体施文の土器片。石鏃1点, 石錘2点。

SKF 84フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.8×1.7m・1.6×1.4m・1.1m, (5)壁沿いに溝。(6)隆帯+刺突文の施文される土器片。石鏃1点。

SKF 85フラスコ状ピット (1)不整形楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.8×1.4m



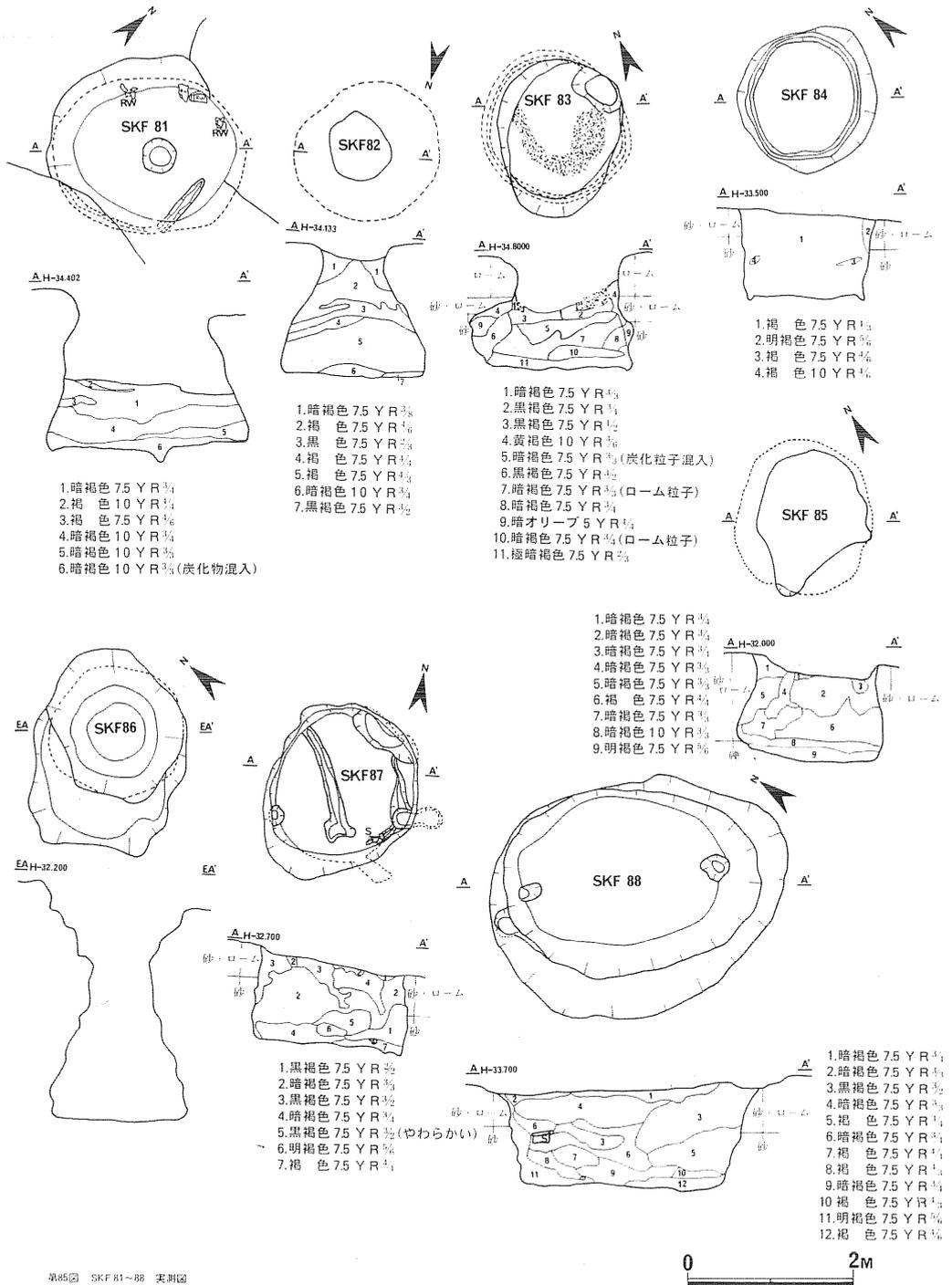
第84図 SKF 86出土遺物

1

2

3

0 5CM



第85図 SKF 81~88 実測図

第85図 SKF 81~88 実測図

・1.9×1.6m・1.2m。

SKF 86 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)1.8×1.6m・1.6m・2.9m, (6)口縁部に段, 口頸部が内湾し, 側面圧痕文+刺突文が施文され, 胴部には羽状縄文+単軸絡条体+綾絡文の施文される土器片。

SKF 87 フラスコ状ピット

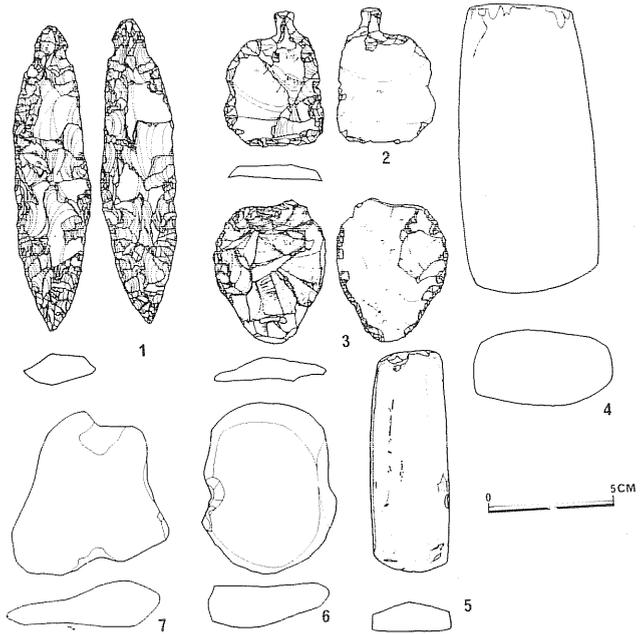
(1)楕円形, (2)楕円形, (3)ピーカー状に近い, (4)2.2×1.8m・1.9×1.7m・1.1m, (5)中央に溝・壁ぎわにピット。

SKF 88 フラスコ状ピット

(1)楕円形, (2)楕円形, (3)ピーカー状に近い, (4)3.6×2.9m・2.4×1.8m・1.2m, (5)壁ぎわにピット, (6)石匙3点・石斧2点・石錘6点。

SKF 89 フラスコ状ピット

(1)楕円形, (2)楕円形, (3)ピーカー状に近い, (4)1.6×1.5m・1.5×1.3m・0.9m。



第86図 SKF 88出土遺物

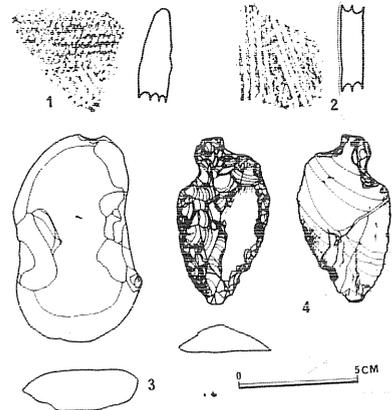
SKF 90 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)2.0×1.7m・2.2×2.0m・0.7m (5)壁ぎわにピット, (6)単軸絡条体の施文された土器片。石錘2点。石槍1点。

SKF 91 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)1.8×1.5m・1.8m・0.7m, (6)狭い口頸部文様帯に側面圧痕文を旋文した土器片。

SKF 92 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)ピーカー状に近い, (4)1.8m・2.0m・1.1m, (5)壁沿いに溝とピット, (6)刺突文+側面圧痕文の施文された土器片。

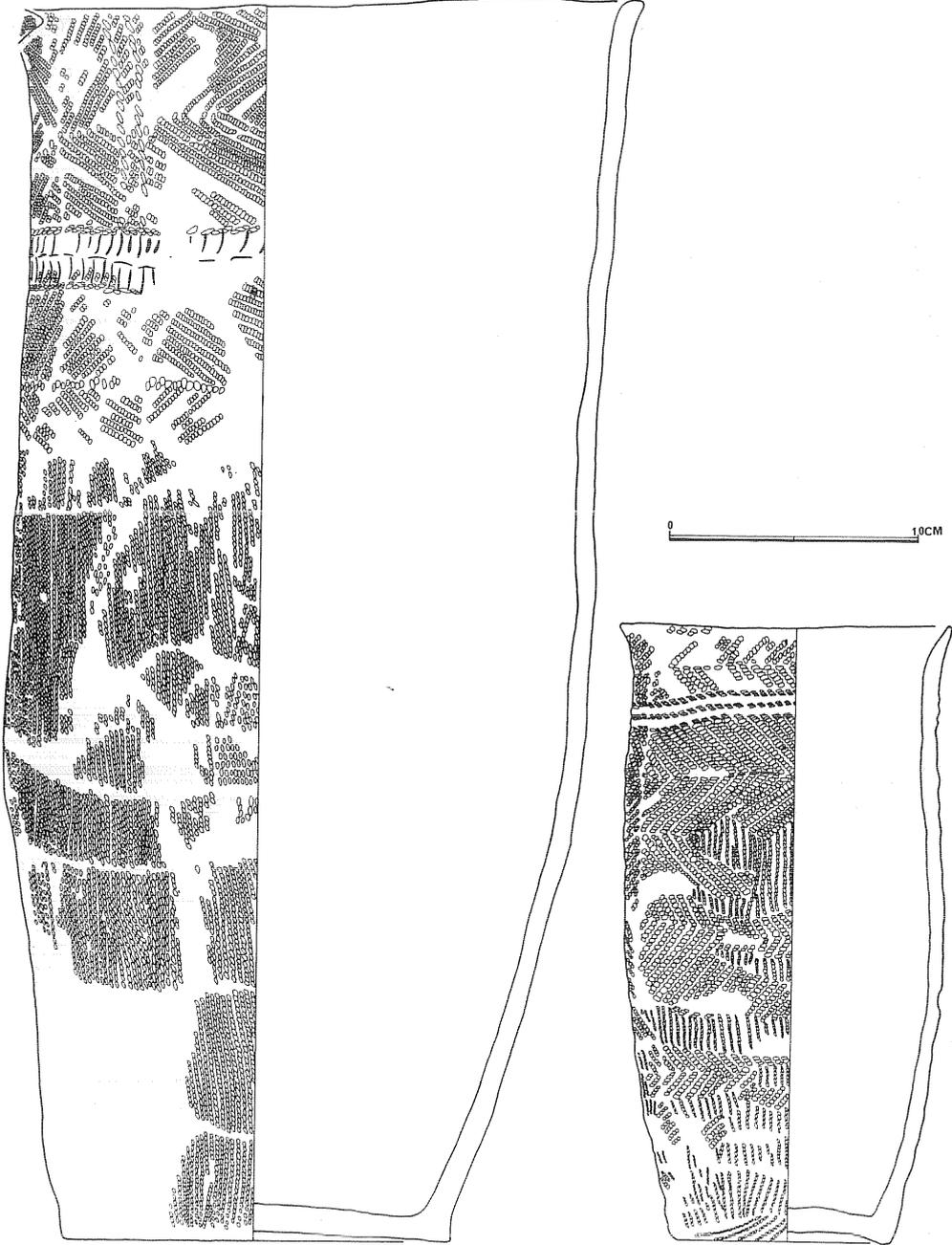
SKF 93 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)1.8×1.4m・1.8m・1.1m, (5)壁ぎわにピット, (6)口頸部に羽状縄文の施文された土器片。

SKF 94 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)1.8×2.1m・2.0m・1.5m, (5)中央にピット, (6)狭い口頸部文様帯に側面圧痕文の施文された土

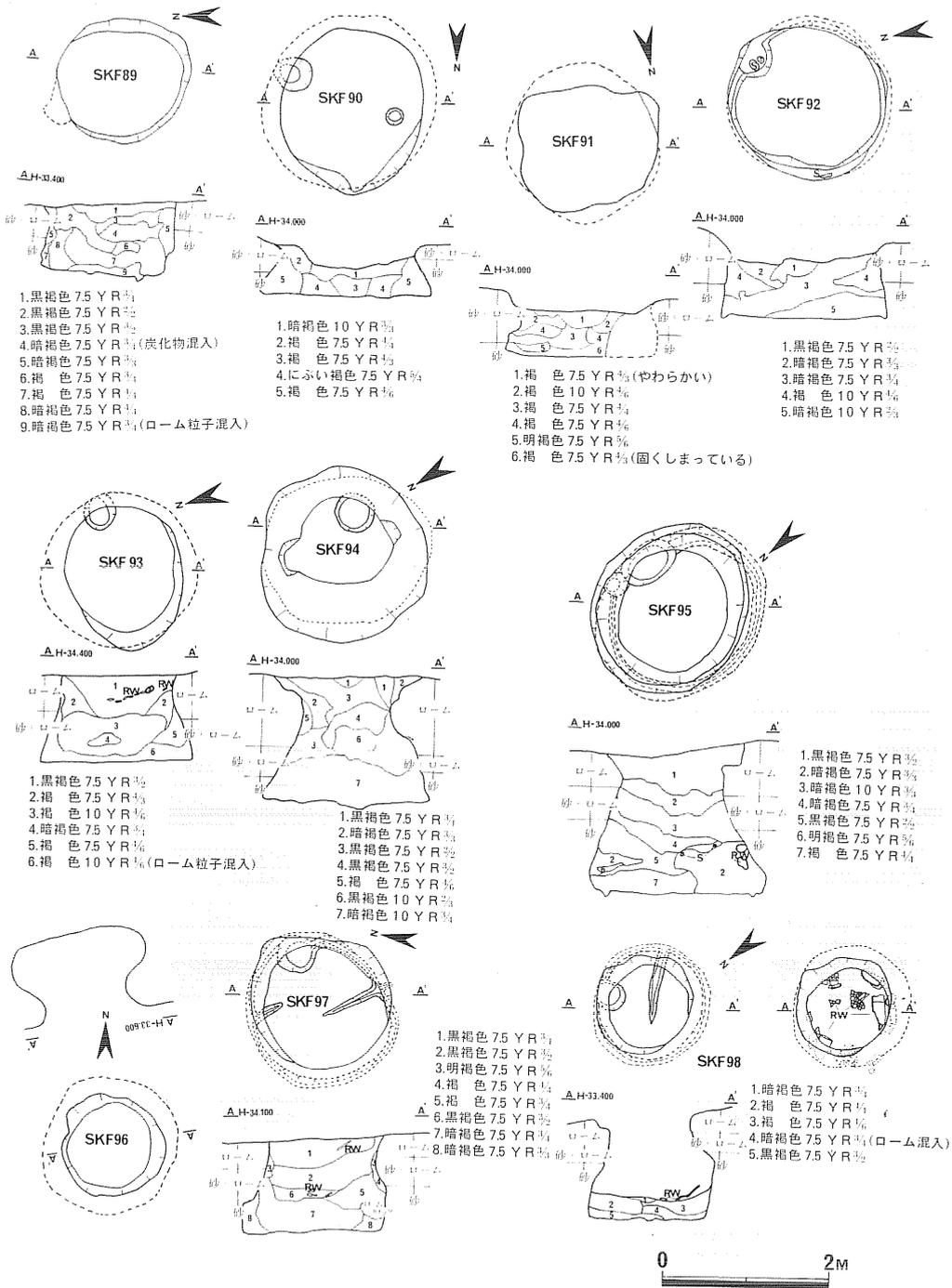


第87図 SKF 94出土遺物

器片と木目状撚糸文の施文された土器片。石匙1点。石錘1点。

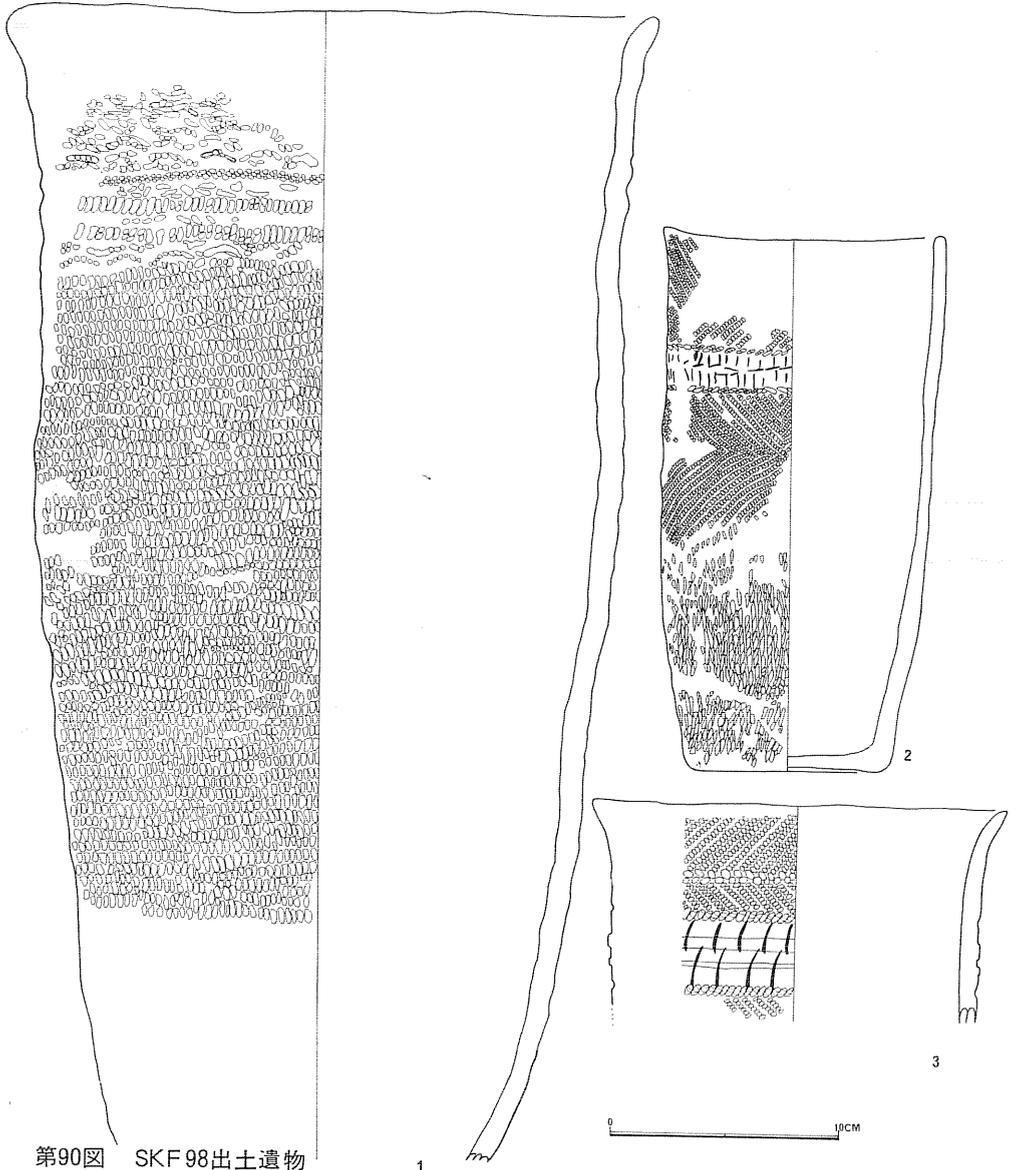


第88図 SKF 95出土遺物



第89図 SKF89~98 実測図

SKF 95 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)2.2×1.8m・2.3×1.9m・1.7m, (5)壁沿いに溝とピット, (6)1と2は床上約20cmの埋土で検出。1は口径25.7cm・底径156cm・器高49.8cm。口頸部がわずかに外反し、口頸部と胴部上半に羽状縄文, 下半に単軸絡条体を施文し、口頸部には側面圧痕文+刺突文が施文される。内面のミガキ顕著。2は口径134cm底径88cm・器高248cm。口頸部が外反する。器面全体に羽状縄文を施文し、胴下半部にはさらに単軸絡条体を施文する。口頸部には3条の側面圧痕文が施文される。内面にはミガキが施される。石錘4点。



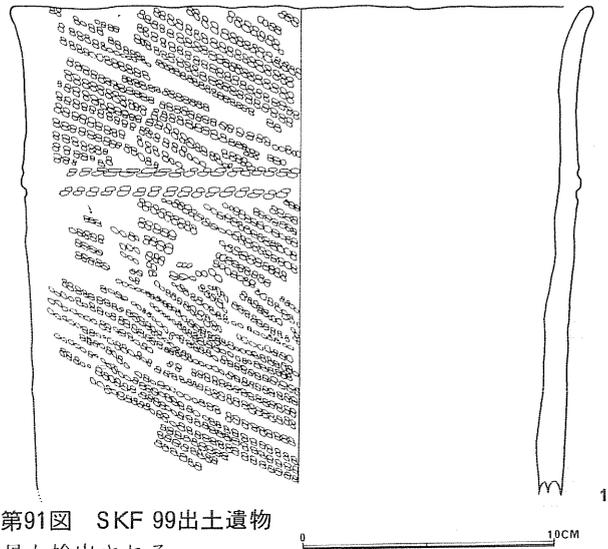
第90図 SKF 98出土遺物

SKF 96 フラスコ状ピット (1)円形, (2)不整円形, (3)フラスコ状, (4)1.3m・1.7×1.6m・1.0m, (6)刺突文の施文される土器片。

SKF 97 フラスコ状ピット (1)円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.4m・2.0×1.7m・1.1m, (5)壁沿いに溝とピット・中央に溝, (6)狭い文様帯に側面圧痕文の施文される土器片。石匙1点。石錘3点。

SKF 98 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.3×1.1m・1.6×1.4m・1.4m, (5)壁沿いに溝とピット・中央に溝, (6)床上約30cmの埋土で3個体の土器が横位で検出され貝もわずかに検出される。1は口径28.5cmの大型土器であり, 口頸部は外反する。口頸部は綾絡文と3条の側面圧痕文が, 口頸部以下は多軸絡条体が施文される。内面のミガキが顕著。2は口径12.5cm, 底径8.7cm, 器高23.4cm, 器面の上半が羽状縄文, 下半が撚戻し, 口頸部に側面圧痕文+刺突文が施文される。3は口頸部に羽状縄文と側面圧痕文+刺突文が施文される。石錘1点。貝はヤマトシジミ約420個体, 魚骨もわずかに検出。

SKF 99 フラスコ状ピット
(1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.8×1.4m・1.9×1.8m・1.5m, (5)中央にピット (6)口縁部に段。複節斜縄文が施文され, 口頸部に2条の側面圧痕文が施文される土器片。隆帯+刺突文の施文される土器片。石錘2個。床上60cmの埋土で貝層検出。ヤマトシジミ約3,450個体・カワシンジュガイ約460個体, カワニナ20個体, ヒメギセル1個体。魚骨も検出される。



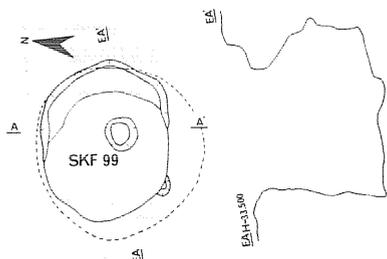
第91図 SKF 99出土遺物

SKF 100 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)円形, (3)フラスコ状, (4)1.7×1.5m・1.6m・1.5m

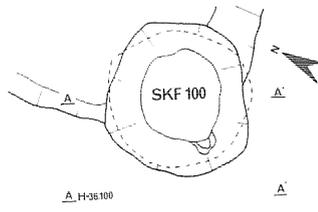
SKF 101 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.7×1.5m・1.8×1.6m, 0.8m。

SKF 102 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)1.9×1.7m・2.0×1.6m・0.6m, (5)壁ぎわにピット。

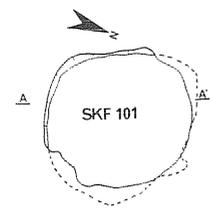
SKF 103 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.7×2.0m・2.9×2.0m・0.8m, (5)壁沿いに溝とピット・中央に溝, (6)口頸部に刺突文の施文される土器片と刺突文+側面圧痕文の施文される土器片。



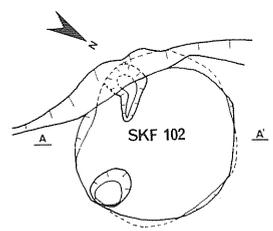
1. 褐色 7.5 YR 4/6
 2. 明褐色 7.5 YR 6/6
 3. 褐色 7.5 YR 4/6
 4. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 5. 褐色 7.5 YR 4/6
 6. 暗褐色 7.5 YR 4/6



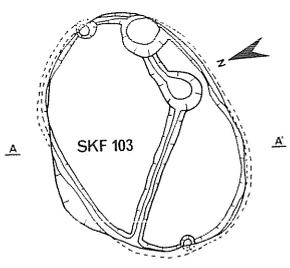
1. 褐色 7.5 YR 4/6
 2. 褐色 7.5 YR 4/6
 3. 暗褐色 7.5 YR 4/6



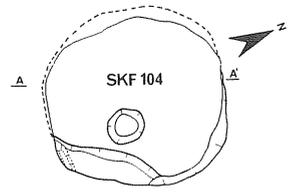
1. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 2. 暗褐色 7.5 YR 4/6 (固くしまっている)
 3. 褐色 7.5 YR 4/6
 4. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 5. 黄褐色 10 YR 6/6
 6. 褐色 10 YR 6/6
 7. 暗褐色 7.5 YR 4/6 (ローム粒子少量混入)
 8. 黄褐色 10 YR 6/6
 9. にぶい黄色 2.5 Y 6/4



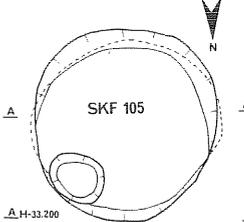
1. 褐色 10 YR 6/6
 2. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 3. 褐色 7.5 YR 4/6
 4. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 5. 明褐色 7.5 YR 6/6
 6. 褐色 7.5 YR 4/6
 7. 明褐色 7.5 YR 6/6
 8. 暗褐色 7.5 YR 4/6 (粘性あり、やわらかい)
 9. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 10. 暗褐色 7.5 YR 4/6 (固くしまっている)



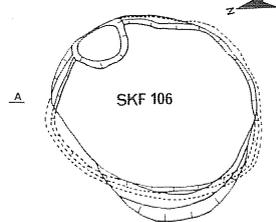
1. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 2. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 3. 暗褐色 7.5 YR 4/6 (焼土混入)
 4. 暗褐色 7.5 YR 4/6 (やや固い)
 5. 暗褐色 7.5 YR 4/6 (ローム粒子混入)
 6. 褐色 7.5 YR 4/6
 7. 褐色 7.5 YR 4/6



1. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 2. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 3. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 4. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 5. 褐色 10 YR 6/6
 6. 暗褐色 7.5 YR 4/6



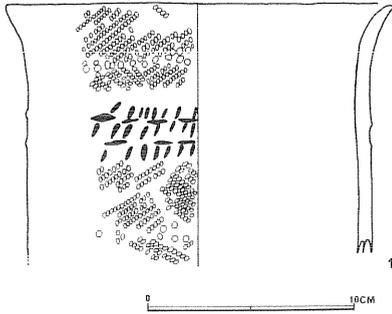
1. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 2. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 3. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 4. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 5. 暗褐色 7.5 YR 4/6 (やわらかい)
 6. 明褐色 7.5 YR 6/6
 7. 暗褐色 7.5 YR 4/6



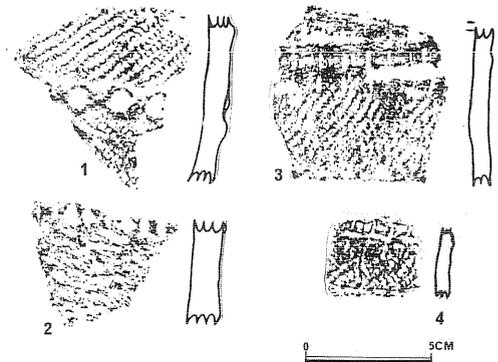
1. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 2. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 3. 黒褐色 7.5 YR 2/6 (焼土粒子混入)
 4. 黒褐色 7.5 YR 2/6
 5. 褐色 7.5 YR 4/6 (やわらかい)
 6. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 7. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 8. 褐色 7.5 YR 4/6
 9. 暗褐色 7.5 YR 4/6
 10. 黒褐色 7.5 YR 2/6



第92図 SKF 99~ 106 実測図



第93図 SK F 103 出土遺物



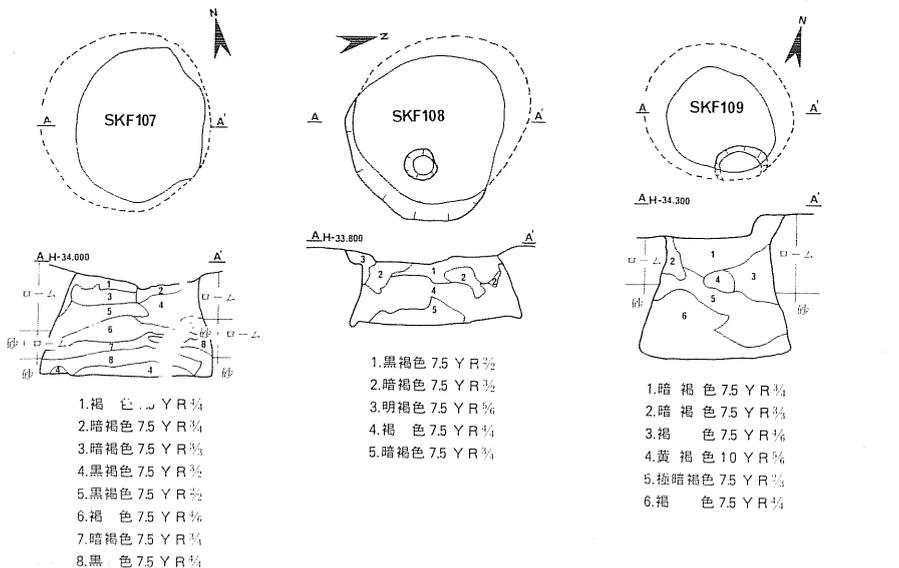
第94図 SK F 104 出土遺物

SK F 104 フラスコ状ピット (1)不整円形, (2)不整円形, (3)フラスコ状, (4)2.0×1.8m・2.0×1.9m・1.1m, (5)中央にピット, (6)1は隆帯+指頭状押圧文が施文, 2~4は刺突文の施文された土器片。

SK F 105 フラスコ状ピット (1)円形, (2)円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.0m・2.1m・1.2m, (5)壁ぎわにピット, (6)口頸部に側面圧痕文+刺突文を施文の土器片と側面圧痕文の施文された土器片。

SK F 106 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)ビーカー状に近い, (4)2.4×1.9m・2.4×2.2m・1.5m, (5)壁沿いに溝とピット。

SK F 107 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.7×1.4m・2.0×1.9



第95図 SK F 107 ~ 109 実測図

m・1.1 m。

SKF 108 フラスコ状ピット (1)不整楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.9×1.7 m・2.0×1.8・0.9 m, (5)壁ぎわにピット。

SKF 109 フラスコ状ピット (1)楕円形, (2)楕円形, (3)フラスコ状, (4)1.2×1.1 m・1.7×1.6 m・1.6 m, (5)壁ぎわにピット。 (佐々木・永瀬)

③ 土 壌

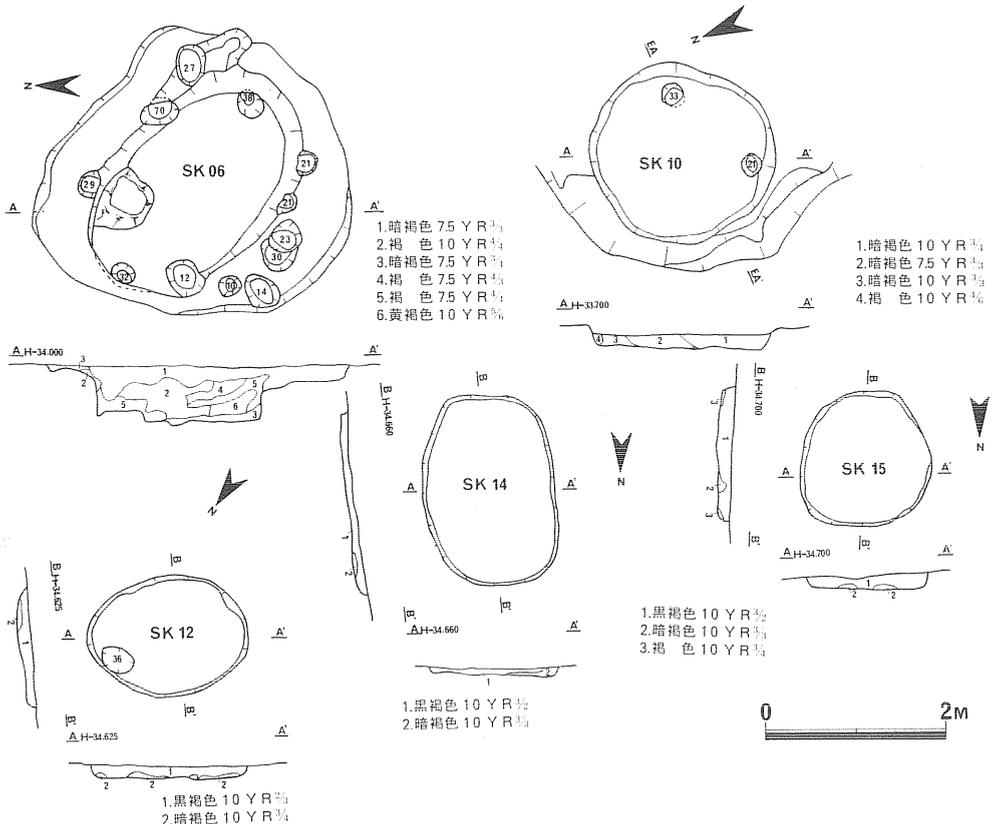
SK06土壌 地山ローム上面で確認。長軸3.3 m。短軸3 mの不整円形, 壁高60 cm, 柱穴は壁に沿って認められる。堅穴住居跡の可能性も考えられる。床面は平坦。

SK10土壌 SI13と重複し, 本遺構が古い。径2 mの円形を呈す。深さ20 cm。床面は平坦。

SK12土壌 地山上面で確認。SI35の近くに位置する。長軸1.8 m・短軸1.3 mの楕円形。深さ15 cm。床面は平坦。

SK14土壌 地山ローム上面で確認。SI35の近くに位置する。長軸2.2 m・短軸1.5 mの楕円形。深さ10 cm。床面は平坦。

SK15土壌 地山ローム上面で確認。SI44の近くで検出。径1.5 cmの円形を呈する。(大高)



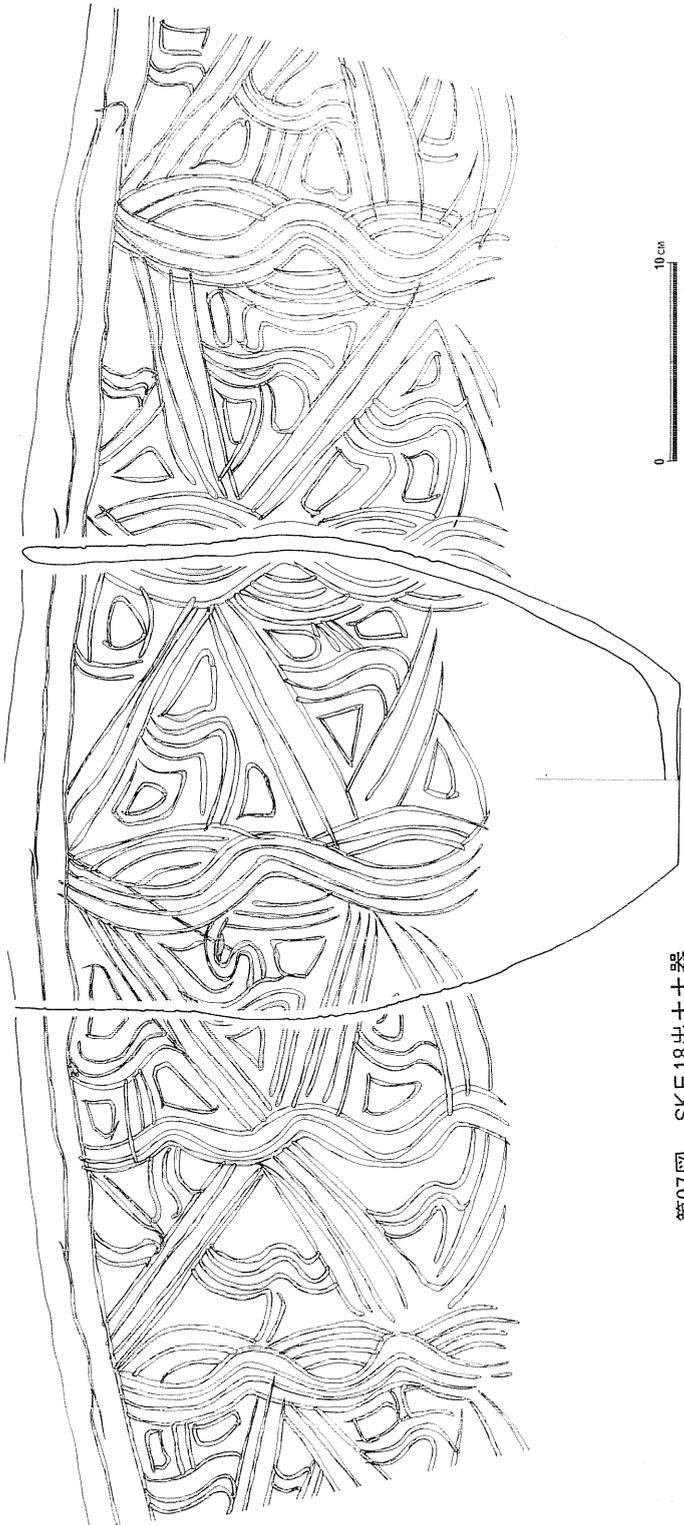
第96図 SK06・10～12・14～15 実測図

2 縄文時代後期

後期に属する遺構は、フラスコ状ピット1基のみであり、遺構外の遺物も検出されなかった。

SKF18フラスコ状ピット
SI13住居跡と重複して検出され、SKF18が新しい。平面形は口縁部1.29 m・口頸部1.61 m・底部1.48 m・深さ1.10 mで砂層まで掘り込む。断面の形状はフラスコ状というよりむしろビーカー状に近い。

出土土器は、深鉢1点が倒立状態で出土した。土器内部は空洞で、フラスコ底面にしっかりと口縁部が接していた。器形は胴部がやや膨みをもち、口縁は平縁である。口径23.5 cm・胴部径24.6 cm・底部9.2 cm・高さ34.0 cmで、内面には縦方向のヘラミガキが施されている。外面は2本の沈線を横方向に施し、次に3本～4本一組の曲線で縦方向に全体を5区分する。その内部を直線や曲線の沈線を施文し、土器頸部から胴部3分の2まで及ぶ。また、胴部上半には炭化物が付着す



第97図 SKF18出土土器

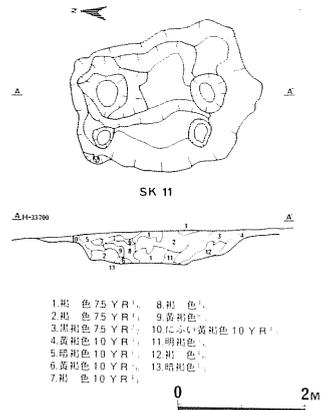
る。煮沸用に使用されたものと考えられ、底部が赤褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は灰褐色を呈す。十腰内I式土器に比定される。(佐々木)

3 縄文時代晩期

出土遺物の多量さに比較し、遺構の検出は土壌1基である。遺物は東南部に集中し、その出土は第1層を主として第2層上位までわたるが、層位による土器型式の区分は明確でなかった。

① 遺構

SK11土壌 平面プランは不整の楕円形を呈す。壁、底面とも凹凸が激しい。埋土は攪乱気味で褐色土を多量に混入。自然作用で形成された(風倒木痕)可能性がある。出土遺物は埋土からで、1は底部が平底で直線的な立ち上がりを示し、体部に5組の雲形文を連続施文、口唇部には4個の瘤状突起 内面は磨きを加え弱い光沢を生じている。2は長胴を呈す壺型土器で、肩部で陵を形成。口頸部を磨き消し、口縁部と体部にLR原体を横位回転施文し、地文とする。



第98図 SK11 実測図

② 遺物

器形を中心に群別、さらに器表面における施文状態をもとに類別する。

鉢形土器I群 (3, 4 23~32)

口頸部が巾を持ち、口縁部が短く外反する深鉢型を主とする。多くは器内外面にすす状炭化物が付着。出土量は多い。

a類 (23~27) 口頸部に羊歯状文を施す。羊歯状文は末端のかみ合うもの、かみ合わないのがある。前者はいずれも左傾きで、ポジティブな浮彫りによる曲線的な文様から、ネガティブな沈刻による直線への過程を持つ。又、施文の区画帯は羊歯状文が直線化するにつれ肩部に降下、口頸部は狭巾の無文帯を基調とする。

b類 (3, 28) 胴部に雲形文を施す。口頸部は磨きを加えた無文帯、及び数条の平行沈線を引く場合がある。3は台付鉢型土器でx字状文を4組連続し、頸部には6条の平行沈線、胴部下半にLR原体を横位回転施文し、地文とする。

c類 (4, 29~32) 装飾文様が施されなく、口頸部は数条の平行沈線が引かれるか無文帯で、口唇部には、B状突起を付するのが多い。4は台付鉢型土器で、頸部に3条の平行沈線及び沈線間に列点を有す。胴部はLR原体を横位回転施文し、施文とする。

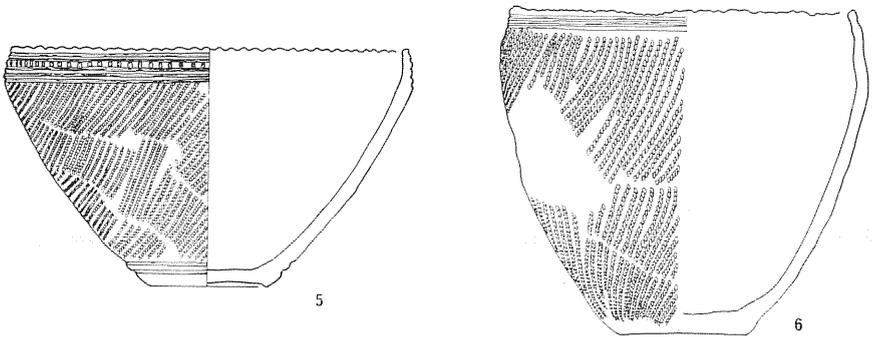
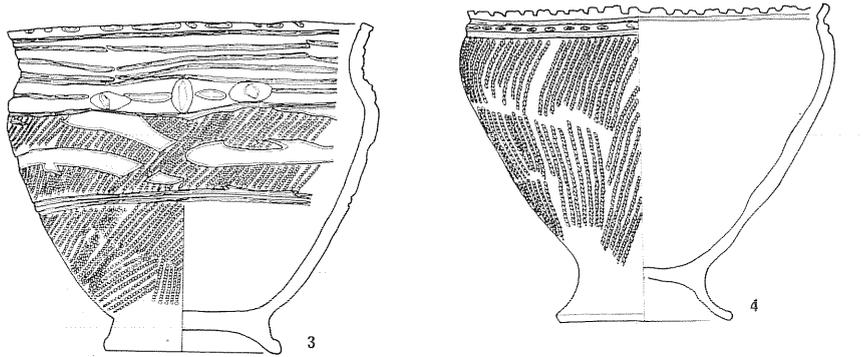
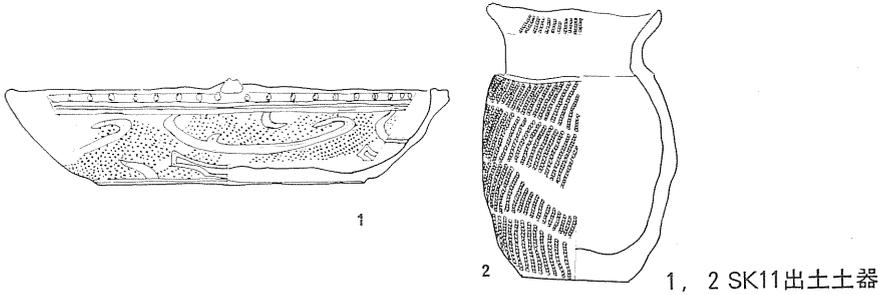
鉢形土器II群 (5~9・33~39)

口縁部が直線的に立ち上がるか、わずかに内反する深鉢形土器を主とする。出土量が多い。胴部には縄文を地文とし、雲形文を施すものは出土していない。土器は総じて粗いつくりが多い。

a類 (33) 口縁部に八組文施す。出土量は極めて少ない。

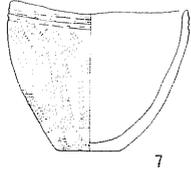
b類 (34) 口縁部に羊歯状文を施す。出土量は少ないがいずれも左傾きで末端のみ合う羊歯状文。

c類 (37~39) 渦巻き状の文様を浮文的に連続表現。出土量は少ない。文様は工字文へ移る過渡期を示し、太く深い沈線でなされ、体部下半には比較的撚りのきついR L原体を横位回転施文させ、地文とする。

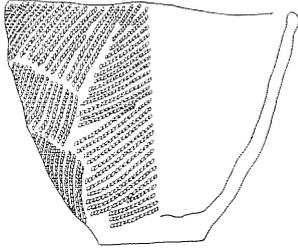


第99図 出土土器

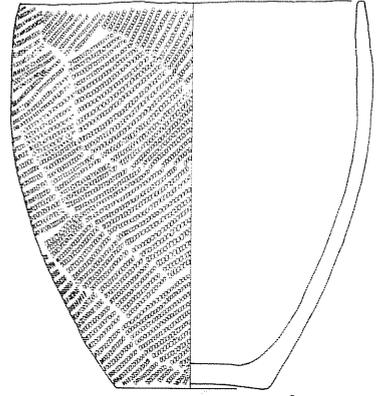
0 5cm



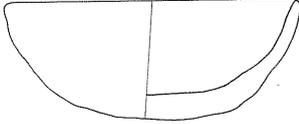
7



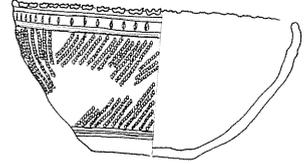
8



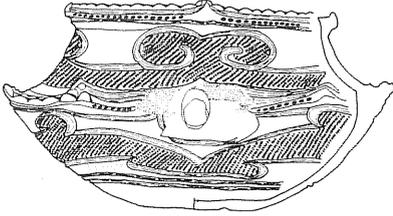
9



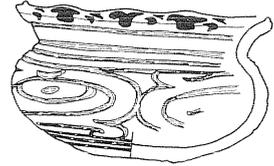
10



11



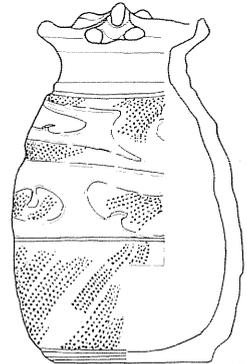
12



13



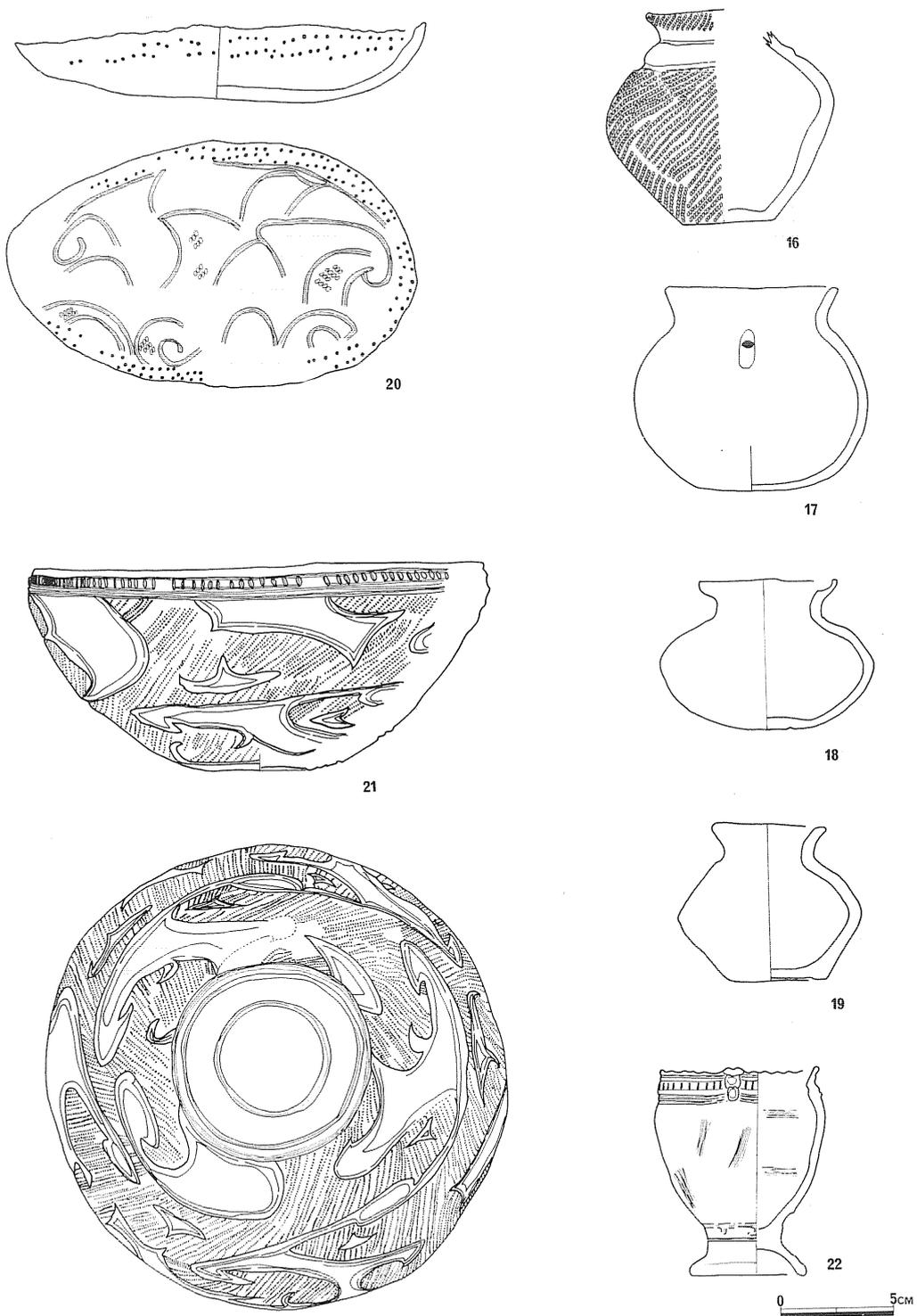
14



15

第 100 图 出土土器

0 5cm



第101图 出土土器

d類(5~7・35~36) 装飾文様を施さず、口縁部に数条の平行沈線を引く。口唇部は小波状、山形状を基調とし、B状突起を付す(37)のものもある。6は口縁部に3条の平行沈線を施す。5は沈線内に列点を加え、底部は削りを加え平滑にしている。7は口縁部に3条の平行沈線。小型で口径6.6 cm, 器高5.9 cm

e類(8・9) 装飾文様を施さず、縄文を地文とする。小型から大型まで量的に最も多い。器質は粗製で厚く、口縁部は内反するものが多い。器内外面にすす状炭化物の付着が著しい。8は厚手につくられ、器表面に砂粒が浮出している。9は多量のすす状炭化物が付着

鉢形土器Ⅲ群(40~47)

狭い巾の口頸部を留め、口縁部がくの字状に強く外反、肩部がはり出す浅鉢形土器を主とする。胎土は緻密で精製され、口縁部内面に磨きを加えているのが多い。出土量は比較的多い。

a類(40~42) 肩部にかけ羊歯状文を施す。羊歯状文は、いずれも直線化されており、左傾きのものである。口唇部にはB状突起を付す。出土量は極めて少ない。

b類(43~45) 胴部に雲形文を施す。出土量は多い。口唇部にはB状突起を付すものが多い。胎土は緻密に精製され、器表面は平滑で、わずかながら光沢を生じている。

c類(46, 47) 装飾文様を施さず、肩部から口縁部にかけ数条の平行沈線を施し、多くは沈線間に列点を加える。

鉢形土器Ⅳ群(10・11・48~55)

口縁部が内湾もしくは内湾気味で、薄手で精緻及び厚手で粗くなされたものがある。内面に多くの場合すす状炭化物の付着をみる。出土量は多い。

a類(48) 口縁部にかけ三叉状入組状を施す。出土量はきわめて少い。口唇部にはB状突起が付され、内外面に磨きを加えている。

b類(49~51) 口縁部に羊歯状文を施す。羊歯状文は末端のかみ合わないもの(52)を加え、直線化しているものが多い。

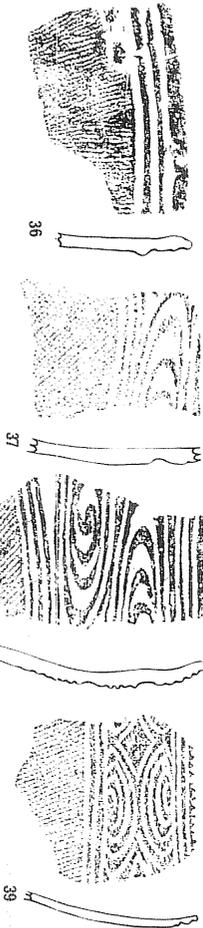
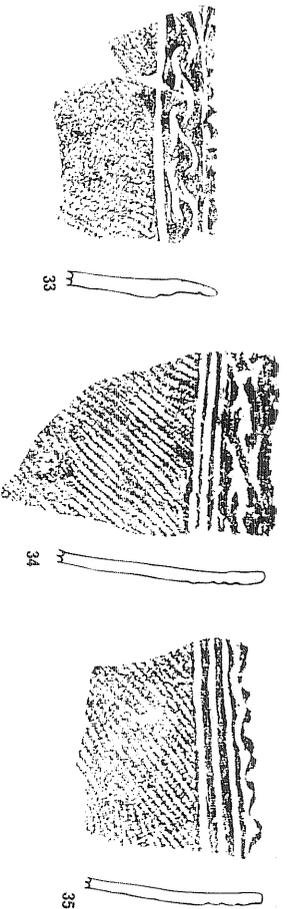
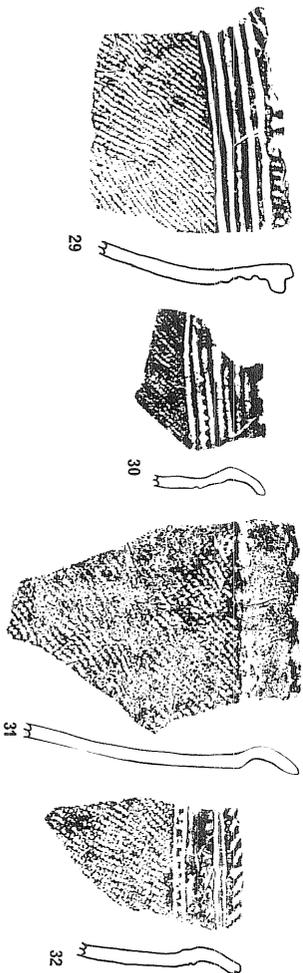
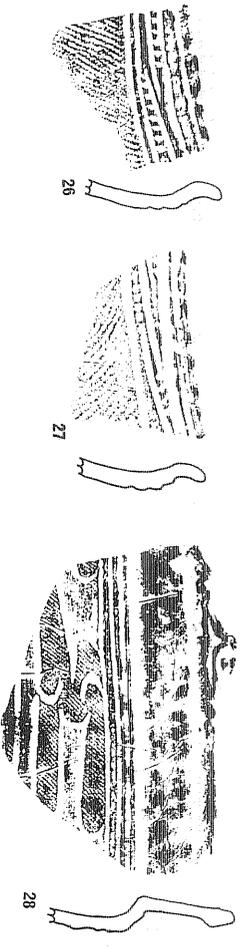
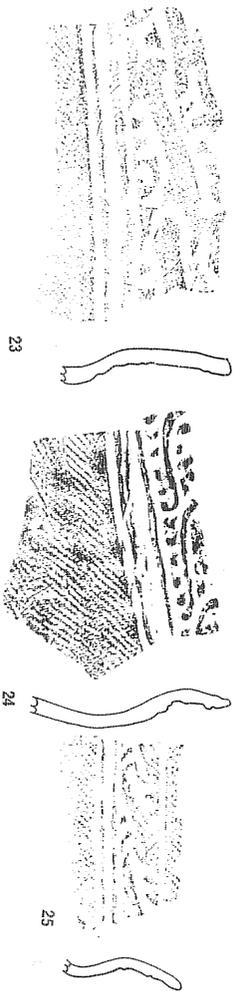
c類(52) 口縁部に羊歯状文、体部に雲形文を上下接続して施す。出土例は1点。薄手で精緻につくられ、小波状口縁を呈す。

d類(55) 体部上半に工字文風の隆帯を付す。

e類(10・11・53・54) 装飾文様を施さないものを主とする。体部は地文として縄文がなされるのと、一切施さないものがある。前者の場合口縁部に平行沈線及び列点を加えるものが多い。10は地文を施さない厚手の粗製土器で、色調が灰白色を呈す。11は薄手で精製されている。

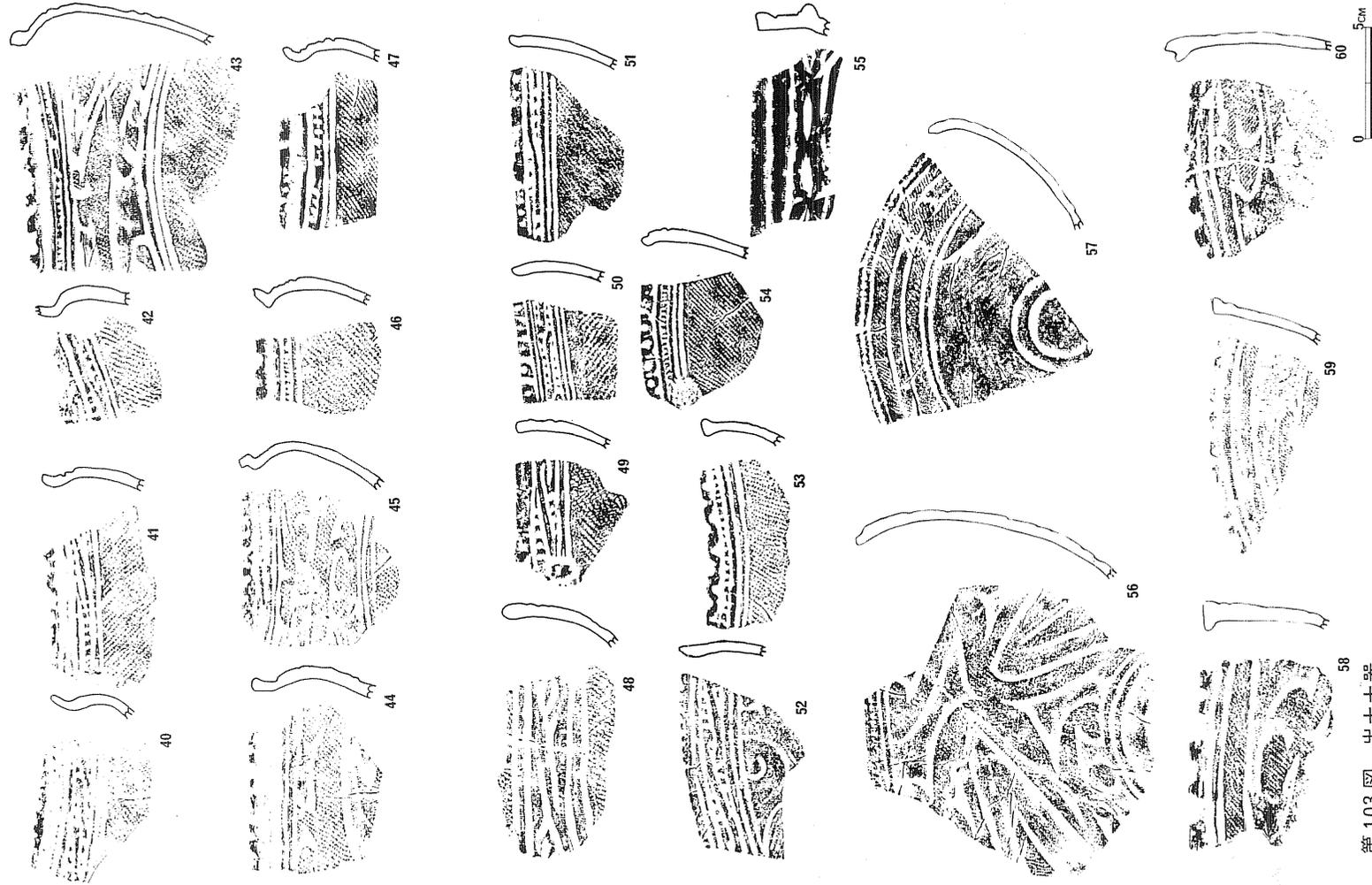
注口土器(12)

出土量は少い。装飾文様はいずれも雲形文を主体とする。頸部は外反気味にそり上り、袋状を呈す。体部中央の最大径部に刻目を有する粘土紐と2個1対の山形状突起が組合わされてめ



第102图 出土土器





第103图 出土土器

ぐり、底部は磨きを加えた無文の丸底を呈するものが多い。12は頸部に羊角状文、同位置で胴部には x 字状文をいずれも 4 個連続施文。

壺形土器（2, 12~19）

小型から比較的大型まで種類に富み、胴部形態は、球形状、扁平状、長胴及び肩部から胴部上半にかけ張りを持つものがある。

a 類（13~15） 胴部上半に装飾文様を施す。出土量はきわめて少ない。13は胴部が張り丸底を呈する広口壺。口唇部には B 状突起を伏し、胴部全面に x 字状文を施す。内外面は朱塗りされている。14は磨消縄文により、渦巻状を基調とする文様を施す。15は左傾する雲形文を 3 単位連続、口頸部は、直線的に立上る口縁部と共に磨きを加えられる。

b 類（16） 体部に地文として縄文を施し、口頸部は無文にする。出土量が多い。小型から比較的大型までであるが、胴部に張りを持つ器形には少い。16は胴部上半で張りを呈し肩部との境に 1 条の沈線を施す。

c 類（17~19） 装飾文様及び地文が一切なされないもので、全体に磨きを加え精緻なつくりのものが多い。器形は胴部が扁平もしくは球型を呈する小型壺に多い。17と18は器表面を平滑に磨いている。19は赤色顔料が上部まで収められている小壺。

皿形土器（1, 20~21, 56~60）

いずれも体部に雲形文を施すものが出土。器形は内湾気味に立ち上がり、丸底を呈すものと直線的に立上り平底を示すものがある。前者は全て平縁で、口縁に沿い数条の平行沈線と沈線間に列点を伴う。後者は口縁部に平行沈線、及び口唇部が肥厚し B 状もしくは山形状の突起を付す。出土量は丸底のものがやや多い。21は体部に 3 組の流麗な雲形文が連続する。口径 19cm・器高 8.9cm。20は平面形が楕円を呈す浅皿。器表面は摩耗が激しいが磨消縄文を用いて、不規則な雲形文風の文様を施している。

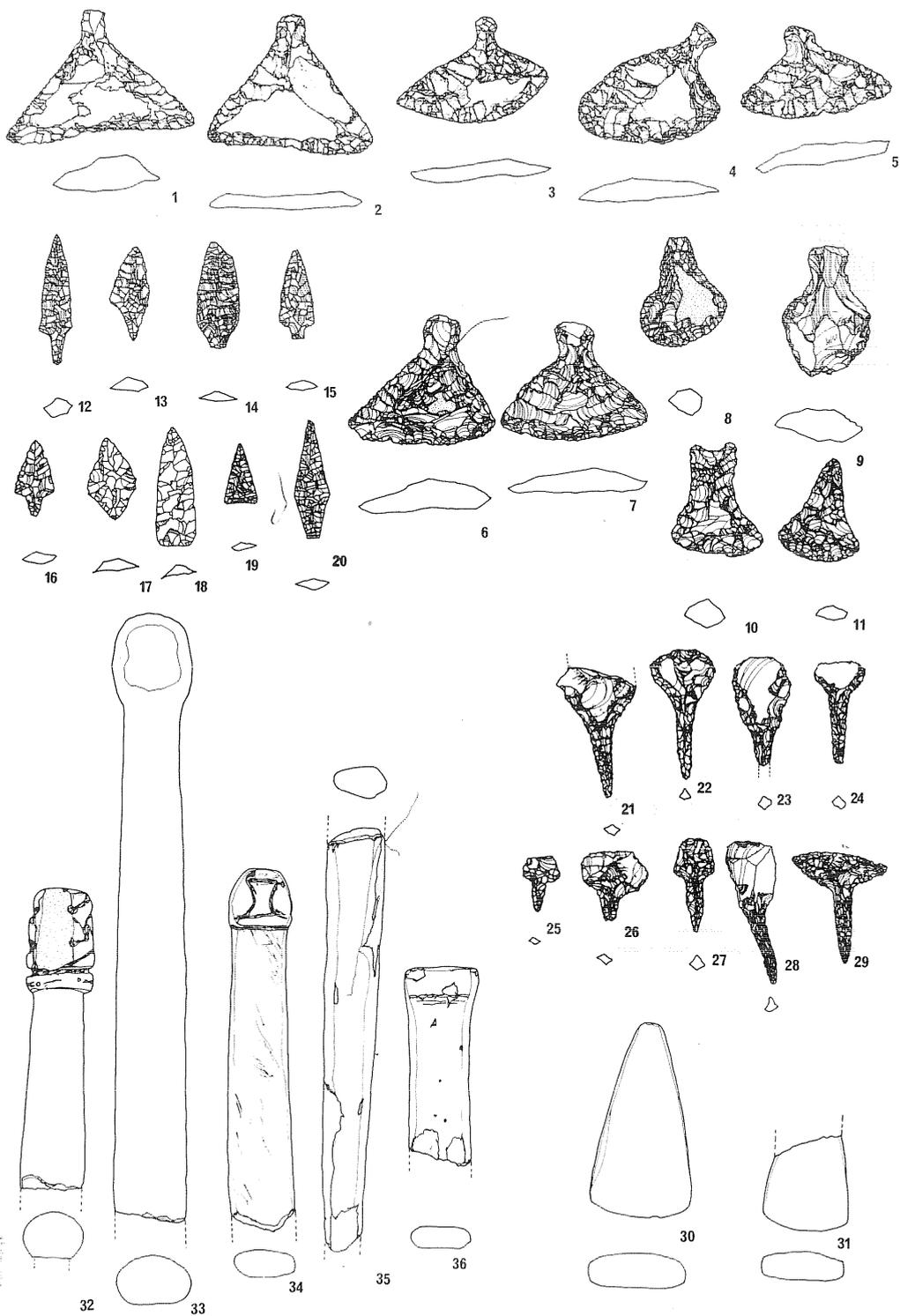
③ その他

22は台付の土器でコップ型を呈す。胴部と台部の境は肥厚し、工字文風の沈線を刻む。

石器・石製品

石匙（1~11） 刃部が横型と縦型がある。横型は、1つまみ以下の主体部が正三角形を呈し比較的大型。2、主体部が 2 辺の内 1 辺の長い三角形を呈し、刃部は直線もしくは内反りを呈す。3、基部が傾倒し上端部の延長を思わせるもので、出土量は 2 が最も多い。石質は石英 2 点を除き他は頁岩。縦型は出土量少く、刃部先端が丸味を帯び鈍角で主体部は、巾広の棒状を呈す。10は基部頂端中央に抉込みを有す。石質は石英 1 点を除き、他は頁岩。

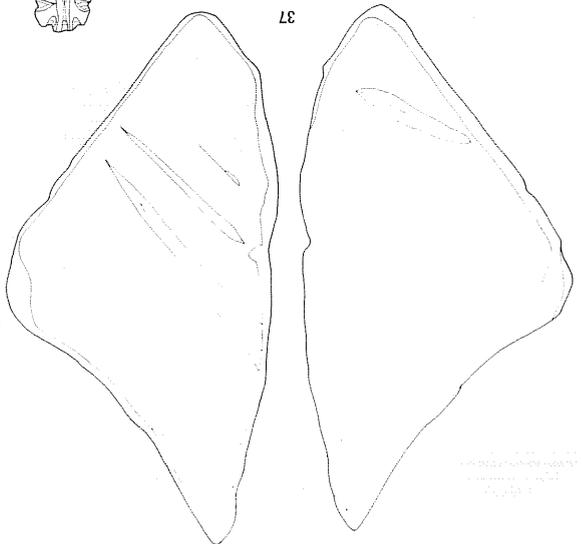
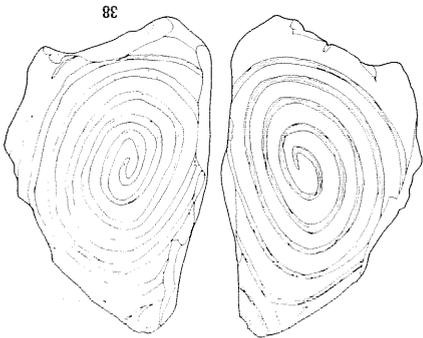
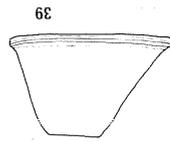
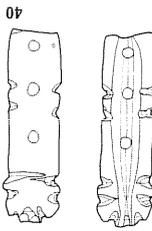
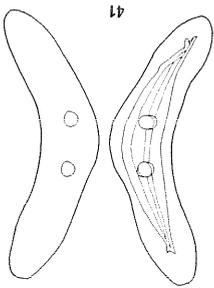
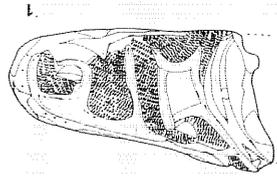
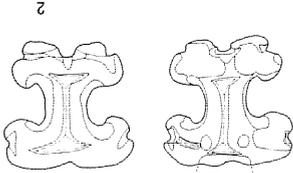
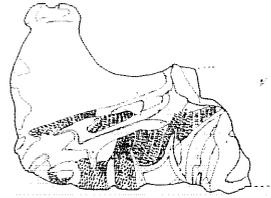
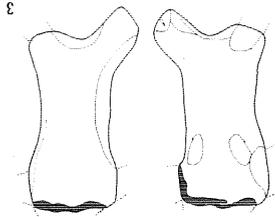
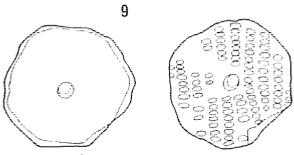
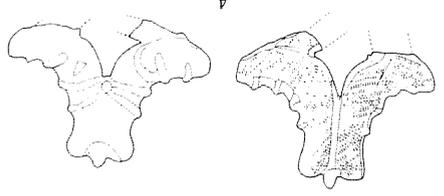
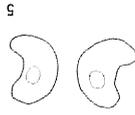
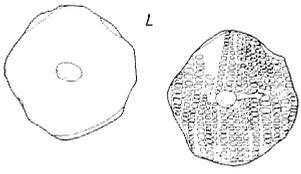
石鎌（12~20） 有柄と無柄があり、出土量は前者が多い。有柄は T 柄・Y 柄が大部分を占め 5 角形鎌も 1 点検出。石質は全て頁岩。



第104图 出土石器·石製品

0 5cm

第105图 出土石制品·土制品



石錐 (21~29) 出土量は少い。いずれもつまみ部が大きく明瞭なもので、石質は全て頁岩。
石斧 (30・31) 出土量は少い。刃部は円刃状で、基端に向い巾細になる。石質は凝灰岩。
岩板 (38) 表裏に、沈線によって渦巻状の文様が立体的に浮彫りされ、全面に朱彫りの痕跡がみられる。周辺は部分的に欠損。

石冠 (39) つまみの部分が台形を呈す。全体がきわめて平らに研磨。高さ4cm。底部最大幅5cm。石質は頁岩。

叉状石製品 (41) 全面を研磨。一面を扁平に、他面には幅広の溝を取り入れ、中央部に2個の穴を穿つ。孔は両面から穿っている。石質は凝灰岩

石棒 (32) 片側が $\frac{1}{2}$ 欠損しているが、断面はほぼ円型を呈す。先端部に入組状の装飾文様を浮彫りし、頭部に凹帯を巡らす。石質は凝灰岩。

石剣 (33・34) いずれも胴部を欠損。断面は楕円形を呈す。石質は全て凝灰岩。34は頭部に一条の沈刻をめぐらし、先端部の片面につづみ形の沈刻文様をなす。

石刀 (35・36) いずれも部分的に欠損。断面は上下もしくは1端に稜の通った楕円形を呈す。35は胴部の1端を刃状に研磨、弱い内反りを示す。石質は凝灰岩。

砥石 (37) 両面に擦痕を留める。石質は凝灰岩。

異型石製品 (40) 横笛状を呈し、全面に磨きを加え、一面に巾太の溝を削り込む。穿孔は両面から行い、朱塗りの痕跡を留める。

④ 土製品

土偶 (1・2・3) 3点出土。いずれも部分的に欠損。1は中空土偶の肩部で、磨消縄文により雲形文を簡略化した文様を施す。3は頭部と脚部の一部を残し欠損。頭部欠損部にアスファルトの付着をみる。2は簡略化されてつくられ、顔面を欠く。

勾玉 (5) 土製で中央部付近に穿孔をなし、器表面に磨きが加えられる。長さ28cm。

円盤状土製品 (6・7) いずれも土器片を利用したものと思われ、直径10cm。

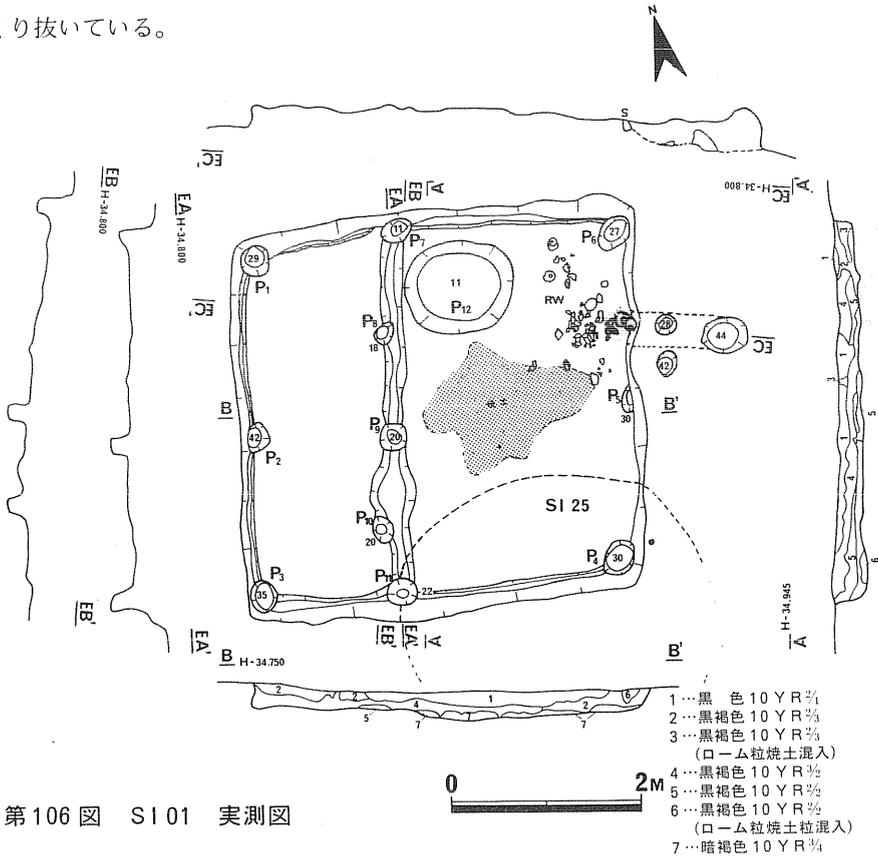
異型土製品 (4) 一端が脚状に開き部分的に欠損。一面は隆帯による装飾文様を施し、他面に縄文を施す。 (熊谷)

4 平安時代

① 堅穴住居跡

SI01堅穴住居跡 調査区西側で検出。SI25と重複。平面形は1辺約4mの正方形で東側を除き、巾、深さとも約10cmの周溝が壁沿いに巡る。柱穴はP₁~P₆。間仕切りはP₇~P₈の柱穴と溝である。これより西床面は1段(約6cm)高くなる。壁は20~30cm垂直に立ち上がる。床面面積は約16㎡。カマドは東壁やや北寄りに設置され、カマド本体は崩壊している。煙道はローム

層をくり抜いている。



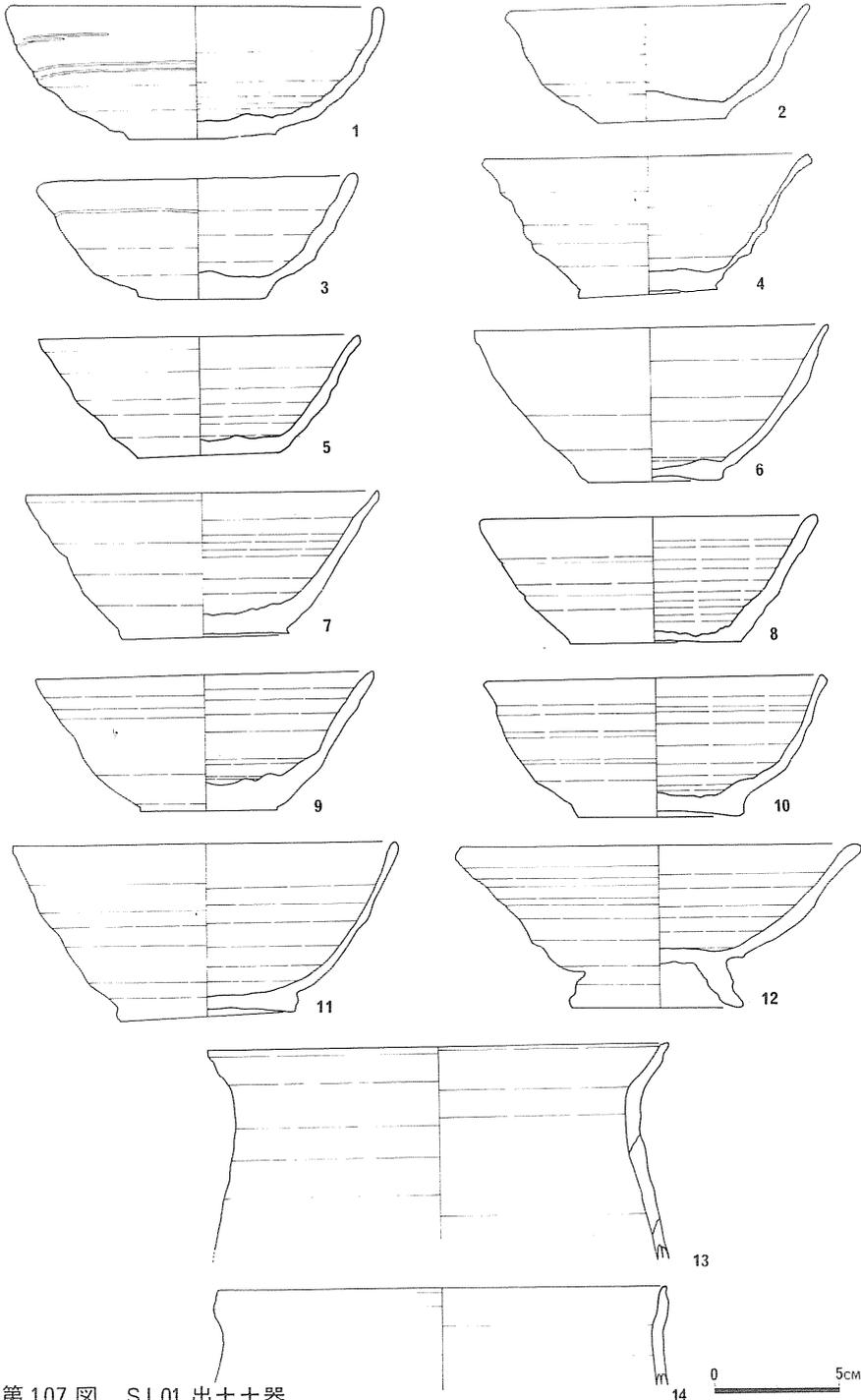
第106図 SI 01 実測図

出土遺物はカマド付近床面から土師器杯と甕破片である。1～12は土師器杯でロクロ成形水挽き。回転糸切り底。口径に比べ底径が小さい。1・2は器高低く胴下半部の立ち上がりが緩い。2は口縁部が外反。3・11は内湾しながら立ち上がる。4～10・12は内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。12は高台付杯。色調は3～5・12が赤褐色。6～11が黄褐色。1・2が黒褐色。いずれも焼成良好。13・14は土師器甕。13は胴部が緩く膨らみ、口縁部でくの字に外反して立ち上がる。14は口縁部で緩く外反し口唇部で内湾。色調はいずれも黄褐色。

SI02竈穴住居跡 調査区西側で検出。SI09・SKF01と重複。平面形は1辺約3mの正方形。柱穴不明。壁はほぼ垂直に20cm程立ち上がる。床面は平坦で堅い。床面面積約9㎡。カマドは北壁東寄りに設置。カマド部分には石と鉄滓を底部に溶融させたスサ入り粘土がコ字状に配置され、入口部には焼け跡のない礫がある。なおスサ入り粘土は鉄滓を溶融して付着させてあるところから他から持ち込まれたものと考えられる。

出土遺物は土師器杯、甕、須恵器甕破片、1・2・6が埋土、3・5・7がカマド、4が床面からの出土。また、カマド付近より羽口破片出土。1～5は土師器杯で口径に比べ底径が小さい。4・5は大型で胴部が緩く膨らみ、1～3は口縁部で外反。6は土師器の小型甕で口縁

部がくの字に外反する。底部は外方に張り出す。外面は棒状のもので縦、斜方向へ器壁調整。底部にはモミ痕が認められる。7は土師器甕。胴部が緩く膨らみ、口縁部でくの字に外反し内湾気味に立ち上がる。色調は1～7まで黄褐色であるが6の底部には赤褐色の焼跡がある。



第107図 SI 01 出土土器

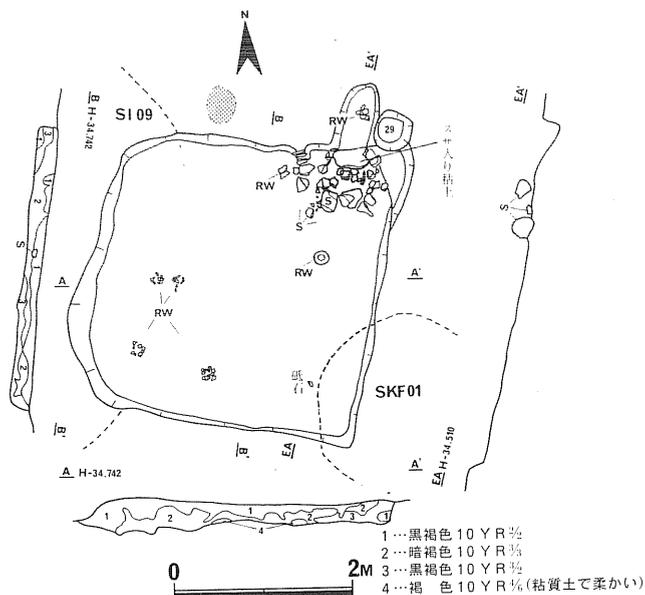
SI03堅穴住居跡 調査区西側で検出。SI10と重複。平面形は長軸3.5 m、短軸3 mの方形。柱穴不明。壁は垂直に30~40cm立ち上がる。床面は堅くしまっているが起伏が激しい。床面積約10㎡。カマドは東南コーナーに構築されているが崩壊している。

出土遺物は、埋土から土師器杯、甕破片が数片出土。

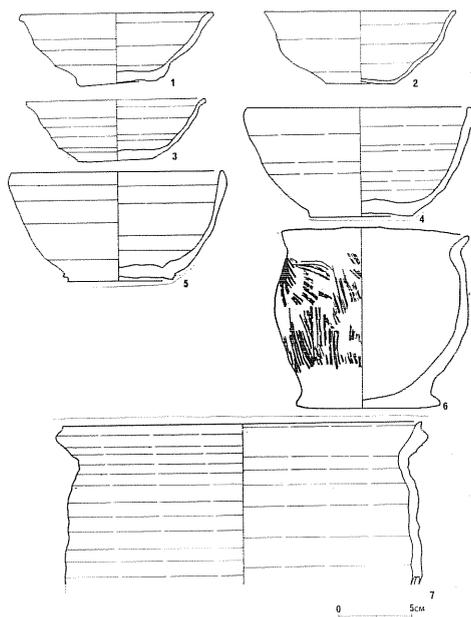
SI04堅穴住居跡 調査区中央で検出。SD12と重複。平面形は1辺2 mの正方形。柱穴なし、壁は垂直に20cm立ち上がり、巾、深さとも約10cmの周溝が壁沿いに巡る。床面は平坦で良好。床面積約4㎡。カマドは東壁南寄りに設置され、保存状態良好。カマドの袖部は礫を芯にした粘土で本体を構築している。

出土遺物は、カマド付近より回転糸切りの土師器杯と甕破片出土。色調は黄褐色。

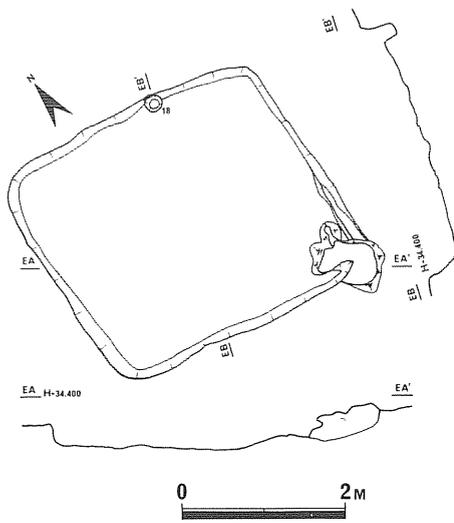
SI05堅穴住居跡 調査区西側で検出。SI14・SK02 07・SD01と重複。平面形は重複のため不明。柱穴不明。壁はなだらかに立ち上がる。カマドは東壁中央に設置されたものと考えられる。



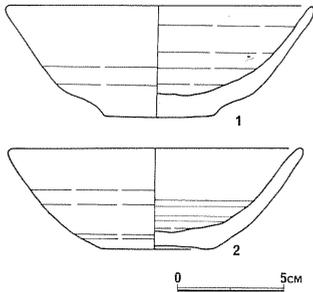
第108図 SI02 実測図



第109 SI02 出土遺物



第110図 SI03 実測図



第113図 SI05 出土土器

出土遺物は、床面と埋土から土師器杯破片数片出土。1・2とも胴部緩く膨らむ。回転糸切り底。色調は1が黄褐色、2が赤褐色。

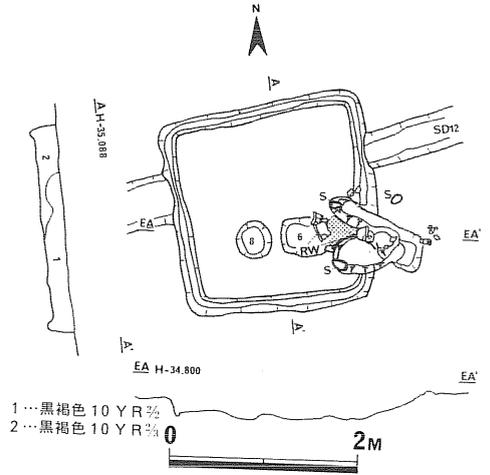
② 堅穴状遺構

SK1 01堅穴状遺構 調査区西側で検出。平面形は1辺2.4 mの正方形。柱穴はP₁～P₄。壁は緩やかに10cm立ち上がる。各壁に沿って周溝が巡る。床面はしまり、中央に焼土がある。床面面積約5 m²。

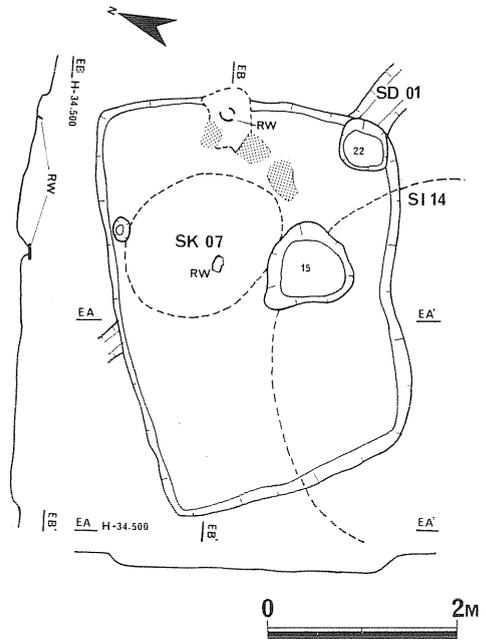
出土遺物は、埋土より土師器杯出土。胴部緩く立ち上がり、口縁部で外反。底部で張り出す。回転糸切り底。色調は黄褐色。

SK1 02堅穴状遺構 調査区中央で検出。SD14重複のためプラン不明。

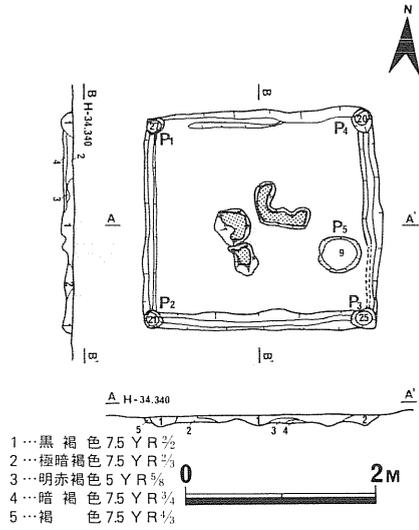
③ 土 壌



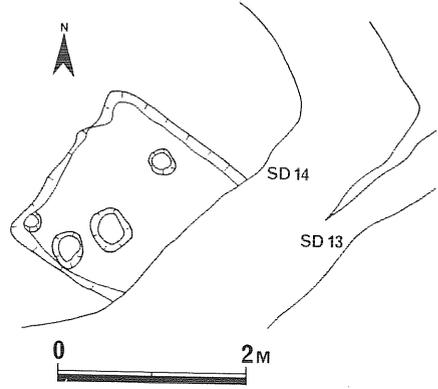
第111図 SI04 実測図



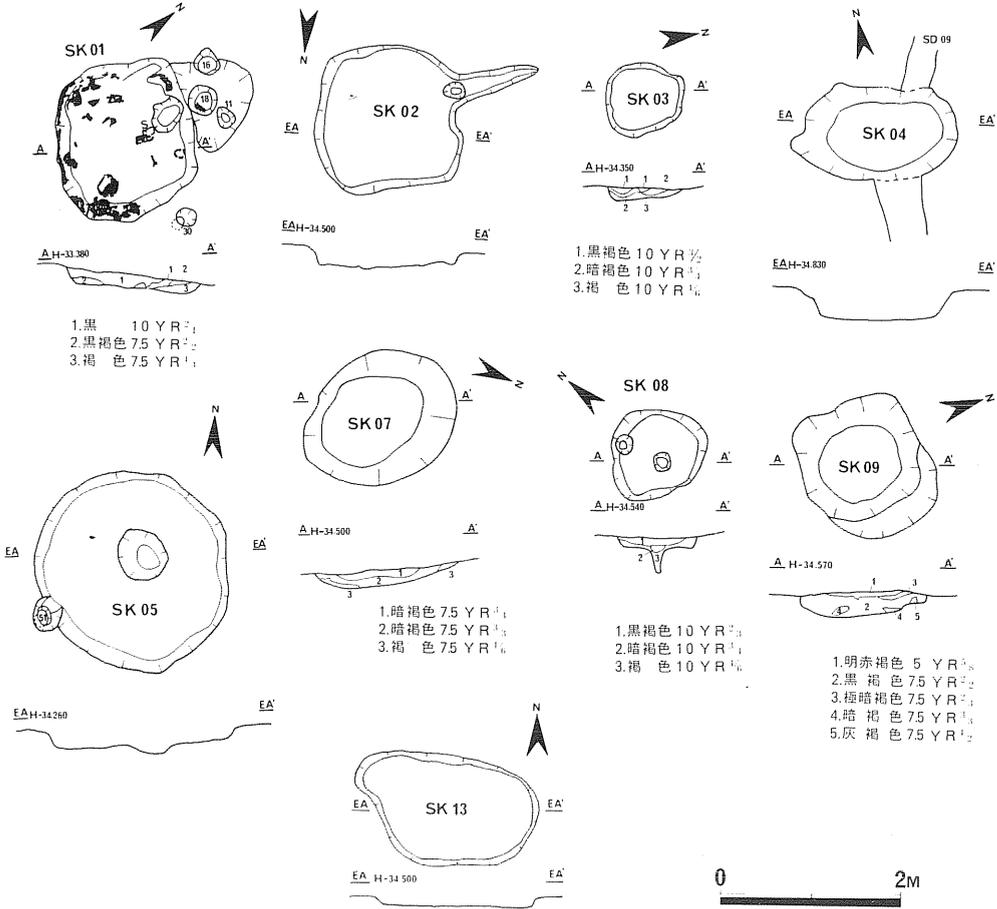
第112図 SI05 実測図



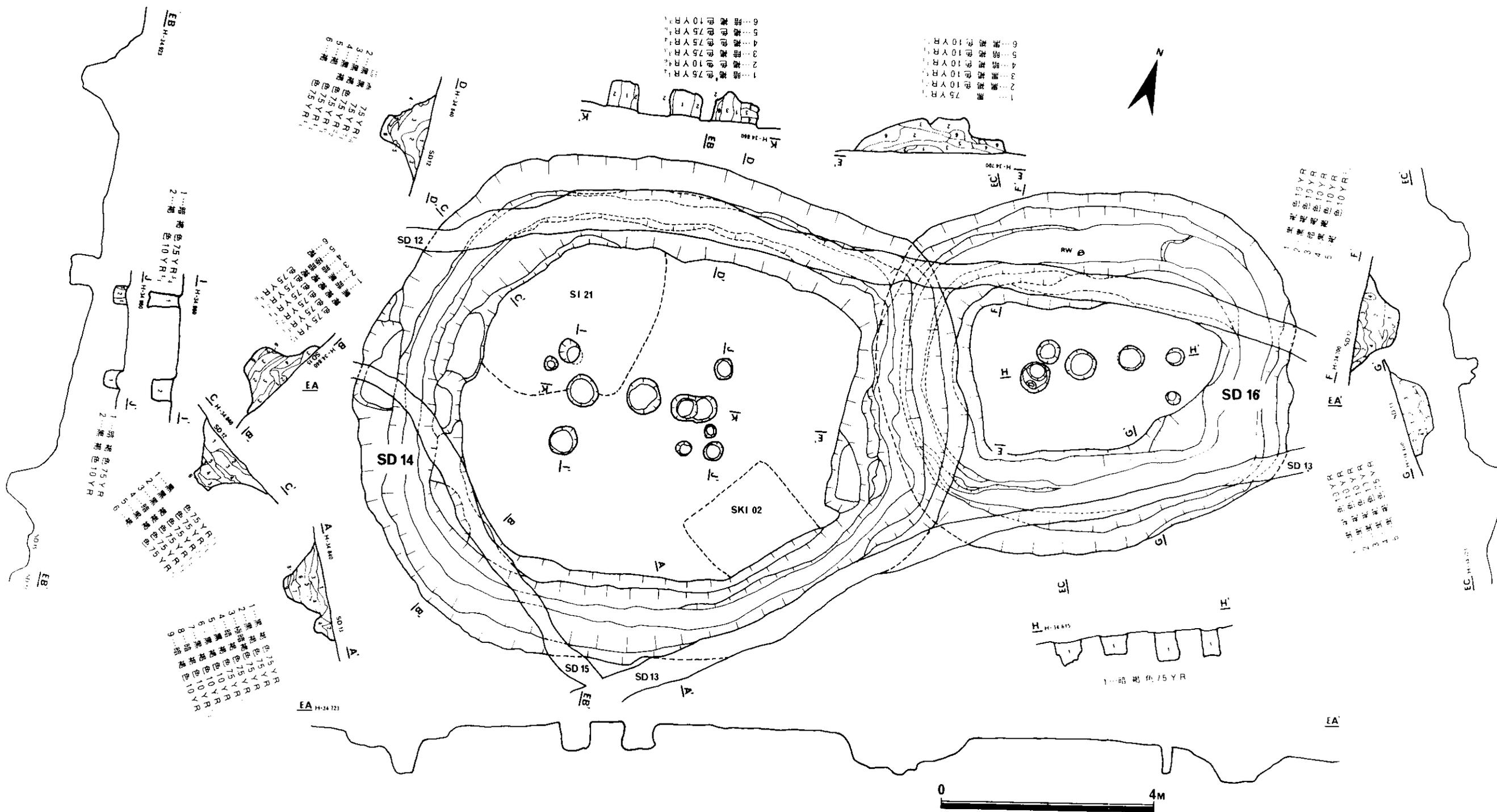
第114图 SK101 实测图



第115图 SK102 实测图



第116图 SK01~05 07~09、13 实测图



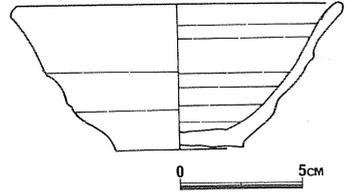
第 117 图 SD 14.16 实测图

SK01土壙 平面形は長軸 2 m, 短軸 1.6 m の不整形円形。深さ 15cm。土師器片出土。壁が焼け, 床面から多量の炭化物出土。

SK02土壙 平面形は長軸 1.9 m, 短軸 1.5 m の不整形円形。深さ 20cm。

SK03土壙 平面形は長軸 1 m, 短軸 0.8 m の不整形円形。深さ 15cm。

壁が焼けている。土師器片出土。



第 118 図 SK101 出土土器

SK04土壙 平面形は長軸 1.7 m, 短軸 1 m の楕円形。深さ 30cm。SD09と重複。

SK05土壙 平面形は 2.2 m の正円形。深さ 20cm。床面中央に浅い凹みがある。

SK07土壙 平面形は長軸 1.8 m, 短軸 1.5 m の楕円形。深さ 20cm。土師器片出土。

SK08土壙 平面形は長軸 1.2 m, 短軸 1 m の不整形円形。床面中央に深さ 30cm のビットがある。

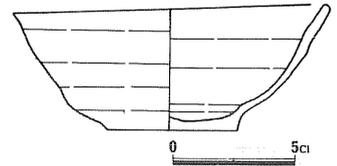
SK09土壙 平面形は長軸 1.8 m, 短軸 1.3 m の不整形円形。深さ 30cm。壁が焼けている。土師器片出土。

SK13土壙 平面形は長軸 2 m, 短軸 1.2 m の不整形円形。深さ 10cm。壁が焼けている。土師器片出土。

④ 溝状遺構

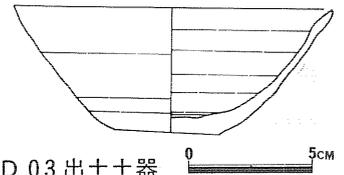
SD01溝 上面巾 30~50cm, 底面で 20~40cm。深さ 10cm。長さ約 5.5 m。SI05・SK07と重複。断面形は鍋底状。

SD02溝 上面巾 60~90cm, 底面で 40cm。深さ 20cm。長さ約 10m。断面形は鍋底状で北から南へ傾斜している。底面から土師器杯出土。胴部緩く膨らみ, 底部が張り出す。回転糸切り底, 色調は赤褐色。



第 119 図 SD02 出土土器

SD03溝 上面巾 50cm, 底面で 30~50cm。深さ 10cm。長さ 11 m。断面形は鍋底状。底面より土師器杯出土。胴部緩く膨らみ, 口縁部で外反。回転糸切り底。色調は外面が黄褐色。内面数カ所が黒くなり, 燈明皿に使用されたもの。第 120 図 SD03 出土土器



SD04溝 上面巾 30~40cm, 底面で 20cm。深さ 10~20cm。長さ約 33 m。断面形は鍋底状。東南から北西へ傾斜。SD11と切り合う。SD04が新しい。

SD05溝 上面巾 1 m, 底面で 0.7~1 m。深さは浅く底面より多量の炭化物出土, SI06, 07と重複のため断面形, 長さとも不明。

SD06溝 上面巾 20cm, 底面で 10cm, 深さ 20cm。SI07と重複のため長さ不明。断面形は鍋底状。

SD07溝 上面巾 50cm, 底面で 20~40cm。深さ約 5 cm。長さ不明。断面形は鍋底状。

SD08溝 上面巾 30~70cm, 底面で 20~60cm。深さ 10cm。長さ約 9.5 m。西南より北東へ傾斜し, 断面形は鍋底状。

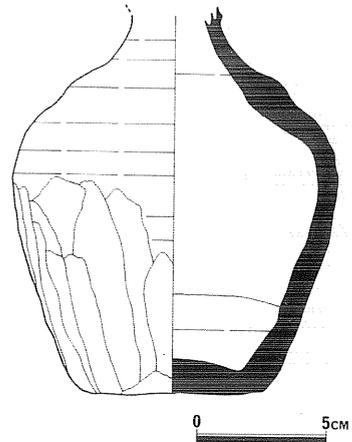
SD09 溝 上面巾30～50cm, 底面で20cm。深さ10cm。長さ約4m。断面形は鍋底状。SK04と重複。

SD10 溝 上面巾15cm, 底面で10cm。深さ10cm。長さ不明。断面形は鍋底状。

SD11 溝 上面巾50cm, 底面で20～40cm。深さ10～50cm。断面形はU字状。長さ約17cm。

SD12 溝 上面巾30～50cm, 底面で10～40cm, 深さ10～25cm。長さ不明。13と切り合い, 新旧関係は不明。断面形は鍋底状。

SD13 溝 上面巾40～50cm, 底面で20cm。深さ20～30cm。調査区を南から東に走り, 長さ不明。12・15と切り合い, 新旧関係は不明, 断面形は鍋底状。



第121図 遺構外出土遺物

SD14 溝 調査区中央東寄り台地上縁で検出。上面巾約1.5m, 底面で約45cm。深さ約80cm。長軸約11m, 短軸約9mの楕円形環状溝。断面形は逆台形。SD16と切り合うがSD14が新しい。

SD15 溝 上面巾40cm, 底面で20cm。深さ約20cm。長さ不明。断面形は鍋底状。

SD16 溝 調査区中央東寄り台地上縁で検出。上面巾1.8～2.5m、底面で50～90cm。長軸約8m, 短軸約7mの楕円形環状溝。断面形は逆台形。溝底面部より土師器甕底部出土。

SD17 溝 上面巾20～40cm, 底面で10～30cm。深さは5～10cm。長さ不明。断面形は鍋底状。

⑤ 遺構外の遺物

(大高)

中世陶器 口頸部が破損し, 口縁の造・反の形状は不明であるが, 口頸を細くしぼった均整のとれた小壺である。頸部は, 他の陶器にみられない形状である。最大径は肩部にあり12.5cm, 底径7cm。平底である。胎土は, 砂質分の少ない良質の陶土を使用し, 高い温度で焼きしめ, 肩から胴部にかけて白ごまふりの自然降灰が認められる。成形は紐土巻上げであり, ロクロも使用され, 胴部下半は篋削りにより調整される。薄手で, 越前焼き等に比べて非常に軽い。

(武田)

V ま と め

1 縄文時代前期

① 竪穴住居跡

検出された44棟の住居跡を, その規模で大別すると,

大型……SI06・07・18・44（4棟）

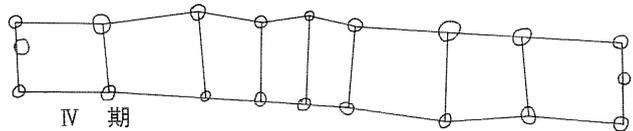
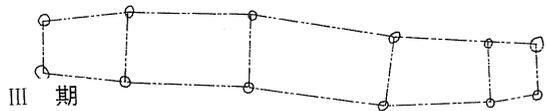
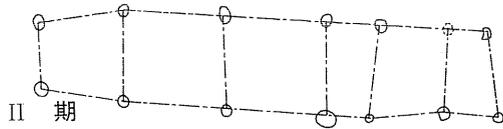
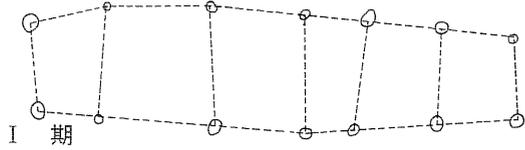
中型……SI09・26・32・41・45（5棟）

小型……SI08・10～17・19～25・27～31・33～40・42・43・46～49（35棟）

大型住居跡の特色は、

- (1) 台地縁のもっとも標高の高い場所に位置する。
- (2) 平面プランは小判形を呈する。床面積の平均 152.5 m² 長軸15m以上。
- (3) 床面は2段構造を呈する。
- (4) 柱穴はベンチ状床面と土間状床面の段境に、長軸線に對称的に配置される。長軸線上にも柱穴が認められる。段境に配置される支柱穴の柱間は、両端部と中央部が短くなる傾向が認められる。
- (5) 炉は地床炉で長軸線上に数カ所あり、熱作用による赤色変化が激しい。使用度が高かったものと考えられる。

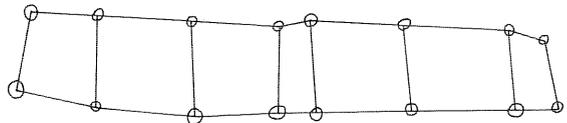
(S I 06)



- (6) 特殊ピットを持つ。
- 中型住居跡の特色は、

- (1) 台地縁および斜面に位置する。
- (2) 平面プランは楕円形を呈する。床面積は平均 40.5 m²。長軸 8～13m。
- (3) 床面は2段構造を呈し、ベンチ状床面を持つ。
- (4) 柱穴はベンチ状床面と土間状床面の段境に、長軸線に對称的に配置される。
- (5) 炉は地床炉であり、長軸線上に2カ所程存在する。赤色変化が激しく、使用度が高かったと考えられる。SI09は埋甕炉である。
- (6) 特殊ピットを持つ。

(S I 44)



第122図 大型住居跡の支柱穴配置



(7) 床面に台石のある住居跡がある。

小型住居跡の特色は

(1) 台地縁および斜面に位置する。

(2) 平面プランは円形を呈するものが多く楕円形のものもある。面積の平均は9.5㎡。径2.5～5m。

(3) 中央に炉と考えられる凹みがあるが、焼土は判然としない。

(4) 柱穴は0～数本と規格性に乏しい。

(5) 特殊ピットを持つ。

(6) 床面に台石のある住居跡がある。

以上のように、大型と中型の住居跡はプラン・柱穴配置・2段構造の床面・炉の使用度の高さなどに類似点が多い。中型と小型の住居跡の類似点は、床面に台石があることである。大型・中型・小型に共通することは、特残ピットを持つことである。

② フラスコ状ピット

フラスコ状ピットについて注目されることは、大部分が北斜面に構築され、群集することである。意識的に斜面を選び、群集させる意図はなにか、フラスコ状ピットの性格と社会構造に係る問題を内包しているものと考えられる。

検出されたフラスコ状ピットは、口縁部と底面が円形で、断面がフラスコ状を呈するもの（第1類）と、口縁部と底面が楕円形を呈し、断面形がピーカー状に近いもの（第2類）とに大別できる。第2類の方が大型である。第1類と第2類は、時間的変遷によるものでなく、共存するようである。

床面に溝とピットを有するフラスコ状ピットがある。これは第1類にも第2類にも認められる。溝は壁に沿って掘られたり、中央に掘られたりする。ピットは中央や壁ぎわにある。溝やピットの機能については不明であるが、雨の日観察したら、底面に降ったり、周囲から流れ込んだ雨水は、溝を流れピットに溜った。このことから、床面からの排水機能を持つのでないかと想定されるが、溝、ピットを持たないフラスコ状ピットもあり、断言できない。

フラスコ状ピットの埋土を除去すると、どんどん崩壊する。崩壊の原因は、高温による地割れと雨水による浸蝕である。口縁部の地割れ部に雨水が流込み、口頸部が崩壊する。雨の日には崩壊現象が多いわけである。開口部が広がったフラスコ状ピットは、フラスコ状を呈さず、ピーカー状に近くなる。ピーカー状になった壁面は、再び雨水による浸蝕を受け凹む。杉沢台のフラスコ状ピットは、ローム層→砂層→（礫層）へと掘り込む。浸蝕を受けやすい砂層が崩落し、凹むのである。砂層が凹むと直上のロームが崩落する。以上のようなフラスコ状ピット自体による崩落と外部から流れ込む土砂によって、フラスコ状ピットは埋没するものと考えられる。

フラスコ状ピットの埋土中で、貝層の検出された例が6基あった。貝層が、埋土の上位から検出された例はSKF 20・83、中位検出例はSKF 44・99、下位検出例はSKF 08・98である。また、貝層がフラスコ状ピットの南側に集中したり（SKF 83）、北側に集中したり（SKF 08）する。このことは、投込む人の位置に関係しているのであろう。貝層中には、魚骨を多数含む。以上のことから考えると、6基のフラスコ状ピットは捨て場としての再利用（第2義的使用）が考えられる。貝層検出の6基は大型住居の近くに位置する。

③ 土 壙

前期住居跡と同様、ローム上面で確認されたため、前期の遺構として取り上げたが、遺物の出土もなく、性格も不明である。

④ 土 器

土器型式の分類

縄文時代前期の土器は、量的には多くなく、遺構内埋土からの出土である。そこで遺構内出土の土器を中心に整理してみたい。「円筒土器下層諸式及び同上層諸型式を通じて、文様帯は口頸部の狭い带状部に位置して居り、……私はこの文様帯はこれらの諸型式を通じて一系統のものであって、手法及び内容の変遷を経たものとする」（山内 1929）のごとく、本遺構の分類も、口頸部文様の相違で分類したものである。

第1類土器（図版37）口頸部に綾絡文を施文した土器。出土量は少なく、全体の様子をうかがえるものはない。

SKF 47出土（図版37の2）は、平縁で口頸部が外反し、胴部がいくらか膨らむ。口頸部には綾絡文が带状をなし、胴部には捺戻しと綾絡文帯が認められ、文様構成は四区分される。内面は縦方向のミガキが施される。胎土には繊維混入。

第2a類土器（図版37・38）口頸部に1～2条の隆帯を貼付し、3～5条の刺突文を施文する類。出土量は少なく、完形品もない。型態は平縁で、口頸部がわずかに外反する。口頸部には綾絡文・網目状捺糸文・単節斜縄文・複節斜縄文のほか、羽状縄文も施文される。

SKF 47出土の土器は、胴部上半まで羽状縄文が施文されている。

隆帯は口唇部から5～10cmのところ、1～2条貼付され、隆帯の巾は5～10mm。

刺突文は、隆帯が1条の場合は隆帯の上方と下方と隆帯上に合計3条施文され、隆帯が3条の場合は5条施文される。刺突文には、長方形・瓜形・指頭状圧痕文などの種類がある。隆帯の上方と下方に沈線を施文した土器もある。

胎土には繊維を混入。内面のミガキも認められるが顕著でない。

第2b類土器（図版39の1）隆帯がなくなり、刺突文のみが2～3条口頸部に施文される類。この類も出土量が少なく、完形品もない。

形態は、平縁で、口縁部がわずかに外反する。

口頸部に施文される縄文原体は、単節斜縄文と羽状縄文であり、後者が多い。胴部には単軸絡条体（撚糸文）が施文される。

口頸部の刺突文帯は地文を2～3条磨消し、その上に刺突を加える。指あるいは指状工具で地文を磨消すとき、押された粘土は中央で凸状を呈する。これは、第2a類の貼付した隆帯とは区別される。刺突文には、瓜形・長方形・楕円形があり、縦位・横位・斜位に施文される。横位の刺突文は縦位と縦位の間、凸部に施文される場合が多い。刺突文帯は口唇部から6～8cm。内面のミガキは顕著である。

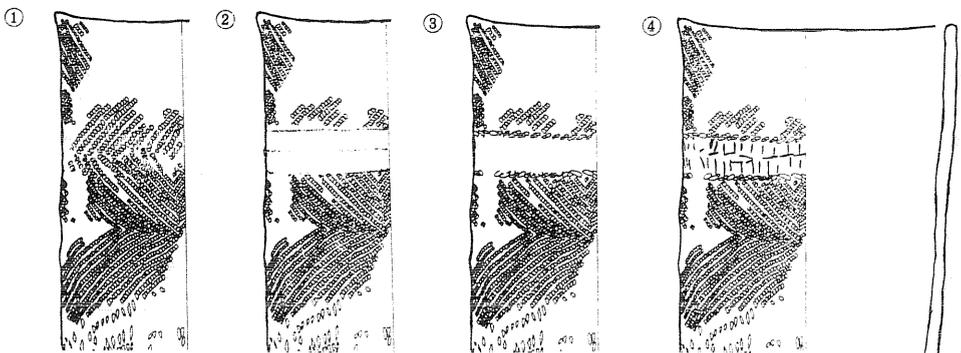
第2c類土器（図版39の2・3）口頸部に刺突文帯を有し、刺突文帯の上方と下方に側面圧痕文が2条施文される。側面圧痕文は口頸部に縦位に施文される場合もある。形態は、おおむね円筒形を呈するが、口頸部がわずかに外反し、胴部下半がややしぼむ。出土量が多い。SKF95・98出土の土器は、ほぼ復元し得たものである。

縄文原体は、胴部上半に羽状縄文・胴部下半に撚糸文・撚戻しが施文される。

刺突文は、口唇部から7～11cmの口頸部に2～3条施文される。刺突文は長方形・瓜形があり、縦位・横位に施文する。縦位十横位・横位だけ・縦位だけとバラエティーに富む。

刺突文の上方と下方には側面圧痕文が2条施文される。刺突文と刺突文の間に施文される場合もある。また、側面圧痕文のかわりに沈線を引いたものもある。側面圧痕文は横位に施文されるほか、縦位にも施文される。SKF95出土の土器では、2条の側面圧痕文を1単位として、6単位縦位に施文している。

口頸部文様帯の施文順序は、①地文としての羽状縄文を施文する。②工具で2～3条地文を磨消す。工具は、巾7～10mm・厚さ1mmの板状工具を使用するものと、竹様の工具を使用するものがある。板状工具を使用した場合は、磨消し部分は平らであり、竹様工具の場合は、丸



第123図 第2C類土器施文順序

味を持った溝状を呈する。いずれの場合も、磨消す作業で粘土が寄せ集められ、凸部を形成する。

③磨消した部分の上方と下方に側面圧痕文を施文する。④磨消した部分に、刺突文を施文する。刺突の工具は、②の磨消し作業で使用した工具を使用する。凸部には横位の刺突文を施文するが、瓜形の横位の刺突文はない。これは第2b類土器の場合にも共通する。

繊維混入。内面のミガキも認められる。

第3類土器（図版40・41）口頸部に1～7条の側面圧痕文を施文する類。形態は平縁のものが多く、波状口縁を呈するものもある。全体の器形は、第2C類土器と同じであり、口頸部がわずかに外反し、底部がしぼむ。器高は20cmの小型のものもあり、50cmを越える大型のものもあるが、約40cm程のものが多く。出土量も多い。

縄文原体は口頸部から胴部上半にかけて、羽状縄文を施文するものが多い。胴部下半には撚糸文・撚戻し・多軸絡条体が施文される。単節斜縄文・複節斜縄文を施文するものもある。

側面圧痕文は、口頸部に1～7条施文されるが、3条のものがもっとも多い。側面圧痕文の施文される位置は、口唇部から9cmのところのところに施文される土器もあるが、4～5cmのところのところに施文される。第2C類より口頸部文様が狭くなる傾向が認められる。口頸部に縦位の側面圧痕文をもつもの、口唇部直下に、口縁に平行に側面圧痕文を持つものもみられる。

胎土には繊維混入。内面のミガキ顕著。

第4類土器（図版42の1～3）口頸部に側面圧痕文と刺突文の施文される類。器形はバケツ形を呈するもの（図版42の2）、口頸部が外反し、底部がすぼむもの（図版42の3）、口頸部が外反し、肩部が張るもの（SI18出土）がある。口縁は平縁のものが大部分である。

口頸部文様帯は、全体的に狭いが、器形と相関関係にある。バケツ形を呈する土器の文様帯は、口唇部から1～2cmの範囲におさまり、口頸部が外反する器形では約3cm、口頸部が大きく外反し、肩部が張る器形では約6cmである。口頸部に微高の隆帯（貼付け）を持つものと持たないものがある。バケツ形を呈するものは隆帯を持ち、他の器形の土器は持たない。

側面圧痕文は口縁に平行、ときには斜位・縦位に施文される。図版42の3は、1条の縦位の側面圧痕文を6条施文し、口頸部を6区分している。

刺突文には楕円形・瓜形があり、1～数条横位に施文する。口頸部が外反し、肩の張る器形の土器では、縦位の刺突文も施文される。

胴部の縄文原体には、撚糸文、羽状縄文、木目状撚糸文があり、綾絡文が数条横位に施文されるものもある。

内面のミガキは顕著。胎土には繊維混入。

第5類土器（図版43の1）口頸部にボタン状の貼付文を持つ類。この類に属する遺物は、遺構内・外とわず、SI44出土の2点のみである。

口縁部には低い突起がみられ、頂部凹む。

突起の下には、ボタン状の粘土塊が貼付けされ、表面には単節縄文が施文される。

口頸部文様帯には、側面圧痕文に類似する刺突文が数条横位に施文される。

胎土には繊維を混入。内面のミガキ顕著。

第6類土器（図版43の2）口頸部に山形状の沈線文と刺突文の施文される類。SI18で同一個体と考えられる破片2点出土したのみである。

口縁は波状か突起を持つものと推定される。

口頸部には連続山形状の沈線文を数段施文し、その下に3段の刺突文が認められる。

胎土は良好で繊維は混入しない。

内面は横方向のミガキが認められ、きわめて平滑である。

第7類土器（図版43の3）条痕文の施文されている類。

形態は平縁で、口頸部がわずかに外反する。この類はSKF44で出土したのみである。

体部全体に、巾約3cmのクシ状工具で、直線および曲線上に条痕文を施文している。

胎土には繊維を混入。

内面にはミガキが認められるが、さして平滑ではない。

土器型式の変遷

ここで問題にするのは、第1類～第5類土器についてであり、

第1類→第2a類→第2b類→第2c類→第3類→第4類→第5類

のごとく変遷したものと考えられる。

遺構の重複関係から、土器の新旧関係をみてみると、次のような事例がある。上が新しく下が古い。

SKF 07	第3・4類	SI 18	第3・4類	SI 18	第3・4類	SI 18	第3・4類
SI 08	第2a類	SKF 90	第2a類	SKF103	第2b・2c類	SKF 92	第2c類

以上の四例から、第3・4類は第2a・2b・2c類より新しいことが理解できる。

第3表は、第1類から第5類までの土器が、どのような組合せで出土するかを、一覧にしたものである。これをみると、

第1類……………SI24・SKF 59

第1類+第2a類…SI08・SKF 60・69

第2a類……………SKF 32・61・63・64・67・84・90

第2a類+第2b類…SKF 55・104

第2b類……………SKF 51・54・66・72・96

第2b類+第2c類…SI42・SKF103

第2c類……………SKF92

第2c類+第3類…SKF 08・50・98

第3類……………SKF 06・29・34・

35・44・49・81・90・105

第3類+第4類…S107・13・18・33

第4類……………S106・09・41・

SKF 86・91・94・97

のごとくであり、順序組合せが変化していく。このことは、杉沢台における土器型式の変遷として、理解できるものと考えられる。

第1類土器は口頸部と胴部中央に綾絡文帯を持ち、青森県態沢・石神遺跡に類例がみられる。態沢遺跡では円筒土器下層A式の新しい時期に（鈴木 1978）、石神遺跡の土器は口頸部に隆帯+刺突文も施文されるが、B式（村越 1974）やB式（江坂 1970）として位置づけておられる。

第2a・2b・2c類土器は、青森県・岩手県であり類例がなく、今のところ秋田県北部の米代川流域に出土例がみられる。田代町赤川（板橋 1979）、田代町茂屋下岱（奥山 1971）、能代市根洗場（大高 1980）遺跡がそれである。第2a類土器の口頸部には、綾絡文・網目状撚糸文のほか、羽状縄文がわずかにみられるが、2b・2c類になると口頸部には羽状縄文、胴部には単軸絡条体が施文される。羽状縄文の多用がめだつ。羽状縄文は円筒土器下層B1式（江坂 1970）、あるいはB式後半（村越 1974）に出現したといわれる。

	1 類	2 a類	2 b類	2 c類	3 類	4 類	5 類	備 考
S1 44		○				●○	○	
41						○		
09						●○		
06						●○		
07		●				○●○		
16						●		
13						●●		
33						●●		
18						●○●		
37						●		
45						●●●		
32	●	●				●●		
42						●●		
38	●	●	●	●				
08	●	●						
24	●							
SKF 86						●●		
91						●●		
94						●●		
97						●●		
06						●●		
29						●●		
34						●●		
35						●●		
44						●●		
49						●●		
81						●●		
93						●●		
105						●●		
08						●●		貝層検出
50						●●		
98						●●		貝層検出
95						●●		
43						●●		
15						●●		
99		●				●●		貝層検出
20		●				●●		貝層検出
47	●	●				●●		
92						●●		
103						●●		
51						●●		
54						●●		
66						●●		
72						●●		
96						●●		
55		●	●			●●		
104		●	●			●●		
32		●				●●		
61		●				●●		
63		●				●●		
64		●				●●		
67		●				●●		
84		●				●●		
90		●				●●		
60	●	●				●●		
69	●	●				●●		
59	●					●●		

○…床直上、柱穴・ピット内出土、●…埋土内出土

第3表 遺構別の土器型式の組み合わせ

このことから、第2a～2c類は円筒土器下層B式期に比定されるものと考えられる。

第3類土器は、口頸部に羽状縄文・胴部に単軸絡条体と多軸絡条体が多用される。多軸絡条体の多用は、円筒土器下層C・D式であるといわれる（山内 1979・三宅 1974）。

第4類土器は、口頸部文様帯の狭い土器が主体であり、木目状撚糸文の使用がめだつ。この類は円筒土器下層D式として理解されている（山内 1929・1979）。

第5類土器は、頂部の凹む小突起を持ち、口頸部に粘土塊を貼付し、石神遺跡出土の円筒土器下層D₂式・同上層A₁式とされた土器に類似する（江坂 1970）。

以上のように、第1類→第5類の土器変遷は、先学のこれまでの研究成果と矛盾しない。

⑤ 石器

石鏃（図版44の3）14点出土。凹基式無茎石鍛が3点あり、長さ2.6～4.1cm、重さ1～2.5g。凸茎式有茎石鍛は5点あり、長さ3.1～4.2cm、重さ1.5～3.7g。円基式無茎石鍛は5点、長さ2.9～3.9cm、重さ0.9～2.4g。尖基式無茎石鍛は1点、長さ3.5cm、重さ1.4g。石材は14点のうち、1点が玉髓、他は頁岩。

石匙（図版44の4）41点出土。縦形が29点あり、長さ3.8～12cm、巾1.7～3.5cm、重さ4～45g。横形は13点あり、重さ10～32g。石材は玉髓5点。頁岩36点。

石槍（図版44の2）2点出土するが、いずれも欠損している。石材は頁岩。

石篋（図版45の2）20点出土。長さ6～9cm、巾2.8～4.8cm、厚さ0.6～2.0cm、重さ30～56cmg。石材は頁岩。

石錐（図版44の1）4点出土。つまみ部と錐部からなるもの2点。錐部のみのもの2点。石材は頁岩。

不定形石器（図版45の1）13点出土。縦長の剥片使用のもの11点、横長の剥片使用のもの2点。石材は頁岩。

石斧（図版45の3）7点出土。斧の中軸線で左右相称の両刃を呈するもの5点で、長さ9.4～14cm、刃部巾5cm、基部巾3.3～4.3cm、重さ292～369g。石材は凝灰岩・玄武岩。刃部の1端に刃こぼれあり。斧の中軸線で非対称の弱凸強凸片刃を呈するもの2点。長さ9～12cm、巾約3cm、重量57～132g。石材は粘板岩。

凹石（図版46の6）2点出土。両面の中央に1～2ヶ所の凹みを有する。重量約340g。石材は凝灰岩。

石錘（図版46の4・5）154点出土。長軸6～14cm、短軸5～12cm、重量40～1,000gの河原石を使用。200～250gが多い。切目部2ヶ所のもの147点（うち、長軸にあるもの121点、短軸にあるもの26点）、切目部3ヶ所のもの3個、切目部4ヶ所のもの4点。

扁平打製石器（図版46の1～3）18点出土。長軸9.3～20.7cm、短軸5.2～9.2cm、

厚さ 0.6～3.7 cm、重さ 53～728 g の範囲に入る。石質は凝灰岩と安山岩。

石器製作者が、当初意図した石器の形態は、①平面形が楕円形で、断面が扁平であること、②使用したい縁辺が、弧状でV字状であること、鋭さは要求していない。

製作者は、まず、石材選びをする。石器製作上手間の省ける石材は、扁平で弧状を呈する礫である。これだと、使用したい縁辺をV字状に調整するだけですむ。礫が肉厚である場合は、縦に半折したり、部分的に加工して、扁平で、縁辺が弧状を呈するように調整する。また、板状に剥離した岩石を使用する場合もある。このような石材を使用するときは、縁辺を弧状に調整する作業と断面をV字状に調整する作業を同時に行う。

この石器の使用される部分は、弧状を呈する縁辺部である。弧状を呈していた縁辺部は、磨減って直線状を呈する。磨減って平坦的になった部分の巾は0.1～1.2 cmである。もともとこの石器は、縁辺が弧状を呈し、V字状に調整加工していることから考えると、使用面が直線上を呈したり、巾が広くなると、本来の機能は低下したものと考えられる。機能が低下すると、同一の石器なら他の縁辺を使用するか、または、他の石器を使用したものと考えられる。

平面形が楕円形に近った当石器は、結果的には、1側辺だけを使用すると半円状になり、両側辺を使用すると長方形になる。

この石器の機能は、磨切る・磨減らす・磨潰すことにあったと考えられる。

なお、長軸の1端または両端の抉込みは、当石器が本来持つ形態ではないと考えられる。なぜなら、抉込み部を持たない石器があるからである。縁辺部と抉込み部は別々の機能を果たしたのと考えられる。

⑥ 前期集落

集落の変遷 縄文時代の遺構は、台地の北縁に位置する。大型住居跡は、もっとも標高の高い場所が選定される。中型・小型の住居跡は、台地の縁と斜面に、フラスコ状ピットは斜面に分布する。東側斜面には遺構が密集し、重複が激しい。

第124図は、第3表を遺構分布図に表現し、集落の動きをみようとしたものである。遺構の時期決定は、床面埋設土器や床面直上・柱穴等出土土器で決定されるべきと考えられるが、第124図は、埋土出土の土器も使用している。従って、時期決定が厳密でない遺構がある。埋土から数形式の土器が出土した場合は、新しい形式の土器で表示した。また、第1類土器は、第2a類土器と相伴する場合が多いので、第1・2a類期として表示した。

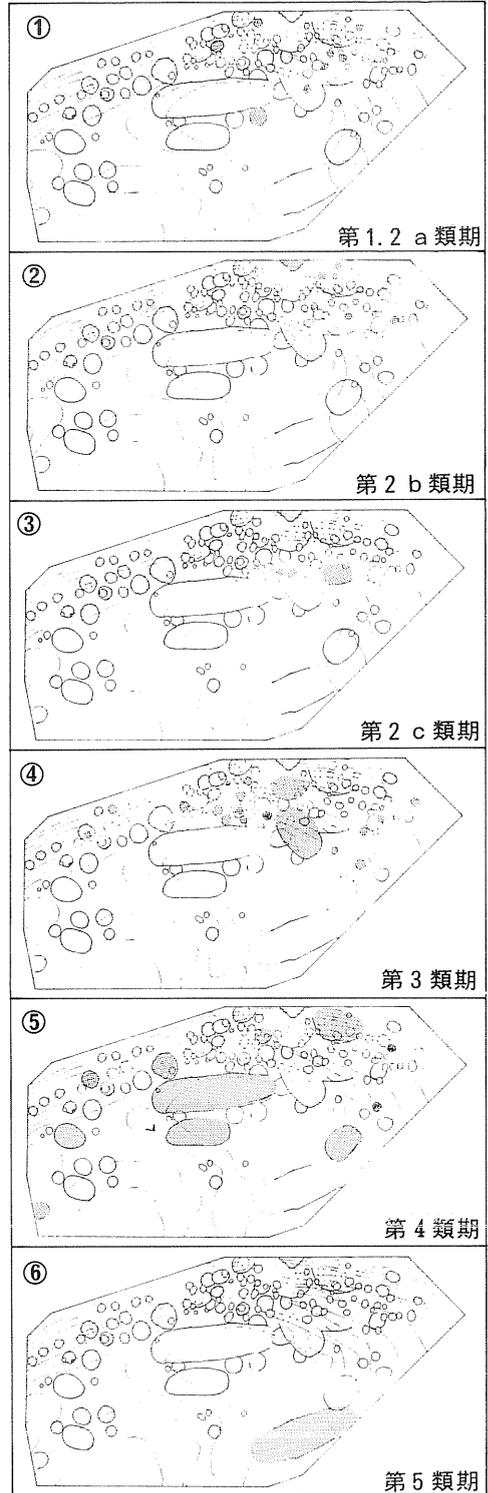
第1・2a類期から第2c類期までは、調査区の東側斜面に住居跡やフラスコ状ピットが位置する。なお、貝層検出のフラスコ状ピットは、6基とも第2c類期に属する。第3類期になると、斜面全体に広がり、SI18のような大型住居跡も出現する。第4類期になると、斜面と台地縁の平坦地にも住居が構築され、台地のもっとも高い場所に大型住居（SI07・SI06）が位置する。

この大型住居の周囲に小型・中型住居が位置し、フラスコ状ピットは斜面に位置する。SI07住居とSI06住居が、同時に存在したか、いなかは大いなる問題である。両住居の距離は1.5mしか離れていない。雨水や雪が相互におよぼす影響を考えると、同時存在は無理ではなからうか。SI07の床面からは第3類と第4類の土器が出土し、SI06の床面からは第4類土器が出土している。第5類期になると、SI44大型住居が出現する。

以上の集落の変遷を概括すると、東側斜面を起点に台地縁への拡大として理解できるように考えられる。このことは、東側斜面の遺構分布が密であり、重複が激しく、西側は重複が少ない点と第3類から出現する大型住居は、重複しているすべての住居跡より、新旧関係において新しい点からも理解できると考えられる。

SI18住居は1回の建替え、SI07が3回の建替え、SI06住居が1回の建替えが認められる。第3類・第4類期が、この集落がもっとも活気のあった時期であり、第5類期は、この集落の終末期であり、SI44は建替えることなく廃棄された。

大型住居 本遺跡のなかで、最大規模のSI07住居跡の面積は222㎡である。中型住居跡の平均面積は40.5㎡であり、小型住居跡のそれは約9.5㎡である。SI07住居跡は、中型住居跡の約5.5倍、小型住居の23.4倍である。いかに規模が大きいかを理解できるし、4棟の大型住居跡が、すべて標高のもっとも高い場所に構築されていることから考えると、大型



第124図 集落の変遷予想図

住居が小型・中型の住居とは違った性格を持つだろうことは想像できる。

大型住居を造るためには、土を掘る作業、掘った土を捨て場まで運ぶ作業、柱材を切る作業、柱材を運ぶ作業、上屋の骨組みを組立てる作業、屋根を葺く作業などが考えられ、その労働量は膨大であったろう。にもかかわらずこのような大型住居跡を造った目的はなにか。多人数を収容するためであったろうが、問題は、「どんな人たちが」・「いつ」・「なんのために」この施設を使用したかである。多人数が集まる機会は、共同作業・集会・祭り・冬期間を安全に過すための共同生活などが考えられる。いずれにしても大型住居の性格を考えることは、社会構造を考えることであると思われ、今後、(1)周辺の集落との関係、(2)現在のところ、大型住居の検出は、日本海側に多いが、太平洋側では今後とも検出されないのかどうか、(3)他の遺跡では大型・中型・小型の住居が集落のなかでどのように配置されるのか(集落形態)、出土遺物および出土状態はどうかなどに視点をすえ、杉沢台の大型住居の性格を考えていきたい。

なお、秋田県内検出の大型住居跡(「大型」の意味は、その集落のなかでひととき大きな意味で使用している)例は、秋田市柳沢遺跡・前期後葉(富樫 1974)、能代市館下I・中期前葉(岩見 1979)、八竜町萱刈沢遺跡・中期前葉(鍋倉 1979)、上小阿仁村不動羅遺跡・中期前葉(富樫ほか 1978)である。

⑦ C₁₄測定結果

SKF 08 フラスコ状ピット (木炭)	4930 ± 90 y B・P
“ “ (貝)	4790 ± 90 y B・P
SI07 竪穴住居跡 (木炭)	4850 ± 90 y B・P
SI14 竪穴住居跡 (木炭)	4820 ± 65 y B・P

2 縄文時代後期

検出された遺構はフラスコ状ピット 1 基のみであり、出土した遺物は、このフラスコ状ピットの床面直上に、倒立して出土した深鉢型土器 1 個体のみである。土器は、十勝内 I 式期に比定される。

北斜面の下は、狭い段丘面になっているので、今後の調査で住居跡の検出も考えられる。

3 縄文時代晩期

検出された遺構は、SK 11 土壌(風倒木痕の可能性もある)のみであるが、調査区東側に遺物包含層があり、多量の土器が出土した。

遺物は第 1 層の下位で検出された。出土土器の大部分は破片であるが、完形品の出土状態をみると、横位・倒立・正常とさまざまである。

土器の器形も豊富であるが、鉢形土器が主体である。

土器型式は、大洞B～C₂式があり、C式が多く、次いでB・C式であり、B式とC式は少ない。晩期中葉を中心とする遺跡と考えられる。

4 平安時代

① 竪穴住居跡

5棟検出。4棟は調査区の西側に集中するが、1棟東側寄りに離れている。

平面形は方形を呈し、SI01がもっとも大きく、1辺約4m・面積約16㎡、SI04がもっとも小さく、1辺2m・面積4㎡である。

カマドの構築位置は、東壁のもの3棟、北壁1棟・東南コーナー1棟である。カマド本体は礫を芯材として粘土で構築されたものと考えられ、SI04は遺存状態がよかった。

SI01の床面は2段になっていて、西側半分が約6cm高くなっている。この段境には浅い柱穴と溝が認められ、「間仕切り」の施設と考えられる。住居空間の使い分けがあったものと考えられる。

柱穴は、SI01では、コーナーと東壁と西壁の間にも認められた。他の住居跡では、柱穴は認められない。

遺物はカマド付近に集中する。とくに、SI01では土師器杯が10余点出土した。

② 竪穴状遺構

2棟検出されたが、SKI01が原形をとどめている。1辺2.4mの方形を呈するが、カマドは付設されていない。中央に焼土が堆積している。作業小屋としての使用が考えられる。

③ 土 壇

9基検出された。平面形は、円形・不整形円形・楕円形を呈する。周壁が焼けているのが特徴であるが、用途は不明。

④ 溝状遺構

17条の溝状遺構が検出。東↔西・南↔北に掘られているが、どんな意味を持つのか不明。

SD14・16が注目される。台地の縁に立地する。重複していて、SD14が新しい。SD14の方が規模は大きい。溝は環状を呈し、平面形は楕円に近い。断面は逆台形を呈し、かなりしっかりした溝である。

秋田県内での類例は、増田町梨の木塚遺跡（畠山 1979）と峰浜村中田面遺跡（熊谷 1980）で検出されている。（永瀬）

VI おわりに

杉沢台遺跡は、縄文時代前期・後期・晩期、歴史時代の複合遺跡である。今回の調査では貴重な資料を多数検出することができた。とりわけ、縄文時代前期の大型住居跡を持つ集落は、縄文社会を考える上で看過できない資料である。また、ヤマトシジミを主体とする貝層は、約5,000年前の環境を知る上で貴重である。

遺跡は、歴史を物語ってくれる資料であり、国民共有の財産であると考えられる。「ここに遺跡があった」というのと、「ここは遺跡だよ」というのでは大きな違いがある。ここから遺跡保護問題が発生してくるし、当然のことながら、貴重な遺構・遺物を数多く検出した杉沢台遺跡の場合も、この問題が発生した。

幸いに、この遺跡は工事から除外され、保存されることになった。保存の方向に至るまでは、幾多の右余曲折があったが、地元地権者・小土部落会・東北農政局・秋田県能代地区土地改良区・能代市のご努力とご理解のもとに、難問は解決されていった。土地所有者である船木貞治船木恒夫・木村忠光（木村良一）のみなさんには、物心両面にわたってご協力をいただいた。また、小土部落のみなさんには、深夜に至る数度の会合で、熱心に保存の道を検討していただいた。上記の関係者ならびに関係機関に深く感謝の意を表するしだいである。

（永瀬）

引用及び参考文献

- 山内清男「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌 第1巻』 1929年
山内清男『日本先史土器の縄紋』 1979年
山内清男「所謂亀が岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学, 第1巻3号』1930年
山内清男編『日本原始美術Ⅰ 縄文式土器』 1964年
村越潔『円筒土器文化』 1974年
村越潔「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』 1976年
江坂輝弥「各地域の縄文式土器 東北」『日本考古学講座 3』 1956年
江坂輝弥『石神遺跡』 1970年
小林達雄「縄文時代の集落」『国史学 110・111号』 1980年
小林達雄「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学 93号』
坪井清足・小林達雄編『縄文土器 日本原始美術大系 1』 1977年
林謙作「縄文期の集団領域」『考古学研究 20-4』 1974年

- 林謙作「縄文期の集落と領域」『日本考古学に学ぶ』 1977年
- 水野正好「縄文時代集落研究への基礎操作」『古代文化 21—3・4』 1963年
- 後藤和民「原始集落研究の方法論序説—とくに縄文時代早期・前中期を中心として—」『駿台史学 27』 1970年
- 渡辺誠「雪国の縄文家屋」『小田原考古学研究会報 第9号』 1980年
- 橋本正「石器の機能と技術」『日本の旧石器文化 1』 1975年
- 藤本強「技法と機能」『日本の旧石器文化 5』 1976年
- 工藤竹久「北日本の石槍・石鏃について」『北奥古代文化 9』 1977年
- 工藤竹久「北日本における縄文時代狩猟用具変遷の意義」『考古学ジャーナル』 1979年
- 三宅徹也「青森県における円筒下層式土器群の地域展開」『北奥古代文化 6』 1974年
- 佐原真「石斧論」『考古学論集 松崎寿和先生退官記念事業会編』 1977年
- 保坂三郎『是川遺跡』 1972年
- 安孫子昭二「コブ付土器様式から亀が岡土器様式への変遷過程」『考古風土記 第5号』 1979年
- 鈴木克彦「亀が岡式土器の羊歯状文に関する考察」『考古風土記 第5号』 1980年
- 藤村東男「大洞諸形成に関する2・3の問題」『考古風土記 第5号』 1980年
- 奥山潤『茂屋下岱式土器群』 1971年
- 岡田茂弘、桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要 I』 1974年
- 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史 第14輯』 1957年
- 富樫泰時「秋田市柳沢発見の住居跡」『考古学ジャーナル 99』 1974年
- 青森県教育委員会『熊沢遺跡』 1978年
- 青森県教育委員会『太平遺跡』 1980年
- 青森県教育委員会『近野遺跡発掘調査報告書 V』 1979年
- 岩手県埋蔵文化財センター『松尾村長者屋敷遺跡 (1)』 1980年
- 富山県教育委員会『富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概報』 1974年
- 上小阿仁村教育委員会『上小阿仁村不動羅遺跡概要』 1978年
- 八竜町教育委員会『萱刈沢貝塚』 1979年
- 大館市編さん委員会『大館市史 第1巻』 1979年
- 秋田県教育委員会『遺跡分布調査報告書』 1980年
- 秋田県教育委員会『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』 1979年
- 秋田県教育委員会『中田面・重兵衛台 I・II・根洗場遺跡発掘調査報告書』 1980年
- 秋田県教育委員会『館下 I 遺跡発掘調査報告書』 1979年

附編

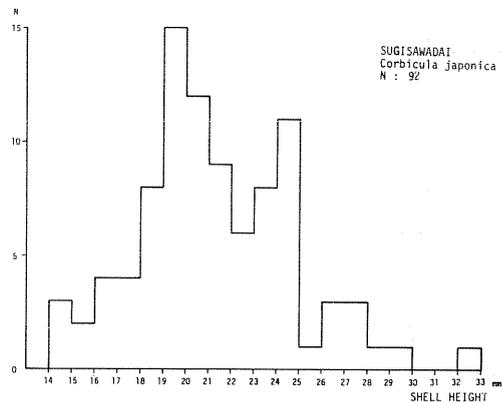
1 フラスコ状ピット (SKF08) 出土の貝層について

SKF08内の貝層 杉沢台遺跡の今回の発掘調査では約109基のフラスコ状ピットが発見された。その中のSKF08と名づけられたピットには、床面より50cm上の覆土中に貝層が投棄されていた。貝層の厚さは約40cmで、比較的大型の土器破片が面的に介在しており、それより上を貝層A、下を貝層Bと区分した。どちらもヤマトシジミからなり、貝層Aはやや保存が悪いが、貝層Bは保存が良好で、純貝層を呈していた。貝層Bの上面近くにカワシンジュガイが数片集積していた。

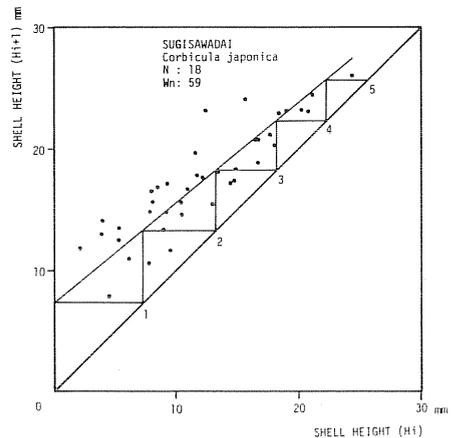
サンプリング この貝層のサンプリングはいわゆる“切り取り法”を行なった。この貝層の中央部において、30cm×30cmの柱状に残るように周囲をあらかじめ発掘しておき、これよりやや大きめのわくをかぶせ、わくと貝層の間をウレタン樹脂で補強し、貝層より5cm下で切り取った。この貝層サンプルを研究室にもちかえり、垂直断面を再び開けきれない面を出し、ポイント発掘を行なった。その面に表われた

すべての貝殻について位置を記録し取り上げた結果、ヤマトシジミ96点、カワシンジュガイ4点をサンプリングし常法によって樹脂に包埋し、レプリカを作成して成長線を観察した。

殻高分布 ポイント発掘された96点から破損して計測不能な4点を除く92点の殻高分布を図1に示す。最小値14から最大値33cmの間に3つのピークが認められ、第1のピークは19mmの所に、第2は24mm、第3は26—28mmに位置する。反対に18mm、22mmと25mmにピークの谷が認められた。このような出現の仕方は採取季節が



第1図

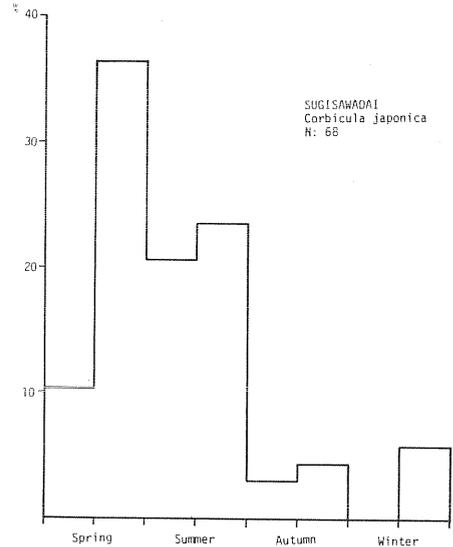


第2図

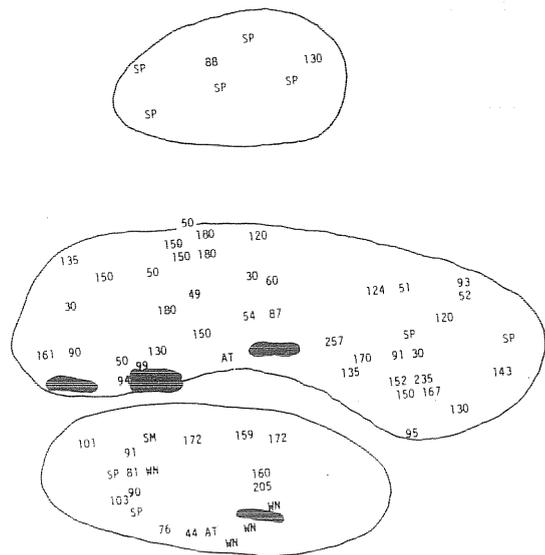
限定された場合の各ピークが各年齢群を表わすパターンと類似している。

成長速度 包埋したヤマトシジミの中から比較的大型の18個体を選び、殻頂から冬輪を検出しながら、冬輪時の殻高を調査した。ヤマトシジミの殻頂部は普通磨耗が著しく外層がすでに消失しているため、成長初期の情報を読みとることができない。そこでWalfordの成長式を用いて成長速度を算定した。図2に示すように、満1年で殻高7.3mm、2年で13.3mm、3年で18.3mm、4年で22.5mm、5年で26.0mmと千葉利根川産よりやや遅く、現生の青森浅虫産に相当する。

採取季節 92個体のうち採取季節が推定できたのは保存不良のものを除く68個体であった(図3)。春の後半が最も多く全体の32%を占め、ついで夏の前、後半で各15%台でこの3期で全体の60%強に達する。これらの採取季節の貝層内の分布をみると(図4)貝層の上面には春が多く、間層の下には春と夏を示す貝が混在していた。カワシンジュガイをはきんでそれより下の層では、その上方に夏の後半、中程に春の後半、最下面に冬の後半から春の前半の貝が堆積していた。すなわち貝層の下面から堆積が進むにつれ、冬の後半と春の前半から春の後半、やがて夏の後半への層に従って堆積するのが認められた。しかもこの部分の貝層から得られたヤマトシジミの最終冬輪には特徴があり冬輪の初めに強い障害輪を伴うことがなかった。このような特徴のみられた個体は22例中13例にのぼった。つまりわずか8cmのこの貝層の部分は同一年の冬の終わりから夏の間に堆積した可能性が強いことが示唆された。



第3図



第4図

小池裕子(東京大学総合研究資料館)

2 貝層内検出の遺存骨

魚骨

- 1 ニシン科 脊椎骨, 鱗
- 2 ウグイ 咽頭歯
- 3 フナ 咽頭歯
- 4 サケ科 脊椎骨
- 5 サバ科 脊椎骨, 棘, 顎骨
- 6 フグ科 棘, 顎骨

その他

- 1 カエル
- 2 ネズミ 切歯, 臼歯 (ハタネズミ属)
- 3 哺乳類 (中型) 指骨
- 4 鳥

※ 暫定的結果である。

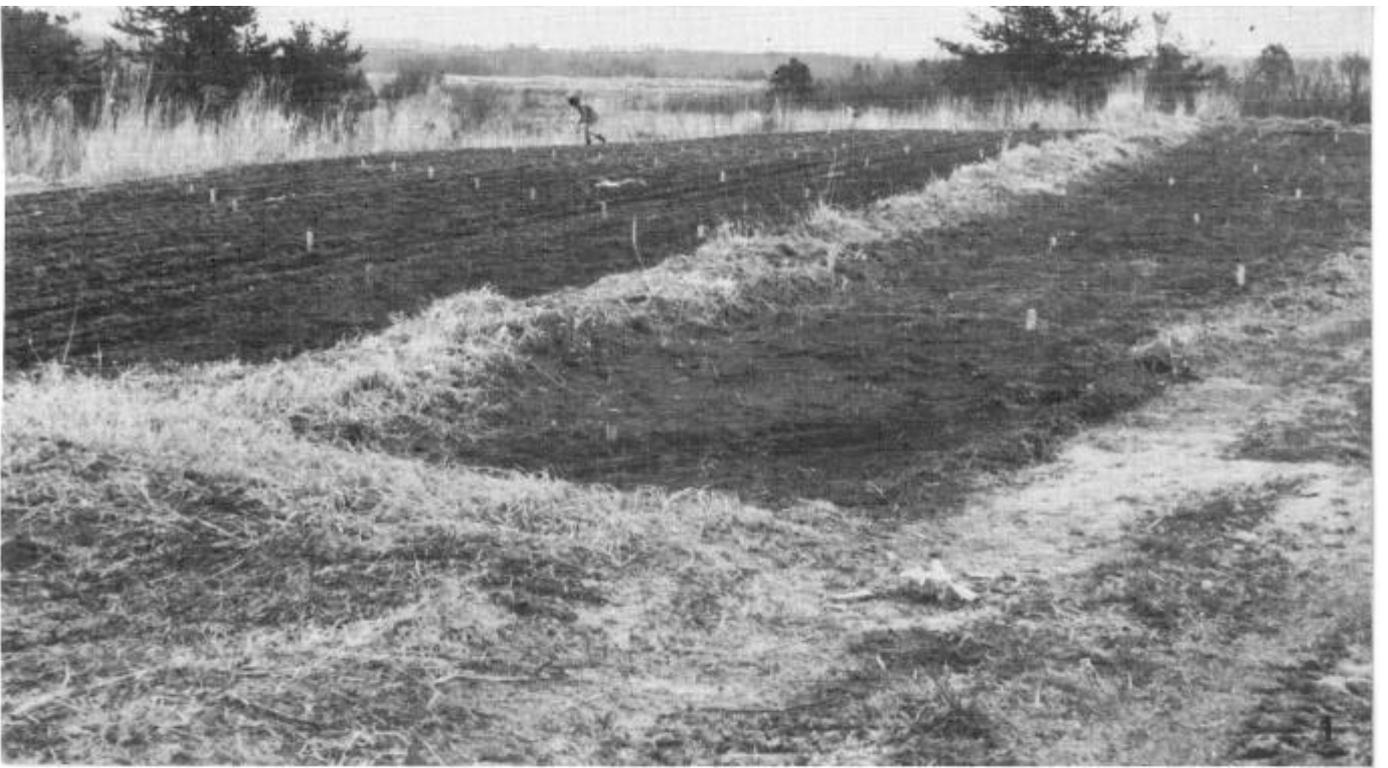
上野輝弥 (東京国立科学博物館)

☒

版



図版1 (1)遺跡遠景(北▶南) (2)遺跡遠景(南▶北)

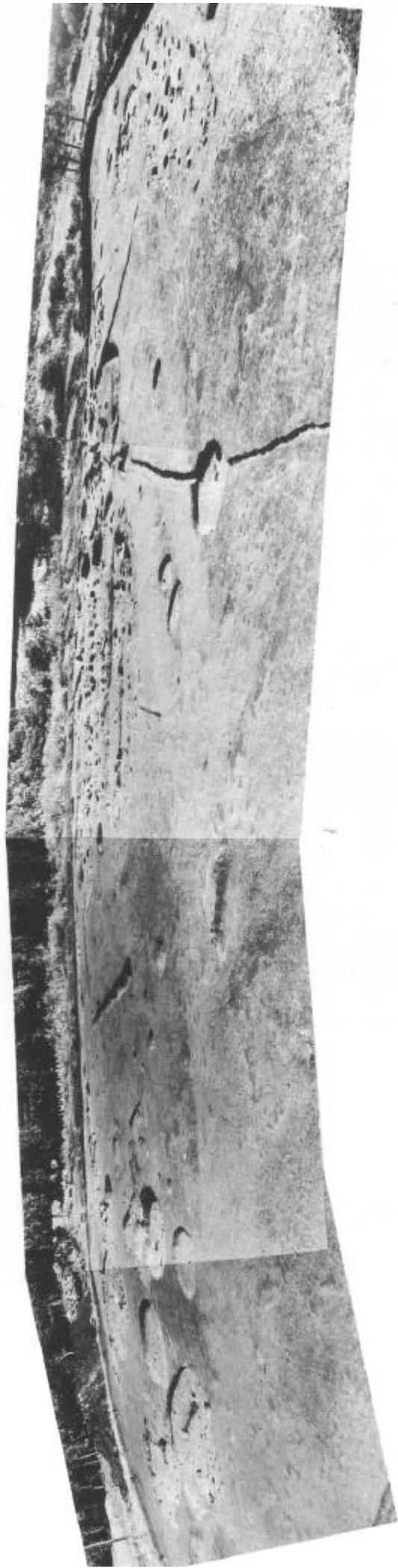


図版2 (1)調査前の状況 (2)調査風景



図版3 調査区全景（航空写真）

4
5
6
7
8



图版 4 发掘调查区 (南▲北)



図版5 (1)・(2) 北斜面のフラスコ状ピット群



図版 6

(1) SI 06 (西▶東)

(2) SI 06 (東▶西)



図版7 (1) SI 07 (西▶東) (2) SI 07 (東▶西)

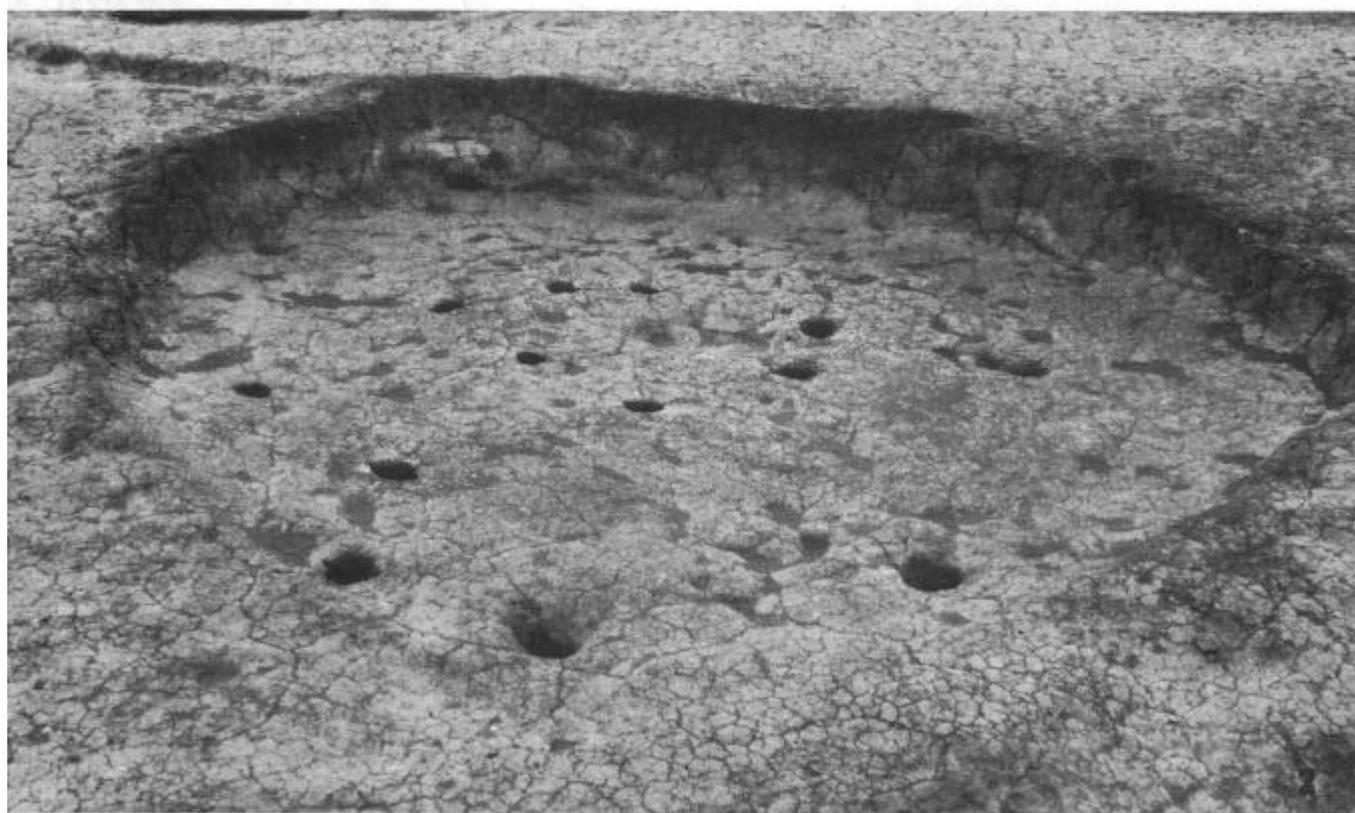
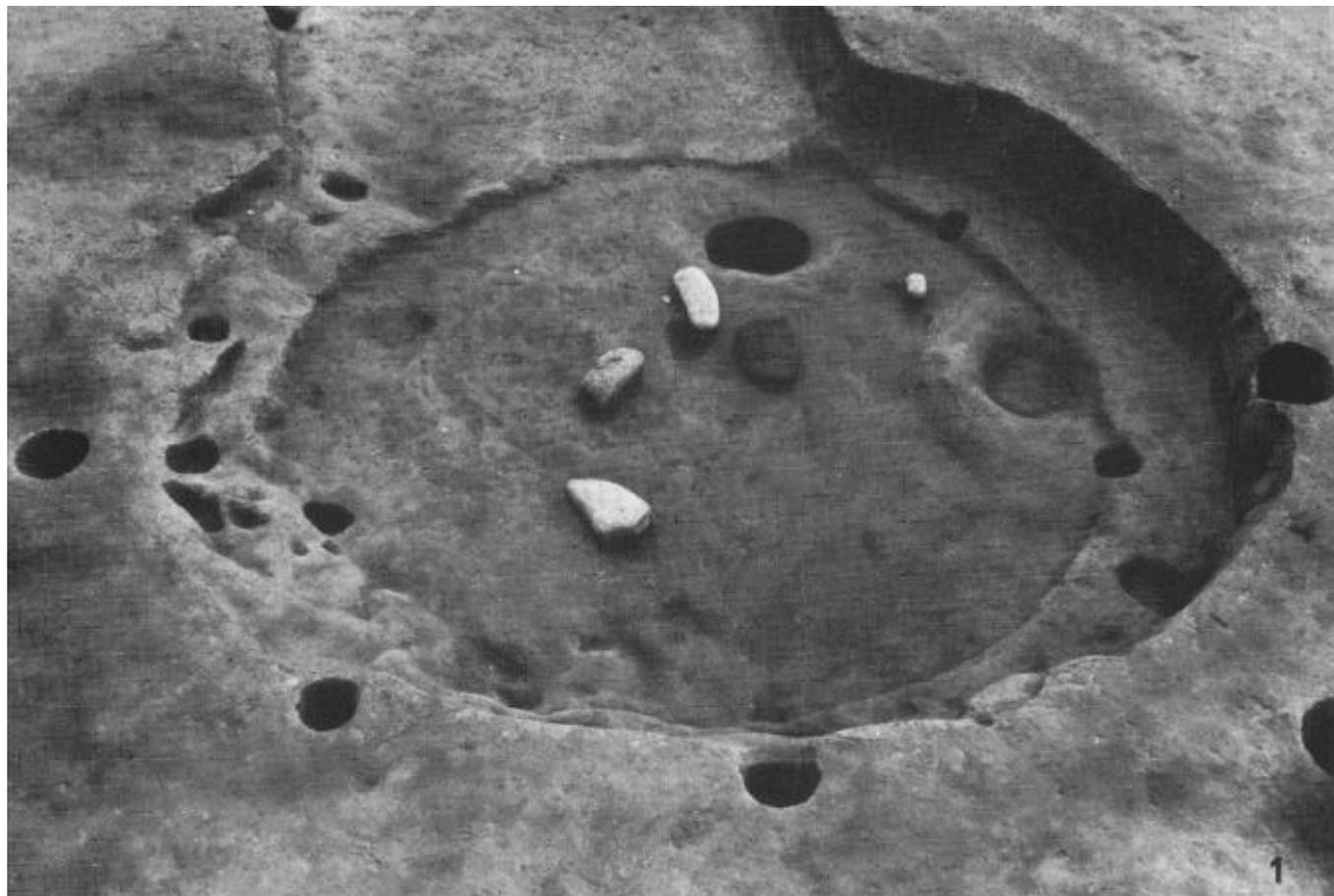


図版 8

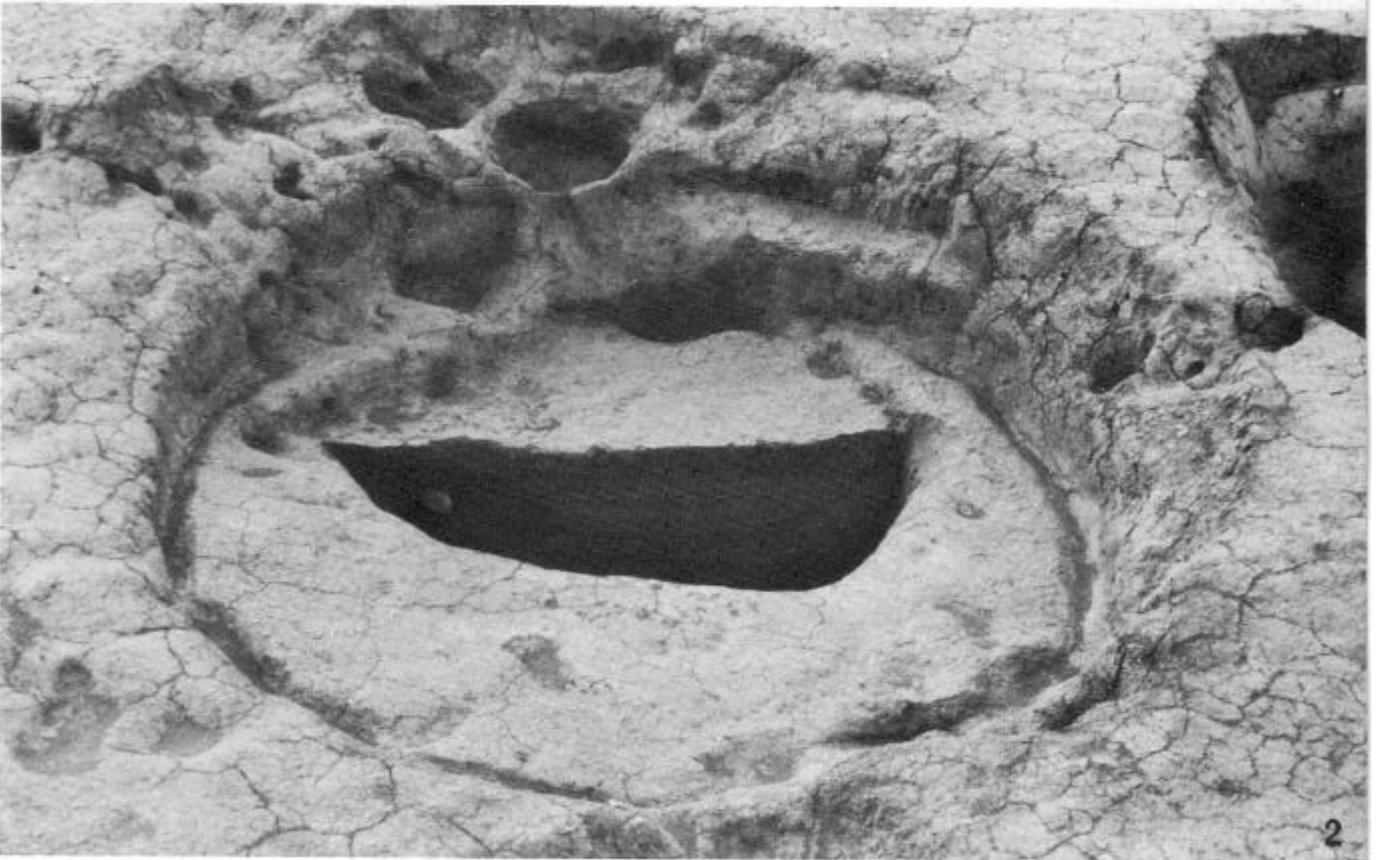
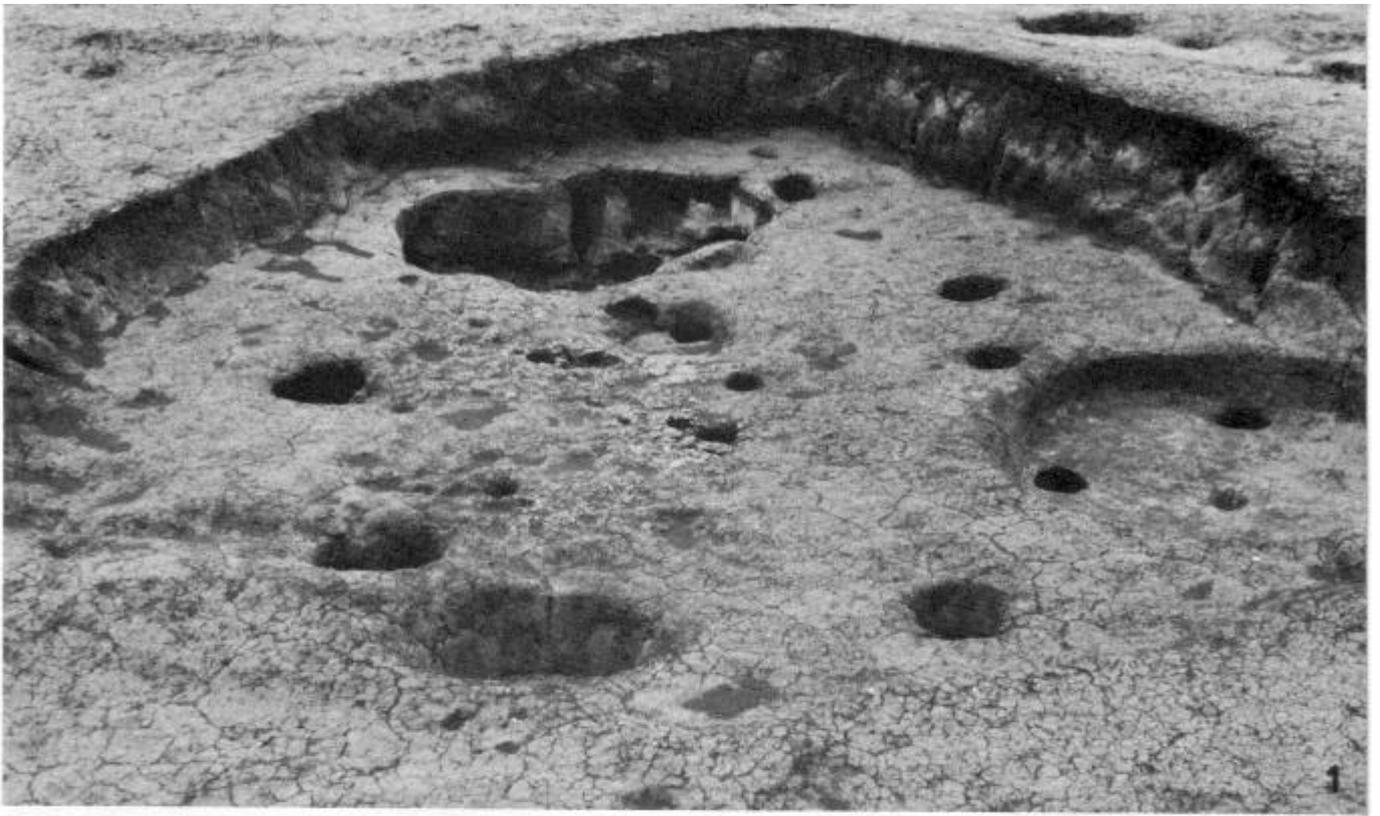
(1) SI 08 (北▶東)

(2) SI 09 (東▶西)

(3)・(4) SI 09 の炉埋設土器



図版 9 (1) SI 10 (西▶東) (2) SI 12 (北▶南)



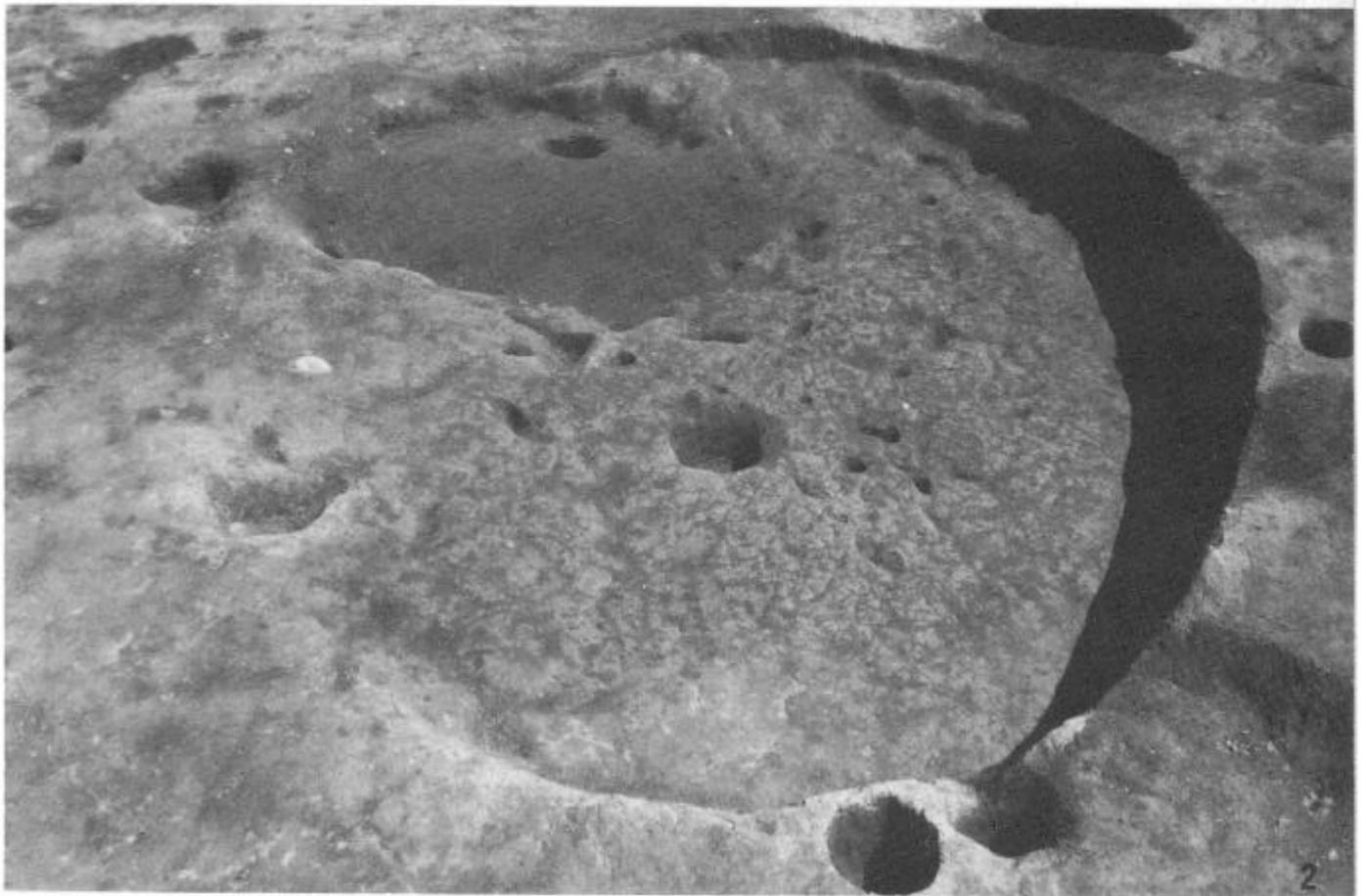
图版10 (1) SI 13 • SKF 18 • SK 10 (北▶南)

(2) SI 16 • SKF 43 (北▶南)



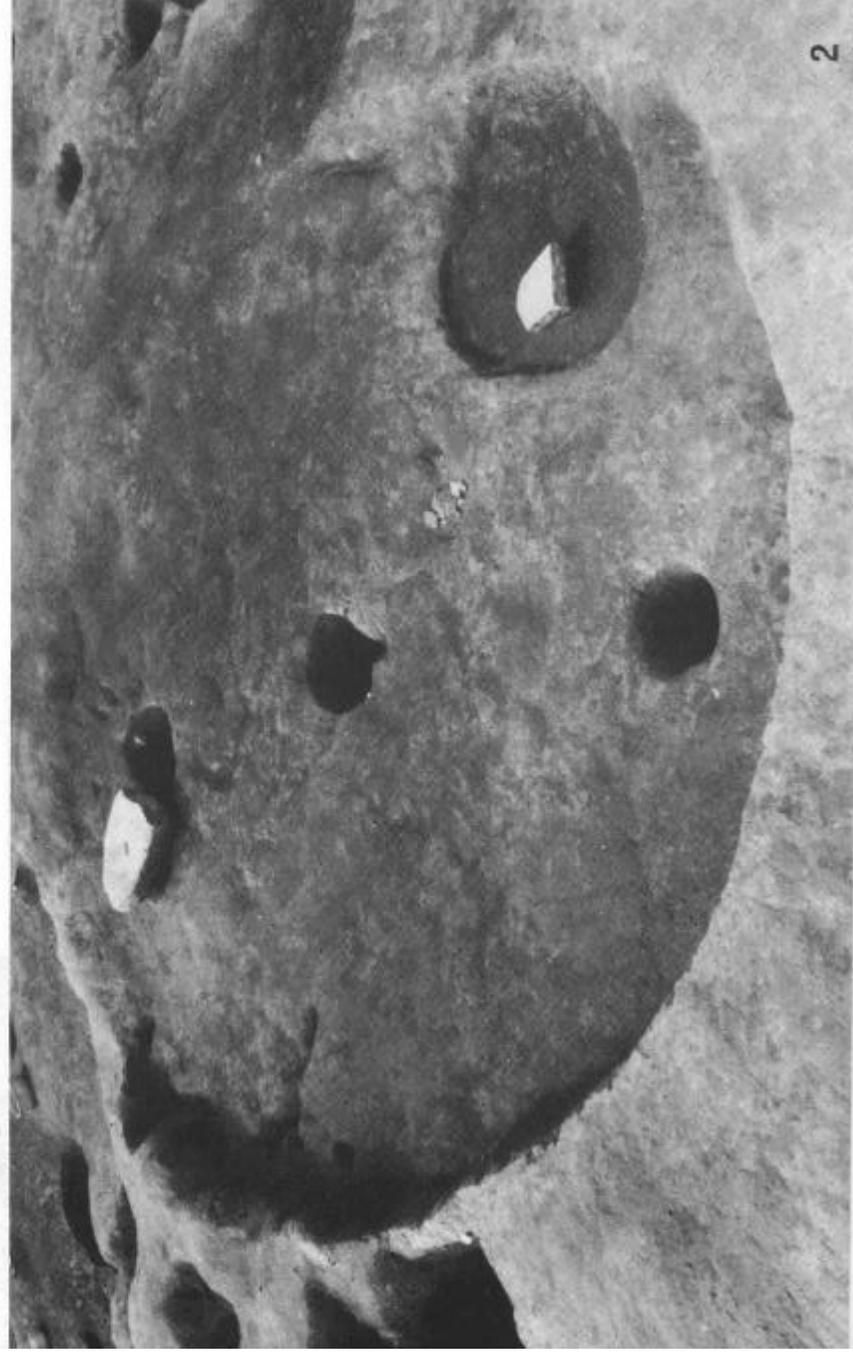
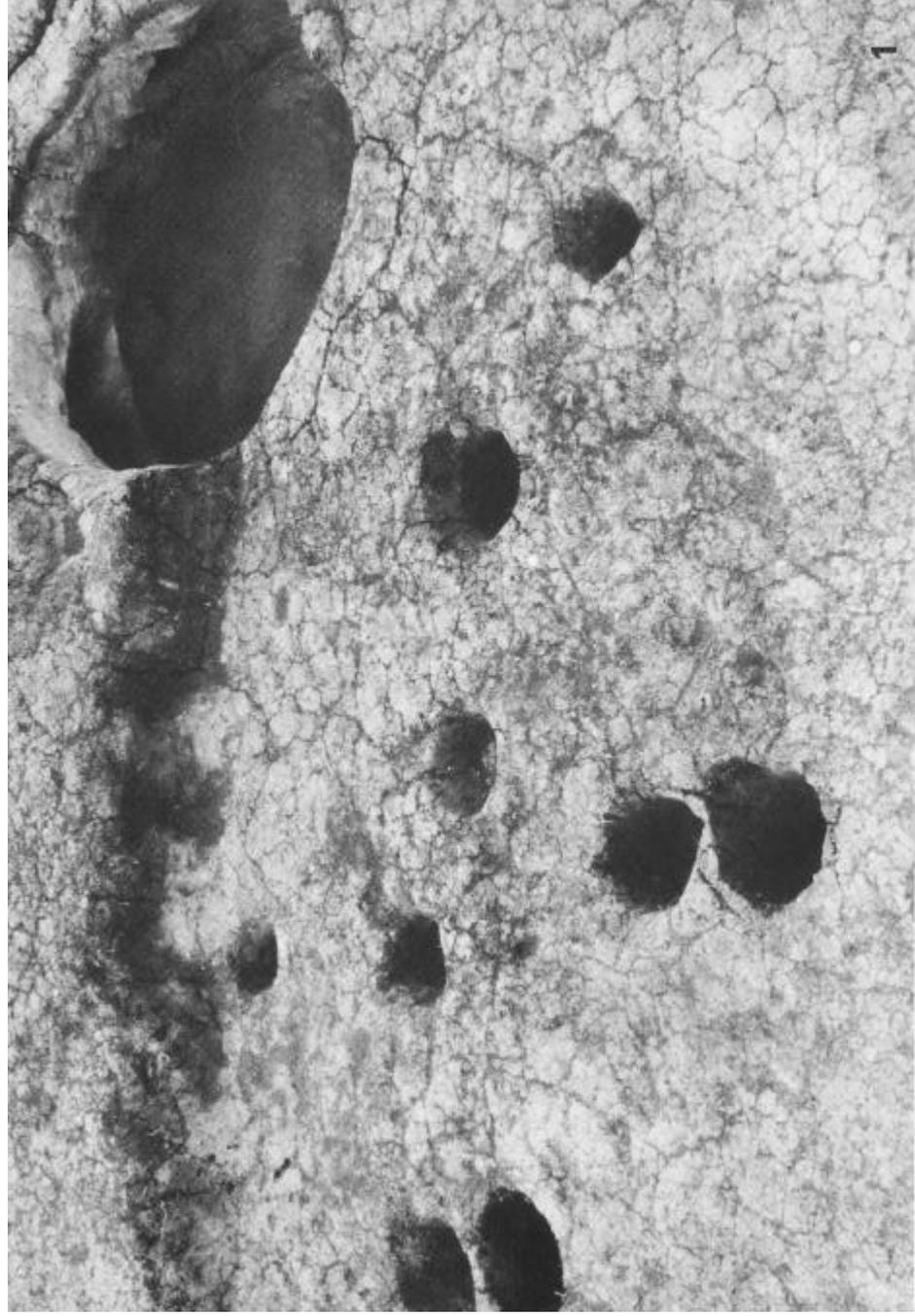
図版11 (1) SI 18遺物出土状態 (東▶西)

(2) SI 18 (南▶北)

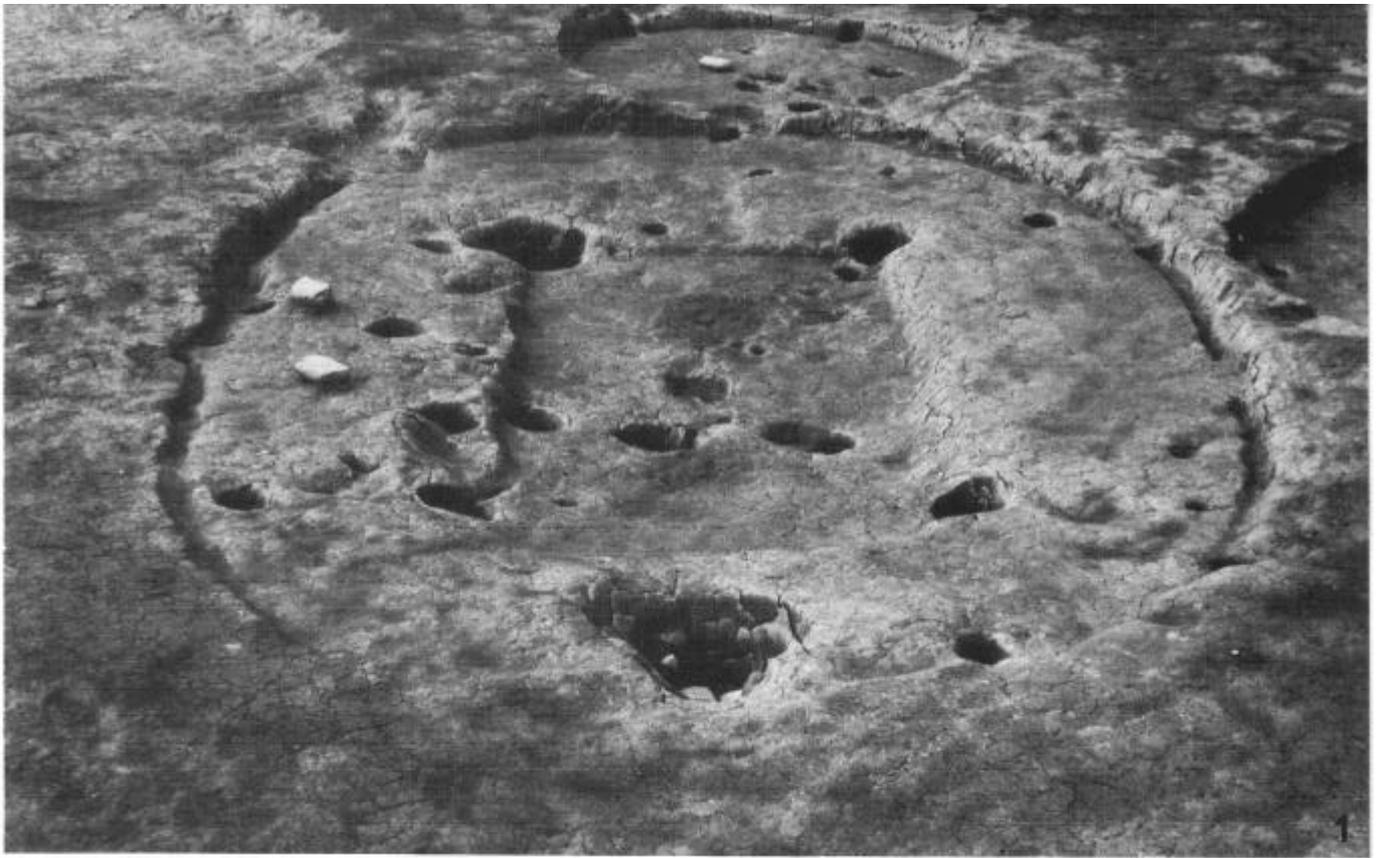


図版12 (1) SI 20・SKF 13・82 (北▶南)

(2) SI 22 (西▶東)



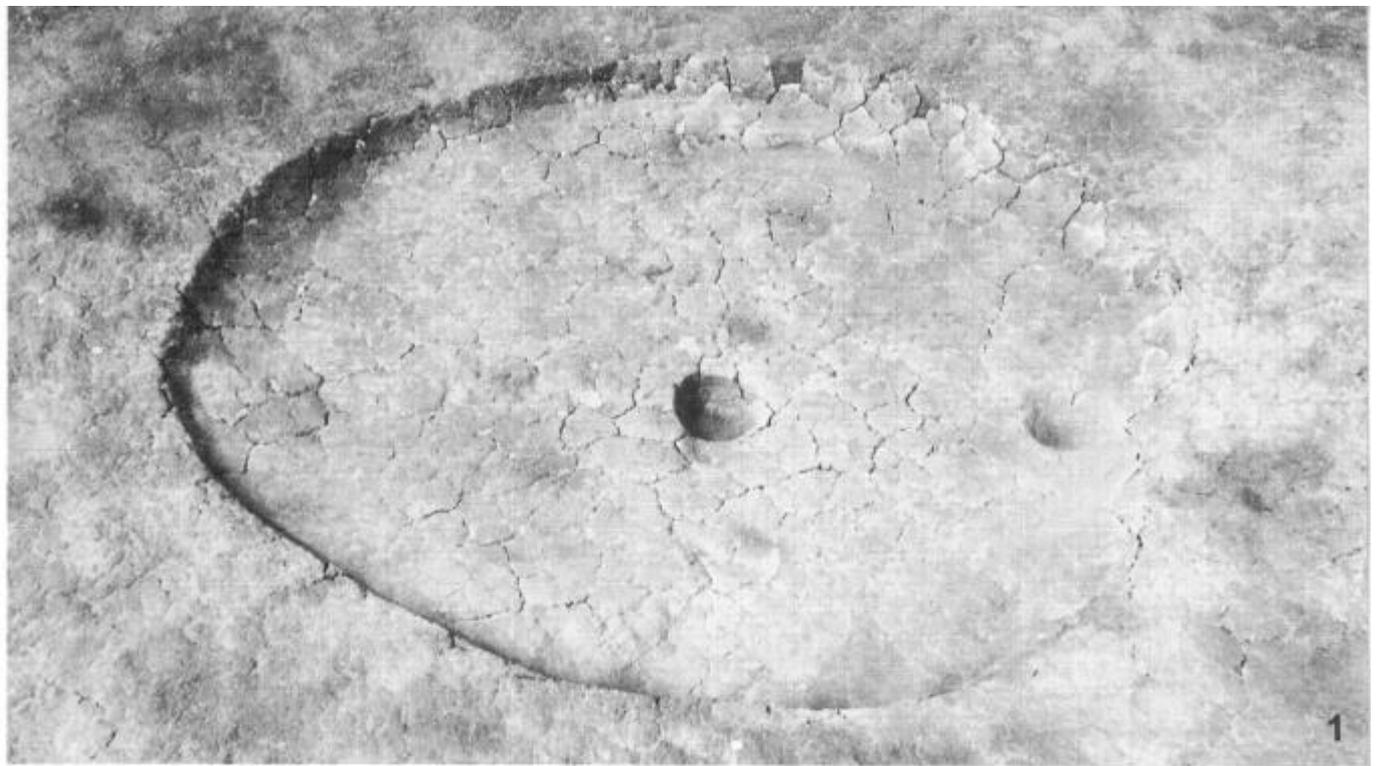
图版13 (1) S I 23 • SKF 40 (北▶南) (2) S I 24 (东▶西)



図版14 (1) SI 26 (東▶西) (2) SI 27 (東▶西)



図版15 (1) SI 38 (西▶東) (2) SI 34・SKF 51・69 (南▶北)

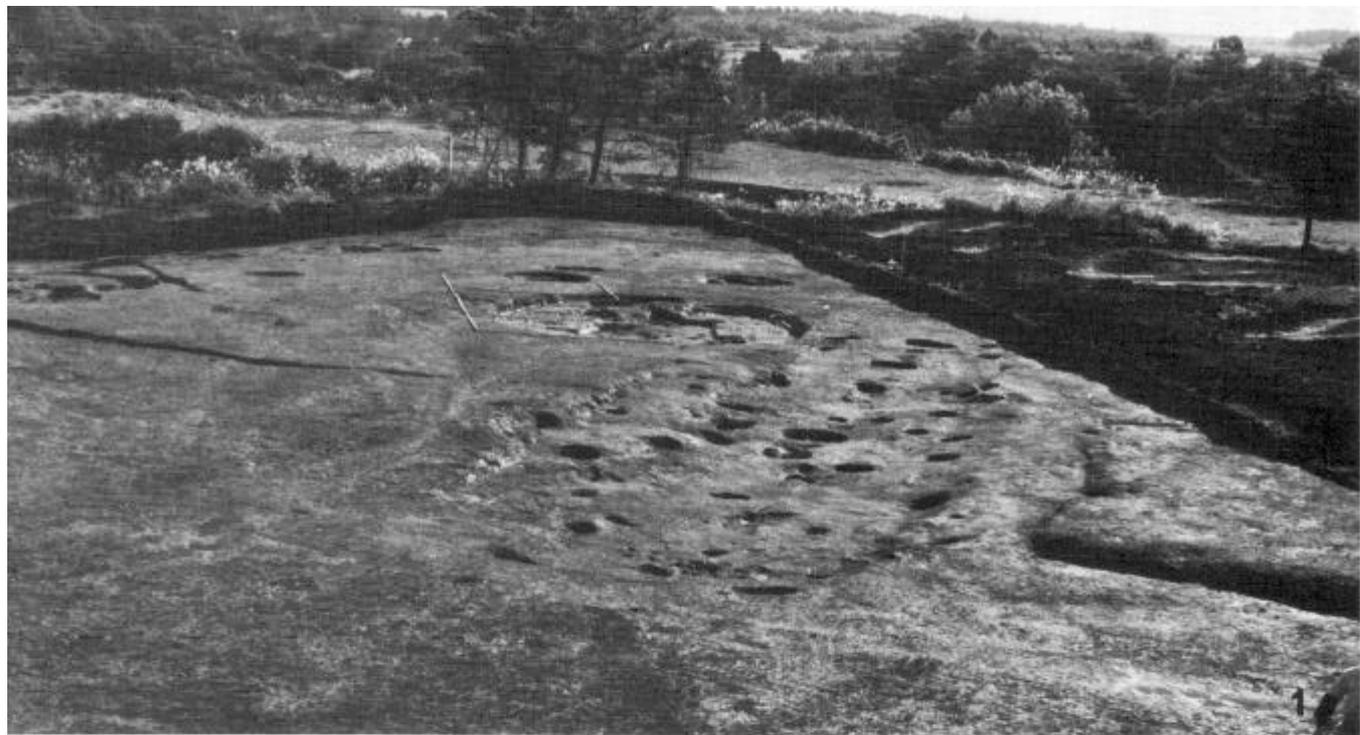


1



2

图版16 (1) SI 36 (南▶北) (2) SI 37 (東▶西)



図版17 (1) SI 44 (西▶東) (2) SI 44 (東▶西)



図版18 (1) S145 (東▶西) (2) S148 (北▶南)



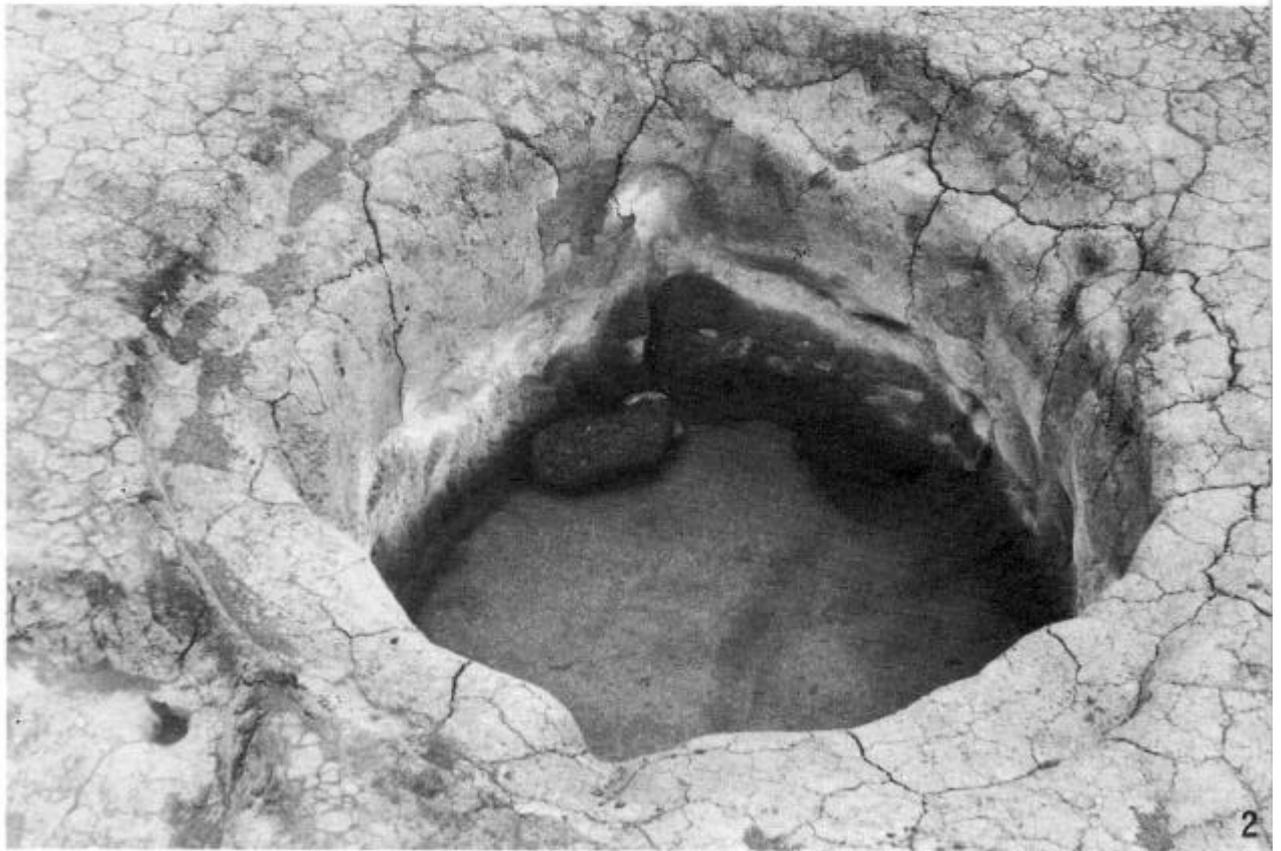
圖版19 (1) SKF 01 (北▶南) (2) SKF 06 (東▶西)



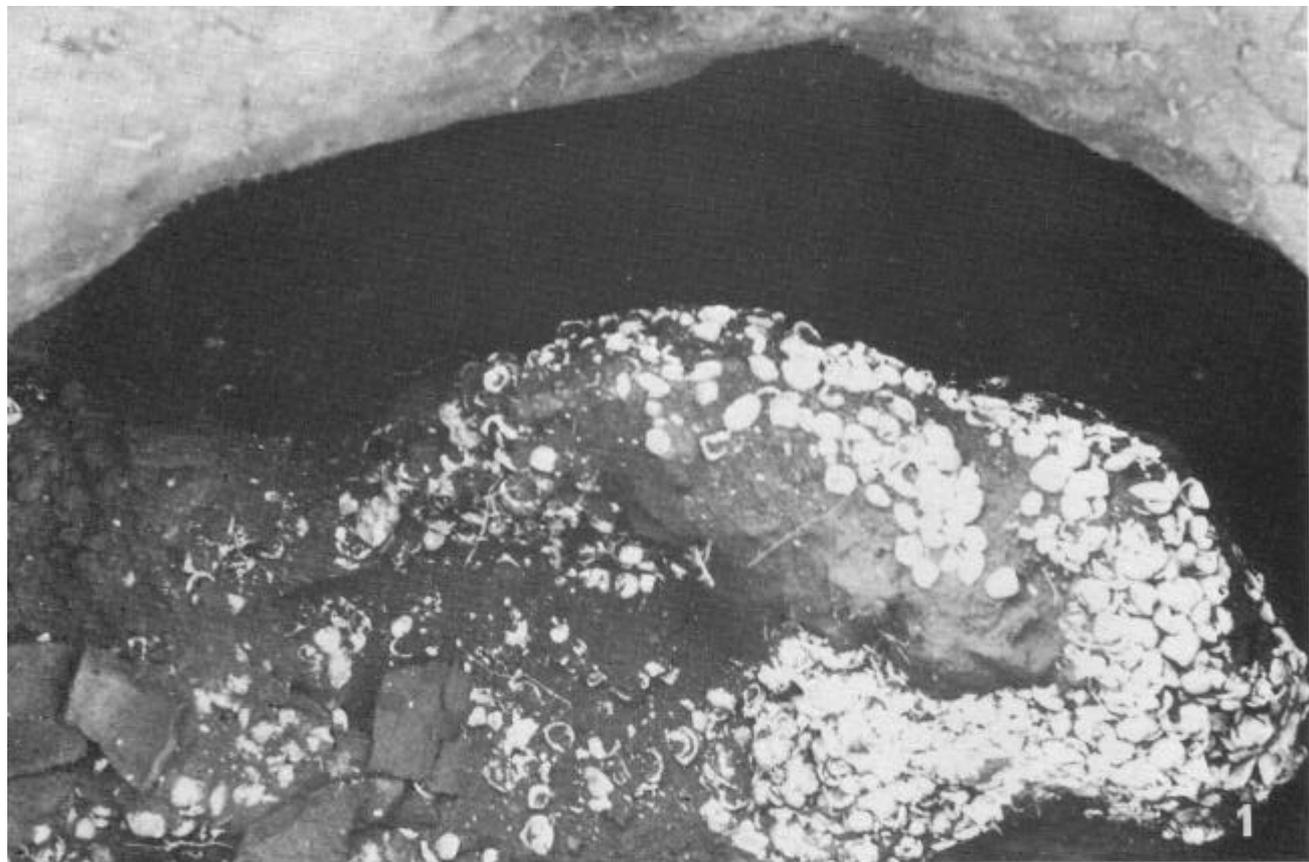
图版20 (1) SKF 08 (北▶南) (2) SKF 19 (南▶北)



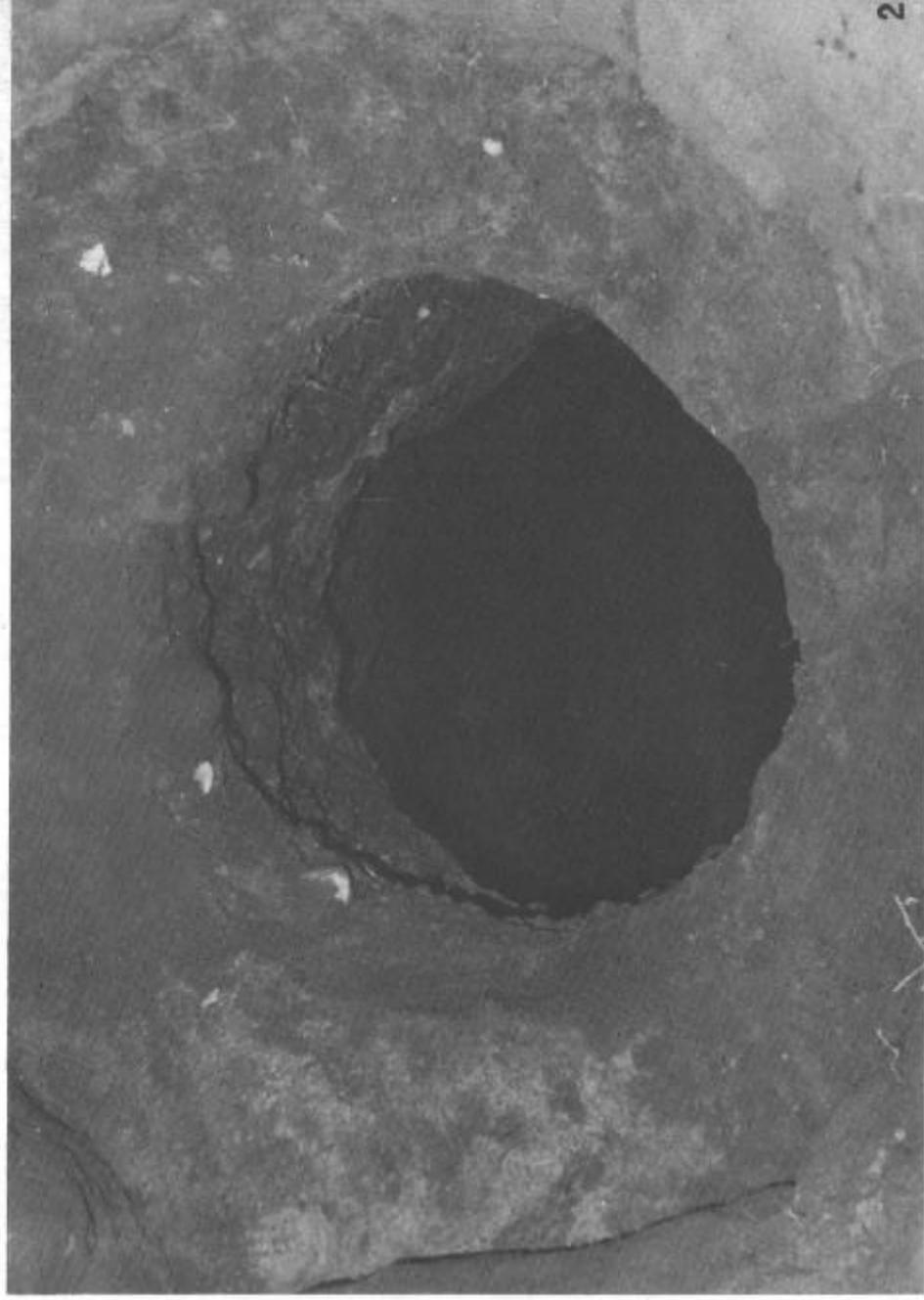
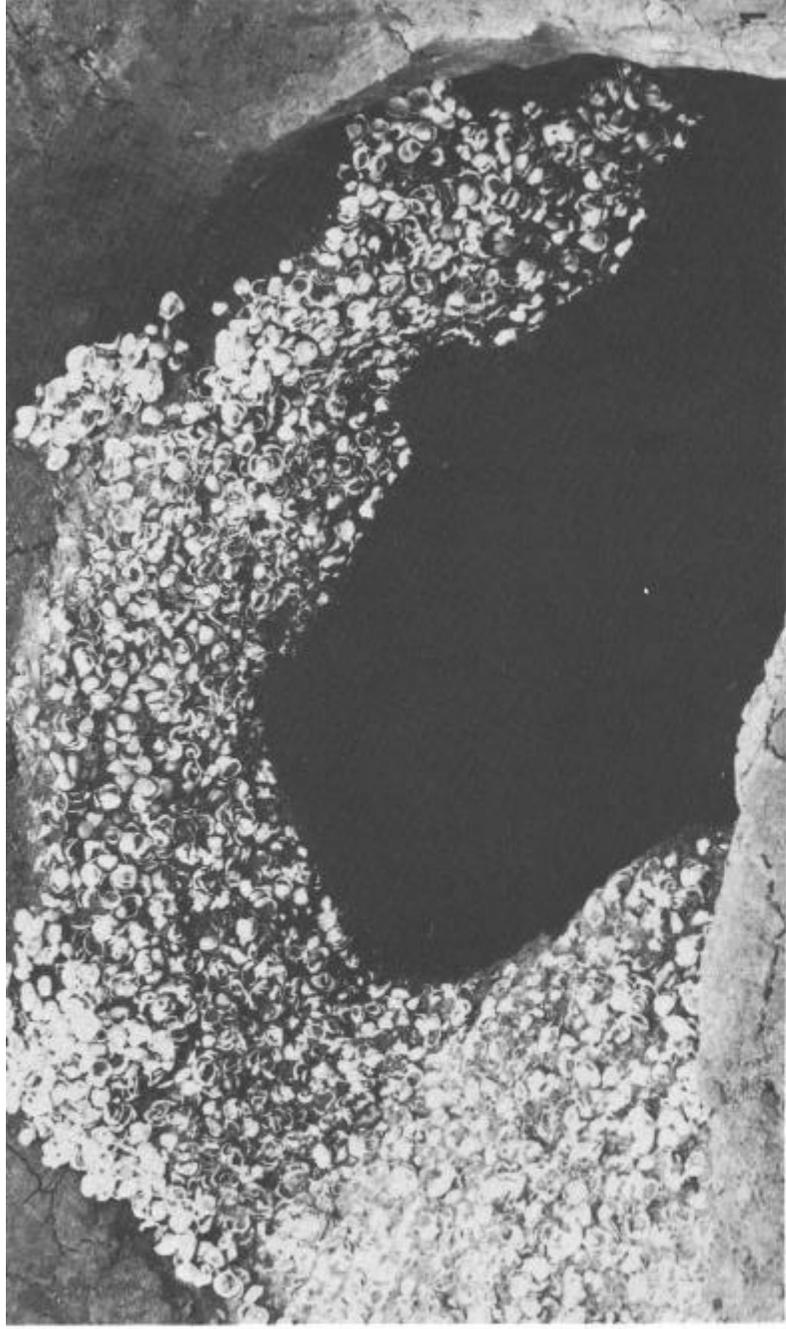
図版21 (1) SKF 20 (北▶南) (2) SKF 20の貝層



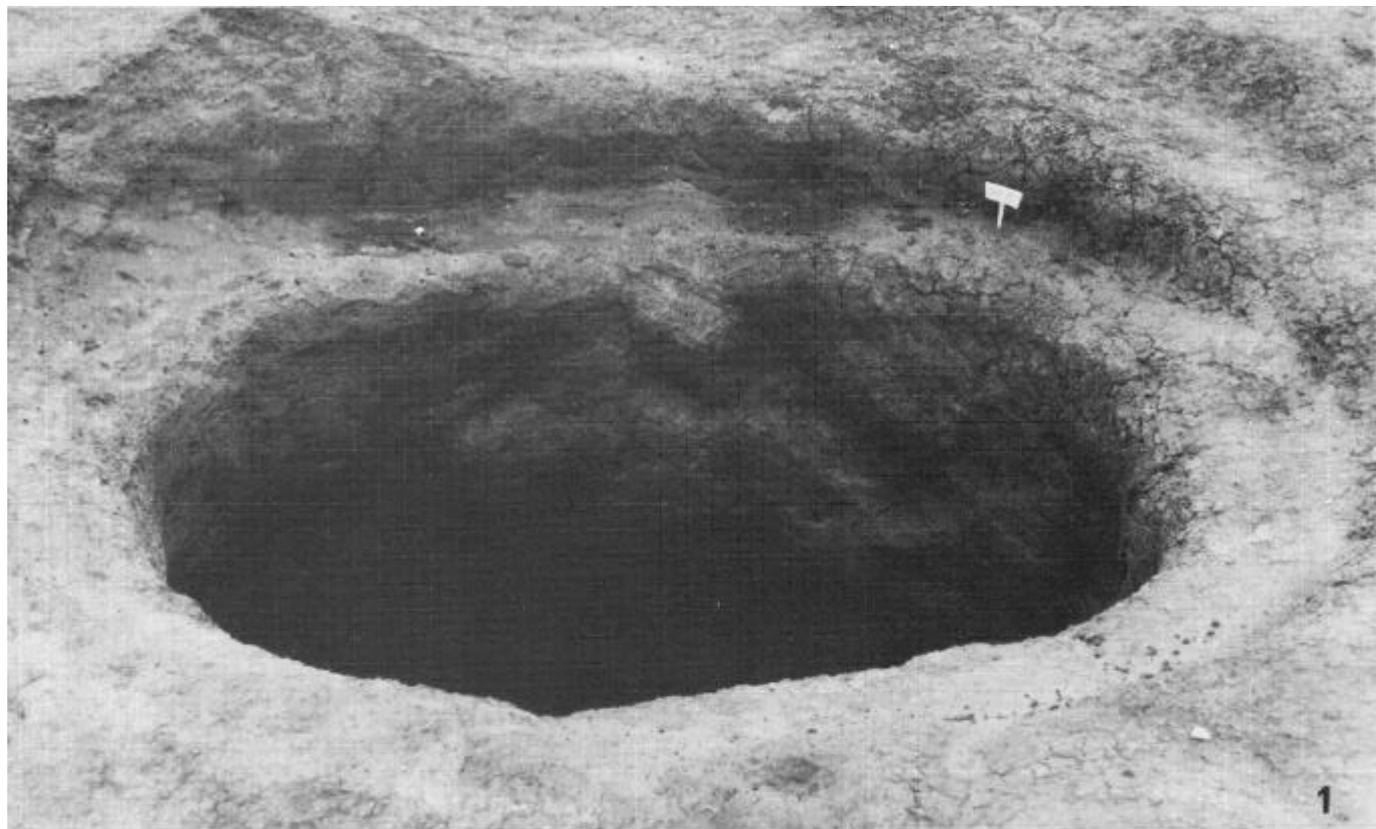
図版22 (1) SKF 21 (東▶西) (2) SKF 27・SI 26 (南▶北)



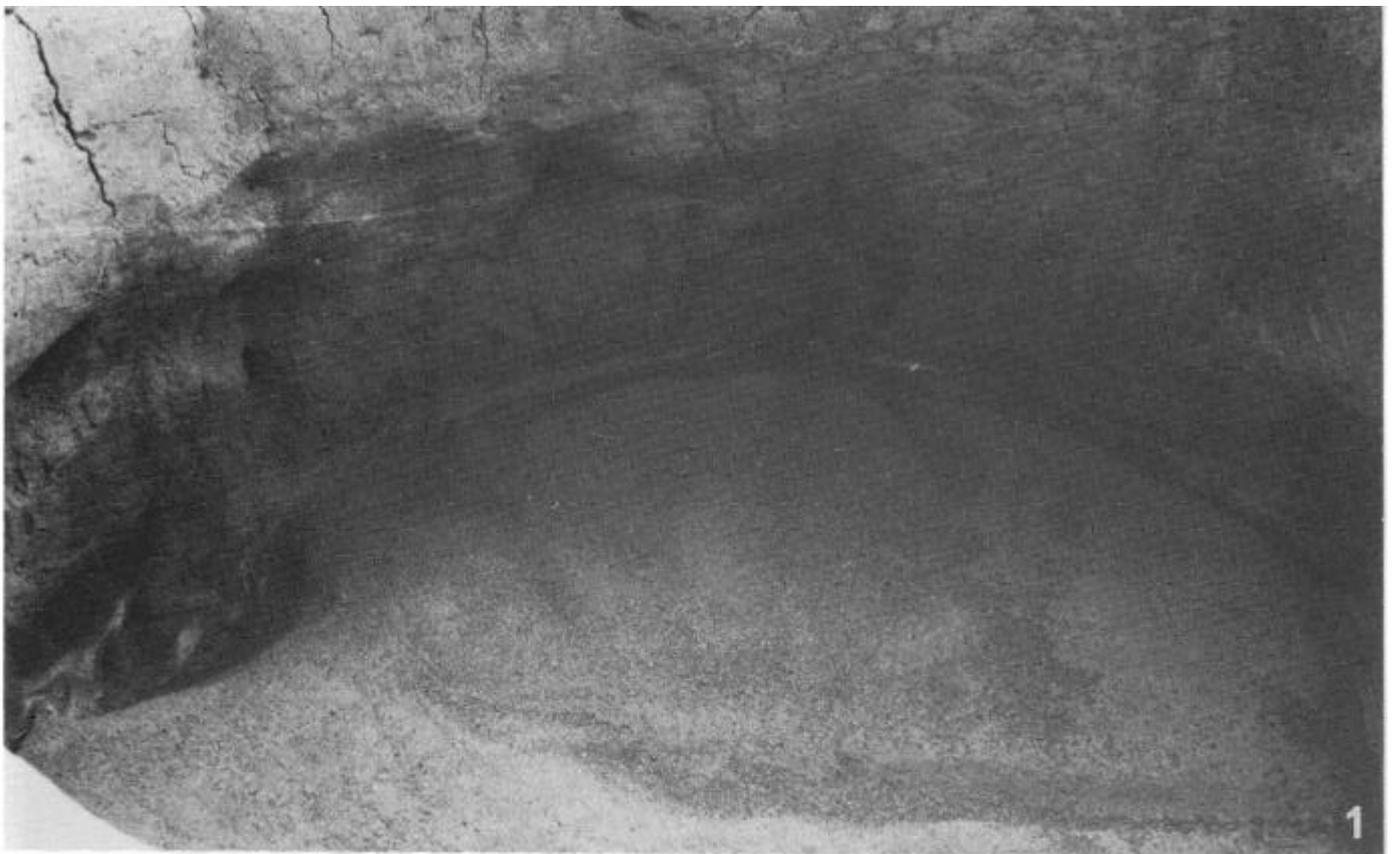
図版23 (1) SKF44 (北▶南) (2) SKF47 (東▶西)



圖版24 (1) SKF 83 (東▶西) (2) SKF 86 (南▶北)

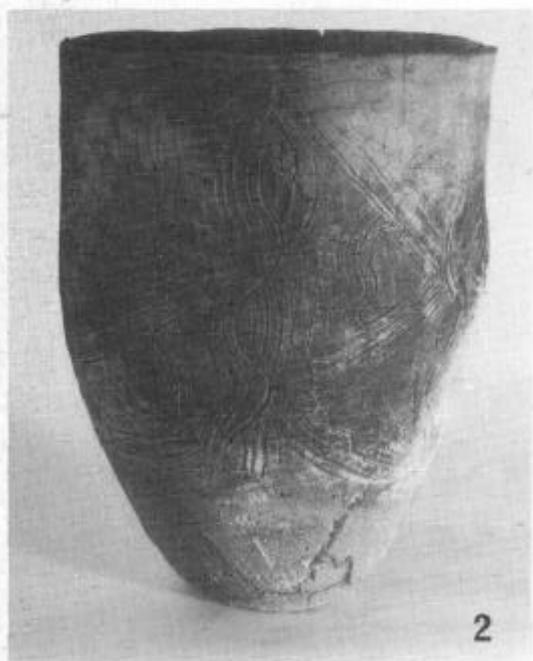
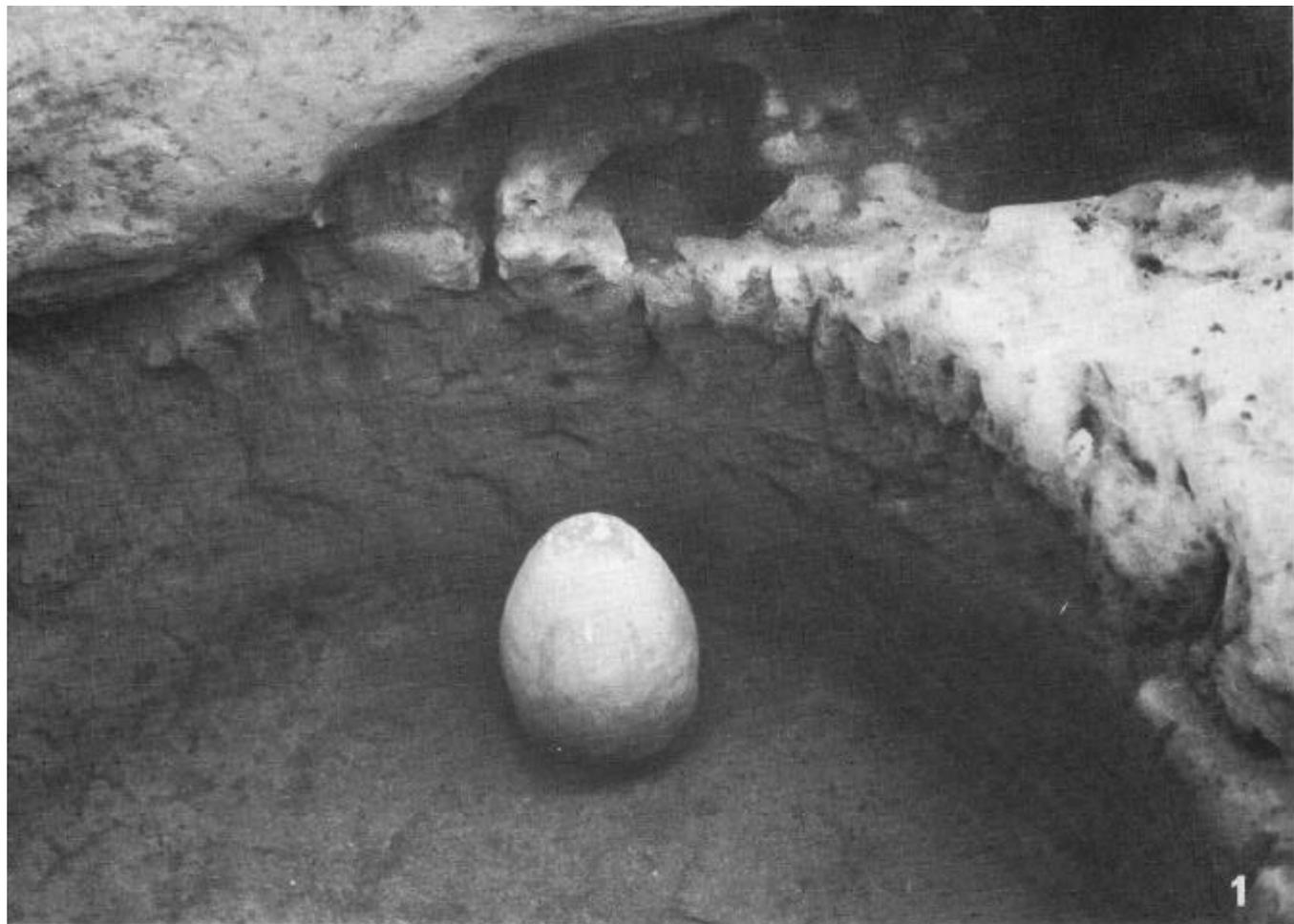


図版25 (1) SKF 95 (西▶東) (2) SKF 98 (西▶東)



図版26 (1) 雨水は溝からピットに流込む (SKF 27)

(2) フラスコ状ピットの崩壊 (SKF 50)



図版27 (1) SKF 18 (北▶南) (2) SKF 18出土土器



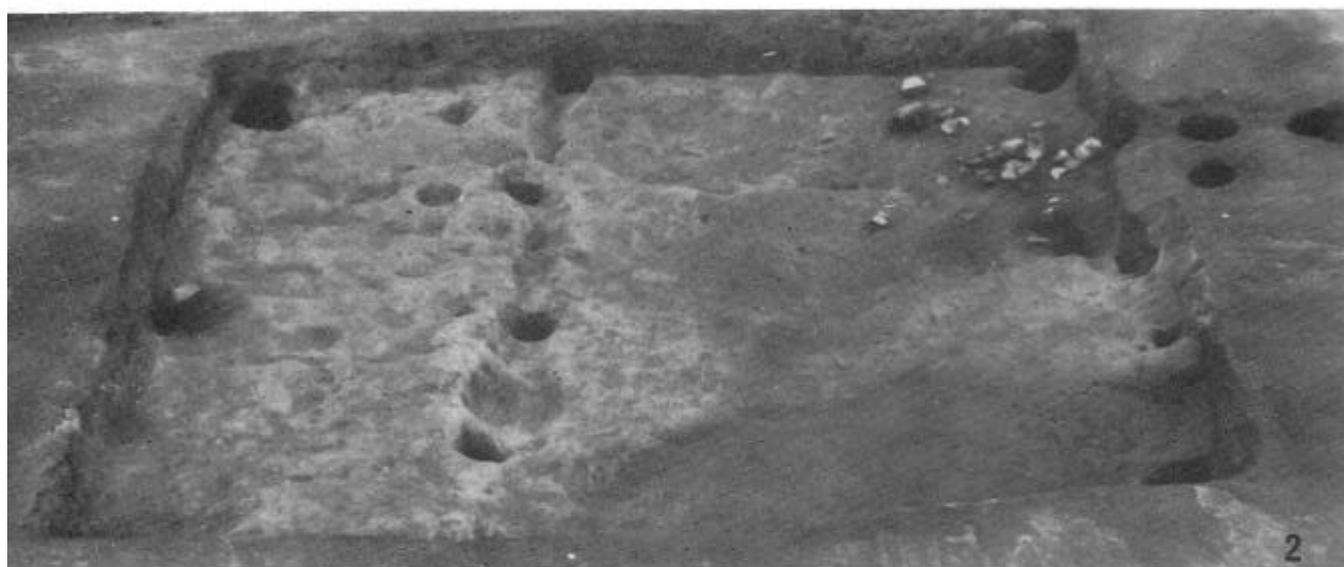
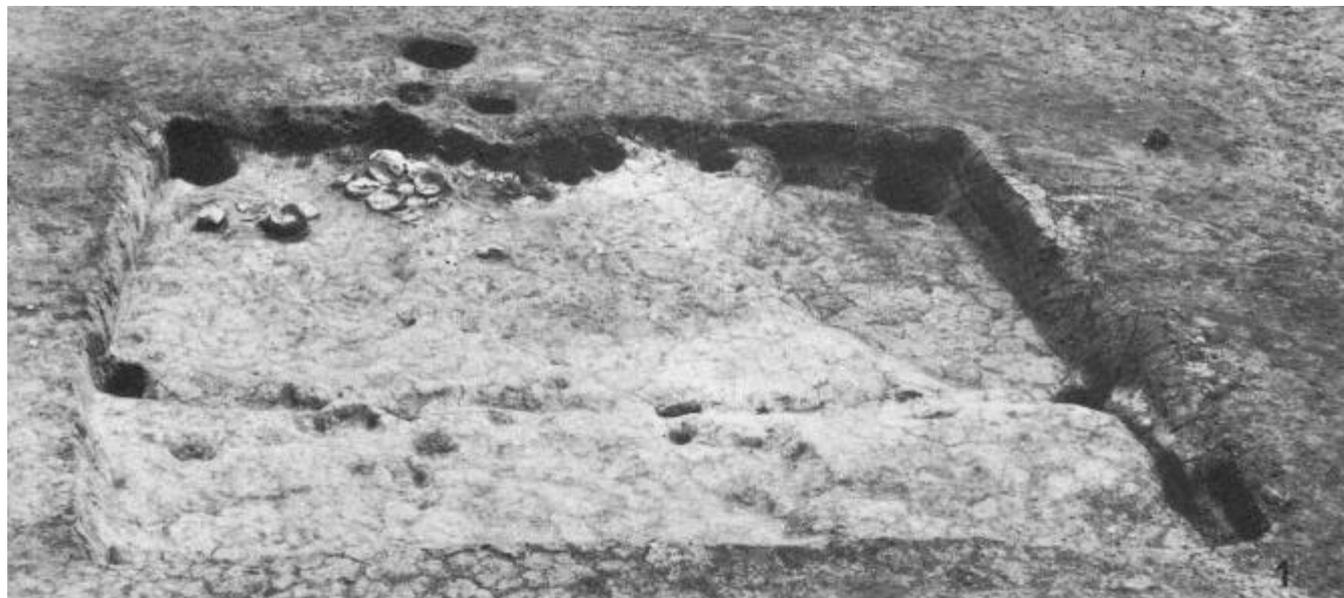
図版28 (1)・(2) 縄文時代晩期の遺物包含地



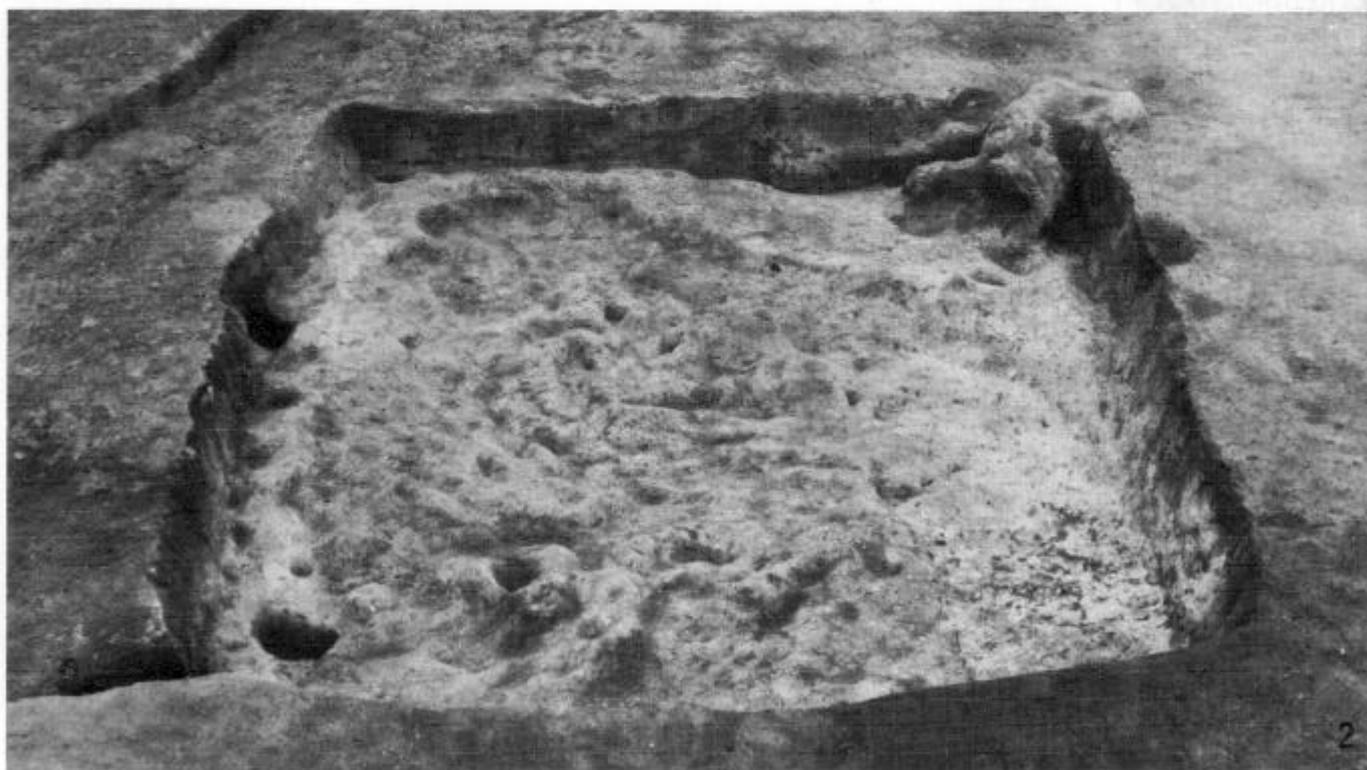
図版29 (1)~(3) 縄文時代晩期の遺物出土状態 (1)



図版30 (1)~(4) 縄文時代晩期の遺物出土状態 (2)



図版31 (1) SI 01 (西▶東) (2) SI 01 (南▶北) (3) 遺物出土状態

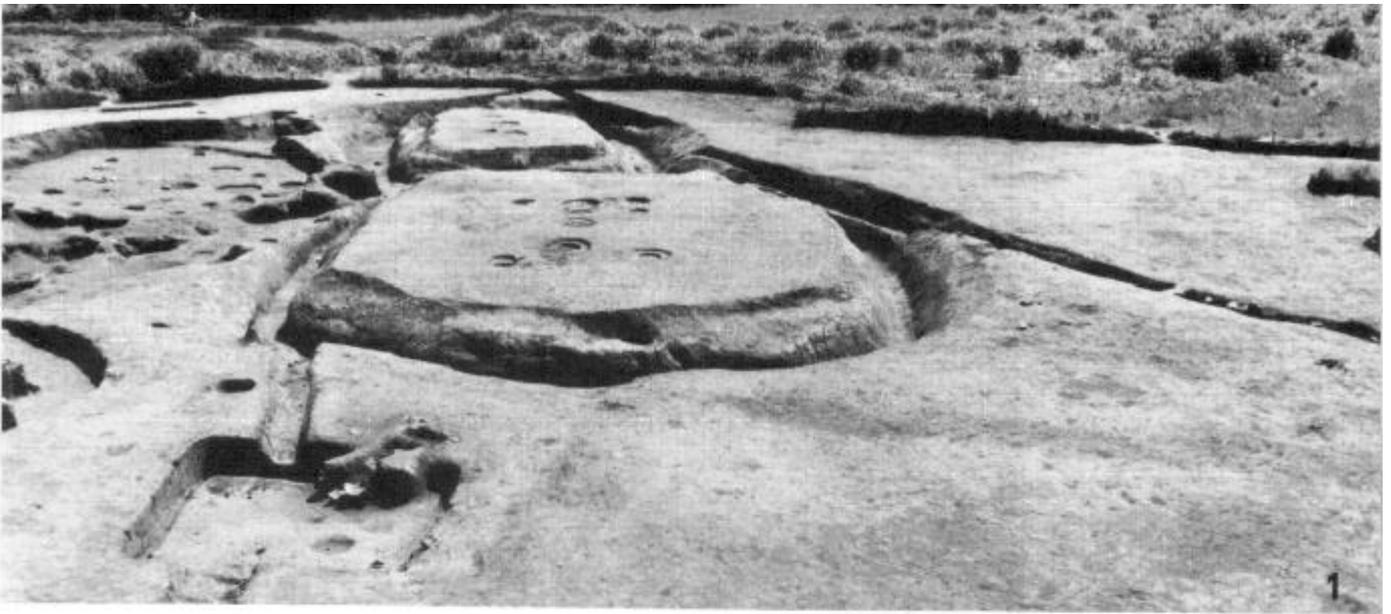


図版32 (1) SI 02 (南▶北) (2) SI 03 (西▶東)



図版33 (1) SI 04・SD12の遺構確認面(西▶東)

(2) SI 04・SD12(西▶東)



图版34 (1) SD 14·16 (南▶北) (2) SD 14·16 (北▶南)



図版35 (1) SD 02 (南▶北)

(2) SD 02 遺物出土状態



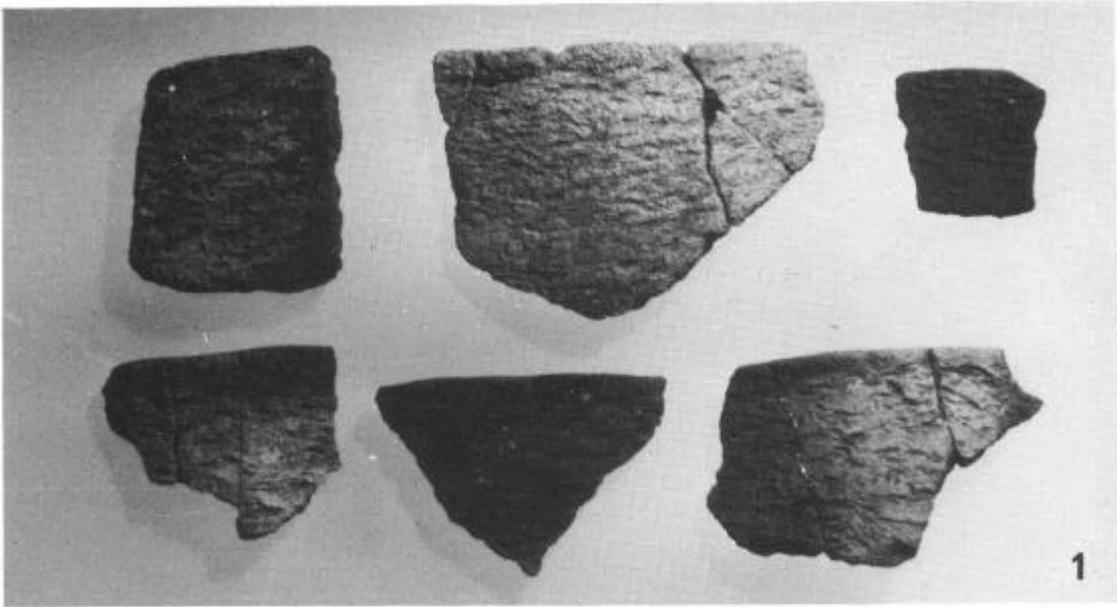
1



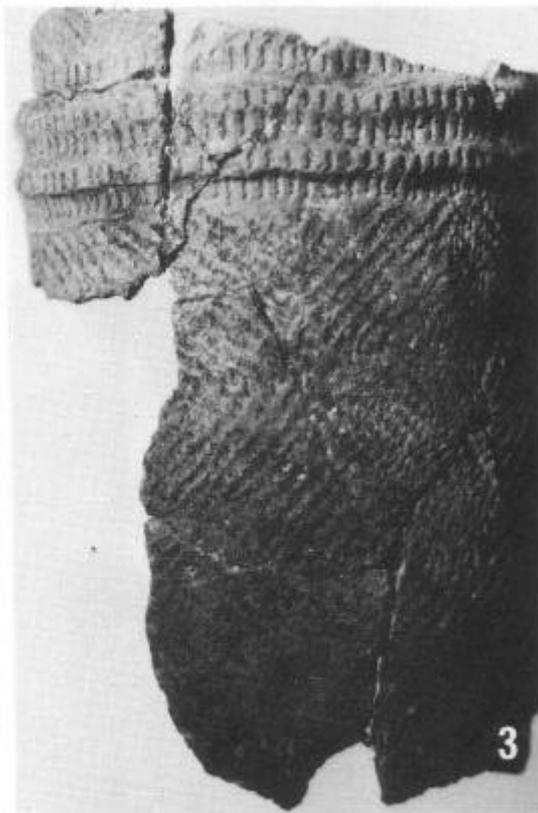
2

図版36 (1) SD 03・04 (西▶東)

(2) SD 03 遺物出土状態



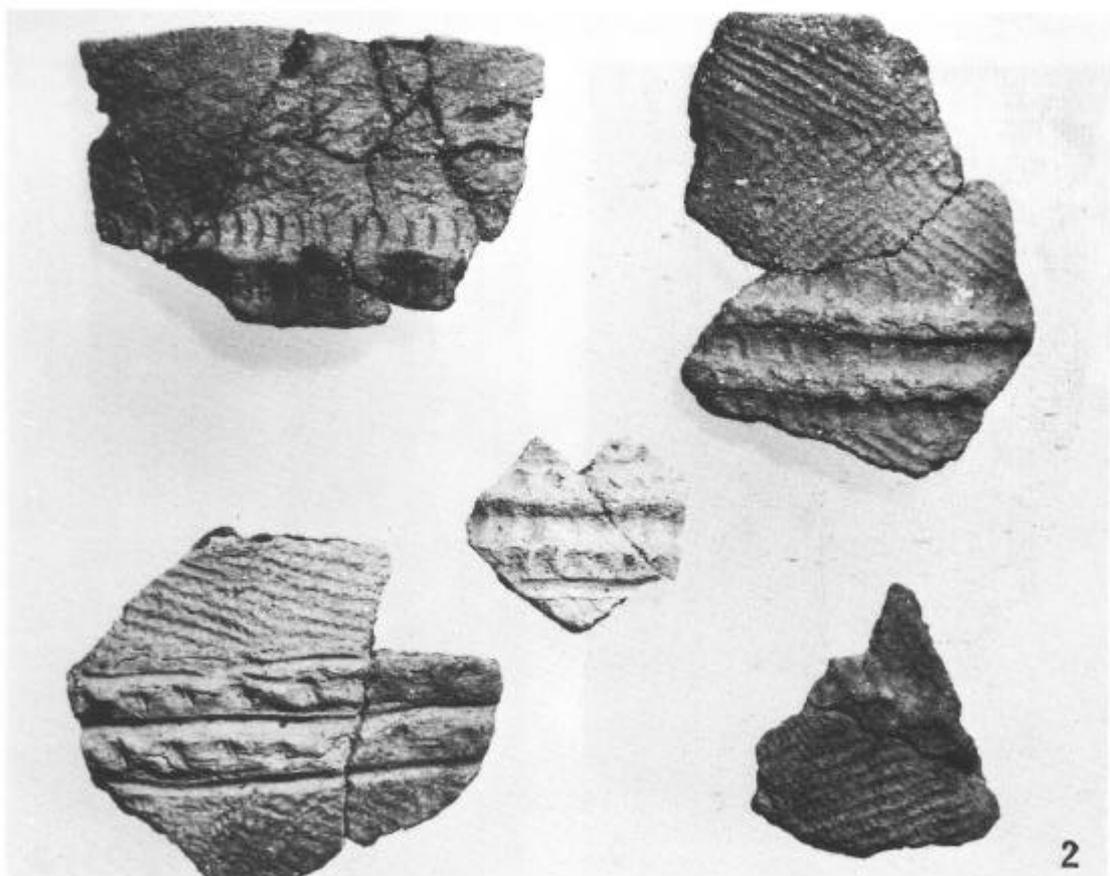
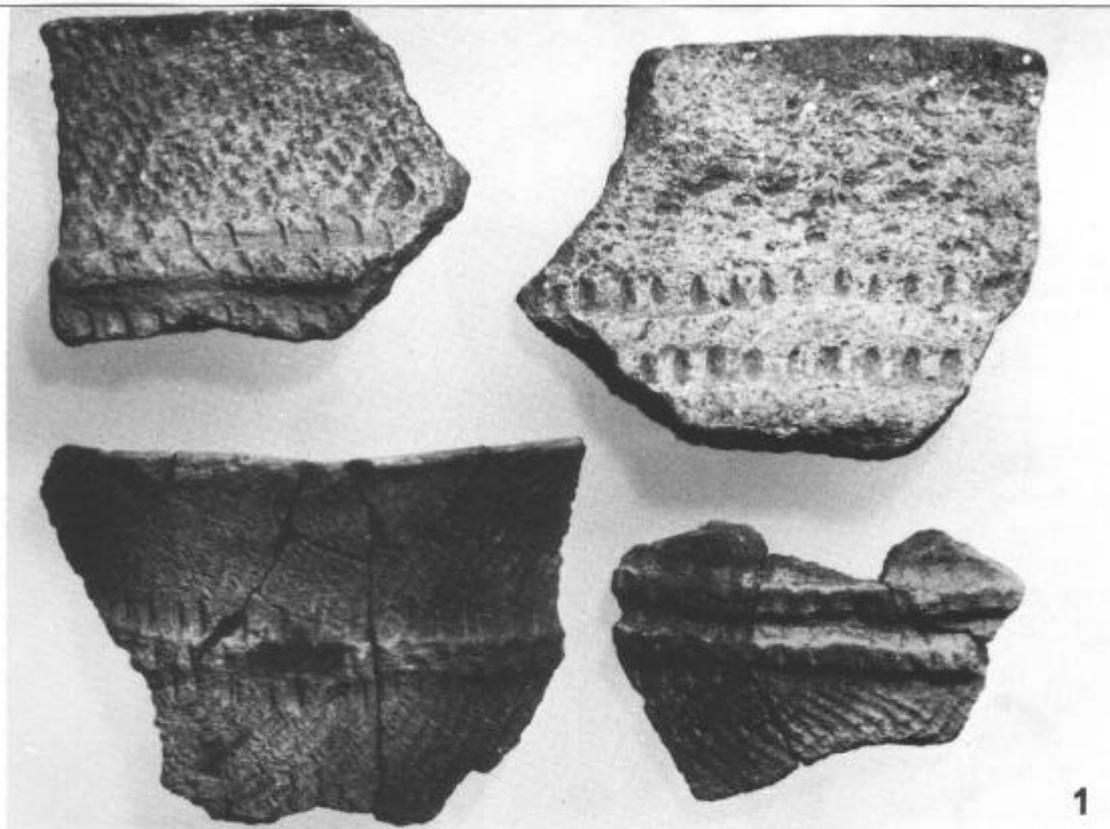
SKF47



SKF47

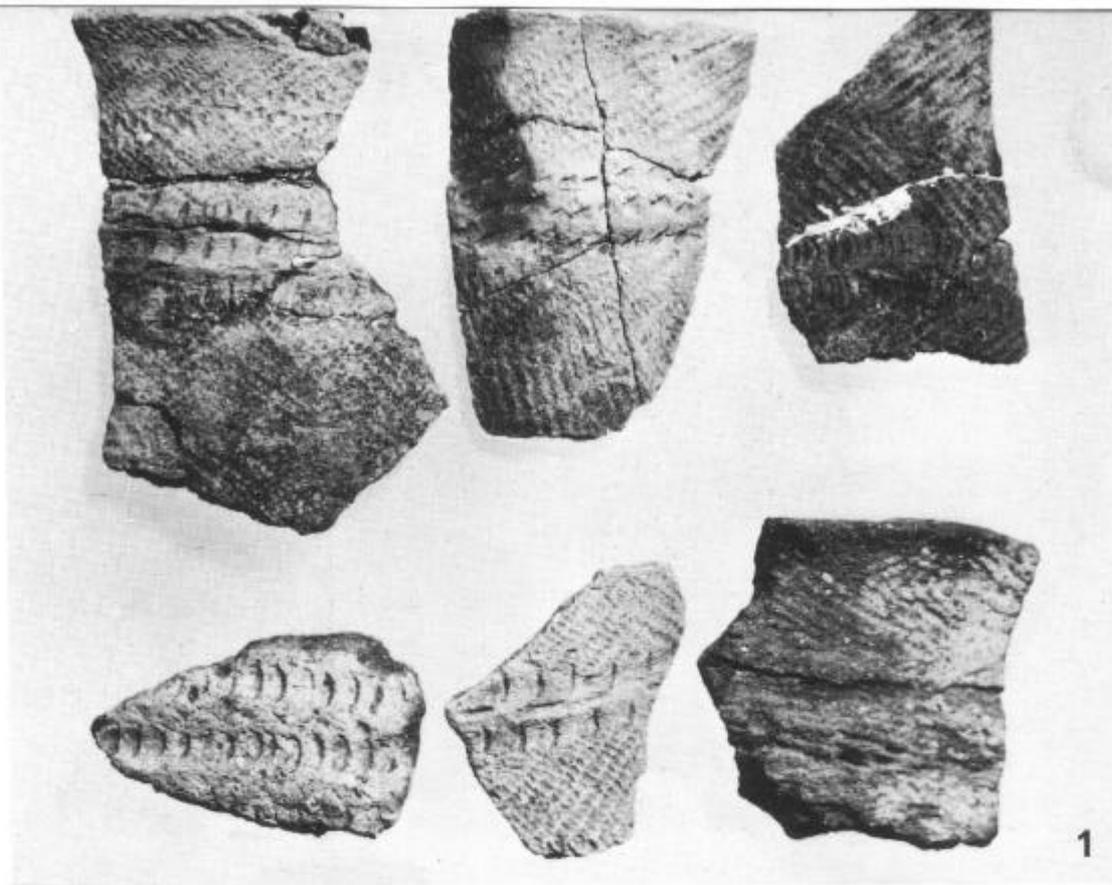
図版37 縄文時代前期の土器 (1)

(1)・(2) 第1類土器 (3) 第2a類土器



図版38 縄文時代前期の土器 (2)

(1)・(2) 第2a類土器



SKF 98



SKF 95

図版39 縄文時代前期の土器 (3)

(1) 第2a類土器 (2)・(3) 第2c類土器



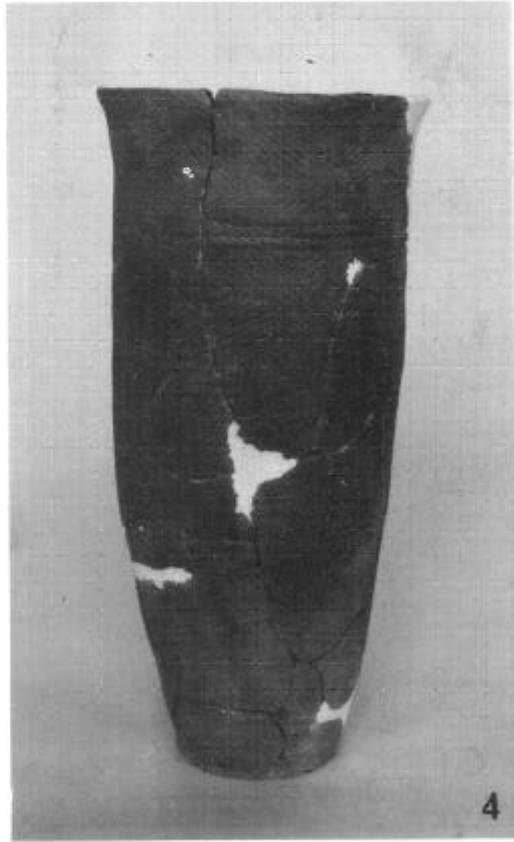
SKF44



SKF95



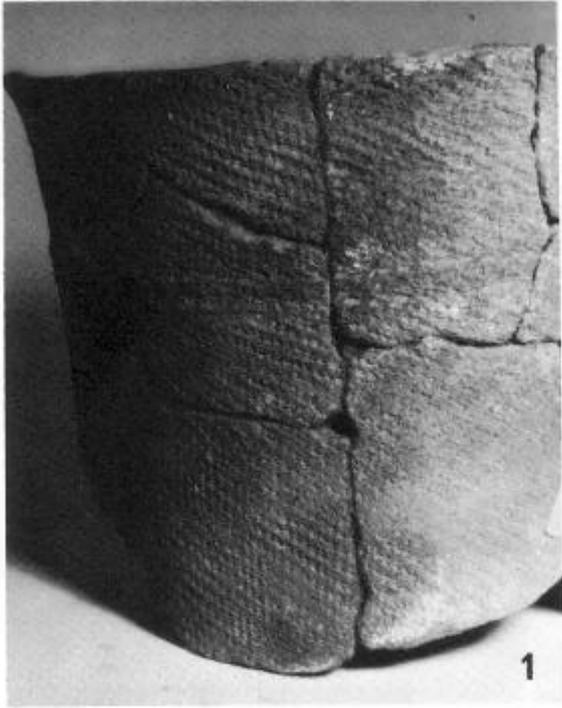
SKF98



SKF08

図版40 縄文時代前期の土器 (4)

(1)~(4) 第3類土器



SKF 90



SI45



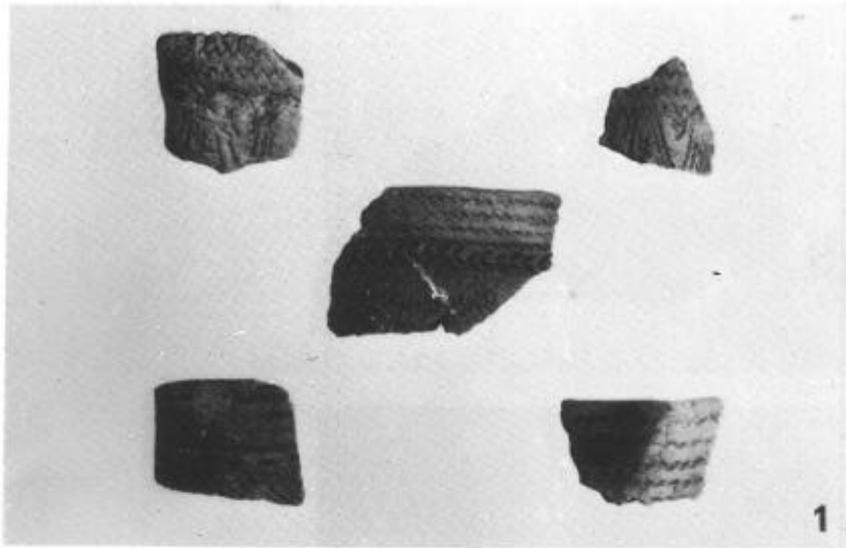
SKF 95



SKF 81

図版41 縄文時代前期の土器 (5)

(1)~(4) 第3類土器



S109



S141

図版42 縄文時代前期の土器 (6)

(1)・(3) 第4類土器



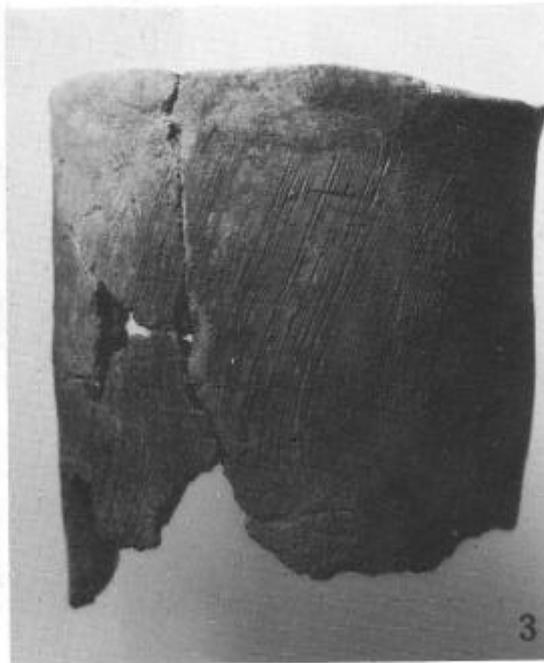
1

SI44



2

SI18



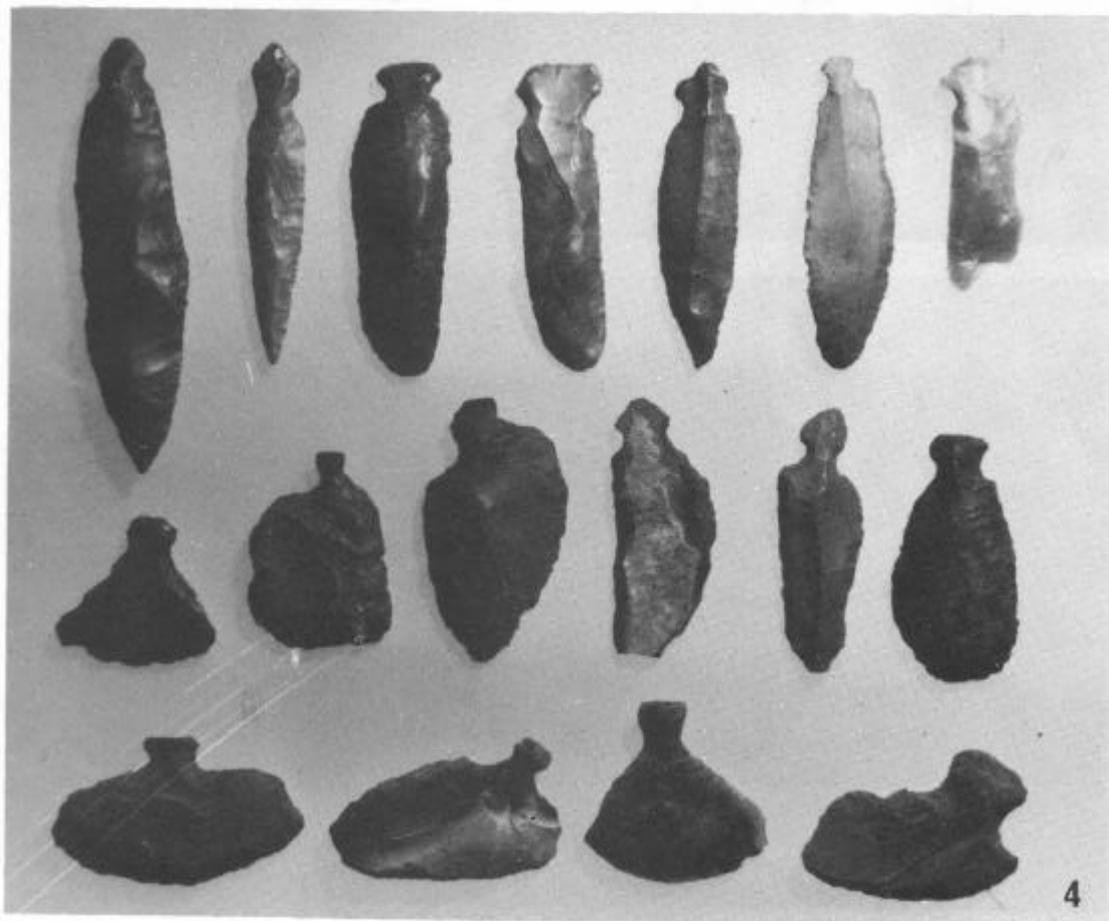
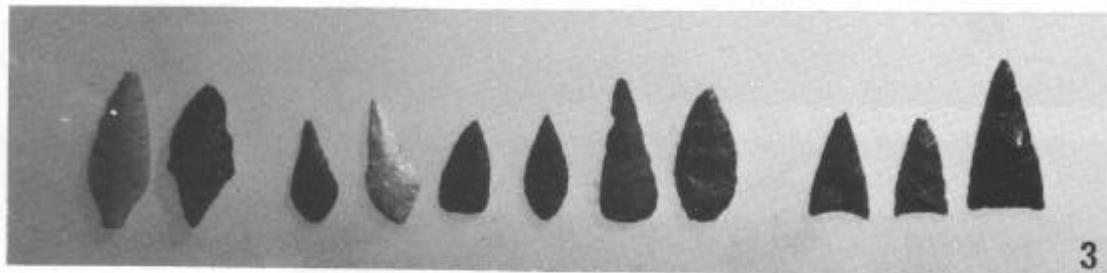
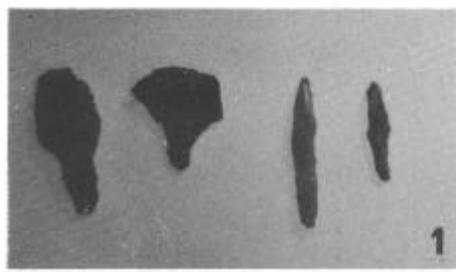
3

SKF44

図版43 縄文時代前期の土器 (7)

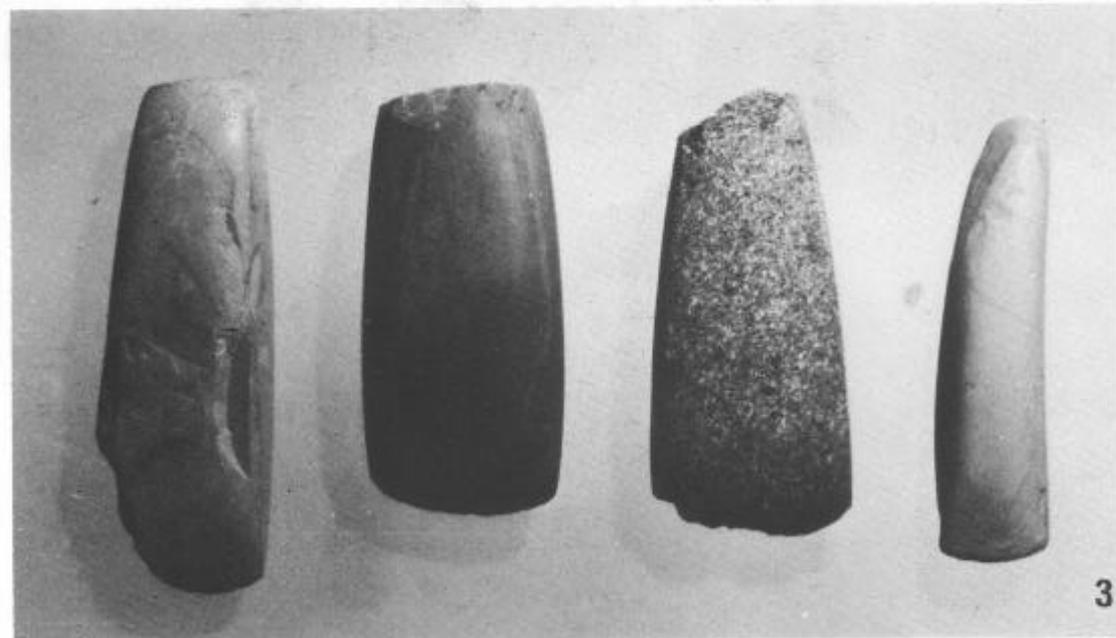
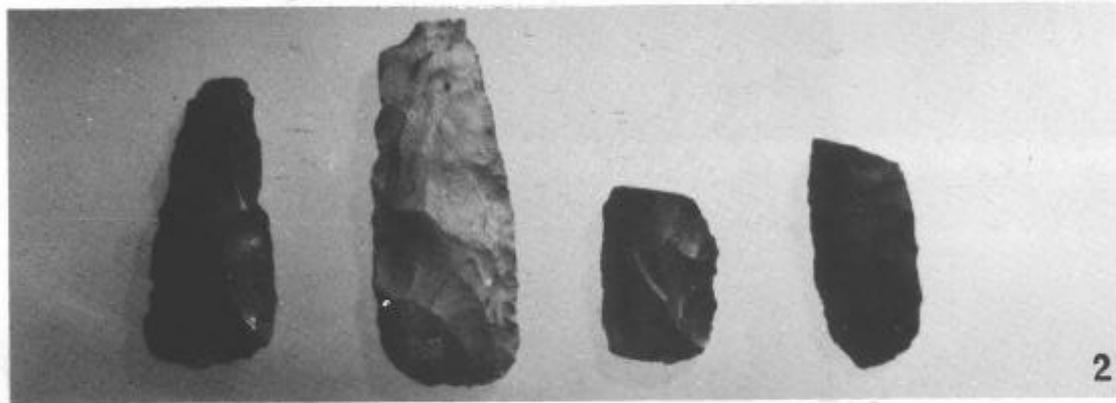
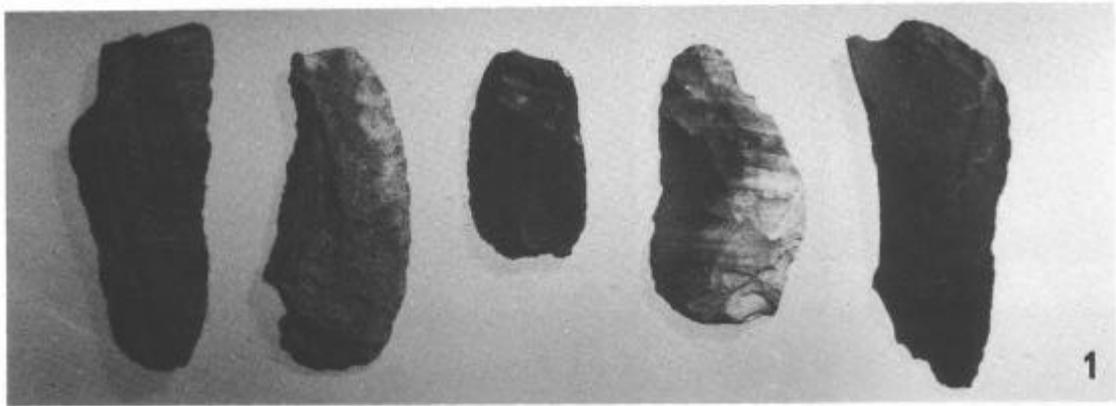
(1) 第5類土器 (2) 第6類土器

(3) 第7類土器



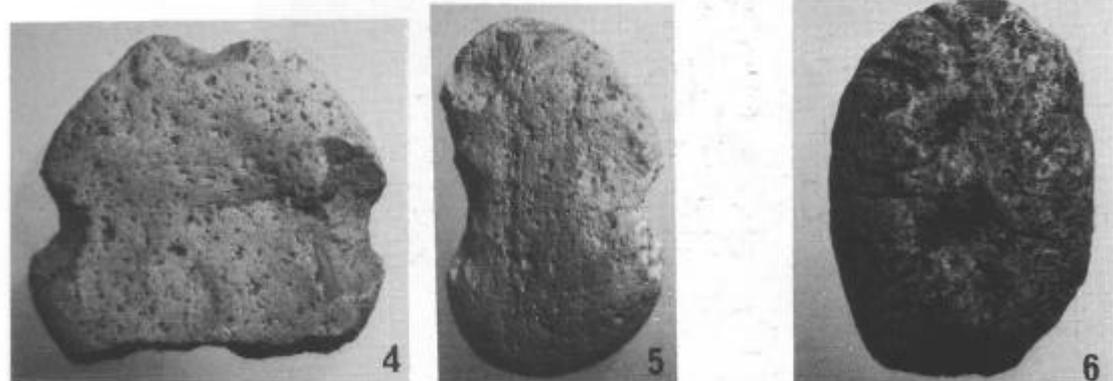
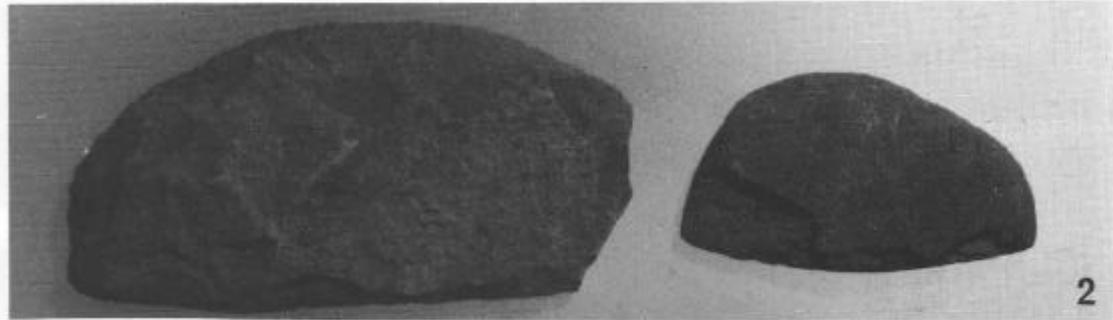
図版44 縄文時代前期の石器 (1)

(1) 石錐 (2) 石鏃 (3) 石匙



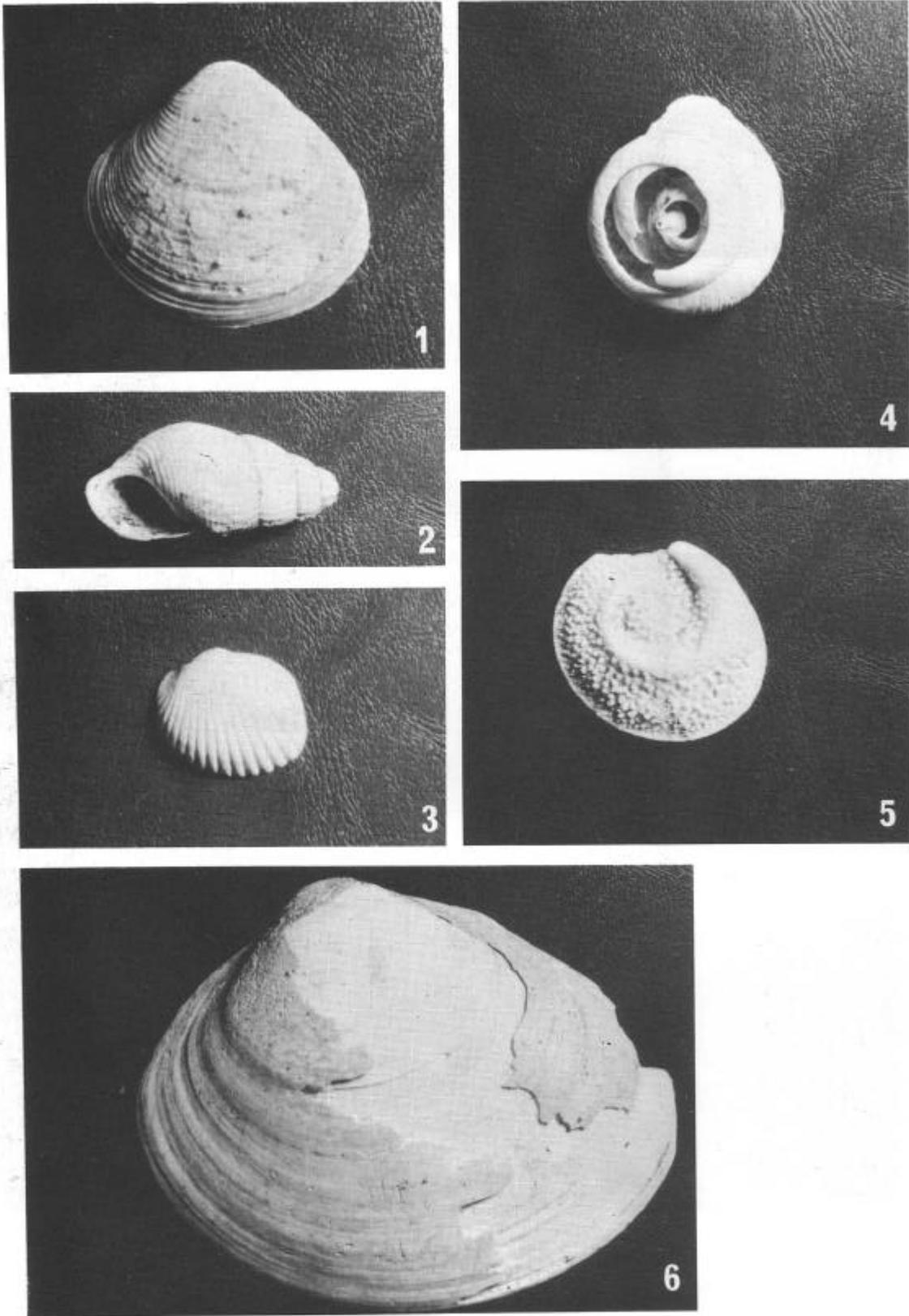
図版45 縄文時代前期の石器 (2)

(1) 不定形石器 (2) 石籠 (3) 石斧



図版46 縄文時代前期の石器 (3)

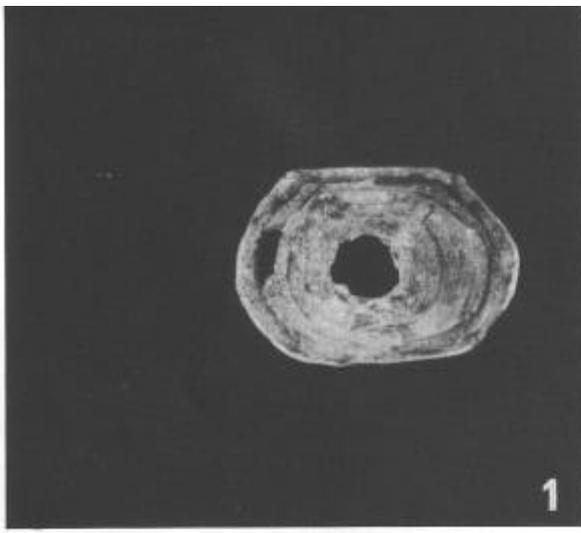
(1)~(3) 扁平打製石器 (4)・(5) 石錘 (6) 凹石



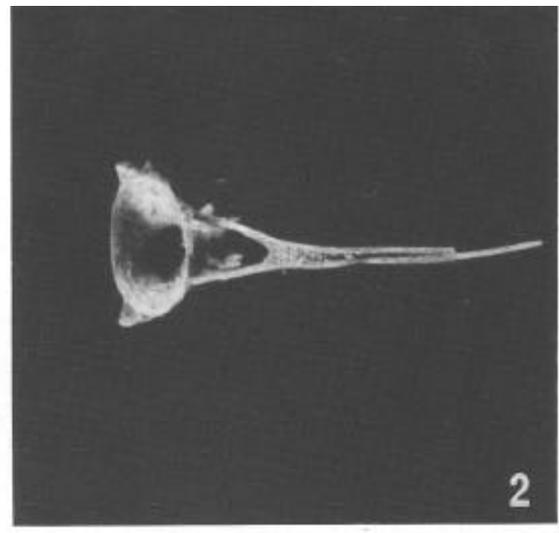
図版47 フラスコ状ビット検出の貝類 (約1.3倍)

(1) ヤマトシジミ (2) カワナ (3) サルボウ

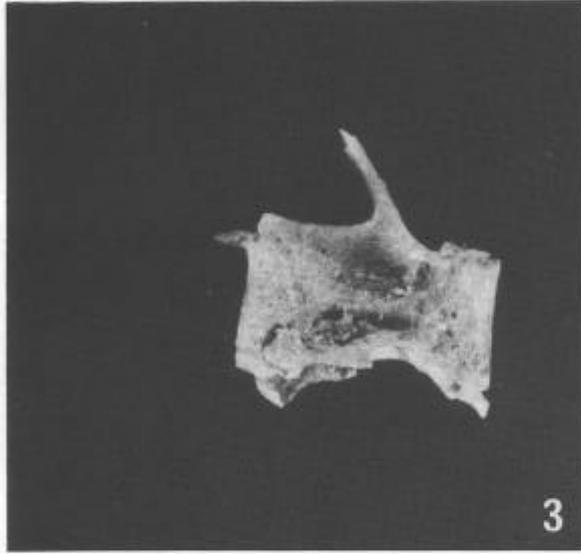
(4) ヒダリマキマイマイ (5) サザエのふた (6) ハマグリ



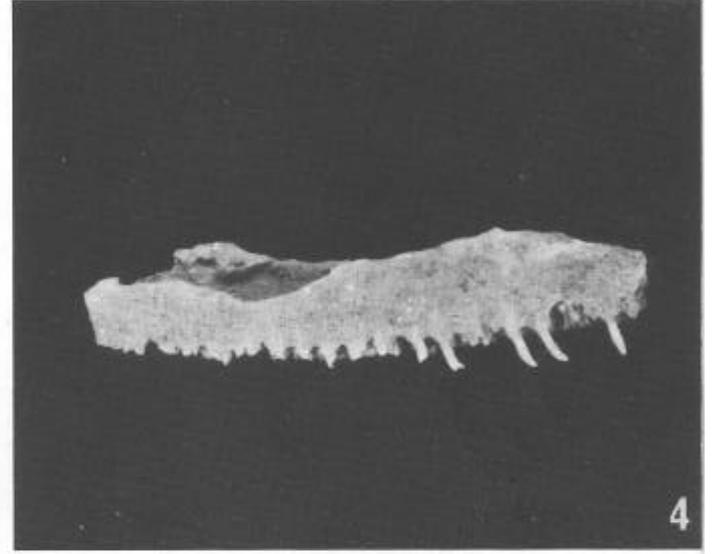
1



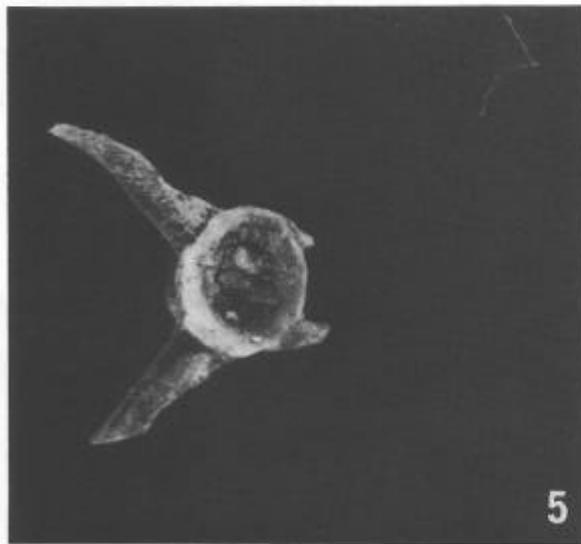
2



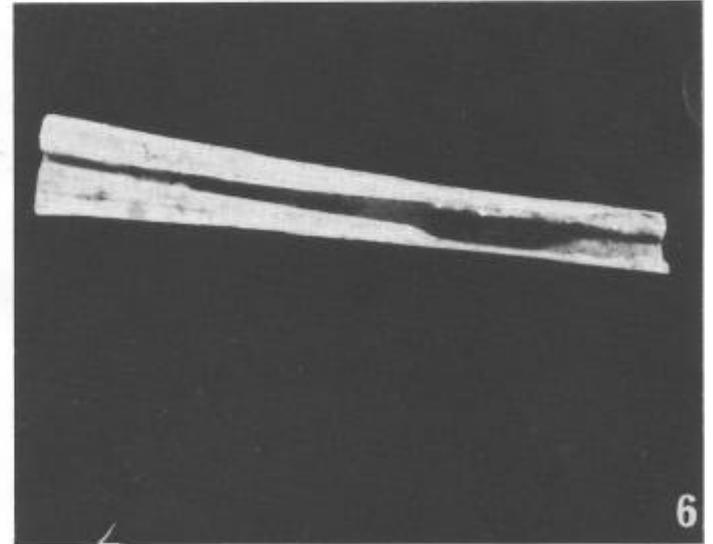
3



4

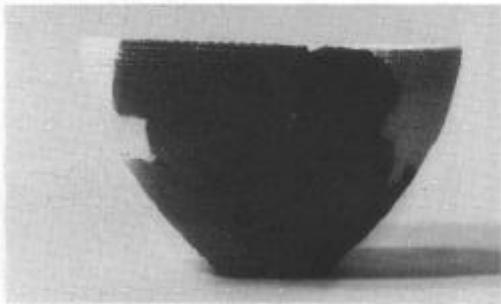
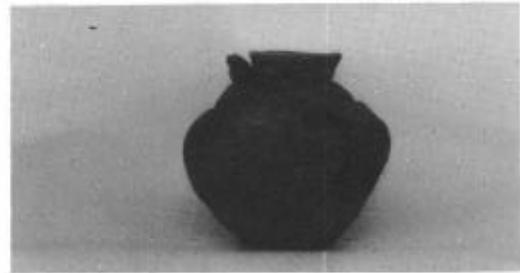


5

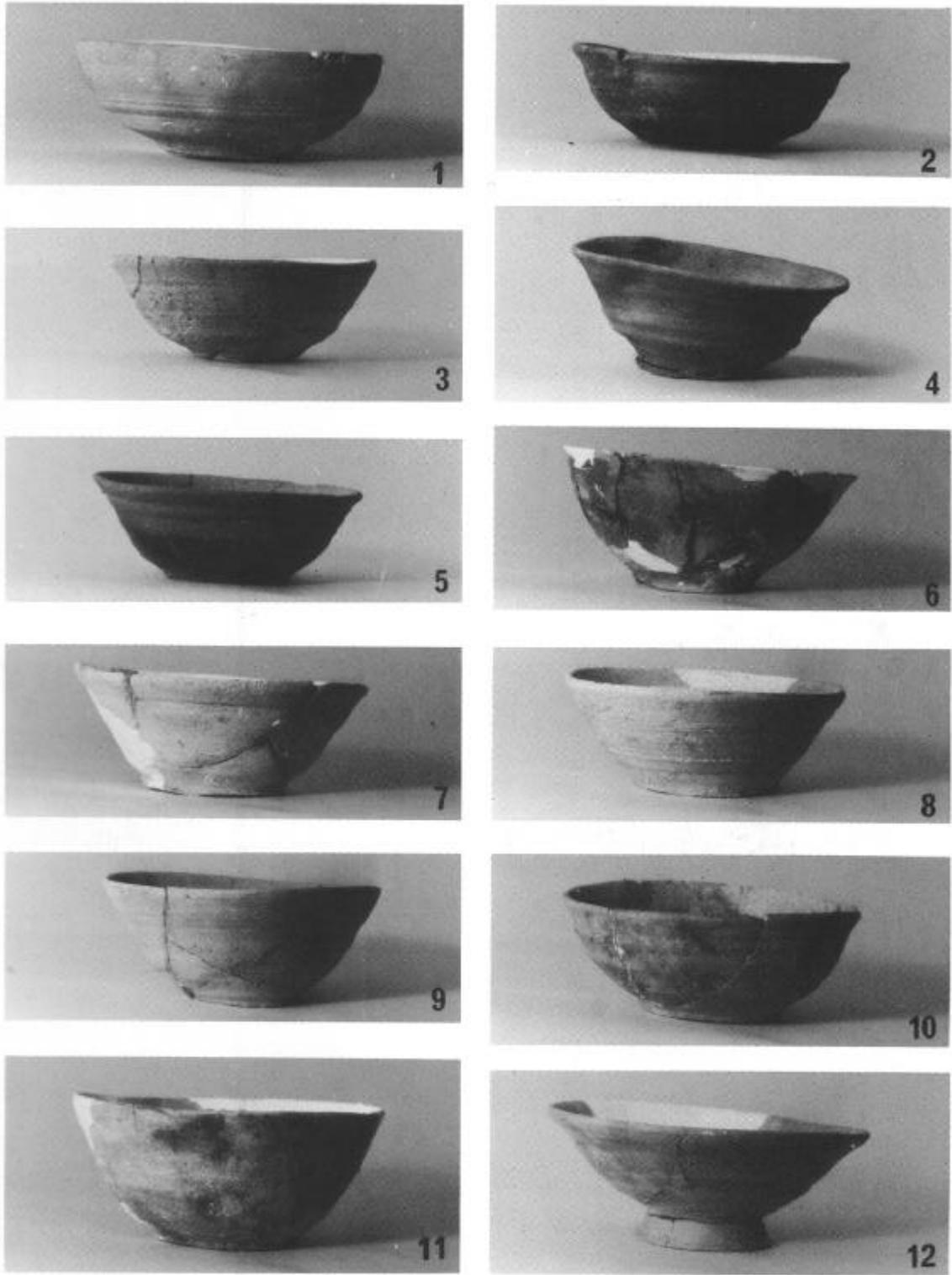


6

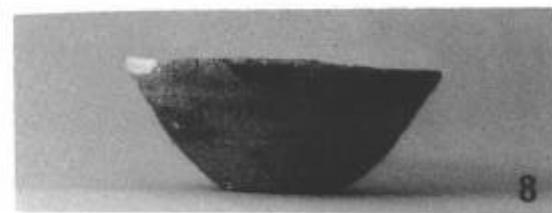
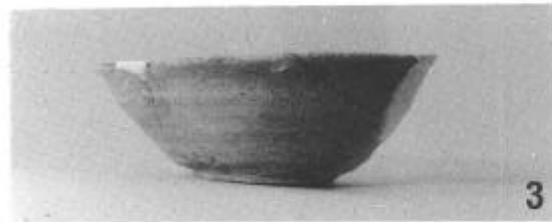
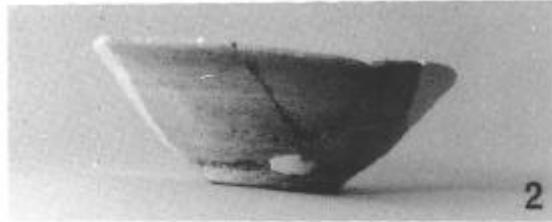
図版48 貝層から検出された魚骨等 (約80倍)



図版49 (1)~(8) 縄文時代晩期の土器

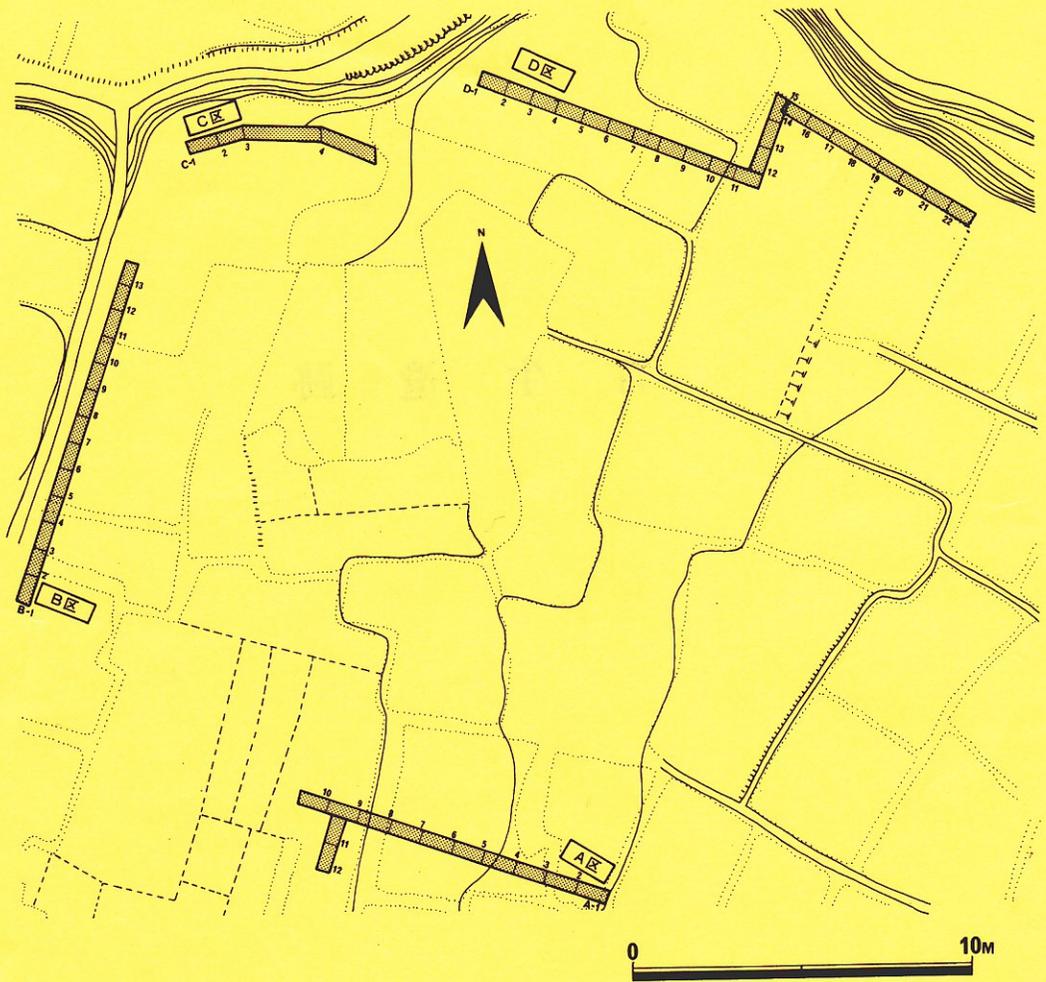


图版50 (1)~(12) SI 01 出土土器



图版51 (1)~(5) SI 02 出土土器 (6) SKI 01 出土土器
(7) SD 02 出土土器 (8) SD 03 出土土器 (9) 中世陶器

竹 生 遺 跡



第1図 竹生遺跡の地形と発掘調査区

I はじめに

1 発掘調査に至るまで

竹生遺跡は秋田県能代市竹生字竹生に所在する。調査は、国営能代開拓建設事業の一環として遺跡内に導水路工事が計画されたため、記録保存を目的に、事前に行なわれた。

2 調査の組織と構成

遺跡名 竹生遺跡

遺跡所在地 秋田県能代市竹生字竹生

調査期間 昭和55年7月23日～8月30日

調査面積 2,000 m²

調査主体者・調査員・補佐員・補助員・作業員・調査協力機関 杉沢台遺跡参照

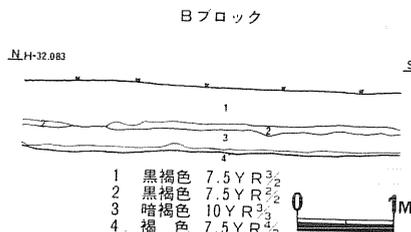
II 遺跡の立地と環境 杉沢台遺跡参照

III 発掘調査の概要

1 遺跡の概観

竹生遺跡は、南へのびる台地の北縁部に位置する。台地は平坦で東方に広がり、標高はほぼ30mを保つ。遺跡地の現状は畑地で、調査区域に沿って南北に農道が通っている。

遺跡の面積は、昭和55年度の範囲確認調査で、約53,000 m²と確認されている。遺跡の地層は、1層が黒褐色の耕作土（約40cm）、2層は部分的に存在する黒褐色土（約9cm）、3層は比較的軟かい暗褐色土（約20cm）、4層がローム層である。



第3図 竹生遺跡の地層（B区3-4）

2 調査の方法

調査区域を含む広範囲にわたり、方位を磁北方向に一致させ、20m×20mのグリッドを設定。これに基づき4m×8mのグリッドを設定した。調査地は4ヶ所に分割されており、南からそ

れぞれA区、B区、C区、D区とし、さらにグリッド毎に算用数字を順に付す。

遺構の記号は以下とする。

竪穴住居跡……………SI	竪穴状遺構……………SKI
土 壙……………SK	溝……………SD
おとし穴状遺構……………SKT	カマド（焼土状遺構を含む）…SXF

3 調査の経過

調査期間、7月23～8月30日。

7月23日、B区グリッド設定、同時に表土除去開始。25日、SIO1検出。以後土壙、溝の確認相次ぎ。精査に入る。30日、B-3グリッドで鋤先検出。8月4日、SKI 01（製鉄遺構）検出。B区の遺構実測開始。6日、SXF04検出。11日、D区グリッド設定及び調査開始。表土は浅い。B区は実測を平行して行なう。12日、遺構確認。精査に入る。18日、D-16.17にてSXF07～10検出。一部D区の実測開始、D区実測継続。25日、C-5でSXF13～17が集中して検出。精査。26日、B、D区遺構実測終了。直ちにA、C区の実測開始。29日調査と平行して資材撤去開始実測、写真の補足作業を急ぐ。30日、調査及び資材撤去終了。

IV 調査の記録

1 遺構と遺物

① 竪穴住居跡

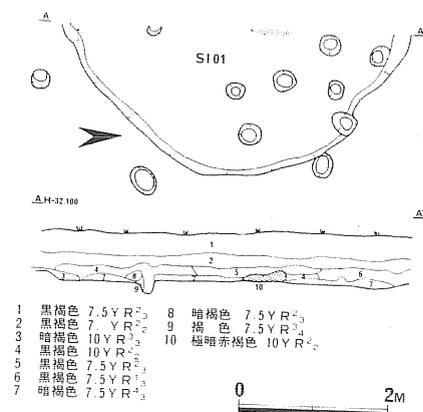
SI 01 遺構西面部は範囲外で未確認。平面プランはほぼ円形を呈すと思われ、直径460cm・深さ18cmで浅い。中央に地床炉を備える。底面は堅くしまっている。柱穴状ピットは付属すると思われるが、関連性は明確でない。遺物は縄文土器数点で、磨耗が激しく、時期は不明である。

② 竪穴状遺構

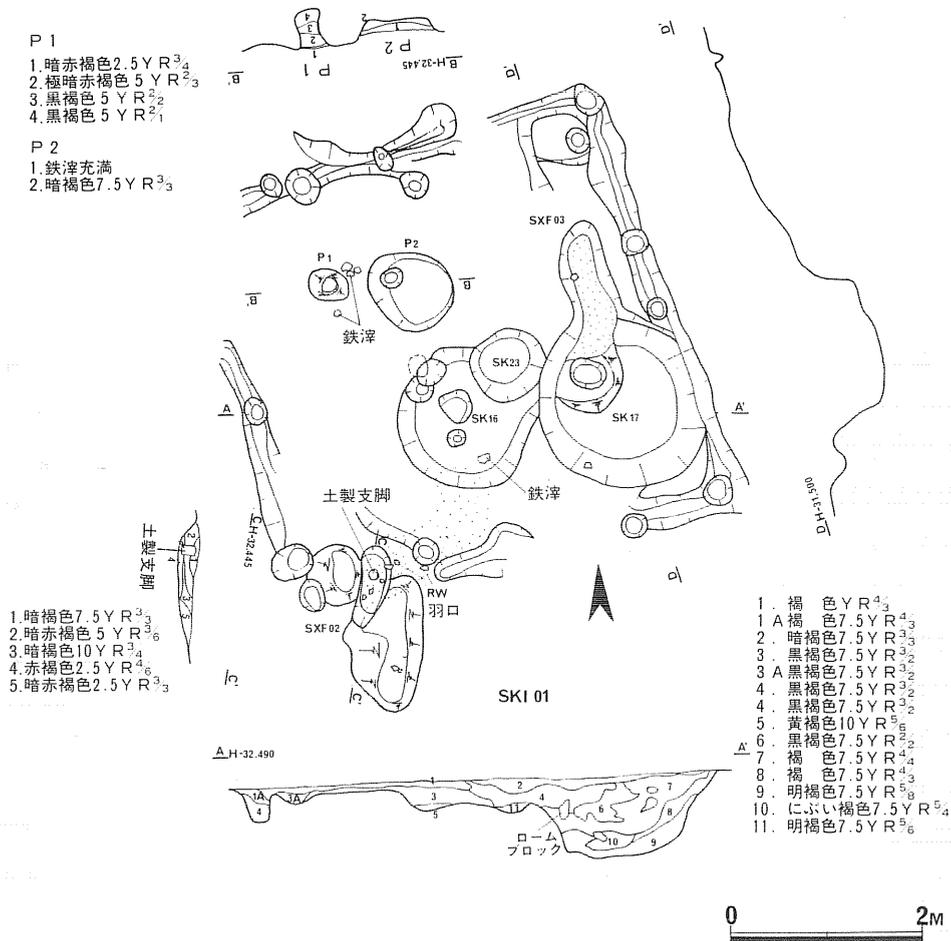
SKI 01 方形を呈する竪穴状遺構で内壁に沿い周構がめぐり、各コーナーに隅柱を有す。床面は堅くしまっている。遺構はその内部にP₁、P₂、SXF 03、SKI 16、17、23を伴い東面寄りにSXF 02を付設、いずれも構築時期を同じくする。P₁は現存する頂部直径32cm、深さ40cmで周囲が盛り上がり、上面で多量のスサ入り粘土、及び鉄滓を検出。埋土は上層で多量の焼土、炭化物鉄滓を含有しており、部分的にこれらは互層を示している。中層以下では鉄滓が少量になり、

炭粒を多く含む。P₂は主として1層中に鉄滓が充満。その総量8kg。底面は堅くしまっている。遺物は埋土より、少量の土師器杯片。

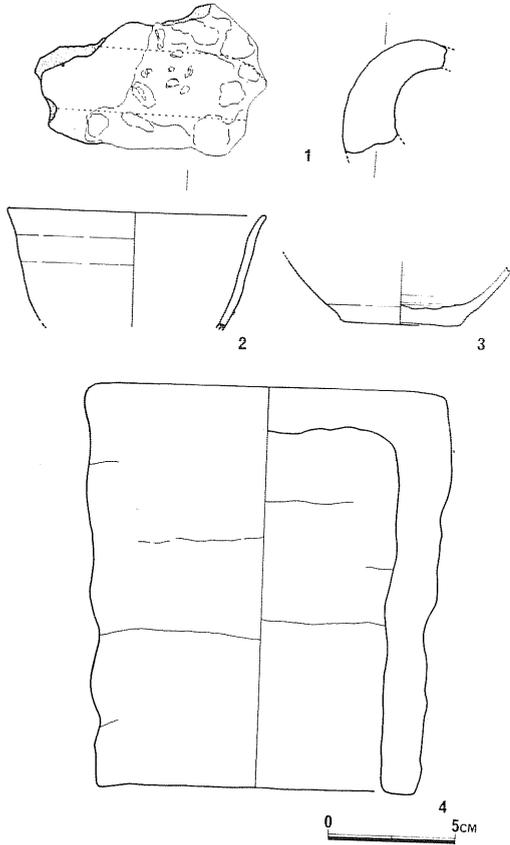
SK 17は北壁にSXF03を付設する。埋土は一部をSK16と同じくし、底面は堅くしまり、少量の鉄滓を付着。カマドは土壌斜面を掘りくぼんでなされ、その焼土は土壌底面まで流れ込み付着。SK 16は底面が凹凸を呈するが堅く、SK 17より1段高い。SK26は、SK 16と接合し1段低く球状に掘られている。いずれも埋土より土師器杯、甕片が、出土。



第4図 S101 実測図

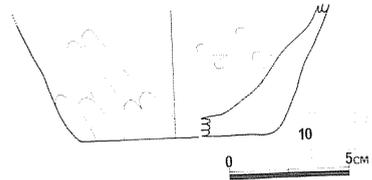


第5図 SK01 (SK16. 17. 23. SXF02. 03. P 1. 2) 実測図

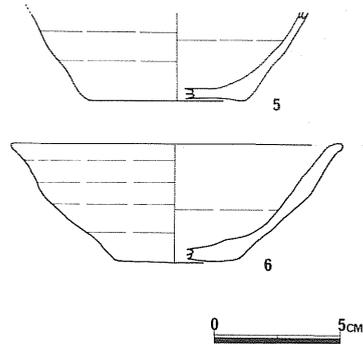


第6図 SXF 02 出土遺物

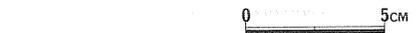
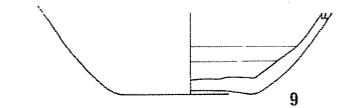
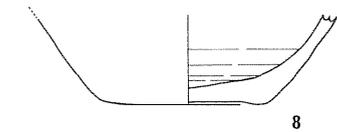
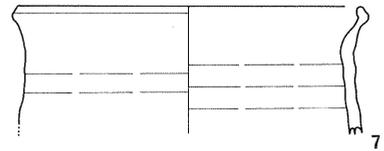
SXF 02 は竪穴状遺構に直接伴うもので、地山面を掘り込んで構築されている。燃烧部はかなりの熱化を受け、側壁は部分的に表面まで赤褐色の色調を示す。燃烧部内に土製支脚、側壁に羽口を挿入している。遺物は土師器杯甕片が埋土より検出。①・②・③・④はSXF 02 出土。①は羽口、部分的に欠損しており、②は土師器（赤褐色土器杯で、全体が淡い赤褐色を示し、内湾気味に立ち上がる。胎土は緻密で器厚は薄い。無調整で回転糸切りに



第7図 SXF 03 出土土器



第8図 SK 16 出土土器



第9図 SK 17出土土器

よる。③は土師器杯で摩耗が激しく底部の痕跡を留めない。色調は、灰白色で器厚薄く内湾気味に立ち上がる。④は土製支脚。輪積み成形され、その痕跡を部分的に留める。⑤・⑥はSXF 03 出土。⑤は回転糸切り無調整の須恵器杯。直線的に立ち上がり、器厚薄く、胎土は緻密。底部一部に自然釉が付着。⑥は回転糸切り無調整の土師器杯。体部で内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反。⑦・⑧はSK 17埋土より、⑨は同底部より出土。⑦は土師器甕で、巻き上げの後口

7口整形され、器厚は薄い。口縁部はくの字状に外反。口唇部で直線気味に立ち上がる。胎土は緻密で焼成良好。⑧・⑨はいずれも土師器杯で内湾気味に立ち上がる。⑩はSK16埋土出土。土師器甕底部・底部外面に手持ちのヘラケズリを斜状になし、内面にヘラナデ痕を留める。

③ 溝状遺構

SD 01 傾斜は西→東。SK03と重複。時期的に溝が先行。掘り込みは船底状(∩)になされる。遺物は埋土より土師器甕片。

SD 02 傾斜はゆるく東→西。SD07と重複。時期的に02が先行。掘り込みは船底状。遺物は埋土より少量の土師器杯片。

SD 03 比較的中広く深く掘られ、壁、底面共堅くしまっている。傾斜方向は東→西へゆるやかになされる。掘り込みは船底状で、底面に拳大の石を数個検出。SXF01と重複し、時期的に01が先行する。埋土は、部分的に焼土、炭化粒を含み、SXF01より流れ込んだものと思われる。遺物は埋土より、土師器杯片を検出。遺構西面部に集中している。

SD 04 短い溝で傾斜方向は北→南。SK15と重複。溝が先行する。掘り込みは平底状(∟)。遺物未検出。

SD 05 調査区を南北斜状に貫く、長い溝である。確認段階で長さ25m。両端は範囲外のため未確認。壁、底面共、凹凸を呈し荒れているが、硬くしまっている。傾斜方向は、比較的勾配を持って北→南。部分的に底面に拳大の石が附着、B-9グリット内で、それが著しい。埋土は暗褐色土を主体とし、炭化物を少量含む。SK15・25と重複しており、前者は溝が、後者は土壌が先行する。掘り方は船底状。遺物は埋土より少量の土師器杯片。

SD 06 比較的中が細い溝だが、傾斜は、勾配を持ち、北→南。3基の土壌と重複し、SK9,11は溝が、SK12は土壌が、それぞれ時期的に先行する。壁、底面は凹凸を呈しかなり荒れている。埋土は1層よりなるが、部分的に炭化粒を多く含む。掘り方は船底状になされる。遺物は埋土からで、少量の土師器杯片及び須恵器杯片。

SD 07 傾斜方向はゆるく北→南。掘り方は船底状。遺物未検出。

SD 08 確認段階で長さ6m20cmと短かいが、南端はさらに続行すると思われる。掘り込みはしっかりしており、底面は硬い。遺物未検出。

SD 09・10合体している様相を呈し南北に長くのび、最も巾広く深い溝である。壁底面共堅くしまり掘り方はいずれも船底状。傾斜方向はやや勾配を持って北→南。SKI01と切り合い、上面確認では溝が時期的に先行。遺物は埋土からで、09は少量の土師器杯片、10は比較的量が多く土師器と共に須恵器甕片を検出。

SD 11 傾斜方向はゆるやかに南→北。SKI 01 と先端で切り合い消滅、時期的に溝が先行。掘り方は整ってなく凹凸を呈し、底面は硬い。遺物は埋土上層より土師器甕片及び少量の鉄滓

SD12 SKI 01に切られており、SK09・10と接続する可能性も考えられる。傾斜方向は北→南
遺物未検出。

SD13 SKI 01の西南部を貫いて、北→南へ傾斜を持つ。埋土には鉄滓、焼土を含み、SKI 01
から流入したものと思われる。掘り込みはU字状を呈し比較的深く35cm。遺物は埋土より少量
の土師器杯片。

SD14 傾斜方向は極めてゆるやかに西→東、SK 22と重複、溝が先行。掘り込みは浅く平底状
遺物未検出。

SK15 直線状になされ、傾斜方向は西→東。SK21と重複、溝が先行。掘り込みは平底状で遺
物未検出。

SK16 西端は途切れ、短かく浅い。傾斜はうかがえない。遺物未検出。

SK17 傾斜方向は勾配を持って北→南。掘り込みはしっかりとなされ船底状を呈す。埋土に
炭化物を含み、少量の土師器杯片、鉄滓を検出。

SD18 SD17と並行し掘り込みも似ている。傾斜方向は勾配を持って北→南。遺物未検出。

SD19 両端は途切れて短い。傾斜はほとんどない。掘り込みは平底状。遺物未検出。

SD20 東西に長くのびる溝で、D区では最も深く巾広い。傾斜方向は勾配を持って西→東。
埋土は部分的に焼土、炭化粒を含む。遺物は埋土から少量の土師器片、及び鉄滓。

SD21 グリッド内で途絶えている。傾斜はほとんどない。掘り込みは皿状。遺物未検出。

④ 土 壙

土壙は一部を除き浅く、その形状も類似したものが多く、掘り込み状況は、1、皿型状、2
深皿状 3、鍋底状になされ、その平面プランはA、円型（もしくは不整形円形）B、楕円型（
もしくは不整形楕円形）を呈するものが多い。

SK01 （A）円筒状に掘り込まれ、壁、底面共堅くしまっている。直径160cm、深さ120cm
遺物未検出、時期不明だが縄文期のものと思われる。

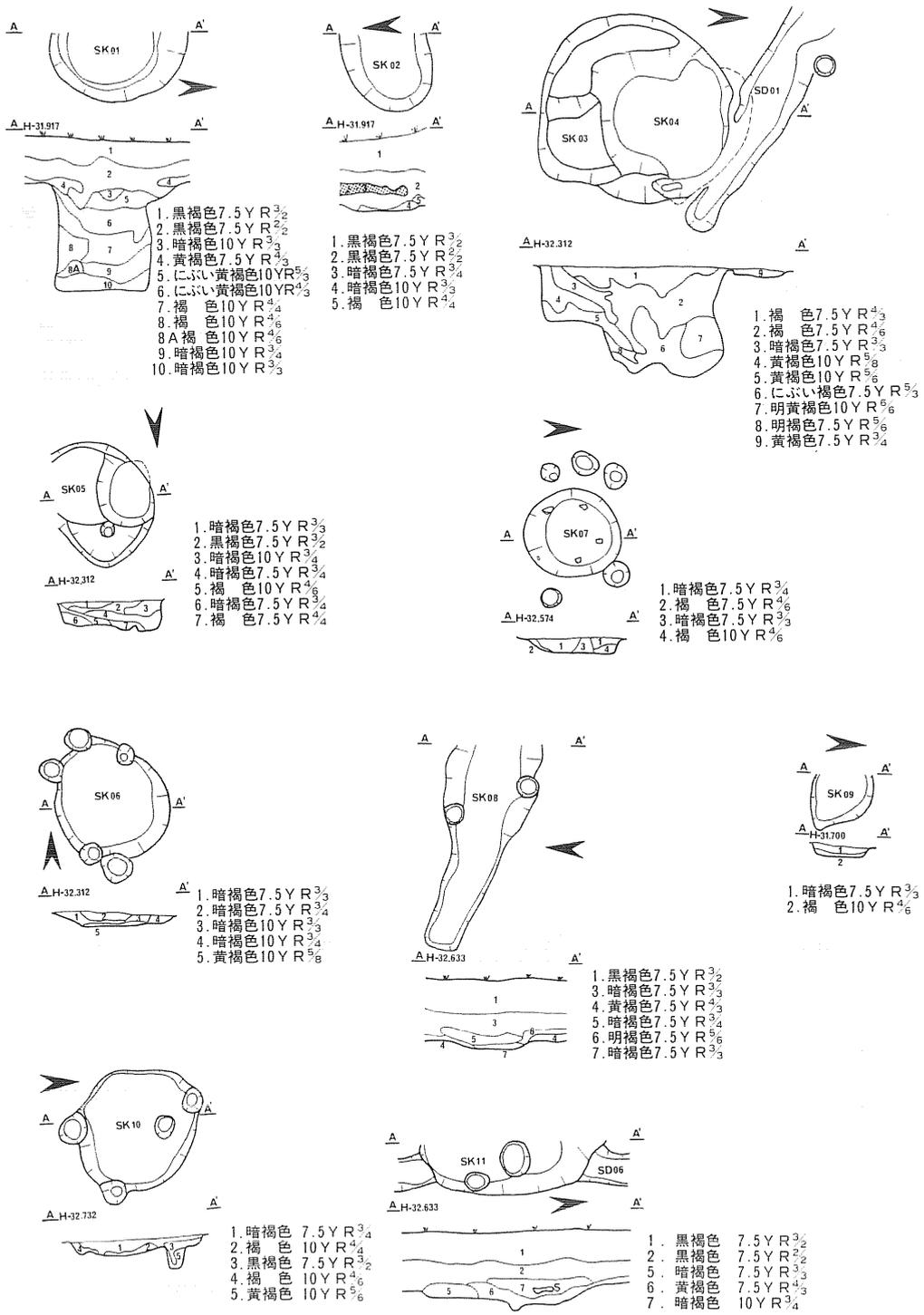
SK02 （1、B）深さ12cm。底面は堅い。遺構上面に焼土層を検出するが、埋土には含有せ
ず。遺物未検出。

SK03・04 両遺構は重複しており、SK04が現存する平面範囲で掘り込まれた後、SK 03が新た
になされている。直径220cm、深さは04が60cm、03が128cm。掘り込み
はSK04が南壁で垂直気味に、03が北壁でフラスコ状を呈し特に底面は凹
凸が激しい。

SK05 （B）壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦で堅くしまっている。
南北長軸148cm、深さ40cmで東面は1段深い。埋土は全層にわたり炭化
物及び焼土が混入している。特に2層には多量に含まれ遺物もこの層に

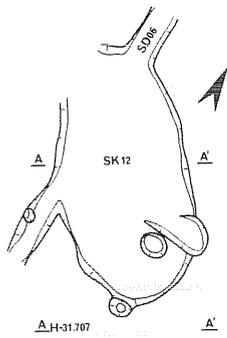


第10図
SK05 出土遺物



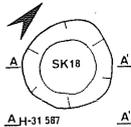
第11図 SK01~SK11実測図





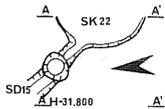
▲H-31.707

1. 黒褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
2. 褐色 10 YR $\frac{4}{6}$
3. 暗褐色 10 YR $\frac{3}{4}$



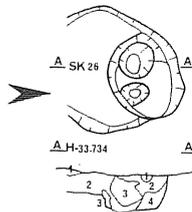
▲H-31.587

1. 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{4}$
2. 褐色 7.5 YR $\frac{4}{3}$
3. 褐色 7.5 YR $\frac{4}{4}$



▲H-31.800

1. 暗褐色 10 YR $\frac{3}{4}$



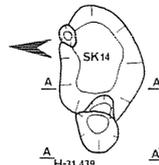
▲H-33.734

1. 黒褐色 7.5 YR $\frac{3}{2}$
2. 黒褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
3. 褐色 10 YR $\frac{4}{6}$
4. 明褐色 7.5 YR $\frac{5}{6}$



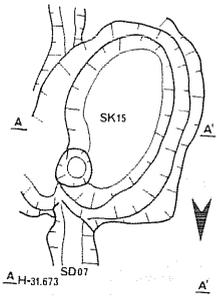
▲H-31.439

1. 褐色 7.5 YR $\frac{4}{3}$
2. 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$
3. 褐色 10 YR $\frac{4}{6}$

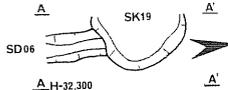


▲H-31.439

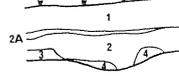
1. 黒褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
2. 黒褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
3. 褐色 10 YR $\frac{4}{4}$



▲H-31.673

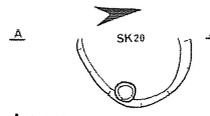


▲H-32.300

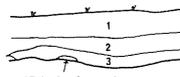


2A

1. 黒褐色 7.5 YR $\frac{3}{2}$
2. 黒褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
- 2A 黒褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
3. 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{4}$
4. 暗褐色 10 YR $\frac{3}{4}$

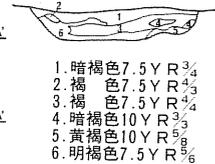


▲H-32.100



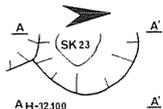
褐色土ブロック

1. 黒褐色 7.5 YR $\frac{3}{2}$
2. 黒褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
3. 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$

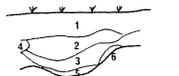


▲H-31.800

- 1層…暗褐色 10 YR $\frac{3}{3}$



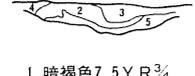
▲H-32.100



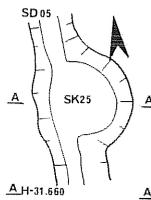
1. 黒褐色 10 YR $\frac{3}{2}$
2. 黒褐色 10 YR $\frac{2}{3}$
3. 黒褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
4. 褐色 10 YR $\frac{4}{6}$
5. 褐色 7.5 YR $\frac{3}{4}$
6. 黄褐色 10 YR $\frac{5}{6}$



H-31.881

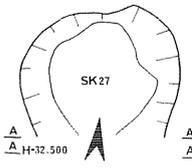


1. 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{4}$
2. 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$
3. 褐色 7.5 YR $\frac{4}{6}$
4. 黒褐色 7.5 YR $\frac{3}{2}$
5. 褐色 7.5 YR $\frac{4}{4}$

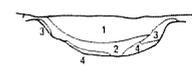


▲H-31.860

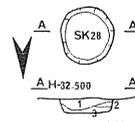
1. 暗褐色 10 YR $\frac{3}{3}$
2. 黒褐色 10 YR $\frac{2}{3}$



▲H-32.500



1. 黒褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
2. 黒褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
3. 暗褐色 10 YR $\frac{3}{3}$
4. 黒褐色 10 YR $\frac{3}{2}$

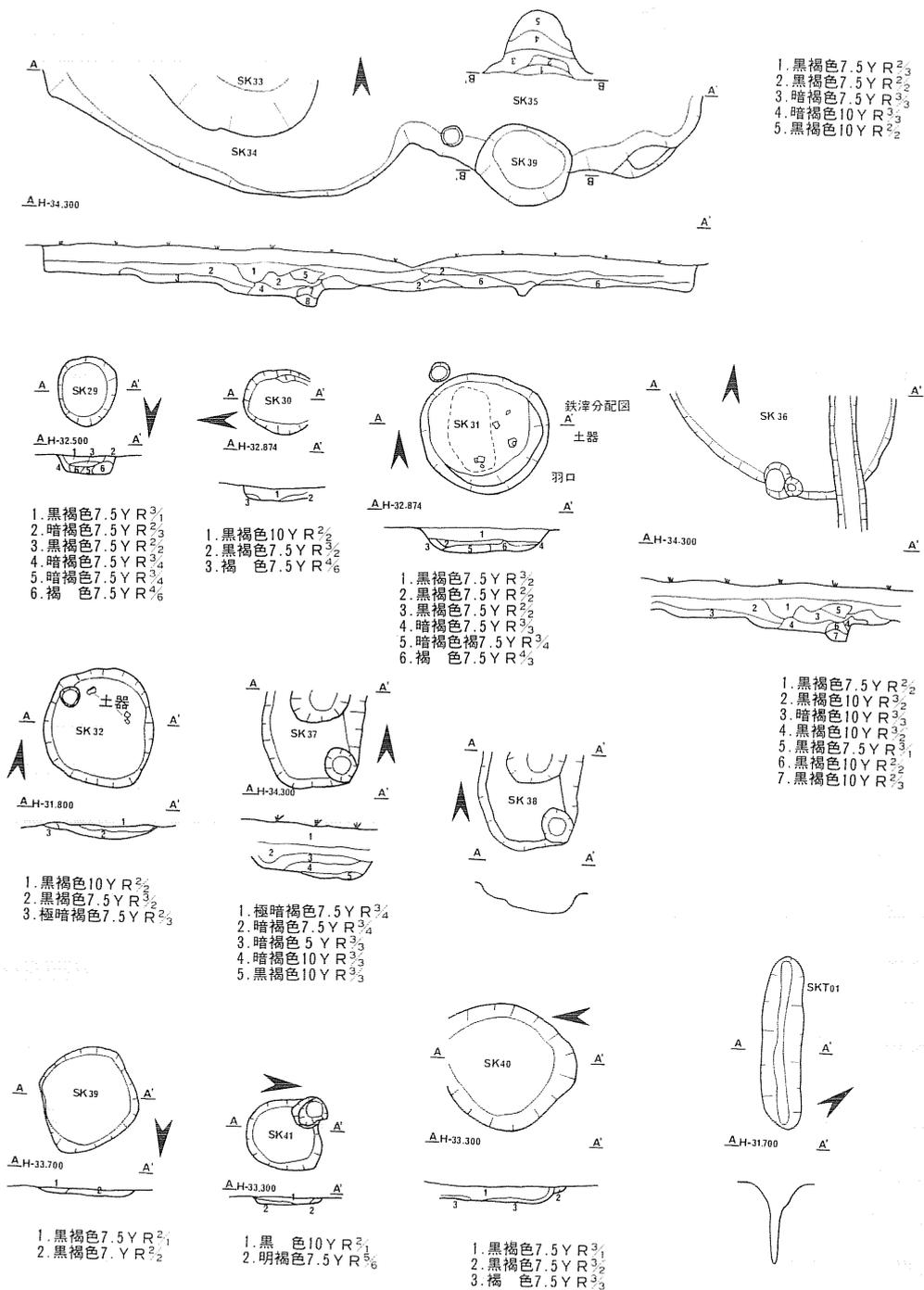


▲H-32.500

1. 黒褐色 10 YR $\frac{2}{3}$
2. 褐色 10 YR $\frac{4}{6}$
3. 黄褐色 10 YR $\frac{5}{8}$

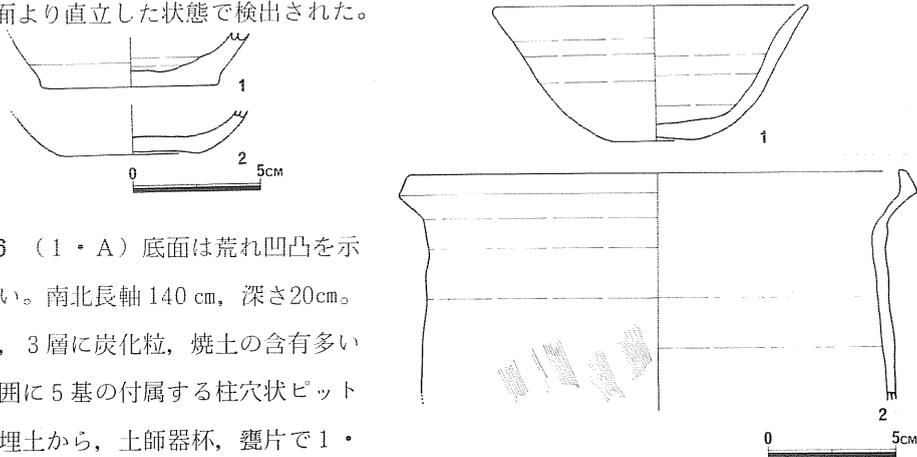
第12図 SK12 ~ SK28 実測図





第13図 SK21~SK41.TP01 実測図

集中している。遺物は熱化を受けもろくなった土師器の甕片、杯片である。①は土器脚柱部で上部及び底部の一部が欠損、高さ6.2cm。上部直径2.1cmで底面は平ら。部分的に熱化している。遺構底面より直立した状態で検出された。



SK 06 (1・A) 底面は荒れ凹凸を示すが堅い。南北長軸 140 cm、深さ 20 cm。埋土 1、3 層に炭化粒、焼土の含有多い遺構周囲に 5 基の付属する柱穴状ピット遺物は埋土から、土師器杯、甕片で 1・3 層に集中。①は土師器杯、直線気味に立ち上がり、粗いつくり。②は土師器杯、内湾気味に立ち上がり、胎土は緻密。いずれも底部からの切り離しは回転糸切り、無調整である。

第15図 SK 07 出土土器

SK 07 (1・A) 直径 116 cm、深さ 20 cm。壁、底面とも硬く、少量の炭化粒付着。外周上に 5 個の柱穴状ピットを検出。付属するものと思われる。埋土上層には焼土、炭化物が多量に含まれ、遺物も多くはこの層位面で検出。①は土師器杯、胎土は緻密で焼成も良好。内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反。口径 12.4 cm、底径 5.1、底部は回転糸切り、無調整。②は土師器甕で、巻き上げの後ロクロ整形。体部下半外面にはハケ目痕を留める。

SK 08 (1) 深さ 12 cm。底面は堅くしまっている。遺物は埋土からで、少量の土師器杯片。

SK 09 (1・A) 直径 68 cm、深さ 12 cm。壁、底面とも凹凸を呈す。遺物は埋土より少量の土師器杯片。

SK 10 (2・A) 直径 140 cm、深さ 20 cm、壁、底面ともなめらか。外周上に柱穴状ピットを有す。遺物未検出。

SK 11 (1・B) 深さ 22 cm。底面は凹凸が激しい。遺物未検出。

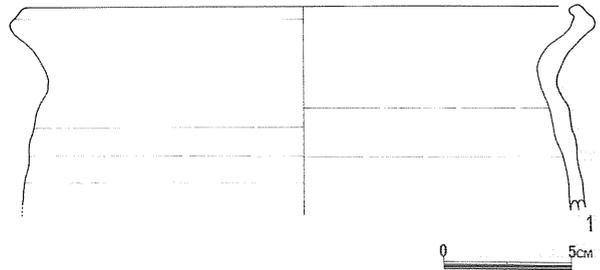
SK 12 (1・B) 深さ 12 cm。遺物は少なく、埋土より土師器杯片。

SK 13 (A) 壁はほぼ垂直に落ち込み、深さ 21 cm、底面は堅くしまっている。埋土は全体を通じ焼土炭化粒を含む。遺物は少量で、1 部底面より土師器杯、甕片出土。

SK 14 (1・B) 深さ 24 cm。西端は 1 段深く掘りしぼめられている。埋土は全層を通じ、焼土炭化粒を含有。特に小ピットには多い。底面はわずかに熱化。遺物は土師器杯、甕片で 1 部底面より出土。①は土師器甕・口径部でくの字状に外反、口唇部で内湾する。器厚は比較的薄

く、ロクロ整形され、胎土は緻密で焼成も良好。

SK 15 (3・B) 長軸 212cm, 短軸 180cm, 深さ 40cm。同一プラン内で 2 度掘り込まれ, 下部は壁面が硬く, 焼土の付着をみるが, 上部にはその痕跡が薄い。埋土は全層に焼土炭化粒を含



第16図 SK 14 出土土器

むが特に 3 層には多い。遺物は 3 層より土師器杯, 甕片, 須恵器甕片。

SK 18 (1・A) 直径 96cm, 深さ 32cm。底面は平坦。遺物未検出。

SK 19 (1・A) 深さ 12cm。底面はしまっている。遺物未検出。

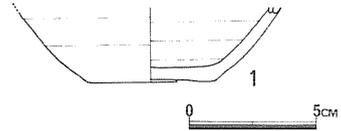
SK 20 (1・A) 深さ 12cm。底面は凹凸を呈し荒れている。遺物は埋土より土師器片 1 点。

SK 21 (3・A) 深さ 12cm。壁, 底面とも凹凸が激しい。遺物未検出。

SK 22 (3・A) 深さ 15cm。底面は凹凸を示し荒れている。遺物未検出。

SK 23 (3・A) 深さ 32cm。壁, 底面ともなめらか。遺物未検出。

SK 24 壁は垂直気味に掘り込まれ, 壁, 底面ともなめらか。埋土は炭化粒を少量含む。遺物は埋土より土師器杯 須恵器甕片及び少量の鉄滓。1 は土師器杯で内湾気味に立ち上がる。器質は部分的に粗い。



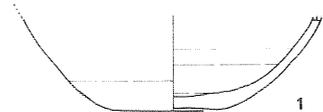
SK 25 (A) 壁は垂直気味に掘られ, 底面は平坦。直径 60cm, 深さ 28cm。遺物未検出。

第17図 SK 24 出土土器

SK 26 直径 122cm, 深さ 40cm で, 北面は 1 段深い。壁, 底面とも凹凸が激しい。埋土は褐色土を多量に含み攪乱気味を呈す。遺物未検出。

SK 27 (3) 直径 144cm, 深さ 42cm で, 壁, 底面ともなめらか。埋土全層に焼土を少量含む。

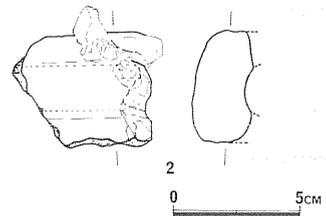
SK 28 (A) 直径 56cm, 深さ 16cm, 壁面はほぼ垂直に掘り込まれ, 底面は平坦でしまっている。遺物未検出。



SK 29 (A) 壁面はほぼ垂直に掘り込まれ, 底面は平坦。直径 80cm, 深さ 20cm。遺物未検出。

SK 30 (1) 深さ 16cm。壁, 底面とも凹凸を呈し, 荒れている。遺物未検出。

SK 31 (2・A) 直径 150cm, 深さ 30cm, 壁, 底面とも堅くしまっており, 少量の焼土, 炭化粒の付着をみる。埋土は全層にわたり焼土の混入をみるが, 特に 2 層には多量。



第18図 SK 31 出土遺物

同層位面で南北楕円状の範囲に（平面図、破線部分）多量の炭化物、及び比較的細かい鉄滓が散布。遺物は主として2層から土師器杯、甕片、羽口出土。①は土師器杯で器形の割に底径は小さく、器厚も薄い。底部は回転糸切り、無調整。胎土は緻密で焼成も良好。②は羽口で部分的に欠損。先端部は1部が熱のため溶解、自然釉及び溶解鉄の付着をみる。

SK 32 (1・A) 直径124 cm、深さ16 cm。壁、底面とも堅くしまり、埋土に少量の炭化粒を含有。北面に柱穴状のピット検出。同時期のものと思われる。

SK 33 (3・B) 地山面よりの深さ56 cm、SK 35と重複するが時期相異は不明。遺物未検出。

SK 34, 35 両遺構とも北面部は範囲外で未確認。深さはほぼ同じく28 cm。壁面は垂直気味になされ、底面は平坦でしまっている。時期的にSK 35が先行。遺物未検出。

SK 36 (1) 深さ19 cm。底面は平坦でしまっている。土壌を切っている溝は後世の排水路跡。遺物未検出。

SK 37 (1) 深さ19 cm、底面は凹凸を呈し荒れている。遺物未検出。

SK 38 (1・A) 深さ15 cm。底面は比較的平坦。遺物未検出。

SK 39 (A) 直径60 cm、深さ72 cm。壁はゆるやかな傾斜で振り込まれ、底面は平坦を呈す。SK 35と重複するが時期的にSK 35が先行。遺物未検出。

SK 40 (1・B) 直径80 cm、深さ12 cm。底面は南に傾斜を持つ。遺物は少量の土師器杯片。

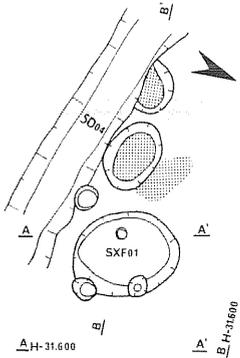
SK 41 (1・B) 長軸145 cm、深さ19 cm。底面は凹凸を呈す。遺物未検出。

⑤ カマド状遺構

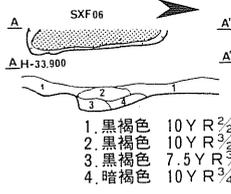
SKF 01 焼土マウンド、及び2基のピットからなる。遺構確認時は、これらを覆う形で焼土が分布、焼土マウンドは表面が熱化し、赤褐色を呈する粘土だが、内部は黒褐色土で熱化をほとんど受けていない。マウンド中央部付近に、径9 cm、輪積みによる円筒状の土師器が挿入され、熱化で崩れている。ピットはいずれも熱により堅くしまり、楕円形を呈す。これら3遺構は相互に関連性を持つものと思われるが、用途は不明。

SKF 04 平面形は128 cm×80 cmの方形を呈し、燃焼部で高さ32 cmのドーム状の天井部を粘土構築、1部が残存。他遺構と伴うことなく単体で検出。燃焼方向は北→南。カマドは地山を掘りくぼんでなされ、粘土構築による本体は内外面とも熱化により赤褐色を示す。焚口部から燃煙部に向け、火床面はゆるやかに傾斜。煙道部、及び煙出部はその延長上にみられない。現況では、天井部は上部にいく程薄くなる。燃焼部内の埋土は上層が焼土を多量に含む粘質土を主体、下層は砂質性で焼土とともに多量の炭化物を混入、かつ土師器片もこの層で検出された。遺物は比較的小量の土師器杯片で、その大半は器肉が薄く、赤褐色の色調を呈する。

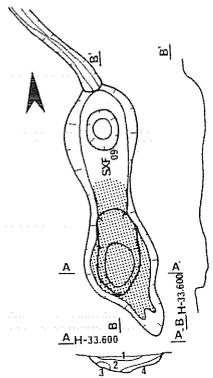
SKF 05 付属する遺構は、現況で確認できなかった。燃焼方向は北→南。地山を掘りくぼみ構築され、煙道部は長さ100 cmでゆるやかに上昇。遺物は火床面より少量の土師器甕片



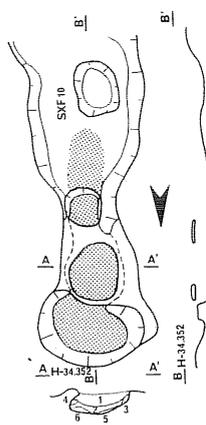
- A.H-31.600 B.H-11600
- 1 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$
 - 2 褐色 7.5 YR $\frac{4}{3}$
 - 3 暗褐色 10 YR $\frac{3}{4}$
 - 4 暗褐色 7.5 YR $\frac{4}{4}$
 - 5 褐灰色 7.5 YR $\frac{2}{1}$



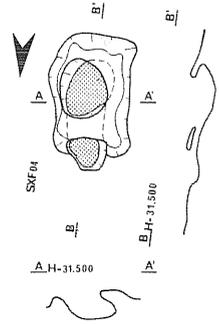
- A.H-33.900
- 1 黑褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
 - 2 黑褐色 10 YR $\frac{3}{2}$
 - 3 黑褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
 - 4 暗褐色 10 YR $\frac{2}{4}$



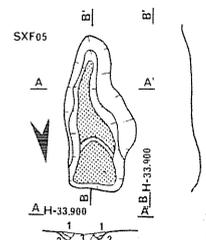
- A.H-33.600 B.H-33.600
- 1 黑褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
 - 2 暗褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
 - 3 黑褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
 - 4 极暗褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$



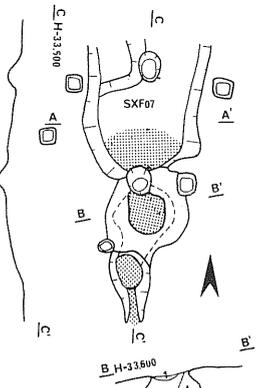
- A.H-34.352 B.H-34.352
- 1 黑褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
 - 2 暗褐色 10 YR $\frac{3}{2}$
 - 3 暗褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
 - 4 黑褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$
 - 5 暗褐色 10 YR $\frac{3}{3}$
 - 6 暗褐色 10 YR $\frac{3}{4}$



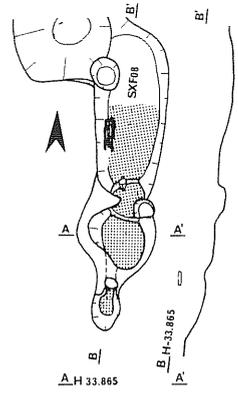
- A.H-31.500 B.H-31.500
- 1 黑褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
 - 2 黑褐色 10 YR $\frac{3}{2}$
 - 3 黑褐色 10 YR $\frac{2}{2}$



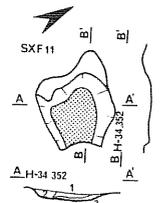
- A.H-33.900 B.H-33.900
- 1 黑褐色 7.5 YR $\frac{3}{1}$
 - 2 赤褐色 5 YR $\frac{4}{9}$
 - 3 赤褐色 5 YR $\frac{4}{3}$
 - 4 黑褐色 7.5 YR $\frac{3}{1}$



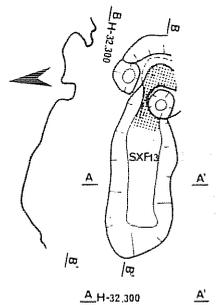
- A.H-33.600 B.H-33.600
- 1 黑褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
 - 2 黑褐色 10 YR $\frac{3}{2}$
 - 3 黑褐色 10 YR $\frac{2}{2}$



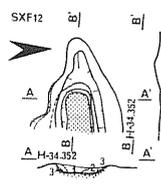
- A.H-33.865 B.H-33.865
- 1 黑褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
 - 2 黑褐色 7.5 YR $\frac{2}{2}$
 - 3 赤褐色 2.5 YR $\frac{2}{8}$



- A.H-34.352 B.H-34.352
- 1 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$
 - 2 黑褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$
 - 3 黑褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$



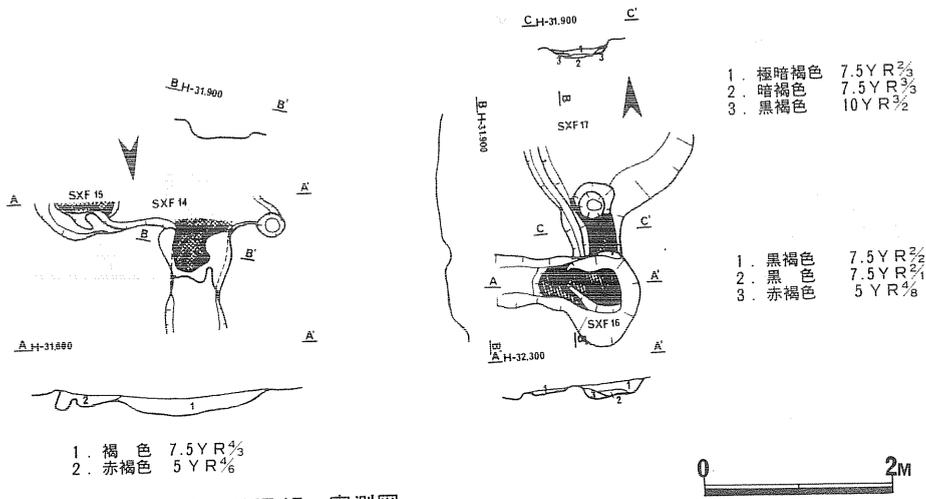
- A.H-32.300
- 1 暗褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$
 - 2 黑褐色 7.5 YR $\frac{3}{3}$
 - 3 黑褐色 10 YR $\frac{3}{2}$



- A.H-34.352 B.H-34.352
- 1 黑褐色 10 YR $\frac{3}{2}$
 - 2 黑褐色 10 YR $\frac{2}{2}$
 - 3 赤褐色 2.5 YR $\frac{6}{8}$

第19图 SXF01 ~ SXF 13 实测图





第20図 SXF 15～SXF 17 実測図

SXF 06 燃焼方向は南→北。付属する遺構は確認できない。地山を掘りくぼみ構築。残存状態が不良で全体が判然としない。遺物未検出。

D15～18グリットにかけSXF 07～10が規模構造をほとんど同じくして並築されている。いずれも遺構に伴うことなく単体で、地山を掘りくぼみ構築され、燃焼部はドーム状に天井部がなされた痕跡を留める。また、SXF 10を除き前庭部を備える。

SXF 07 燃焼方向は北→南。焚口部は1段低くくぼみ多量の炭化物を検出。火床面は約10度の傾斜で登り、煙道部は長さ60cm。燃焼部は比較的保存が良く、熱化により赤褐色した側壁の1部が残存、遺物未検出。

SXF 08 燃焼方向は北→南。焚口部は1段低く、多量の炭化物痕跡。煙道部は約20度の傾斜を持ち、長さ64cm。燃焼部埋土は焼土を多量に含有、2層は炭粒の混入が顕著。

SXF 09 燃焼方向は北→南。焚口部は判然としないが、燃焼部北端に炭化物を多量検出。煙道部は本体から東方向に約25度振り、長さ48cm。遺物未検出。

SXF 10 燃焼方向は北→南。焚口部は1段低く掘りくぼまれている。煙道部は楕円状に開き長さ50cm。遺物未検出。

SXF 11 確認段階で付属する遺構はみられない。保存状態は不良で煙道部のみ検出。燃焼方向は東→西、地山を約10cm掘りくぼみ構築。埋土3層に炭化物を比較的多く混入。遺物未検出

SXF 12 遺構東面部は範囲外のため未確認、煙道部のみである。地山を掘りくぼみ構築、側壁の1部が残存し内外とも熱化、赤褐色を呈す。遺物は埋土3層より少量の土師器杯片。

SXF 13 西面部は範囲外のため未確認。燃焼方向は西→東。燃焼部は、粘土でドーム状に構築、前面に楕円形を呈す前底部を付設。現況では煙道部がみられなく、密閉使用されたと考え

る。残存する壁面は熱化により表裏とも、赤褐色を示す。遺物は埋土より、少量の土師器杯片。

重複する遺構で、SXF 15が14を切っている。いずれも保存状態は悪いが、埋土に熱化した粘土を多量に含み、上部構造が構築されていたと考えられる。前面には溝状に掘りくぼんだ前庭部を持つ。遺物は少量の土師器杯、甕片。

SXF 16.17 重複する遺構で、SXF16が17を切っている。保存状態は不良。現況でくぼみ状を呈し、煙道部に刻当するものはみうけられない。SXF16は前面に溝状の前庭部を付す。埋土はいずれも焼土を多量に含む。

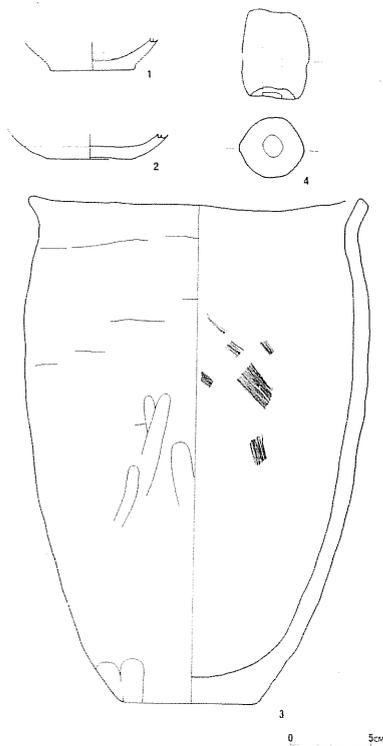
⑥ おとし穴状遺構

SKT 01 地山面で確認。長軸1.8m・
深さ60cm。壁底面とも、堅くしている。

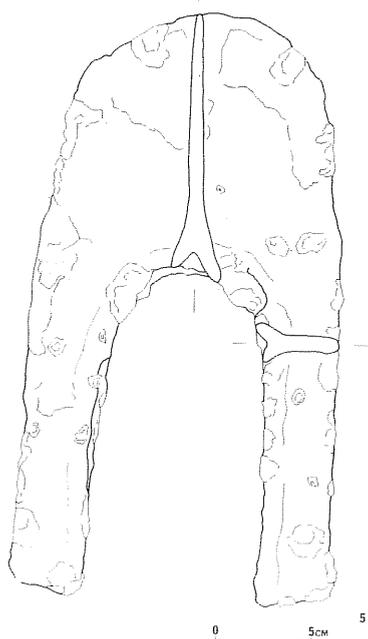
2 遺構外出土遺物

遺物は比較的少なく、主としてB区
で大半が検出された。

①は回転糸切り再調整のない土師器
杯、D-5出土。立ち上がりは直線気



第21図 遺構外出土遺物



第22図 遺構外出土遺物

味になされ、胎土は緻密で焼成も良好。②は土師器杯。B-12出土。ゆるく内湾気味に立ち上がり器質は緻密、わずかに焼きむらを留めるが、全体的に褐色の色調。底部は無調整で回転糸切り。③は土師甕、B-2出土。器表外面は底部付近にヘラケズリ、中半にヘラナデを施し、内面は部分的にハケ目痕。上半には輪積の痕跡がうかがえる。粗い砂粒を含み1部は器表面に浮き出ている。④は土錘、B-6出土。胎土は粗い。内径1.2cm、外径4.1cm、長さ48cm。⑤は鉄製鋸先で、B-3出土。長さ31cm、耳部の巾6cm、刃部巾10.2cm。その他、B-7より鉄釘出土。(図版8)頭部を平らに打ちのばし折り返した平釘。長さ82cm。

V ま と め

1 遺構について

検出されたものは、竪穴住居跡(縄文時代)、製鉄関連遺構(平安時代)、土壌(主として平安時代)、カマド状遺構(平安時代)、おとし穴状遺構で、主なものを下記に述べる。

① 竪穴状遺構(製鉄関連遺構)

遺構は小規模ながら製鉄、及び小鍛冶を中心とした鍛冶湯の両機構を兼ね備えたものと思われる。以下その機能を出土遺構と兼ね合わせ下記に示す。

製鉄遺構、P₁・P₂である。P₁は上部が崩壊しその形態が不明だが、周囲に散乱する多量のサ入り粘土より、上部構造を持ち、小規模なボール炉の形態を持っていたと思われる。P₂は鉄滓留めで、鉄滓の多くはアメ状の平骨な面と、多孔質の海綿状の面を持つ精練滓である。

鍛冶湯、鍛冶には精練鉄を半製品化する(大鍛冶)のと、さらに製品化する(小鍛冶)過程がある。(註1)前者は多くの場合、鉄滓を多量に放出し、その鉄質も精練滓と異なる要素を持つが、遺構内にはその痕跡がみられず、大鍛冶工程は他所で行なわれたか、もしくは省略されたと考えられる。すなわち遺構は小鍛冶を中心としたもので、その場合、製作工程では火づくり、焼き入れのための火床、整形のための槌打場(床は深く掘られる)、及び焼き入れの水場が必要(註2)となり、SK16, 17, 32, SXF03がそれらに刻当すると思われる。

② 土 壌

土壌は1部を除き、下記の特徴を示し、さらに、A類(SK05, 06, 07, 08, 13, 14, 31)・B類(その他)に大別できる。

1, いずれも遺構に伴う事なく単体、又土壌どうしが重複するものは少ない。2, 平面プランは円型もしくは楕円形を呈し、比較的浅い。3, 埋土は焼土炭化物を多く含むもの(A), 極め

て少ないもの(B)がある。この事から、土壌はそれ自体で使用目的を有しかついずれも時代を経る事なく掘り込まれ、ある程度使用目的を同じくしたものと考えられる。A類は、埋土より多量の焼土、炭化粒を検出。それらは主として中上層に集中、加えて同層位面で土器の検出が多い事から、土壌は掘下げ後一担ある程度埋め戻しを行い火床面使用したと思われ、その目的は、焼成使用である事が考えられる。SK31は、上記の形で埋度2層面を火床として用い、この面で多量の炭化物、焼土、鉄滓及び羽口を検出する事から、鉄製品の生産に伴う鍛活湯と考えられる。B類は宮の前遺跡(註3)古館遺跡(註4)等に類例をみるがその使用目的は明確でない。

③ カマド状遺構

調査の結果17基の遺構を検出、内15基は確認段階で、他遺構に伴う事なく単体で検出されている。それらは、平坦地に構築され、地点毎に集中してなされる傾向を持つ。時期は大半が平安時代を中心とするが、SXF07~10は、その内部及び周囲より遺物をまったく検出せず時期、性格等は不明である。

次にこれらの中で特色的な例としてSXF04を取り上げたい。SXF 04。精査の結果、煙道部を持たないカマドで、燃焼部は粘土構築によりドーム状を呈していたと考えられる。残存する側壁は内外面共熱化し、赤褐色を示し、燃焼部内には焼土及び炭化物が充満、一部は互層している。この事からカマドは、ある程度密閉され、高熱を必要としたと思われる。遺物は、土師器杯片のみで、量的には少ないが、本体の崩壊粘土と思われる堆積土下より検出され、カマド使用時に、すでに残存したと思われる。土師器は、薄手で黒斑現象を伴わなく、無調整回転糸切りのもの(赤褐色土器)、及びそれ以外の土師器も含まれる。この事から遺構は、高熱焼成で生産加工するべく性格を備え、かつ土師器(赤褐色土器)焼成を目的とした可能性がある。しかし、現在上記のカマド構造(特に上部構造)は明らかでなく、(註5)類以する遺構は(註6)いずれ也多量の土器を伴うが、本遺構は少なく、赤褐色土器以外の土師器も有する事からSXF04の使用目的を断言する事が出来ない。今後の検出例と比較検討する必要がある。

2 遺物について

出土したものは、縄文土器数点(磨耗のため器表面はうかがえない)土師器、須恵器・土鍾・羽口・土器脚柱部、鉄製鎌先、鉄釘である。その中で出土土器として土師器、須恵器を下記に取り上げる。

土師器、杯類、3形態に分けられる。すなわち(1)、内面にヘラミガキをなし、黒色処理を施すもので出土量は極めて少ない。小片のみだが、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反。(2)部分的に黒斑現象を示すもので出土量は最も多い。2a、体部がやや直線的に立ち上がる。2b、内湾気味に立ち上がり口縁部で外反。口径のわりに底径は比較的小さい。

(3) 黒斑現象が見られなく、薄手で鮮やかな赤褐色を呈す。出土量は少ない。(2)・(3)は無調整で回転糸切りによるものが多い。

土師器甕類 2形態に分けられ、(1) ロクロ整形、胴部は直胴、口縁部でくの字状に強く外反し、口唇部で内湾もしくは直立気味に立ちあがる。胎土は緻密で焼成良好。(2) 輪積み成形され、胴部は鈎錘状を呈し、口縁部でくの字状に外反。胎土は粗い。

須恵器、出土量は比較的少なく、遺構内出土はわずかである。杯類は、いずれも無調整回転糸切り痕を留めるもので、底径は、口径に比して比較的小さく、高台を付す例もある。甕類は外面に平行叩き目文、内面には同心円文をあて痕としてなす。

土器の遺構内出土は、大半が埋土からであるが、共伴状況に特異性はみられなく、確実な時期的差異はうかがえない。土師器は表杉ノ入式に入るものであり、かつ須恵器が減少、赤褐色を呈する土器が、比較的少ないながらも出土する事等から、遺物の時期はある程度明示できよう。

むすび

本遺跡は、調査段階でみる限り、生産を主体とした要素を持つ遺跡である。その年代は出土土器より、表杉1入式の範ちゅうに入る。(註7) 同式の土器は10世紀前半を中心に、かなりの時期的巾を持つが、(註8) 平安中期以降になると伴出する須恵器の量は減退し、酸化焰焼成による赤褐色を呈する土器が出現してくる(註9)。本遺跡では、無調整の赤褐色を呈する土器が少量だが、部分的に共伴し、須恵器は量的に少ない特色があることから10世紀後半を中心とした時期が考えられる。

(熊谷)

参考文献

- 註1 宮田茂郎『鉄の考古学』雄山閣 1973年
- 註2 秋田県教育委員会「秋田の野鍛冶調査報告」 1980年
- 註3 秋田県教育委員会「宮の前遺跡」 1979年
- 註4 青森県教育委員会「古館遺跡」 1979年
- 註5 桑原滋郎「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』 1980年
- 註6 秋田考古学協会「野形遺跡」 1976年
- 註7 氏家和典「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史14』 1957年
- 註8 氏家和典「奈良平安期土師器の諸問題」『山形県の考古と歴史』 1967年
- 註9 工藤雅樹 桑原滋郎「東北地方における古代土器生産の展開」

『考古学雑誌57巻3号』 1972年



図版1 1 B区発掘調査前 (東一西)
2 B区一6~10 遺構検出状況 (東一西)



2. S X F 02 (東一西)



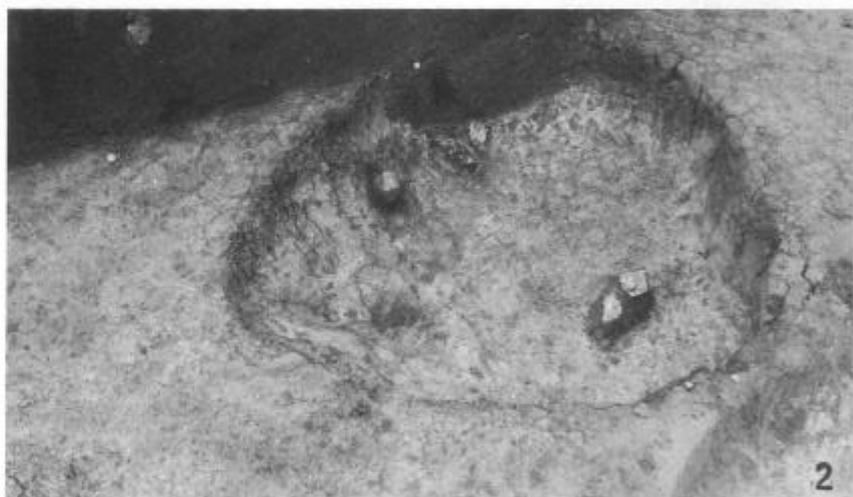
3. P. 2, P. 1 (東一西)

図版 2 1. S K 101 (S K 16, 17, 23, S K F 02, 03, P. 1. 2) (東一西)



1

2. S K 05 (南—北)

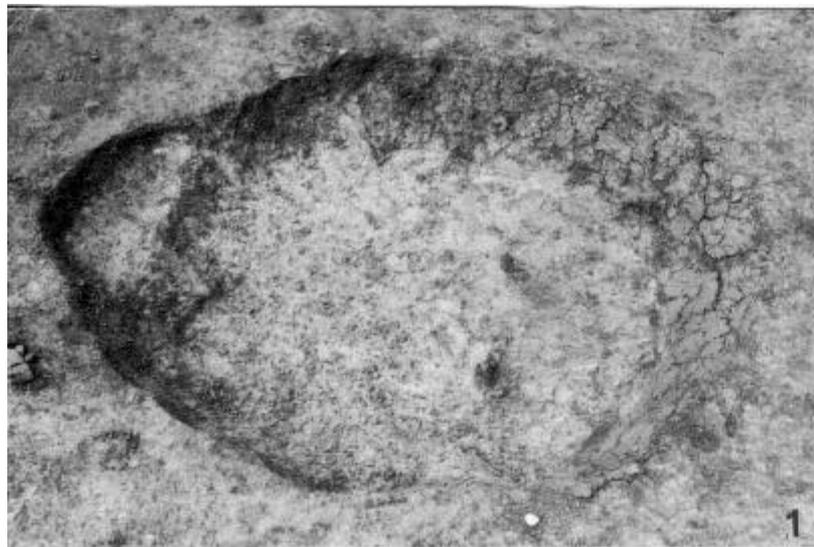


2

3. S K 07 (東—西)



3



1. S K13 (南一北)



2. S K06 (南一北)



3. S K14 (北一南)

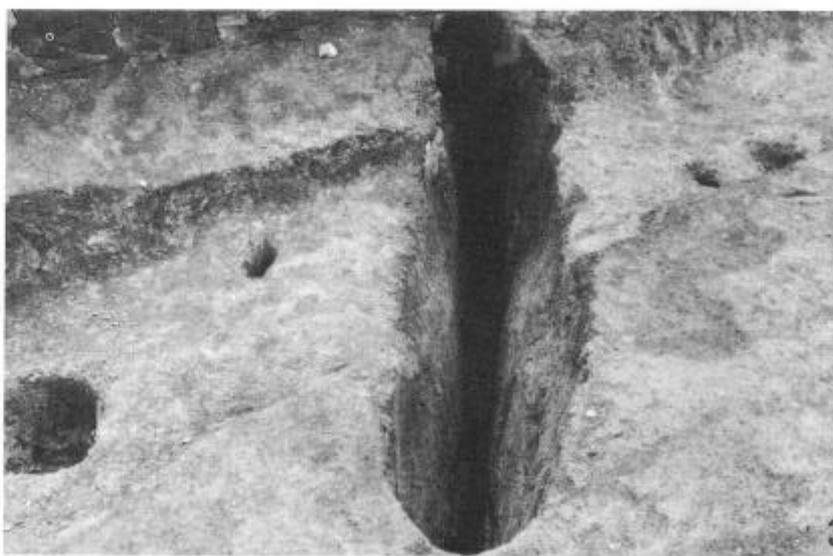
1. SK31
(北—南)

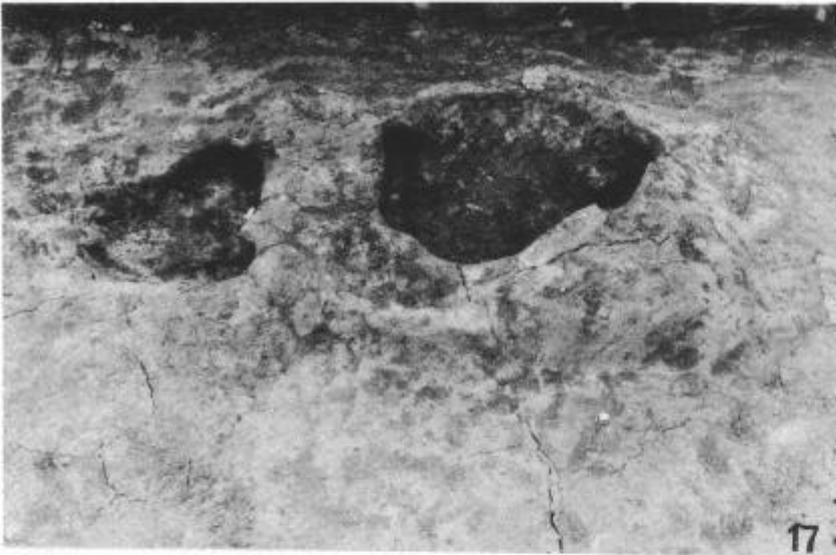


2. SXF01
(南—北)

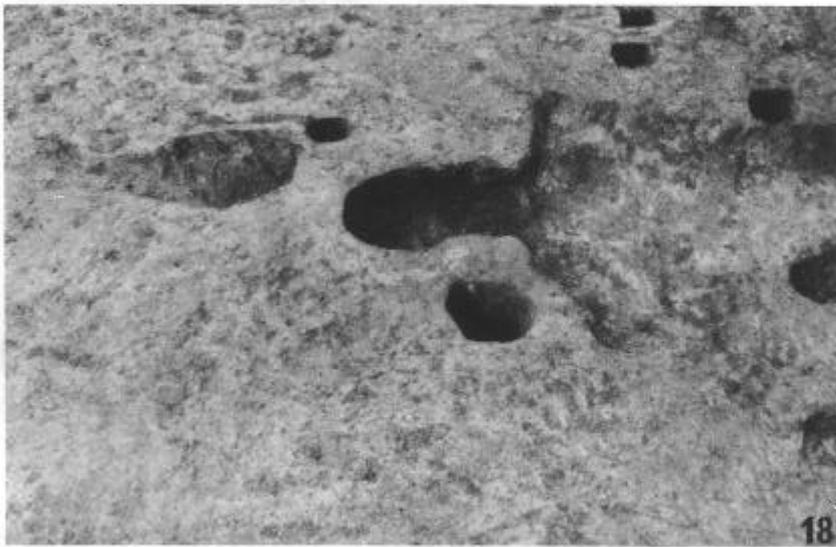


3. SKT01
(東—西)





1. SXF04
(北一南)



2. SXF07
(南一北)



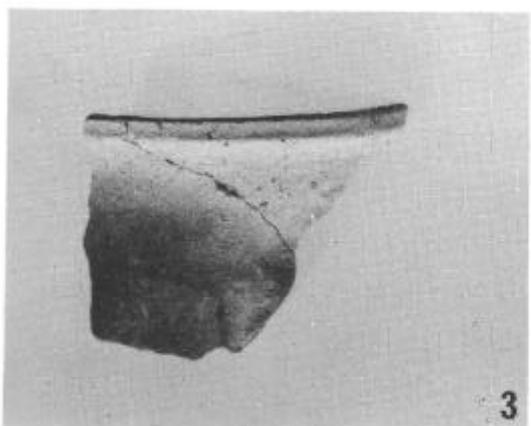
3. XF9~10
(東一西)



1



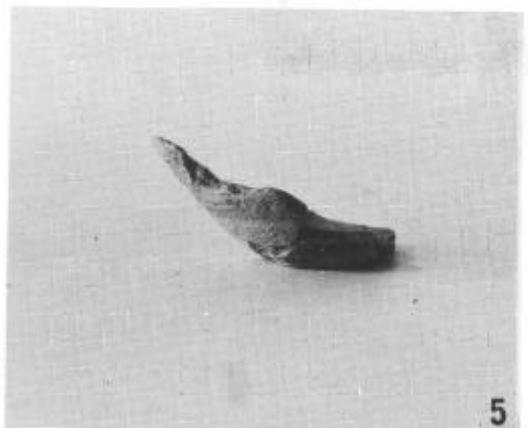
2



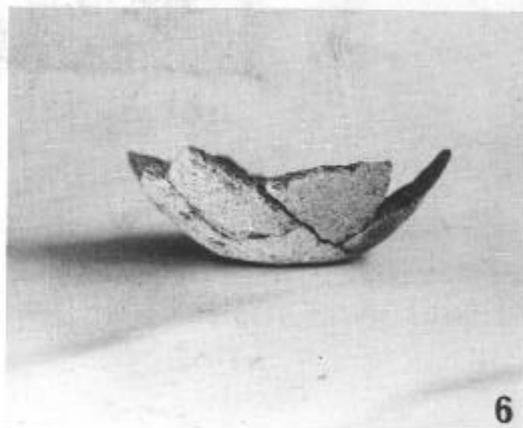
3



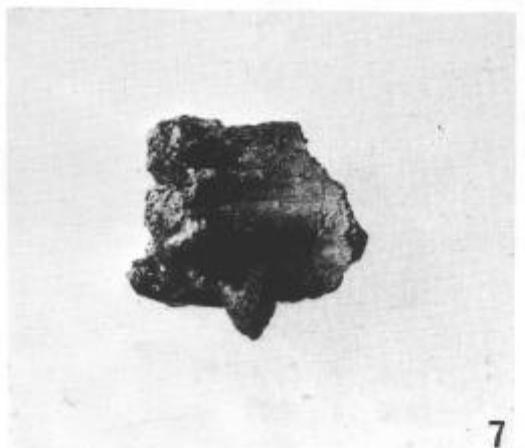
4



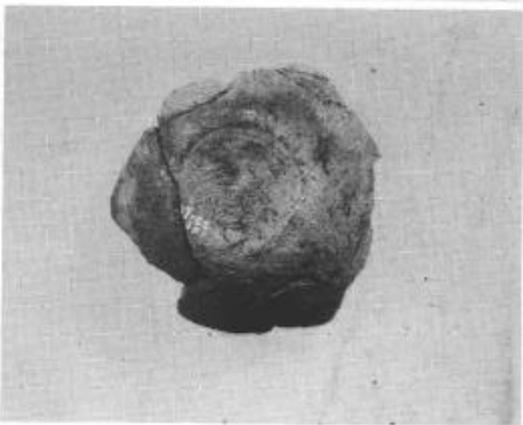
5



6



7



図版 7

遺構内出土遺物

SFX0 1 SK07 2-3 SK16 4
SK17 5 SK31 6-7



1



2



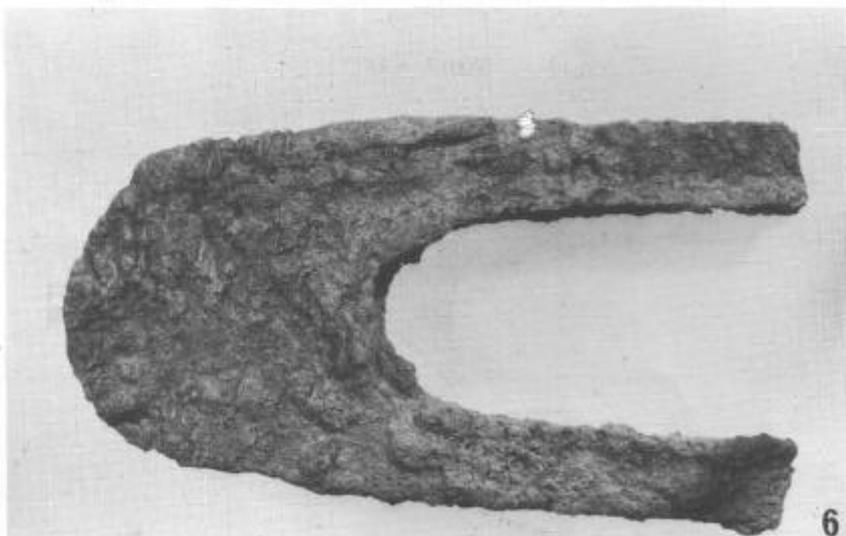
3



4



5



6

圖版 8 遺構内出土遺物 1. SK05 2. SXF02
遺構外出土遺物 3. 土師器 4. 土錘
5. 鐵釘 6. 鉄鋤先